

叙事詩 ショタ・ルスタヴェリ=作

# 虎皮の騎士



袋 一平=訳 理論社刊

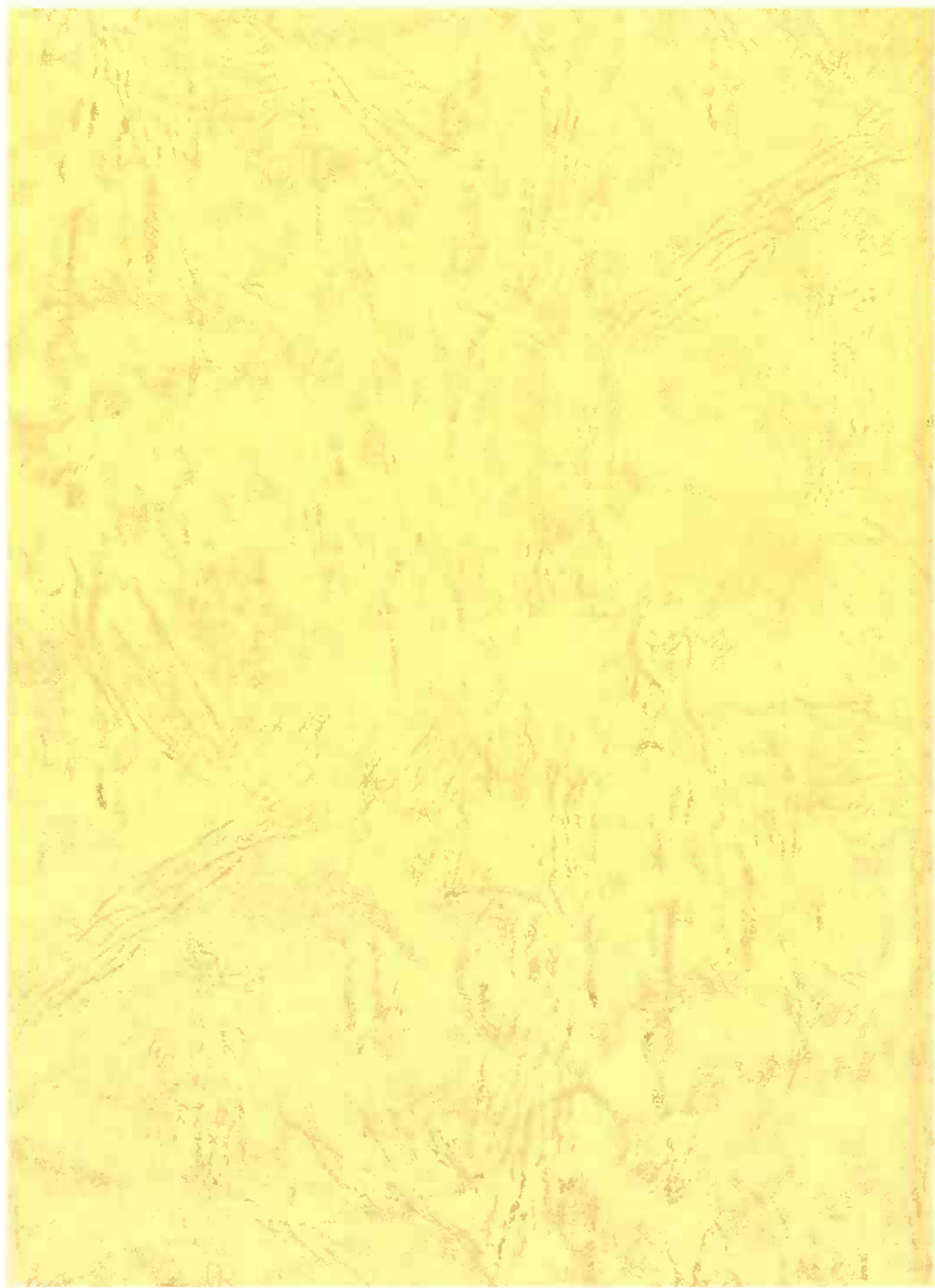
# 虎皮の騎士

シュタールスタヴェル



30-90

38 | 1

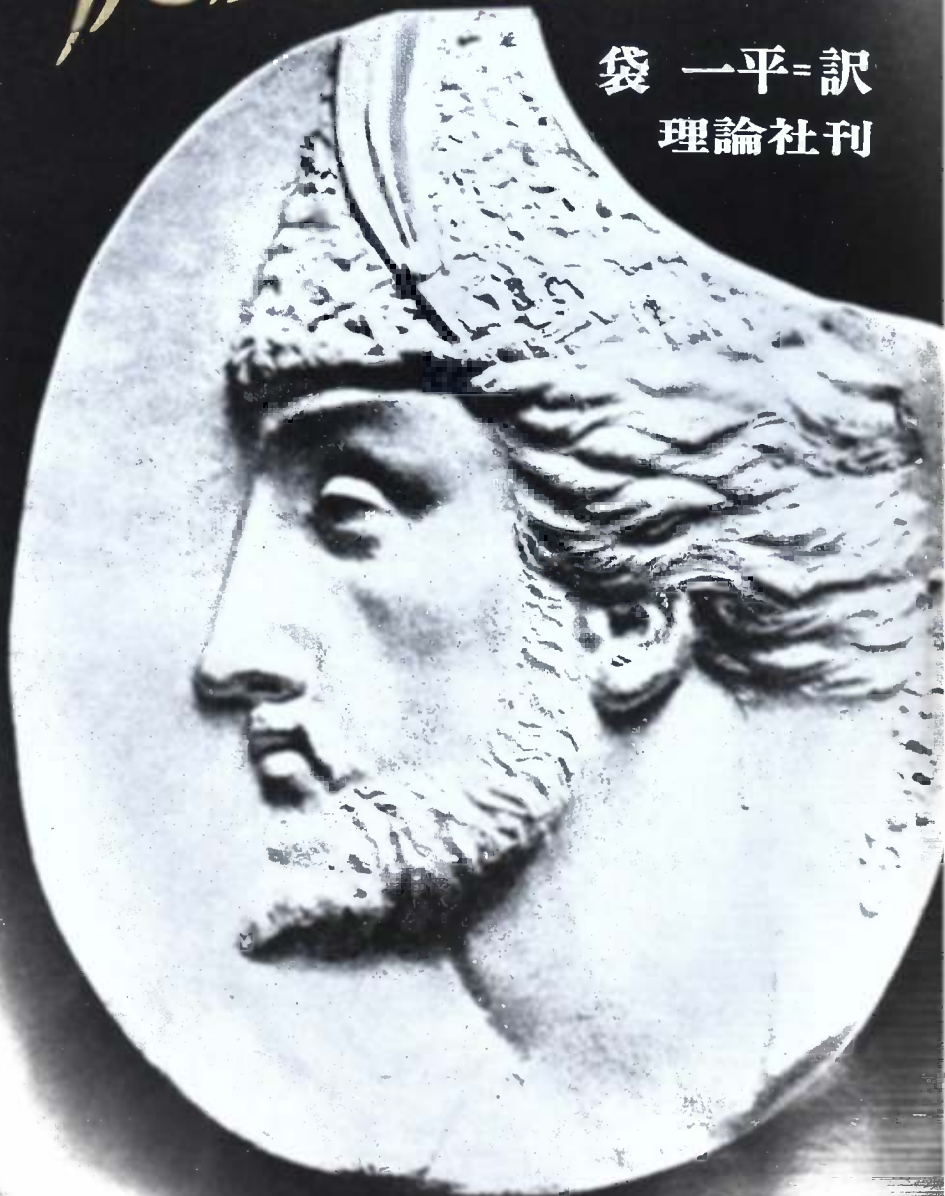




シヨタ・ルスタヴェリの叙事詩

# 鹿皮の騎士

袋 一平=訳  
理論社刊



# უმთა სუსთაულო უმის ცაოსანი

## グルジアの人びとと 虎皮の騎士

作品風土記的解説

小宮山 量平

騎士と女王の国

グルジア・ソビエト社会主義共和国の首都トビリシの旧市街の中心の高台には、新しく端正な騎士の像が建ちました。その騎士の馬首の向く彼方、クラ川をへだてて対応する丘の上には、これも新しいアルミ材による女性像が、街のどこからでも見えるように輝いているのです。旅人たちは、この女性が《グルジアの母》なる象徴であり、彼女の左手の大盃が友人たちへの限りない歓迎を伝え、右手の剣が敵を許さぬ誇りを示すことを、心愉しく聞かされるはずですが、やがてこの国の文化や生活について多少の理解を深めるにつれて、人びとは、これらの古代・中世的なシンボルが、たんなる古都の飾りでもなく、近代に生きのびた遺産にとどまるものではないことに気づくのです。それらは、ある主張性をもって生きています。ますます注目されるべき現代的な意味をもって人びとに語りかけている……と、思えてくるのです。その点に心づくにつれて、その謎をとく鍵のように、この《叙事詩》が、大きく迫ってくるはずですが。



右方の川の屈曲部に凸出している砦には騎士の像があり、その崖には昔の岩窟、対岸には温泉と虎の伝説など語りぐさが多い。



#### ◆谷間に眠る銀河◆

さいしよにこの街を訪れたときは、キエフを遅発した飛行機のため、あこがれのコーカサスの山々は黒くろと眠り、巨峰エリブルースもドウイフ・タウも見定めようがありません。けれど、いくらか気落ちした私の眼に、チカチカと帯状につらなる地上のまたたきが入りこんできたとき、私は、まさにもなく星空のまっただ中にいる驚きに、思わずも叫んでしまいました。「まるで、下の方も空だ！」と。……そして、それをこの街の第一印象として語った私に、グルジアの友人は、「われらの詩人もそううなつています」と、あたりまえのことのように微笑したのです。つまり、この地を故郷とするマヤコフスキーは、いみじくも「銀河がこの谷間で眠っている……」というふうに、この街の夜景をたたえているのだそうです。

その夜景の美しさを自覚し誇るかのように、終夜点灯されたままの街の灯は、けばけばしいイルミネーションなどは混えず、ほほ一色の星の色です。そして高台に新設されたホテル《イベリア》は、高層の各階すべてが足許から全面のガラス張りで、地上と天上の星空のまっただ中に安らく配慮をひそめているとも思えるのです。とりわけ、この街の全景を一望におさめるダウイデの丘には、二条のカープルカーを通じ、終夜開いている大レストランを配して、市民たちがみずから愉しむ趣好をこらしているのも心憎いことでした。

この丘の頂上にひらけた遊園地から見おろせば、もちろん、夜景に劣らぬ《森の都》の美しさも格別です。《水の都》のレニングラードに対して、《森の都》を誇るのはキエフとトビリシでしょう。けれど、これに川と丘の美しさを加えると、ドニエプル川の広大さに比べてのクラ川のほど良さ、街全体を抱きかかえるようにめぐる丘の深さなどの点で、日本人にとってトビリシは格別な親しき温か





さを感じさせることでしよう。嵐買ついでにいえば、大戦でドイツとの戦場にはならなかったこの街は、古都の保存を意識的に政策としていたことも相俟って、眼下にくりひろげられた街々に歩み入ってみれば、そくそくと、人間生活の歴史的な息吹きが追ってきます。眺めて美意識に整除される伝統・文化というものよりも、体感の中に温かく積もってくる眩きがあります。石だたみ、年輪も定かでないすかけ並木、咲き乱れる菊、ふと生け垣からのぞく柿……かつてフランスの文豪大デュマが各地遍歴の途次、一年にもわたってこの地に「蒸発」していたというのも、この体感にとらわれてのことではなかったか、と私は推測したことです。

建造物や風致に目をみはるような観光気分を洗い流して、いち早く、この体感に旅人を馴れさせるものは、もとより、人間です。人びとです。あの友人、この友人です。すれちがう老人や青年、笑いかけてくる子ども……彫り深い顔、きらめく黒い瞳。そして、もし話しあうことができれば、何よりも卒直さを美德とした、えんりよのない対話。たちまち交わされるとめどもないブドウ酒の盃。……あげくのはて、ふんだんに、じつに、ふんだんにどこでもとびだしてくるのが、「友情」ということばでした。

やがて私のグルジアへの旅も重なり、人びととの交流が深まるにつれて、この「友情」ということばにこめられた厚はったい意味がまるであぶり出しの文字のように浮かびでてくることになりました。《愛》とか、《喜》とか、《真実》とか……総じて近代が抽象化し、概念化してしまった徳目が、オレとオマエの愛であり、きみとぼくの善であり、あなたと私をつなぐ真実として、握手や頬ずりのように生き生きと語られる。そういう人間関係の最上の徳目として、この国の人びとが語る《友情》の底に、「虎皮の騎士」の永遠的な主題の息つきを、感じないわけにはいかなかったのです。

●風雪に鍛えられた騎士道●

トピリンを訪れた旅人が、まずまちがいない案内されるのは、市の北方三〇キロの辺りにある往時の首都ムツヘタでしょう。町の手前で対岸の山頂に導かれ、六世紀に建造されたキリスト教会ジュワアリの廃墟に立てば、眼下にクラ川とアラグビ川の合流点が絵のような絶景をくりひろげます。見おろすムツヘタの中央に極立っているのは、十一世紀初めに建てられたスウェティ・ツホウエリ教会で、日本の左甚五郎伝説と似たような名匠アルスキスゼの彫刻逸話が語られるのです。これら二つの建築物が典型的に示しているのですが、この国にキリスト教の伝来した五、六世紀のころの古い教会は、どこやら城塞めいて要害の地を占めており、十一世紀ごろからルスタウエリの生きた十二〜十三世紀ごろの建物は、時の王朝の墓所であったり、古典的なアカデミーとして聚落の中心に位置しています。

おそらく、私の勝手な史実判断をめぐらせば、北に大カフカースの嶮に守られ、西南は黒海でさえぎられた地上の桃源郷めいた豊かな国土は、ともすれば東方からくる外敵の侵攻の目標となりやすかったでしょう。黒海とベルシアから入るビザンチン文明やキリスト教の進路と、アゼルバイジャン、アルメニアを経由するモンゴルの進攻とは、つねに、二者択一の課題であり、一方を受け容れることは、他方に防御を構えることであつたと思われるのです。事実、およそ二千年のこの国の歴史において、戦乱のなかつた年月は二百年を超えまい、と語り伝えられているほどなのです。

このような風雪に耐えて、よく民族の共同体を守り得るためには、よほど強大な権力の統率か、あるいは民族自体の不抜な自衛の結束が固められねばならなかつたはずで、グルジアの伝統と風土は、いつしか、古典的な民主政体を削り成していったようです。王者は



樹木の皆無な山頂のジュワアリは風雪に耐えた歴史を語るにふさわしい。そこから晴天には白雪の巨峰カズベクを望見できる。

民に對して有徳であり、臣下には友愛をつらぬいて信義を守り、それがあるがゆえに、裏切りのない結束は高められたのでしよう。

伝説めいた笑い話ですが、グルシアでは、羊を二頭持ったら「貴族」だといわれるほどで、墓所をめぐってみても片っぱし貴族の名を冠しているのです。これら貴族の子弟は、幼くして一般民家に里子に出され、長じて十二歳ともなると幼友達とともに遊学する。やがて主従である友は、友愛につらぬかれた盟約にもとづいて領国を治める……このような領国が榮え、その頂点に最も有徳の美しい女王タマラをいただいた時代が、ほぼ、ルスタヴェリの育つた時代に先行していたのでしよう。彼の業績をたたえるため当時のアカデミーの一つが記念館となっていますが、このようなアカデミーは十二世紀のころ、すでにこの狭い国土に二百を数えるほど、学芸の繁栄と王者の善政が、外敵に不屈な国を造り成していたわけです。

近世政治思想の先駆をなしたマキャヴェリは、善き王者を持ちえた場合の至福について述べておりますが、古代から申世にかけての文芸は、この善き王者のための教義として創作される側面をもつていました。イタリヤ文芸復興に先行すること二世紀の時点で、わがシヨタ・ルスタヴェリも、その理想主義の構想を、王者への教義として展開したのでした。彼がそれを成しえたについては、日本の《卑弥呼伝説》にも似て、もつと身近なタマラ女王の治績をたたえることができ、また、そのような教義が実効を奏する王者と臣下の友愛の連帯も成立していたという前提を考える必要があります。加えて、かの戦乱の時代に、善き政治の下に民衆生活の泰平を持続するとすれば、王者は、内なる治績にすぐれるばかりでなく、外なる諸君主との友誼をも確保せざるを得ません。ルスタヴェリにおける正義の基底を成す《友愛》の理想は、こうして諸君主をも感動させるに足る起伏に富んだ騎士道物語として結晶を遂げたのです。



この平安なムツヘタの町には百歳の父が80歳に近い息子と植物園を經營し日本の桜もある。幼児の頭ほどのパンがうまい里だ。

### ◆民族主義を起えるもの◆

一般にグルジアを訪れた記者や作家の紀行には、一つのパターンがあります。グルジアは格別に民族主義の強烈な国柄で、国民は自民族出身の英雄としてスターリンへの尊敬を手放さない。今は状況不利だからその名を掲げて語ったりはしないけれど、ここでは、その像も撤去はされず、胸底のスターリン讃仰は不滅である。……なるほど、そう書けば容易にうなずかれるように、すでに常識が用意されています。私自身も、この先入見をこの眼で確かめたくて、わざわざスターリンの出生地ゴリ市まで出かけたことがあります。

その問題そのものについては、別の本で詳記するつもりですが、本書とのかかわりでいえば、グルジアの民族主義というものは、私たちが自身の心情を物差しとして測ったようなものとは、ずいぶん違うと思うのです。グルジアの人びとは、故スターリン氏の出現よりはるかに古く、はるかに一般的に、じつに多くの尊敬すべき英雄を持っていました。それらの英雄の多くは、詩人・作家・画家・音楽家であり、さすがに十一・二世紀に文芸復興の新風を打ちたてた国にふさわしく、これら民族的英雄の人脈は高く深いのです。おそらくこの国、この首都ほど、芸術家たちの名を掲げた地名や建造物の多いところはないでしょう。スターリン治下でも、他の民族国家のように、その名を冠した工場や地名を持つことは少なく、むしろショタ・ルスタヴェリのほうが親しまれ、普及していました。

そんな国柄であつてみれば、スターリンやレーニンの物差しで諸文化を考えるよりは、ルスタヴェリをはじめ作家A・チャフチャワゼ(二七八六―一八四六)や詩人N・バラタシビリ(一八一七―四五五)の心で政治や社会を考える志向の方が、ずっと伝統的でもあり、はるかに強烈だといふべきでしょう。その点では、かのフランコ体制



首都を離れてコルネズを訪ねるときも、遠い山地の古城を探るときも、移動する羊の群れと会う。そのすさまじい密めきの間は自動車もストップだ。そんな一刻に私は詩人ヒメネスの作品に描かれた南国の民衆とこの国の民衆とをグラフさせてしまう。

下でも、『ドン・キホーテ』の目の陽気さを失わず、ゴヤやピカソに連なる創造の気魄にみちた南国の人民を想起したくなるほどです。おそらく広大なソ連でも唯一の乾性ではない亜熱帯のこの国と民族については、もひとつ決った洞察が必要でしょう。

事実、牧羊の移動する道、しなびたブドウの農園、教会、農家、そして酒宴のしきたりや祭りのさんざめきなど、あるいは球戯に對する熱狂ぶり……と心に累積するアルバムをめぐっていると、思わず、イベリア半島のアンタルシヤからバスク地方の生活習俗との相似に驚いてしまうのです。アルシヤは、なんとなくバスキイです」と私が呟くと、わが尊敬するグルジアの一友人は、「それが有力な飯説として、まじめに研究されているんですよ」と、まんざらでもない顔つきで、私の直感の動因を訊ね返すありさまでした。(ついでにいえば、「イベリア」は日本の「大和」のように、グルジアの第二名称で、新設の高層ホテルはそれを冠している。)

おそらく、わがルスタヴェリの作品には、ヨーロッパ北方民話や英雄譚の血脈より、あのラマンチャの騎士物語の先駆にも位置づけたくなる血のたざりがあり、もしもグルジアの民族主義を語るとすれば、この南国的な友愛と純愛の情感にふれて語るべきでしょう。



グルジアの柿はスターリンが日本の建師を招いて植えさせた——という「飯説」がある。ほんとうだろうか？ともかく日本の富有柿に匹敵する柿を私に食べさせたいと駆けよってきたあの農民の顔……そしてその辺りは茶とミカンの畑だった。この農家の壁にもルスタヴェリの肖像があった。これらの顔はタイムラッセ・ステパノフのPR本「トビリシ」より拝借した典型的な市民の表情だ。





とかく日本人にとっては覚えにくいグルジア人名を避けて、エコとか、ラドとか、親しげに呼んだ画家たちについては、遠からずそれぞれの画集を出版し、その中でルスタヴエリ作品との関連性も説くことを、私は自分の課題としているのです。ところで、この二人を挙げれば、さらにグルジア美術とルスタヴエリとを結ぶ鍵をひらいた達人、アマラナシビリについても語らずにはいられません。

彼こそは、「グルジアのスターソフ」と私が失礼な尊称を奉ったとき、彼は少年のように赤らんで喜んでくれました。かのゴリーキ、レービン、シャリヤービンなど多彩な諸芸術家の登場を支援した偉大な批評家スターソフの寛容な温顔と比類ない学殖の深さをひそめた「大人物」が、そのまま生きかえったような風格で、ここと



(上)1646年本・馬上のアフタンジル (下)1688年本・タリエールの進撃

ヒリシンの美術博物館長として、にこやかに人びとを迎えるのです。

このアマラナシビリは「グルジア古代美術史」という浩瀚な労作でレーニン賞を受けたほか、周到な美術研究の諸著作によって全ソ連に聞こえた権威です。とくに一九六六年には、彼ならではの研究と実証によって、ルスタヴエリ研究を数歩進めるグルジア語の労作が生まりました。題して、『グルジア古美術におけるショタルスタヴエリの叙事詩・虎皮の騎士』とあります。彼はこの叙事詩の各時代の版を基に、まず創作叙事詩が彩色画の進歩に寄与した功績を評価するのです。もともとグルジアの古代美術は、ビザンチンやアルメニアンとは異り、宗教画的な束縛から自由でした。他国が聖者や神を画いている時代にも、むしろグルジアは宗教画そのものをも物



この15世紀本のころから詩人の口ひげなどが附加されて詩人の風格が老成し、これに基づく詩人像の古典的作品も多い。



この初期の版本のころ彩色画家の仕事は主として挿どりの装飾画であったが、幸い肖像画一枚があり今はこれが作者原像となる。

語化したり、インドやペルシアの物語を絵物語化することを主流としていたのです(その実例はトビリシ博物館所蔵作品に極めて多い)。ところが、すぐれた自国の創作叙事詩の出現は、この種の彩色画家たちを振いたたせて格段の美術的進歩をもたらしました。

アマラナシビリは、とりわけ『虎皮の騎士』が彩色画の進歩に寄与した成りゆきを、遠く英・仏のミューゼム所蔵の写本までも追跡し、赤外線・紫外線による検証をもって、踏みかためたのです。この研究によって、ルスタヴェリ生存中の肖像が明らかになりました。左、当時の習俗からすれば原作は作者の青年期である十二世紀中に書かれたことも確認されました。ところが、初期版本による青年ルスタヴェリ像が、十五世紀ごろの版本では次第に口ひげを附加され、それが後に作者像として通用するいきさつも調べられました。とりわけ、一六四六年版(右上)から一六八八年版(右下)にかけて、グルジア彩色画は質量ともに最盛期を迎えるわけですが、いつの時代の画家にとつても、『虎皮の騎士』は最も魅力に富んだ劇的テーマだったのです。同時に、現代の画家や彫刻家たちがルスタヴェリその人を再生させる上で、の原型も確かなものとなりました。

アマラナシビリのこの本が出版された一九六六年は、ルスタヴェリの生誕八百年の大記念祭の年に当り、モスタワではポリシヨイ劇場で政界・文芸界の代表的指導者も参列して祝典が催されました。もちろん、グルジアでは国をあげての連日にわたる記念行事がつづき、私がトビリシにはじめて着いたその日はブレジネフも飛来しておりました。もとより作者についてなんの予備知識もない私だったので、銅像にも、絵画にも、民芸品にも、そしてコルホーズの農家の壁にも、八百年むかしの詩人がこんなにも生き生きと甦える民族生活に、まずは深い羨望を禁じ得ませんでした。いつしか、詩人は、東方の國の一編集者の胸にも火を点じたのです。



作者の生誕八百年を記念してロシア語版とグルジア語版でこのような装ゲット版(実物大・縦九〇)が出版された。いわば聖書のような意味をもっている。



ルスタウエリ Шота Руставели (一三二—三世紀) ロシア(グルジア)の詩人。チフリスの南方ルスタウイで生まれ、当時グルジア地方を支配していたタマラ女王の宮廷詩人として活躍。民族的叙事詩「虎の皮を着た勇士」(一九六一—二〇七)は、中世文学の最高峰と目され、グルジア詩文学の母胎となつて、今日の民族詩人たちにも大きな影響を与えている。(中里連弥)

右は新潮社版『世界文学事典』の記述なのですが帰国した私の第一歩は、先ず事典によるABCの入門から始まったのでした。もちろん訳者と約束が成立してからは、いろいろ耳学問もできるようになりました。樹下節氏もソ連の新聞・雑誌の関連記事をもその都度発見し教えてくれました。そして何より私の情熱をかきたてられたのは、N・コンラド先生の『東洋と西洋』 日本版の出版に着手してからの先生の教示とはげました。先生は同書の中で、Sh・P・ヌツピツゼの「ルスタウエリと東方ルネサンス」など多くのグルジア文献を駆使し(その他アルメニアや中国の司馬遷・日本の軍記ものに関する自身の研究も含めて)、「東方のルネサンス」の観点を提起したのです。先生の指摘は、これによって西歐的ルネサンスの世界はもっと広く多元的であり、人類意識の共通根は大きくことを指摘する雄大なヒューマニストの志向を大胆に示していました。

しかし、この指摘に触発されながらも、私の想念は、総じて近代化コースの絶望的な極限状況に当面している現代人として、深いベシミズムからの脱出



こんなペンダント型本も作られている (実物大縦3cm)。中の絵巻(中段)はグアティアシビリによって描かれ、外装はグルジア名物の彫金細工である。まるでジュヴァリ(グルジア語で十字架)ですわと私はつぶやいた。

目を探求する方向へと、勝手に独走するのです。もとより十二世紀の一叙事詩に、現代的混沌の救いを托するような怪はすみは戒めているのですが、少なくとも、私たちに「近代」をその根元からみつめなおすべき理由はあります。そしてその際、イタリヤ・ルネサンス型の人間解放の思想的系譜が、どこかでとりこぼして来たものを省察してみるほどの原点回帰は必要だと思えます。今、その点に関する議論のゆとりはありませんが、ただ一つ、「虎皮の騎士」が、どんなルネサンス文献にもまして熱く訴えている《友情》が、現在の子孫の胸底に聖書や十字架の重さで生きている様相は、今も鮮烈に私をとらえつけています。そこには、グルジア人自身が考えている以上に切実な現代的意義がひそんでいると思えます。

◆虎皮の騎士＝目次◆

序 詞	17	ホムス王のインド入りとその噂	24
1 アラブの王 ロステウン	22	ネスタン姫かどわかされる	25
2 1 狐鹿のロステウンとアフタンシル	28	タリエールとカラシニコアリドンの出会い	103
3 2 1 虎の皮の騎士との出会い	30	タリエール アリドンの刀を盗る	106
4 3 1 王女はアフタンシルを騎士の探察におくり出す	35	アリドンはネスタン姫を見たという	108
5 4 1 家臣一同へのアフタンシルの親書	41	アフタンシルのアラビアへ帰る	115
6 5 1 虎の皮の騎士をさがして	43	王女を婚を賜わるようアフタンシルは母国に頼む	123
7 6 1 洞窟のなかでアスマートと語る	50	アフタンシルとシエルマジンの相談	129
8 7 1 アフタンシルとタリエールの出会い	57	ロステウン王にあてたアフタンシルの遺書	131
9 8 1 タリエールはおのが愛する物語語る	61	アフタンシルの祈り	134
10 9 1 タリエールの恋の物語	65	王はアフタンシルの秘密の脱出を知る	135
11 10 1 王女ネスタン・クレシヤンの最初の恋文	70	タリエールと再会するためのアフタンシルの策立	138
12 11 1 タリエールの返書	71	アフタンシルは氣を承つたタリエールをみつめる	143
13 12 1 ハタイ人に出したタリエールの手紙	72	タリエールが獅子と虎をせしめた次第	149
14 13 1 ネスタン姫タリエールを知り	73	南騎士は遺物に匿りアスマートに会う	151
15 14 1 ハタイ王の返書	75	アフタンシルはアリドンを訪ねて	156
16 15 1 タリエールとネスタン姫の語らい	76	アフタンシルとアリドン	159
17 16 1 タリエールのハタケ進撃と大合戦	78	アフタンシルとキャラバンの出会い	167
18 17 1 インド王へのタリエールの手紙と別處	84	美しい都クランシヤロの物語	172
19 18 1 愛する人へのネスタン姫の手紙	88	アフタマ勇士に恋い焦がれる	175
20 19 1 タリエールの狂乱	89	アフタマの恋文	176
21 20 1 愛する人へのタリエールの返書	90	アフタンシルの返書	178
22 21 1 ネスタン姫の結婚と大合戦	91	ネスタン姫の運命についてのアフタマの物語	182
23 22 1 タリエールとネスタン姫の相談そして二人の決意	93	ネスタン姫がカウジンのとりこになる物語	184
48 1 1 ネスタン姫へのアフタマの手紙	202	タリエールの方策	56
49 2 1 アフタマへのネスタン姫の手紙	204	カウジンとネスタン姫の攻めとネスタン姫の救出	57
50 3 1 愛する人へのネスタン姫の手紙	205	海の国からアリドンの国へ	58
51 4 1 アリドンへのアフタンシルの手紙	209	アリドンのもとで行われたタリエールとネスタン姫の婚儀	59
52 5 1 アフタンシルとタリエールの再会	211	三勇士は洞窟を救ってアラビアへ	60
53 6 1 二勇士とアリドンの出会い	217	アフタンシルとネスタン姫の婚儀	61
54 7 1 アリドンの方策	220	タリエールとネスタン姫の婚儀	62
55 8 1 アフタンシルの方策	221	大団円	247

騎馬小宮山出陣	1
訳者あとがきにて代々々々	23
編集後記	24



アラブ王子の考案に基づき、長谷川裕吉や外務省の要員に於ては出たはるる各々所々の像をマムカ・クワアケラランとセリが描いた複製画



アラブ王子の服装と馬車や民衆の多くが「北風の騎士」に着想している。



◆感謝の追憶◆

モスクワからグルジアに入った日本人ならば、通例は、日本語からロシア語へ、ロシア語からグルジア語へという複雑な通訳過程の往復で対話することになります。幸いにしてグルジア政府は、日本語の話せる唯一のグルジア婦人リュドミーラさん(写真右)を探してくれました。彼女は中国東北在住の頃に日本人と交際した「引揚げ者」なのです。

対外友好協会のジゲンティ氏(中央)は、誠実で教養の高い親日家でした。彼なくしては、グデアシビリやアマミラシビリなど当代の代表的知性との次元の高い対話は成り立ち得なかつた、と感謝せざるを得ません。

\*

それにしても、手間ひまのかかる仕事を微力の出版社が担う半歩の年月の間に、この本の出版を最も喜んでくれるはずの大切な恩人たちを喪う悲しみを重ねました。

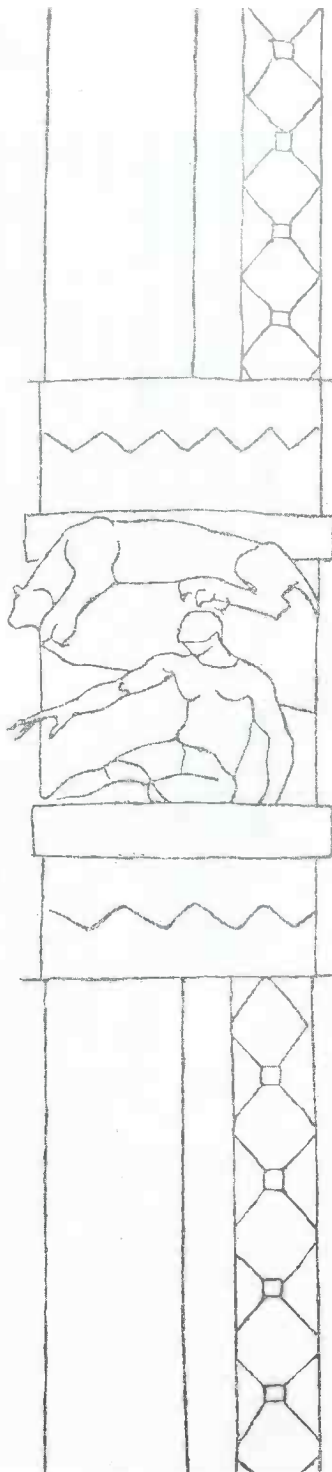
もともと、コンラド先生は長文の解説を特に日本の読者宛に寄せてくれるはずでした。一亡くなられる十日ほど前に病床を見舞った丸山政雄氏にも、先生はそのことばかりを心にかけて語ってくださったそうです。

私の気ままな旅を支援してくれたグルジア共和国の外務大臣ともいうべきA・A・ギゴシビリ氏も、とつぜんの病気で逝かれてしまいました。本書の出版と「友情」のためには禁を犯して乾杯を重ねてくださったのに。

そして、かんじんの訳者・袋一平氏の思いがけない逝去です！ 一度は仕事をすすめる張りあいもなくなつて、ばんやりしました。おそらくは、本書をかかえてグルジアへの何度目かの旅に向くはずであった氏に代つて、私は、グルジアの友人たちに会いに行くことになるでしょう。



写真は特に明記したものは筆者の撮影による



序 詞

1

万能の力で宇宙を創ったその人は  
空の高みから万物にいのち吹きこみ、  
われら人間には多彩の世界をあたえ、  
みずからのおもかげを地上の君主に伝えた。

2

万物それぞれをふさわしく形づくった唯一の神よ、  
私を守り、サタンをこらしめる力をあたえ給え。  
終り知らぬ恋の熱情をみなぎらせ、  
あの世までも担<sup>な</sup>う罪の重荷を軽からしめ給え。

3

その雄々しきこと獅子の如く、槍、楯、剣も似つかわしく、  
しかも、紅<sup>くれな</sup>の頬、漆黒<sup>しつこく</sup>の髪うるわしき日の女王タマラ、  
おん身をたたえるいかなる讚美の歌があるうか？  
うたげの主と仰ぐだけで、心浮きたつものを。

4

心血注いで、タマラ女王をたたえようと、  
いつか私は真心こめて、その歌を歌った。  
インキはうばたまの湖、ペンは葦のくき。  
聞き手の胸はするどい槍に刺しつらぬかれよう。

5

女王にふさわしき優雅な言葉をひびき高く綴り、  
その眉と、まつ毛と、黒髪と、とりわけ唇と齒の、  
ルビーと水晶の輝きを歌えという。

硬い石とてもやわらかい鉛のかなしきの上で砕かれよう。

6

今こそわが歌には、言葉と情緒とわざが要る。

わが知恵、わが才能よ、私を支え、力をあたえよ！

さればタリエールのいさおしを美しくうたいあげ、

厚き友情に生きた三人の巨星をよみがえらせよう。

7

いざ、ともにタリエールへのつきぬ涙を注ごう、

この世にかかる人物は二人とはいわないのだから。

ルスタヴェリと申す私は、心の傷を分かち合って、

昔語りとなったその物語を真珠の環のように歌にうたおう。

8

愛の熱情は私の精魂をこの物語にかりたてた。

それは大軍の力よりも強く、太陽よりもまぶしい。

私は疲れた。だが恋の病に薬はない。

そのとりことなったからには、自ら墓を掘るばかりだ。

9

これはグルジアの言葉に移されたベルシアの物語、  
真珠のように、いく世代かけて愛されるだろう、

歌にうたうのは、軽からぬ仕事だったが、

その荘重さ美しさは私を狂喜させ、心を自由に踊らせた。

10

その輝きには目にはくるめき、くるめいてはまた注がれた。

心は恋の重荷を負って空しき野末をさ迷った。

そのためなら、心の欲びのためなら、この身も灼ごう！

かくれなき三勇士への讃歌に耳傾け給え。

11

運命に身をゆだねた者に、不足はない。

働く者は喜々と働き、戦う者は勇氣に燃える。

恋する人はただひたすらに酔いしれる、

裁く身にならず、裁がれる身にもなるでない。

12

詩は、とりわけ知恵のたまもの——

すぐれた歌はすぐれてひびきよく、

聞く耳あればその人を樂しませる。

長い物語を短く——それも詩なればこそだ。

13

駿馬<sup>め</sup>は長い道でおのれを試し、  
競技者は球をさばいてそのわざを示す。

詩人と同じこと、長い文句を緩らうとも、

言葉につまり、韻が弱まれば、また出直した。

14

言葉につまり、詩藻につまづくとき、  
詩人の顔を見、その詩を見るがいい。

筋のはこびに迷ったか、小細工に逃れたか、

球さばきよろしく、またもやヒーローとなりうるか。

15

一句や二句、巧みに編んだとて、まだ詩人とは申せまい。  
うぬぼれたとて、よき詩人とはなりえまい。

一行か二行結んで、まだ形もつかぬうちに、

「ほら、これが詩だ！」とうそぶくは、驢馬<sup>ろば</sup>のがんこさ。

16

ともすると、小粒の詩人が多く、  
人の心を打つ言葉の仕上げを欠く。

たとえれば、獲物を追う未熟の狩人、

大きいけものにしりごみし、埒<sup>らち</sup>もない小鳥を誇る。

17

中には酒席の興に向く歌も多い、  
情事<sup>じょうじ</sup>をあばき、しゃれのめす、

くどくさえなければ、気晴らしにはなろう。

だが不朽の大作を書かない者は詩人ではない。

18

詩人はその天分を浪費してはならない。  
愛ひとすじにまとをしほり、

精魂<sup>せいこん</sup>つくしてそれを歌いぬくべきだ、

ただひたすらに、言葉で曲を奏でるべきだ。

19

いまこそ聞き給え、誇らかに私がそれをうたうのを。  
私はそれを限りなく誇り、いささかもたじろぐまい。

それはわがいのち、牝虎のごとく無情なのだ。

いざ、その名をひそかに告げて、賞めたたえよう。

20

私は語ろう——高貴な本然の愛を。  
言葉ではなく——言葉はここでは貧しすぎる、

それは高く舞いあがる天上の愛。

それをとらえようとする者は多くのむだを覚悟すべきだ。

21

そういう愛は、知恵では理解できない、

舌は疲れ、聞く耳はふさがっているのだから。

苦悩を知らぬ夢心地は、愛とはほど遠く、

肉欲にゆだねた情熱は、愛を低めるばかり。

22

恋に狂う者をアラブ人は*ミジヌール*と呼ぶ、

見さかいいない愛に、燃え狂うゆえに。

いたずらに神の助けにすがるもあり、

心いやしく、美少女にまといつくもある。

23

だが*ミジヌール*こそ、太陽のように美しいはずだ、

知恵あり、若く、心ゆたかで、自由、

言葉さわやかに、強者のなかの強者となる。

そのいづれを欠いても、*ミジヌール*とはいえぬ。

24

愛——それは名状しがたく神聖で美しい力。

愛——それは情欲とは無縁のもの。

愛と情欲——そのあいだには巨大な深淵があり、

これら二つをたがいにもつれさせてはならない。

25

*ミジヌール*はつねに自墮落をさげすむ。

嘆きをこめたため息で、男は愛する女と別れるもの。

いかに女の怒りが注がれようと、男の真心はくじけない。

抱擁とキスだけの、魂のない愛を私はさげすむ。

26

今日はこれ、明日はあれ、別れてそれまで、

*ミジヌール*にとって、それは愛ではない。

これは若者たちのむなしいなぐさみ。

世の誘惑にうち勝つ者——それが*ミジヌール*だ。

27

愛——それは悲哀を内に秘めるもの、

ひたすら愛する人を思うがゆえに、孤独をもとめるもの、

別離のつらさに身を灼き、心を焦がすもの、

愛する人への畏れを深め、その激怒にも耐えぬくもの。

28

*ミジヌール*は何人にもおのが愛をあかささない。

広言のあげく、愛する人に汚名を着せたりはしない。

どんなときにもおのが恋心のきざしさえ、人には見せぬ。

愛の受難は酒宴のよう、その女のために火にもとびこむ。

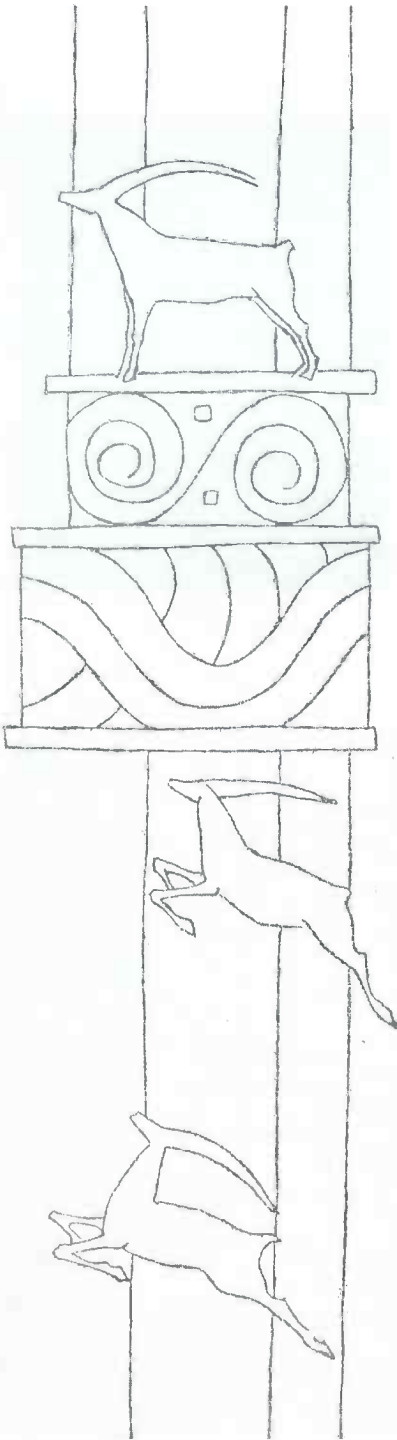


愛の誓いをいふらす者を信じるは狂人のみ、  
愛する人にも、おのれにも、嘆きのほかなんの益があるろう？

秘密が秘密でなくなれば——彼女の誇りは救いようもない。  
ミジヌールは娘の愛に不幸を招くべきではない。

30

おのが愛をいふらす者の気が知れぬ、  
なぜ愛する人はずかしめ、傷つけるのか、  
愛していないのなら、なんで愛を語るのか？  
だがくだらぬ言葉こそ、くだらぬ輩にうってつけなのだ。



31

愛する人が愛に泣くとき——涙はふさわしい。

森のなかの世捨人のように、ひとりひそかに泣くがいい。

愛する人のおもかげを描き、それを抱きしめながら、  
だが人なかでは、おのが愛を口に出さぬがいい。



32

強大な王国アラビアに、ロステワンという王がいた。  
練達の戦士、公平な君主、

寛大で物惜しみせず、威あつて猛<sup>ま</sup>からず、

弁舌さわやかに、強力な軍をひきいる王だった。

33

姫ひとりのほか、王には子がなかった。

大陽系の天体のように姫はまばゆく輝き、

ひと目見るなり、誰も分別や落着きを失った。

よほどの賢者詩人でも、その美しさは語れまい。

## 第1章

### アラブの王

### ロステワン

34

チナチン——それがこの美しい姫の名。

彼女が成熟するにつれ、大陽もその前に光を失った。

王は会議を催し、親しく重臣を集めて、

うちとけた相談をもちかけた。

35

王はいった。「さて、折り入っての相談だが、

咲き誇るバラの花とて、しおれ枯れば散り、

その色香のあとには、新しいつぼみが芽ぶくもの。

わが身の日盛りは過ぎ、闇の夜が迫っている。

36 私は存分に生き、もはやどんな病よりも重い老いの身。

今日か明日にも死ぬだろう。それがこの世の定め、  
闇が忍びよっては、光は持ちこたえられぬ。

そこで太陽よりも美しいわが娘を玉座につかせたいもの。」

37 一同は答えた。「何を仰る、わが君。

君の威徳を慕わぬ民草がありません。

バラはしおれても、かおりは一段と他の花に勝ります。

欠けゆく月を何とて星はあざけりましょうや？

38 ましてわが君、バラはまだしおれてはおりませぬ！  
お言葉ともおぼえませぬが、せひもない、

それがわが君の御心を安んじるとあらば、  
太陽をもしのご姫君を玉座に仰ぎましょう。

39 姫君とはいえ、それは天の授かりもの、  
いえ、われら衷心より姫の統治の才を確信します。

その威徳は太陽のように行きわたるであります。

獅子の子は獅子、雌雄の別は問いませぬ。」

40 アフタンジルは総大将の子で、侍大将、  
太陽にも月にも見まごうばかり、

頬ひげなければ、顔は水晶の清らかさを帯びたるう。

チナチンのまつ毛の美が、彼の心を刺しつらぬいた。

41 勇士の心底ひそかに、恋の炎はゆらめく。

姫の姿なければ、その頬のバラ色は失せ、

姫が現われるや、炎はふたたび心の傷をうずかせる。

あわれ恋する身は、情熱の責め苦にさいなまれる。

42 姫の即位を宣する王の言葉に、アフタンジルは歓喜した。  
燃えさかる彼の心は、わずかに安らぎを覚えた。

「これからは、さらにしばしばお目にかかれよう、  
わが顔色にもまた、赤味がもどるだろう。」

43 アラビアじゅうにくまなく国王のおふれがまわった。  
父なる王は娘チナチンを王位の継承者と定めた、

女王の栄光は太陽のごとく国じゅうを照らすであろう。

来りてその美しきおもてを仰ぎ、心からたたえよ。》

44

アラビア人はこぞぞって城内にかけつけた。

侍従長ソクラートも、侍大将アファンジルも。

やがて玉座が群衆の前にととのえられるや、

驚嘆の声があがった、「なんととみごとな！」

45

父王は光り輝くチナチンの手をとって、

玉座につかせると、その頭に王冠をのせ、

王笏を手わたし、肩に王服を着せかけた。

姫の威光は太陽のようにすみずみまで行きわたった。

46

王と軍は引きさがって、姫の前にひれ伏し、

姫を称え、忠誠誓う声は八方から起こった。

ラッパは高鳴り、シンバルは快く響きわたった。

とたんに、姫のまつ毛は涙にぬれた。

47

父を離いで王国を統べる資格がこの身にあらうか、

思いなやむ涙は、バラの園に注ぐ雨にも似る。

老いたる王ははげました。「子が親に代るは、神の掟おきて、

この掟にそむけば、われらは火に焼かれるであらう。」

48

父王の助言はつづく。「泣くのをやめて、聞くがよい！

今日からは、そなたがまぎれもないアラビアの女王、

この国と人民の幸せは、すべてそなたに任されたのだ。

賢くふるまい、ひかえ目に裁け。

49

雑草にも、バラと同じく、光をそそぎ、

貧しきにも、富めると同じく、なまけをかけよ。

慈悲は奴隷をも高貴にし、その枷かぎを軽くしよう。

大洋の波にも似て、寄すれば返すが習いなのだ。

50

エデンの園を飾るはイトスギ、王を飾るは寛大な振舞。

二心ある者とても、王者の寛仁には畏れ服そう。

祭りとうたげに費やすほうが、蓄めこむよりは益がある。

与えたものはそなたを富まし、与えぬものは失われる。」

51

父の教えはチナチンの胸にしみた。

心打つ言葉は姫はすなおに受け入れた。

つづいて王はうたげをひらき、祝福した。

チナチンは太陽をかげらせ、太陽はチナチンをうらやんだ。

52 女王は忠実なおのが補佐役を召しよせた。

「おまえの封印ある王女の蔵をみんなあけて、わたしの財宝を残らずここへもってきておくれ。」

ぞくぞくと運ばれた財宝は惜しみなく分け与えられた。

53 幼少の頃から集められたありったけのものを分けつくし、上下貧富の別なく、人びとすべてを豊かにした。

そして女王は言った、「父君のおしえを行ないました。わが財物を受けない人がないように。」

54 さらに臣下に命令した、「宝庫のものも持っておいで！ 厩舎長、馬もみんなつれておいで！」

宝もきた、馬もつれ出された。これを残らず分け与えた。兵隊たちは海賊のように、それらをかき集めた。

55 トルコ人からの分捕品のように、手あたりしだいに、財宝を手づかみにし、アラブの駿馬もつれ去られた。吹雪のように、引きも切らず贈りものはばらまかれ、男も女も富めるも貧しきも、素手の者はいなかった。

56 飲みに飲み、食べに食べて、一日は過ぎていく、雲霞と見まごう強兵どもも、酒宴に溺れ果てた。

何の気がかりか、父王ひとりが顔をくもらせている。「いかなされたか？」まわりに不審のささやき声。

57 上席にひときわ目立つはアフタンジル、獅子の目差、虎の身ごなしで、かくれもない大将。

となりに老侍従長ソクラート。兩人ともに訝かり顔。「なにゆえわが君のお顔が訝えやらぬのか？」

58 「たぶん何やら気がかりを思い出されたのであろう、と申すのも、ここにはかくべつご心配のむきはないはず。」アフタンジルはそういって、「お訊ねするのが上分別だ、談笑のうちに、それとなくお気を引いてみましょう。」

59 最長老のソクラートと、並びなきアフタンジルはつれ立ち、さかずきささげて、静かに王の御前に進みより、満面に笑みをうかべて、正座した。侍従長から、言葉たくみに口を切る。

60

「わが君には、ことのほかお顔の色が冴えませぬ、もしや、宝庫があとかたもなく荒らされ、

財宝ごとごとく人手に渡ったのが、お気がかりか？」

姫を玉座に迎えたのが、おまぢがいのものと侮まれてか？」

61

王はソクラートのかん違いに、しばしとまどい、やおら臉をあげると、ものしずかに語った。

「天から降るように恵んだからとて姫を叱りはせぬ。

私をさような物惜しみと思うとは、なさない。

62

気がかりなのは、財宝のことではない。ソクラートよ、

私は年をとり、もはや若い時代は過ぎ去った、

ところが、武勇の心とわざを、私から学びとったものは、

いま国じゅうを見渡しても、ひとりもおらぬ。

63

たったひとりの娘を私は、やさしく慈悲深くと育てた。

なれど世継ぎの男の子はなかった——それが私の運命！

球戯で、弓矢の道で、私に並ぶ者はおらぬ。

わずかに、私の教え子、アフタンジルだけがどうやら。」

64

勇士はつつしんでロステワン王の言葉を聞いていたが、その武勇の自慢話に、思わず微笑した。

白い歯が野末を照らして、光った。

王はとがめた、「何が、それほどおかしいのか？」

65

それとも、この私をからかう気か？」

勇士は無礼をわびていう。「まずお誓いあそばせ、

私が何を申しましようと、けっしてお腹立ちなきよう、

私の無作法を、おとがめなさらぬと。」

66

王はいう、「よし、何を申そうと悪くはとらぬぞ！」

そして太陽よりも美しいチナチンにかけて誓った。

アフタンジルは答える、「では申しあげましょう、

弓矢については、ちとお言葉が過ぎたかと存じます！

67

おそれながら、弓矢にかけては、私はひけをとりませぬ。

部隊を証人とし、腕くらべしてもよろしうございます。

とりわけ八私にならぶ者なし√などは解ひせぬお言葉、

どちらが強いかは、野に出ればすぐわかること。」

王はいった、「よくもいったな、聞きずてならぬ。

すぐにも弓矢をとって、腕くらべをしよう。

証人として、心得ある者どもをえらび、

いずれに軍配あがるか、野に出てためそう。」

アフタンジルは一礼し、衆目のうちにことはきまった。

無邪気な笑いとさざめきが巻きおこった。

賭は、こんなぐあいにきめられた——

負けけた方は三日間、人前にかぶりものをかぶれない。✧

王は命じた、「狩猟方十二名は私に従い、

矢筒十二を運び、私の矢が切れぬようにせよ。

おまえの親兵隊長シエルマジンは、一人でも十二名に勝る。

狼のえものは、公平に正しく数えられよう。」

王は狼人たちに号令した、「いざ、野をめぐるって、

狩立てをなし、けものというけものを追い出せ。」

部隊にも、競技への出勤命令が出された。

楽しい酒宴は、こうして終りを告げた。



## 第2章 獵場のロステワンと アフタンジル

72

明け方、白百合にも似た勇士は白馬で乗り入れた、  
むらさきの服、水晶とルビーの顔の輝き、  
肩衣かたよぎには金糸のぬいとり、剣には黄金の浮き彫り。  
馬上高く騎士アフタンジルは王をいざなつた。

73

従者をしたがえ、王は獵場へ馬を進めた。  
強兵かたきどもは腕くらべを見んものとひしめき、  
町方の者は野をめぐるって祭りのごときさんざめき。  
それぞれ賭け弓を引き、矢羽根の音は高鳴つた。

74

王は十二人の腕利きの狩獵官に命じた。  
「身近にあつて間をおかず弓矢をそろえよ！  
矢の行方を見定め、いずれが射たかを見まごうまいぞ。」  
ほどなく四方からけものが狩り出されてきた。

75

その数いくばくか、いま野に群れなすは、  
鹿、山羊、野牛、さては奥山おくやまかもしかまで。  
王と勇士はそれを追ひ、みごとな手腕てづかを競う、  
いずれ劣らぬ弓矢のはやさは目にもとまらぬ。



76:

馬のひづめが巻きあがるほこりに、目はかげった。

一矢の放たれることに、けものはいけにえとなり、

矢が補給されるにつれて野は朱に染んで、

傷ついたけもの二度と立ちあがるものはいなかった。

77

馬に拍車を当てて、野にけものを追ひ、

射ち、殺し、天なる神を烈しく怒らせた。

野はけもの血でいまやむらさき色に変わったが、

「まるで樂園の若木だ！」と、アフタンジルは賞讃の的。

78

ふたりは旋風のように野を駆けぬけた。

野のはずれに、岸の岩を洗って小川が流れ、

けものは茂みに隠れて、もはや馬も追えなかった。

ふたりは疲れはてていたが、強いて元気を装った。

79

「私の勝ちだ」とふたりは言い争い、

楽しい狩にうち興じたあとの快さを分かち合った。

ほどなく矢筒を持った従者たちが追いついた。

「いずれの勝ちか」と王は訊ねた、「ありのままに申せ。」

80

従者は答えた。「ただありのままを申し上げます、

さすがのわが君も、まこと彼には及びませんでした。

たとえ死を賜わろうとも、偽りは申せませぬ。

彼が仕とめたけものは、すべてその場で息絶えました。

81

おふたりで仕とめた獲物は百を超えましたが、

アフタンジルの取り分は二十も多いのです。

彼の矢は悉く的をつらぬき、一つの射損じもありませぬ。

されどわが君の矢は、時に地上に散っておりまして。

82

王はこれを敗者の歌とは聞かず、

バラがナイチンゲールに耳傾けるように聞いた。

アフタンジルの勝利は、まさに王の勝利、

笑いは愉しさを増し、うれしいの影は消えた。

83

一同は岸辺の木蔭に憩いをもとめた。

畑にそよぐ穂波のように、部隊はここに集結した。

精鋭十二人組の甲冑がひときわきらめき、

人びとは川や野末のながめを楽しんだ。

### 第3章

## 虎の皮の騎士との出会い



84

ふと見れば、小川の岸辺に見知らぬ騎士が  
真珠ちりばめた黒馬のたづなを持って泣いている。

高貴の容姿ながら、その若わかしい頬には、  
胸からほとぼしる涙がとめどなくつたっている。

85

騎士は虎の皮でつくった服をまとい  
おなじ虎の皮のターバンをいただき、

その手に握る鞭は兵士の腕よりも太い。  
このふしぎなようすは、王たちの目をひいた。

86

事情を聞くため、従者がおくられたが、  
騎士は悲しみに打ちひしがれてうなだれたまま。

黒いまつ毛をつたって涙は流れ、  
目は水晶の圍にとざされている。

87

なにやら憐れで、使者はとみには口もきけず、  
ほど経てようやく王の言葉をおずおずと、

「わが君のおさしずで」と伝えたが、耳にも入れず、  
人の気配も知らぬげに、騎士は涙にくれるばかり。

使者の声も言葉も聞かず、

部隊のどよめきにも感ぜず、

ただ火と燃える心が異常なうめき声をあげ、

血まじりの涙が堰を切ってほとぼしった。

騎士のおもいははるか彼方をさ迷っている！

再び王の命令が伝えられたが、

使者の声も、耳には入れず、泣きやみもしない、

その口もバラのつぼみのようにとぎされたまま。

答を得られぬまま、従者は王のもとに引返した。

「仰せを伝えても、泣くばかりで、なんにも答えませぬ、

私の目は日に照らされたようにまぶしく、胸さわぎして、

なんとしても口をひらかせることができませんでした。」

王は驚き、胸は憎しみにわき返った。

十二人の勇士を呼びよせ、声荒らげて命じた、

「屈強の強兵ども、腕におぼえの武器をとり、

あの騎士めを、ただちにここへつれて参れ」

十二勇士は物の具鳴らして騎士に近づいた。

さすがに騎士はわれに返ってふり返り、

涙ながらに一団の戦士を見た。

「悲しや！」とひとこと。そのまま言葉はとだえた。

その手を目にあて、熱い涙をふりはらうと。

剣と矢筒を引きよせ、腕をのぼして、

ひらりと黒馬に——相手には目もくれず、

言葉も惜しんで——別の小道にかけこんだ。

戦士たちがとらえようとすると、騎士は振り向きざま、

敵も憐れむほどの打撃を彼らに加えた。

戦士たちを互いにぶち当てて、容赦なく殺し、

あるいは鞭で、いきなり胸を切り割いた。

王ロステワンは無残な殺戮に血をたぎらせ、

並居る者どもに虐殺者の追跡を命じた。

だが彼らが追いつくよりも早く、

騎士の一撃はたちまち追跡者の息の根を止めた。

96 王とアフタンジルは馬に乗って騎士を追った。

鞍上の若武者は身ごなし軽く、馬はメラニ<sup>\*</sup>に似て、

大陽が野をはくように走る。

彼は王もまた背後に近づいたことを知った。

97 王が追いついたとたん、騎士はおのが馬に鞭を当てた。

一瞬視界から消えて、彼の姿はなく、

天に飛んだのか、あるいは、地にもぐったのか、

いくら探しても、もうその痕跡すら見つからなかつた。

98 デフ<sup>\*\*</sup>のように、あとも止めず消え去るとは、

この世のふしぎというもおろかなこと。

兵士たちは死者をいたみ、傷者の手当をした。

王はいった、「わが楽しみはこれで終った。

99 もはや神はわれらの幸福に飽きて、

わが楽しみを悉く悲しみに変え給うたのか。

わが身は永遠に傷つき、何人もそれを直すことはできぬ、

あわれ、これが神の御心<sup>みこころ</sup>なのか。」

100 こう語ると、王はしおしおと宮殿へもどった。

獵人は狩の気分を忘れ、勝ち負けを問うものもなく、  
さざめきも笑いも消え、うめきが泣き声に重なつた。

「情けなや」という者もあり、神に訴える者もあつた。

101 王ロステワンは悲しみにうちひしがれて寝殿に入った、  
したがうは、わが子とも思う、アフタンジルひとり。

召使たちも引きさがり、楽の音は絶えた、

102 あのカスタネットのひびきも、甘いハーブの音も。

王女チナチンは父王の部屋の入口に近づき、

侍従に訊ねた。「父君はもうお寝みかしら？」

「いいえ」と侍従は答えた。「わが君は、

103 悲しみにお顔の色は青ざめ、怒りで眠れぬごようす。

おそばには、アフタンジル様ただひとり。

ふしぎな騎士に会われたのが、ご不興のもととか……」  
チナチンはいった、「私は、このままそっと、もどります、

でも、私にご用とあれば、すぐまた参りましょう。」

\* メラニ——伝説の名馬。

\*\* デフ——グルジアの英雄伝説のふしぎな巨人。

104

ほどなく王は侍従に訊いた、「姫はどうしているか？  
わがよるこび、わが珠玉、わがいのちの泉は？」

侍従は答えた、「今しもお見えになりましたが、

「不興と知って、お召しがあるまでとお引取りでした。」

105

「すぐ呼んでくれ、姫なくして生きられようか？

伝えてくれ、父の生死にかかわるのになぜ退がった？

来て、わが悲しみを吹きはらい、心の傷を癒してくれ、

なぜ、わがよるこびが消え失せたかを聞いてくれ、と。」

106

父王の言いつけを聞いて、チナチンは駆けつけた、

さながら、明るい月が天上に現われたかのように。

王は姫をそば近く招じ、やさしくキスした。

「なぜ待たせた、なぜ呼ぶまで控えていたのじや？」

107

姫は答えた、「こののほかご不興と承りました、

星空の輝きすら王者の不興で曇ると申しますのに、

なんで私がお気持ちを晴らせましようか？ さりながら、

いかにご心労をとりのぞくか、嘆くより工夫が第一。」

108

王は答えた、「私の心労も、そなたを見たら和らいだ、  
そなたがそばにいれば、太陽が雲を消すように安らかだ。  
では私の嘆きのそもそもを聞いてくれ、

そのわけを知れば、そなたとて私を嘲うまい。」

109

私は惚れ惚れするような見馴れぬ騎士と出会った、

やつは何やらしきりと泣き、そのわけも語ろうとはせぬ。

私が呼んでも知らぬ顔。

腹立ちまぎれに、引きつれよと命じたのだ。

110

やつは私を見るなり、涙をはらって、馬に乗った。

部隊を送ってとらえようとしたが、あえなくみな殺し、

あげくに、幽霊のごとく地に呑まれて消え失せた。

今もって、夢かまぼろしか、私にもわからない。

111

何が起こったのやら、何を見たのやら？

やつが屠った強兵は数知れず、流した血は川のように。

しかも、わが目の前で消え失せるとは、なんの變化か？

ああ、今こそ私は神の加護を失った。

112

神の甘いお慈悲が、今この身には苦くるくなつた！

哀れ、楽しく過あごしたあの日々を私は忘れた、

この身に慰めを与えてくれるものは、この世にない、  
あと幾日生き延びようと、欲ほびも幸せもあるまい！」

113

チナチンはいう、「つたない言葉ながら申上げます。

なんで無益なくりを言を並べ、運命を嘆かれるのでしょうか？

なんで天地を創つくった神様に不幸の罪をきせるのでしょうか？

善をなざる万物の父に、どうして悪ができませんよう！

114

父上は王者の中の王、王国の中の王国のあるじ。

領地は限りなく広く、力も限りなく強いのです。

追手を四方に遣わして、その騎士を捜させるならば、

それが人の子か、悪魔の申し子か、難なくわかりましょう。」

115

追手は世界の四方に送り出された。

「必要とあらば、この世の果てまでも行け、

労苦も時も惜しみなく、全力あげて騎士を捜しだせ。

到るところに話を伝え、僻地には書状を送れ。」

116

追手は出て行き、やがて一年は過ぎた。

行く先々で聞きまわり、捜しまわつた。

だが騎士を知る人にも、見た人にも会えなかつた。

追手は、虚しく傷ついた心を抱いて、帰ってきた。

117

追手はいつた、「わが君、地の中も水の底も捜しましたが、

ご下命のあの騎士の足跡すら見つかりませんでした。

彼を見たという人物どころか、手がかりすらありません。

いかに励んでみても、お役に立ちようがございませぬ。」

118

王はいつた、「なるほど、まさにわが姫の申したとおりだ。

たしかにあれは、私の威信に挑む悪魔の化身、

私の心を試そうと、天から遣わされたに違いない、

なに、悲しむことはない、悲しんだとてせんないことだ。」

119

王は、いつそう盛んな酒宴や狩猟を催した。

軽業師かるわざも詩人も踊り手も陽気な気分を盛りあげた。

贈りものがふんだんに客という客に分け与えられた。

王の中でも、これほど気前のいい王様は、神も知るまい。



#### 第4章

### 王女はアフタンジルを 騎士の探索におくりだす

122

アフタンジルは胸をはり、臆する色なく急いだ、  
しばしば思慕の涙にくれたそのひとに会うために。  
いまそのひとは眉くもらせて悲しげだが、

美しさは稲妻のよう、月の光をさえかき消した。

123

チナチンはすらりとした身に貂たぬきの毛皮をまとい、  
高貴なヴェールをかるく肩にかけ、  
黒いまつ毛に人の心を刺しつらぬき、  
白いうなじを長い黒髪になぶらせていた。

124

彼女はむらさきのヴェールの下から悲しげに会釈むすぶくして、  
静かにアフタンジルに席をすすめた。  
召使のそなえたいすに彼はひかえ目にすわったが、  
まぢかに王女を仰いで、大なるよろこびに満たされた。

120

アフタンジルがわが家にくつろいで、ハーブ爪弾き、  
ひとり歌など口ずさんでいるところへ、  
ふいにチナチンの召使の黒人がはいってきた。

121

「月光の君のおんにそこもとをおつれせよとの仰せ。」  
アフタンジルはこの吉報に胸おどらせ、  
色あざやかな晴着をまとった。  
いままで愛する人と差向いで会ったことはなかった。  
そのいとしいバラをまぢかに見るこのこのよろこび！

姫はいった、「まことに口に出すもはばかりあれば、

思案に余ることながら、今まで黙っておりまして。

でも、なぜ私がうちおれて、おまえをここに呼んだのか、

おまえはたいがいそのわけをお察しでしょうね？」

126

勇士はいった、「恐ろしいことを何で私が申せましょう？

太陽に近づけば、月もその光を失うとか。

いま私の心は病んで、分別も乱れがち

何がお身を苦しめ、あるいは癒すかを、お聞かせ下さい。」

127

美しい刺繻ししゅうを編むように、姫は言葉を選んで答えた。

「おまえは今まで控えめに私から離れていたゆえ、

突然の打明け話にさぞびっくりなさるでしょうが、

私を苦しめる病についてまず聞いて頂かねばなりませんぬ。

128

おまえは忘れもしないでしょう、父と狩狐を競うたとき、

川辺で涙にくれていたふしぎな騎士を見たことを。

その話を聞いたときから、私に安き日とてはないのです。

天あまの下あまねくめぐってどうかその騎士を捜して下さい。

129

今日の日まで口に出してはいわなくても、

かねて私はおまえの気持を感じていました。

滝つ瀬となって涙が頬を打ったのも知っています。

おまえは恋のとりこ、おまえの心は恋に狂っているのです。

130

それならおまえはまず私に力をつくすべきでしょう。

第一におまえはわが家臣のうちで並ぶ者なき勇士、

第二におまえは真正まぎれもない私のミジスール。

それゆえわが願いを果すのはおまえのほかにはないのです。

131

それによつておまえの愛はなお強くなるでしょう。

わがなやみを癒すため、けがらわしい悪魔を退治し、

わが心に葦を植え、バラを咲かせて下さい。

お掃りになったら、おまえといっしょになりましょう。

132

三年間、草の根分けて捜し、

見つけたら、うれしい凱旋へんげん、

見つからなければ、あの人は変化へんげにきまっています。

いずれにせよ、おまえを待つのはみずみずしいバラの蕾つぼみ。



133

誓います。私がおまえの他に嫁ぐようなことがあれば、たとえ太陽が、人の形をして現われ出ようとも、この身は天国を失って、地獄の闇に落ちるがいい。おまえの愛が刃となつて、わが心臓をつらぬくがいい。」

134

勇士は答える、「おお、仰ぐもまばゆき太陽よ！ そのお言葉頂いて、なんで否やを申せましょう？ 死を待つ私にお身は命を授けてくれました。」

135

重ねていう、「おお、神の生み給いし太陽よ！ み空の星もすべてお身にひざまずく。お身のなさはわが身に余るよろこび、わがバラはしほむことなく、輝くでしょう。」

136

重ねてふたりは誓い合った。うちとけて、心の奥まで語り合った。いままでこらえていた悲しみはうすらぎ、白い歯が白い稲妻のように輝いた。

137

膝をまじえて、楽しい語りはつづき、水晶とルビーに照り映えて、瑪瑙は輝きを増した。アフタンジルはいった。「お身を見れば気は狂い、お身につけられた火で、心は灰になるでしょう。」

138

別れはつらかったが、勇士はいとまを告げた。去りがてにいくたびふりかえったことだろう。

139

水晶の粒を散らした彼の全身はうちふるえ、心を心に捧げたのは、愛のしるしというべきだろう。勇士はつぶやいた、「別れはかくも早くこたえるものか、水晶とルビーの輝きは失せて、琥珀よりも黄ばんだ。それなのに、さらに長く姫を見ずにいられようか？ 愛する人のための死はもとより望むところとはいえ。」

140

寝台に横になったが、枕は涙にぬれ、からだは風にそよぐポプラの葉のように震えた。うとうととまどろめば、かたわらに恋する人、目ざめれば、胸苦しさいや増すばかり。

141

別れとはかくもつらいものか、

真珠のような涙は頬をころげ落ちる。

夜があけるや、彼はよそおい美々しく、

謁見のため、馬にまたがり登城した。

142

まづエジプ<sup>\*</sup>に王への取次を命じた。

「わが君、おいとまごいにあがりました。

いまや大地はすべて君の剣にひれ伏しましたが、

改めて遠近<sup>かちこち</sup>に君が威力をひろめる時でございましょう。

143

これより私は領土くまなくへめぐって参ります。

チナチン即位の知らせは敵の心胆を寒からしめ、

従う者は喜ぶが、逆らう者は泣くでしょう。

わが君にはしばしば使者を立てて贈りものお届けします。」

144

王は大なる感謝のことばを伝えた。

「わが獅子よ、おまえには輝く戦功に不足はない。

だが今のあいさつは、さらに武勇に輝くもの、

さらば行け！　だが長い別離はたえられない。」

145

王の前に出て、勇士は低くお辞儀した。

「おほめにあずかり、過分に存じます、

ふたたびうるわしきお顔を拝し、

明るく照らされる日がきますように！」

146

王は彼の首を抱いて、わが子のように、キスした。

実の親子でもこれほどの情はあるまい。

勇士はさがり、これが別れの日となった、

心やさしいロステワンは涙にくれた。

147

アフタンジルは道に出た。もうくよくよしなかった。

夜を日についで、二十日駆けた。

この世の誇り、彼の宝物、

チナチンは炎と燃えて、いつもそばにいた。

148

わが領地に着くと、どこもよろこびにわき返った。

重臣たちは山のような進物捧げて出迎えた。

彼は旅の支度を急いだ、

館はよろこびに包まれた。

\* エジプ——宮廷の用人

それは近隣を威圧する城塞であった。手がかりもない天然の岩壁にかこまれていた。

ここで三日間、彼は狩猟に興じ、

それからシエルマジンを呼んで、相談した。

150

シエルマジンのことは前に話した。

城主と同年輩の、忠実な従者である。

でも城主が恋の炎に焼かれていることは知らなかった、

今、馬のくつわを並べて、アフタンジルは打明けた。

151

「シエルマジン、おまえには恥ずかしい。

いつもおまえとは何事も相談していたが、

涙の跡だけはいままで隠していた。

でも私を悩ましたその人は、いま喜びをもたらした。

152

私はチナチン姫への恋に苦しみ、

しおれたバラに熱い涙を注いでいた。

その深い悲しみは胸に秘めていたが、

姫が誓いの言葉を聞いた今、心にかかる雲はない。

姫は私にいった。『あの奇怪な騎士の消息を手に入れて、お帰りにされたときには、おまえの望みは叶うでしょう。』

おまえのほかは私に私の夫たる人はないのです。』

その言葉は苦しい胸に注がれた香油であった。

154

ここにいうまでもなく、第一に私は臣下の身、

臣下として当然の忠節を王につくさねばならず、

第二に、姫の手でわが心の火はかき消された。

困難にたじろがず、進んでそれに立向かわねばなるまい。

155

領主と家来の仲とはいえ、私とおまえほど親しきはない。

そこでシエルマジン、私のいうことをよく聞いておくれ。

おまえは領主として、軍の大將として、ここに残るのだ。

おまえの他に私に代る者はいないのだから。

156

わが軍、わが家臣をよく統率し、

使節を宮廷に遣わして、情報を集め、

私に代って書信を書き、極上の進物をとどけ、

私の不在をけっして人に気<sup>け</sup>どられてはならぬ。

157

戦場でも獵場でも私のように見せかけ、  
わが秘密をまもって、三年待て。

イトスギは枯れず、おそらく無事で帰るだろう、  
もし帰らなかつたら、喪に服して、泣いてくれ。

158

ただわが君にだけは好ましく知らない知らせを伝え、  
そ知らぬ顔で、わが死について語れ、

なにびとにも避けられぬ運命が私をとらえた、と。

貧しい人たちには金、銀、銅をわけ与えよ。

159

それからわが後生をねがって、  
私を忘れず、いつも思い出すように！

私を悼み、わが魂のために祈り、

母のやさしさを泣いてくれ。」

160

シエルマジンはこれを聞いて、おろおろした。  
真珠のような涙が目からあふれ落ちた。

「おまえさまなしに、なんのうれいしことがありませんよう、  
でも、止めて止まらぬお方ゆえ、お引止めはいたしませぬ。

161

ただなんでへ私の代りをやれとお命じなされた？  
どうして私にそんな大役が勤まりましよう？

お別れするくらいなら、いつそ討死にするがまし、  
ぜひお供させてください。」

162

勇士は答える、「この道理をわきまえてくれ。

そもそもミジヌールは、ただひとり山野をさ迷うもの、

真珠は努力なしには手に入らない、

不信のともがらは槍に突き刺されなければならぬ。

163

わが心の秘密打明けたのは、おまえだけだ。

おまえのほかには、だれに留守をまかせられるか？

領土かためて、敵をよせつけるな、

おそらく、無事に私は帰るだろう。

164

一人殺すも百人殺すも不幸は同じこと、

天命が味方すれば、孤独も恐ろしくはない、

三年たつて帰らなければ、そのときおまえは喪に服せ。

ハス<sup>\*</sup>総てがおまえに服するよう、私は一書を認めておく。」

\* ハス——貴族・上流階級の代表者たち



## 第5章 家臣一同への アフタンジルの親書

165

彼は書いた——親しき者、わが師、わが弟子たちよ、  
わが希望の形に従う影のように、  
忠実と信頼にきたえぬかれた者たちよ、  
共に集まりて、わが親書に聞き給え。

166

取るにも足らぬこのアフタンジルが、  
おのが手で書き残すこの親書に聞き給え、  
ほんのしばらく私は酒宴を後に旅に出る、  
腕におぼえの弓と矢が旅の食事をまかなうだろう。

167

私には故国を後にする使命があり、  
この一年はひとりぼっちのさすらい人となるだろう。  
それゆえにおまえたちに頼むのは、  
わが帰還まで祖国を無傷にまもること。

168

その間シェルマジンが私の代りを勤めるが、  
私の生死がわかるまでは、  
太陽のように一同を照らして、バラを枯らさぬように、  
また反逆をたくらむ者は、蠟のごと溶かすように。

169

知つての通りわれらふたりは兄弟のように成長した、彼の指図はアフタンジルの指図と思つて、それに従い、一度ラツバが鳴つたなら、直ちに行動に移るように、もし私が帰らない時は、笑いでなく、涙で思い出すように。↘

170

情意そなわつた言葉で書き終ると、彼は旅支度ととのえ、金の帯しめて、叫んだ、「野駆けに出るぞ！」部隊は整列し、彼はすぐ馬を進めた。

171

「みんな、野に散れ、私に手をかす者は要らない。」この命令で、彼はついにひとりになった。馬の首をめぐらし、草を分けていくと、さびしさのきわまる果てに、チナチンの姿が見えた。

172

部隊は巻狩りにうち興じていた、ひとりとして彼を見る者、追う者はいなかった。アフタンジルはわが右腕をただ一つのたよりとして、恋の重荷を背負つていった。

173

巻狩りは終り、部隊はあるじを捜した、太陽の顔は見えずみんなは色あおざめた。楽しさはたちまち悲嘆にかわり、足早い馬をもつ者たちは四方を捜しまわつた。

174

「いざおしの君よ、どこに君に代る人がいよう！」みんなは目撃者を捜し、聞いたしたが、どの方角へ立去つたか、知ることができなかった。みんなは悲しみにうちひしがれ、熱い涙を流した。

175

シェルマジンは貴族と要人を呼び集め、親書を見せて、あるじの言葉を伝えた。聞く者ひとしく胸を痛め、われとわが頭を打つて、身もだえした。

176

みんなはいった、「彼なしで生きるはつらいことながら、おまえのほかに、城主の座につく者はいない！ 私たちはおまえのどんな命令にも服するだろう。」みんなは彼を城主と仰いで、平伏した。



177

聖哲エズロス<sup>＊</sup>は『ディオノス』の中で証言している、「世にもあわれを誘うものは、霜に打たれたバラ。」  
人里離れて、ひとりさ迷い歩き、  
枯れ葦<sup>も</sup>のようになった人こそあわれである。

178

アフトンジルはギヤロップで野を過ぎ、  
アラビアの国境を越え、他国の土地に入った。  
だがチナチンのおもかげは目から離れず、ひとり語る。  
「彼女がいつしよなら、かくも熱い涙にくれまいに。」

## 第6章

## 虎の皮の騎士をさがして

179

また新雪がま白くバラにつもった。  
わが胸をひと突きに、と短剣に手をかけることもあった。  
ひとり語る、「世界はわが悲しみを百倍にもした、  
笛も、太鼓も、楽しみごとはずべて失った。」

180

太陽から離れては、バラは日増しにしぼんでいく。  
「しっかりしろ！」とわが心をしかって、気をとり直す。  
かすかなあかりをたよりに、よその国ぐにをたずね、  
道ゆく人と親しんで、問いたただす。

181

捜しあぐねて、落ちる涙は海へ流れ、  
大地はふしど、手はまくらとなった。  
ひとり語る、「愛する者よ、お身はわが心を奪った、  
そなたのために死ぬこそ本望だ。」

\* エズロス (エズラ) —— 12世紀初期の詩人、アラビア語で傳かれた詩集『ディオノス』(ディオノス、ディフノス)がある。

182 彼は大地くまなく捜しまわった。

天の下、彼の足跡印さぬところは無い。それなのに、  
捜す人のことを知る相手にはひとりも出会わなかった。  
三年の期限はあと三月を余すばかりとなった。

183 彼は地の果てらしいさびしい場所に来た。

この一か月、アダムの子にはひとりも出会わなかった。  
こんな悲しみはヴィスもラミン\*も知らなかったろう。  
昼も夜もおもいに浮かぶはあのひとばかり。

184 高い山の頂いただきに一夜のねぐらを求めた。

そこからは、七日駆けまわる広さの野が見渡された。

山の裾をはばせまい川が流れ、

水ぎわまでうつそうと木が茂っていた。

185 彼は景色に見とれながら、残りの目をかぞえた、  
あとわずか二月。思わず深いため息が出た。

「秘密の使命が達せられなかったら、どうしよう？  
悪を善に代えたり、生まれ変わることはできないのだから。」

186 立ちどまって、思いめぐらした。

「引返せば、今までの労苦は水の泡、  
捜す人のうわささえ耳にしなかったなどと、  
どうして太陽の君に復命できるか？」

187 引返さないで、なお捜しまわり、  
捜す人のうわさも聞かないうちに、  
シエルマジンに約束した期限が切れば、

彼は涙ながらに悲報を大君に伝えるだろう。

188 かねてのいいつけどおり、わが死について語るだろう。  
城内は悲しみに満ち、涙にあふれるだろうが、  
どうしてそこへ私がぶじの顔を見せられようか？」

涙ながらに、彼は気重く考える。

189 「神よ、なぜ私から正義の顔をそむけられたのか？  
なぜ私の長いさすらいをむだにされたのか？  
なぜわが胸を悲しみの巢にし給うたのか？

生涯わが涙のとまることはないだろう。」

\* いずれも昔からイランに伝わる三大悲恋物語の一つ『ヴィスとラミン』の主人公たち。11世紀のペルシアの詩人グルガーニの作といわれる。



190

さらに語る、「いや、しっかりするんだ！」  
氣をとりなおして、「今から、がっかりすることは無い。  
泣いて望みが叶うわけじゃなし。

神意に叶わなければ、どっちみちことは終りなのだ。

191

それなら、いっそ死ぬがまし、  
うるわしいチナチンが出迎えて、

騎士のことを聞いたなら、なんと答えられようか？」

思いは堂どうめぐりする。

192

「天の下、めぐりめぐって、見落としたものはない、  
それなのに、あの男のことは、うわざにも聞かない。  
たしかにあれはカッジにちがいない、

とすれば、いくら泣いてもむだなこと。」

193

アフタンジルは山をおり、川と森を過ぎて、  
野に出た。蹄ヒツメの音のみいたずらに高く、

腕の力はぬけ、目はかすんだ。

黒い林が清らかな野を飾っていた。

194

彼はため息して、引返すことにきめ、  
道をさぐりつつ、谷におりていった。

まる一か月、ひとりの人影も見なかった、

恐ろしいけものはいたが、相手にはしなかった。

195

けもののように、ひとりさ迷ってはいたけれど、  
彼も人の子、食べないわけにはいかなかった。

ロストム※の腕よりも長い矢で野鳥を射止め、

馬をおりて、森のはずれで焚火した。

196

馬を草地にはなし、肉を焼いていると、  
どこからきたか、六騎の近づくのが見えた。

「おおかた夜盗のたぐいだろう、

こはぶつうの人のくるところではない。」

197

弓矢を手にも立向かった。  
ひげ男が二人、ひげなしの若者をほこんでくる。

若者は頭に傷、熱い血潮が流れている。

若いのちは絶えなんとして、一同は泣いている。

\* カッジ——人間の形をした妖怪。魔法使い。

\*\* ベルシアの詩人フィルドゥン（940～1025年ごろ）の大叙事詩『シャフナマ』の中の人物の名をズルジア風に記したもの。

アフタンジルは声かける、「何者だ、どろぼうか？」  
相手は答える、「とんでもない、この苦しみを察してくれ、  
助けることができなければ、せめてわれらに同情して、  
涙を分かち、頬を苦でおおってくれ。」

199

アフタンジルはなおくわしく問いたです。  
相手は涙ながらに物語る、

「われら三人は生まれながらの兄弟で、  
ハタエチに\*大きい城を持っている。」

200

すばらしい獵場があると聞いて、そこへ出かけた。  
数多の部隊をしたがえて、川岸におりた。

獵場は気に入り、一か月のあいだ、  
野に、山に、無数のけものを仕とめた。

201

われら三人兄弟は抜群の成果あげ、  
ついに互いに腕自慢をはじめた。

『仕とめる腕はおれが一番』、『いや、おれた』、  
互いにいい争って決着がつかなかった。

202

鹿の皮着た全部隊を遺ざけて、いった、  
『さあ、誰の腕が一番か、決着つけよう、  
おれたちだけがここに残り、  
自分の目で見つけたけものだけをねらうのだ。』

203

われら三人は従者三人だけを残して、  
部隊全員を立去らせた。

野に、森に、山に、けものを追い、  
頭上を飛びすぎる鳥をも射落とした。

204

ふいに仏頂ぶつぽう面の騎士が現われた、  
黒馬にまたがっている——黒いメラニに。  
頭から胴にかけて、虎の皮をまとい、

その儼々しさ、何に喩えるものもない。

205

目から発する稲妻はまぶしいばかり、  
〈空の太陽ではなくても、地上の太陽とはいえるだろう。〉  
われらはこの騎士をとりこにしようとした、  
われらの嘆きはそこにはじまる。

\*ハタイ人が住んでいる国の名。あるいは単にハタイ国とも  
いい、学者の考証によれば、北部中国に当たること。

206

長兄の私は騎士に手出しするなといひ、  
次兄はりっぱな馬に見とれるばかり、  
ただこの末弟の闘志がわれらを引きずって、  
彼に向かわせた。彼は静かに馬をやる。

207

水晶にルビーを散らしたバラの頬、  
彼は怒って、われらの甘い夢を吹きはらう。  
目も向けず、一語も発せず、無造作に、  
おめきかかるわれらを鞭ではらう。

208

敵を末弟にまかせて、われらは手を引く。  
末弟は彼に迫って、大音声、『待て！』  
騎士は剣をとらず、鞭をふるって、  
末弟の頭を打つ。とたんに血潮がほとばしる。

209

ただの一打で頭は割れた、  
末弟は馬から落ちて、虫の息。  
無礼をとがめて、相手を地面にたたき伏せると、  
騎士はわれらが目の前を悠然と去る。

210

一顧だにせず、ゆるゆると遠ざかる。  
その姿は太陽か月かと見まごうばかり。」  
「涙ながらにアファンジルに遠くを指した、  
太陽を乗せていく黒馬がかすかに見えた。

211

アファンジルにつき、がまわってきた。頬の雪はとけた。  
さすらいの年月はむだではなかった。  
望みを遂げ、未知のものを手に入れようとする人に、  
過ぎた労苦を思い出すのはふさわしくない。

212

彼はいった、「兄弟よ、私はよるべなきさすらいの者、  
あの騎士を捜したいばかりに、ふるさとをすてた、  
それを今、あなた方のおかげで、捜し当てた。  
あなた方にも、悲しい時が過ぎ去りますように！

213

おかげで、私に運命がほほえみかけた今、  
神も弟御の傷をおなおし下さるであらう。」  
彼は自分の泊り場を指し、「あそこへ行って、  
ものかげに彼を寝かし、ゆっくりやすまれるがよい。」

214

そういうと、彼は馬に拍車をかけ、  
綱を解かれたタカのように飛んでいった、  
太陽と出会う月もかくやとばかり。  
こうして身をこがす炎は消えた。

215

近づくにつれ、出会いのしかたが気になった。  
「へたな口きいたら、いっそう狂乱をかき立てるだけ！  
むずかしい仕事を処理するには、  
冷静と沈着がかんじんだ。

216

なにしろ相手は理非わきまえぬ無法者、  
人目を避け、人をそばによせつけない。

うっかり近づけば、必死のたたかいは避けられまい、  
殺すか、殺されるかだ。」彼は木蔭にかくれた。

217

「といて、いままでの労苦をむだにできようか？  
彼が何者であれ、ねぐらはあるにちがいない、  
どんな障害であれ、乗りこえて彼は行くだろう、  
私もそこへ行って、望みを遂げる手段を捜そう。」

218

ひとりとはひとりのあとをつけて二日二夜、  
昼も夜も食事をとらず、  
つかのまも立ちどまらず、  
流す涙は野をひたした。

219

次の日もくれるころ、大きな岩場にさしかかる、  
洞窟が口をあけ、裾には川が流れ、  
川岸はぎっしりと蘆荻あしにうずまり、  
巨木は空をおおっている

220

川を渡って、騎士は洞窟へ向かう。  
アフタンジルは巨木の蔭で馬をおり、  
馬をつないで、この木にのぼる。  
涙にぬれて騎士の行くのが見えた。

221

虎の皮を着た騎士が森を出ると、  
洞窟から黒衣の娘が現われ、  
海となるほどの涙流して、泣き出した。  
騎士は馬をおりて、娘の首を抱いた。

222

騎士はいった、「アスマート、われらの橋は崩れ落ちた。

「どれほど時が流れても、わが姫君は見つかるまい。」

彼はわれとわが胸を打ち、涙は滝とほとぼしる。

娘は彼を抱いて、血の涙をふいてやる。

223

かきむしる髪の毛で、森はさらに暗くなる。

悲しみはふたりをひとつに溶け合わせる。

ふたりの鳴咽なげなげに答えるのは、岩壁ばかり、

アフタンジルは始終をながめて、おどろくばかり。

224

やがて娘は氣をとりなおし、

馬を洞窟に入れて、鞍をはずし、

騎士から剣や弓矢を受取った。

ふたりとも、その日はもう出てこなかった。

225

アフタンジルはただ惘然ぼうぜん、「何だろう、あのさわざは？」

夜が白むと、おなじ黒衣で、娘は出てきて、

黒馬をショールでふき清め、鞍をおき、

音もたてずに物の具そろえて持ってきた。

226

洞窟は一夜の宿——これが埜であるらしい。

娘は胸を打って泣き、髪かきむしり、

騎士は別れのくちづけして、馬に乗る。

アスマートはしゃくりあげつつ見送る。

227

通り過ぎる騎士の額をアフタンジルは見る。

口髭が濃い。「まるで太陽だ！」

風は騎士からイトスギのにおいをはこんでくる。

彼なら容易に獅子を倒すだろう、羊を獅子が屠るように。

228

騎士はきのうの道をたどり、

蘆荻を分けて、野に出て行った。

枝のしげみにかくれて、アフタンジルは彼を見送り、

考える、「意外な好運がめぐってきた。

229

これにまさる天の恵みがあるか？

あの娘をつかまえて、騎士の話聞き出そう。

まずわが身の秘密うちあけ、真実を告げ、

決して剣に手をかけないことにしよう。」

## 第7章

### 洞窟のなかで

### アスマートと語る



230 彼は木からおり、幹に結んだ綱をほどいて、馬にまたがると、洞窟へ乗りつけた。

涙にまみれた娘が走り出た、  
光まばゆい騎士の帰りかと思っただのだ。

231 見ると、おのが騎士とは違っている。  
悲鳴で岩や木を震わせつつ逃げ出した。  
だがアタンジルは馬からおり、難なく娘をつかまえる。  
岩は娘の悲鳴に単調なこたまで答える。

232 娘はけがらわしげに顔をそむけ、  
ワンにつかまったハトみたいに、身もだえする。  
タリエールという名を呼ぶが、助けはこない。  
アタンジルはひざまずいて、手をさしあげる。\*

233 彼はいう、「私もアダムの子、悪いことはしない、  
私は花の色を失ったバラを見た。  
光まばゆいあの人は誰なのか、話しておくれ、  
こわいことはない、そんなに泣きわめくことはない。」

\*ひざまずいて両手をさしあげるのは奴隷の作法

234

さとすようなひびきをこめて、娘は答える、

「正気ならその企てを止め、気違いなら目をさましたさい。

だって、あなたのいうことなんて、きけないもの、

あたしから秘密を引出そうなんて、とんだ見当違い。」

235

さらにくり返す。「いったい何を知りたいの？」

それは筆でも書けず口にもできないこと、

〈話せ〉と一度いわれれば、〈だめよ〉と百度答えるわ。

笑いが泣きに勝るとも、あたしには愁いが歌に勝るのよ。

236

「わが限りない悲しみを、おまえは知らない。

長いことあの人を捜しまわって、噂も耳にしなかった。

そこにおまえを見つけたのだ！ もう放すことではない、

話しておくれ、なにもためらうことはない！」

237

娘はいう、「そういうあなたは誰かしら？」

今太陽が消えたのでそれであたしをいじめるんでしょう。

いくら仰っても、返事はひとつ、

けっして口はきかないわ。どうともしなさい！」

238

また膝を折って、彼は頼んだ。

説きふせられなかった。じりじりした。

顔は怒りに燃え、血は目にのぼってきた。

娘の髪をつかみ、短剣をのどにつきつけた。

239

「なんでまた嘆きの底に私をつき落とすのか？」

なんでまたむだな涙を流させるのか？」

話してくれば、なんでおまえに手を出そう。

さもなければ、おまえは敵だ、殺すほかはない！」

240

娘は答える、「それはずいぶんまずい手ね。

殺されなければ、あたしは死なずに、ぶじでしょう、

ぶじとわかれば、なんで口を割りましょう。

また殺されたら、もうお話はできませんわ。」

241

つつけて、「いったいなにがお望みかしら？」

生きてる限り、なんにも口をきかなければ、

あなたはあたしを殺す羽目になり、

不要の手紙よりもなお軽く引裂くでしょう。

242

あたしが死をおそれているとお思いなら、まちがいよ、死ねば泣くこともなく、涙の泉は涸れるでしょう、あたしにとって全世界は薬屑やまぶくろみたいなもの。あなたが誰か、どうだっていいことでしょう？」

243

勇士は考える、へなるほど、まずい手を打った、なにか別のやりかたを考えよう。娘を放して、遠くにすわり、涙流して、

244

娘はまだ気が安まらず、ふくれつつら、アフタンジルはなんにもいわず、泣くばかり。

245

バラの園には涙の池、いくらか胸もほぐれたか、ふいに娘は泣きじゃくる。泣く騎士をあわれんで、熱い涙を流したが、でも他人は他人、娘は口をひらかない。でも怒りがおさまったのをみとると、彼は娘の前にひざを折り、涙ながらに口をきる。

246

「おまえはもう兄妹になってはくれまい、おまえにとっては私はさすらいの孤児、ただあわれみを乞うほかはない、どんなに罪が深くて、許しはきつとあるという。」

247

向こう見ずのふるまいには恥じ入るけれど、ミジヌールをあわれむのは人の情、おまえのたすけがなければ、生きるもおぼつかない。真ごころ捧げて祈るばかり！」

248

騎士から愛の言葉を聞くと、娘は重いため息して、さらにはげしく泣きじゃくり、おろおろ声して、涙に沈む。

249

天はアフタンジルの頼みを聞きとどける。愛の言葉で娘の顔色が変り、涙の雨さらにしげくなるのを見て、彼はいう、「恋する者には敵もあわれをかけるとか、ミジヌールは死を求め、死を避けない。」



250

私はミジマール、生きるにつらい恋の狂人、  
わが太陽は私にあの騎士捜しをいつけた。

雲でさえ私が捜しまわった道には入りこめまい。  
でもやっとおまえたちの姿を見つけ、目的に近づいた。

251

彼の顔はわが心に焼きつけられた、  
おかげで私は気が狂い、よろこびを失った。

私をとりこにするか、自由にするか、  
生かすか、殺すか、おまえの心ひとつだ。」

252

前よりもやさしく、娘はいった、  
「いい言葉を思いついたわね、

ついさっきはあたしを敵にまわしたが、  
今はどんな兄妹にもまさる友を見るでしょう。

253

愛の言葉で、話のはじまった上は、  
今からあたしはあなたの奴隷、

もうあなたに嘆きを見せず、  
あなたのために身を粉にするもいとませぬ。

254

もしこれからあたしのいうとおりになされば、  
かならず、捜すお方に会えるでしょう。

なさらなければ、いくら泣いても、せんないこと、  
世を恨んで、望みなく死にいくばかり。」

255

勇士はいう、「その言葉はこんな話を思い出させる。  
ふたりの旅人が歩いていて、後の人が

前の人の井戸に落ちるのを見た。  
駆けよって、つれの不幸を悲しんだ。

256

『おい、そこでしばらくおれを待て！  
どこかで綱をみつけてきて、おまえを引上げてやるから。』

落ちた人は胆をつぶして、笑いだし、下から叫んだ、  
『はい出るあてもない身、なんで待たずにいられよう？』

257

その頼みの綱はいまおまえの手にある。  
おまえなしには、どんな救いの手もおよばない、

おまえはわが希望の灯、いのようにしておくれ、  
さもなければ、誰が満足な頭に綱帯かけてくれよう？」

258

娘は答える、「その言葉は気に入りました、たしかにあなたは博士も賞めるほどのりつばな騎士、今までずいぶんご苦労なされたようですが、あたしのいうこと聞けば、望みをお達しなされましょう。」

259

あの騎士の物語はこの世のどこでも聞かせぬ、  
ご自分で話さない限り、聞いても耳を疑うでしょう。  
あのお方がもどるまで、あなたはゆっくりお待ちなさい、  
バラの色あせないよう、心やすらかにお待ちなさい。

260

まずあたしたちの名をなりのりましょう、  
タリエール、これがあの気遣い騎士の名、  
炎に身を焼くあたしは、アスマート、  
千万もため息するのは、わがためのみか。

261

あたしの話は今はこれまで。  
今も彼は野山を駆けまわっていることでしよう、  
その狐のえものが食糧です、  
いつ彼がもどるか、あたしにもわかりませぬ。

262

どこへも出ないで、ここでじっとお待ちなさい、  
もどってきたら、あたしがうまくとりなして、  
おふたりをひき合わせ、彼にすべてを語らせませぬ。  
あなたはそれで愛する方を喜ばせることができます。」

263

騎士は娘のいうとおりになった。  
ある夜、谷の水音を聞いて、顔を見合わせた、  
あたりを照らして、月が川からあがってきた、  
ふたりはいそいで後にさがった。

264

娘はいう、「あなたの願いは叶えられるでしょう、  
でも、しばらくは隠れていることです、  
あのお方の意に逆らうことは、誰にもできないのです、  
あなたを見ても怒らないよう、うまくやってみるわ！」

265

娘は洞窟の奥にアフタンジルを隠した。  
愁いの色をたたえて、騎士は馬からおりる。  
ふたりは声をあげて泣き、涙は海とひろがる。  
アフタンジルはものかげからそれをながめる。

266

涙につかつて水晶の顔は琥珀こぼろに変わる、

騎士と黒衣の娘はいつまでも泣いていたが、

やがて氣をとりなおして、馬や物の具片づけた。

ふたりはおちつき、黒いまつ毛は涙を切り落とした。

267

牢屋むとやの窓からのぞくように、アフトンシルが見ていると、

娘は足元に虎の皮を敷き、

騎士はそれにすわって、深いため息、

血の涙が黒いまつ毛に散りばめられる。

268

娘は焚火のはたをかきおこし、

焼き肉の一片をさし出した。

木から果実をもぎ取るように、端を噛みとったが、

食べる氣力もないらしく、騎士はそれをはきだした。

269

彼は横になったが、それもつかの間、

すぐはね起きて、悲鳴をあげ、

われとわが胸や頭をめった打ち。

いたましげにこれを見て、娘は顔をそむける。

270

娘は訊く、「また何かあったのですか？」

彼は答える、「罨うに出たどこかの王を見かけたのさ。

兵もたくさん、武器もたくさん持っていた、

狼場むらは勢子せこにかこまれていた。

271

みんなのようすは私をいらだたせた、

わが身をあわれみ、出会いを避け、

色あおざめて、森に身を隠し、

あしたまで、ここに隠れていよう、と考えた。」

272

娘の涙は百倍も強くほとばしった。

「けものだけを友として、あなたは山野をさ迷い、

人をけつしてよせつけず、話もしない、

それでは日々をむだにして、かの君の為にもなりません。」

273

世界の果てばてまでめぐってこられたのに、

あなたを慰めるひとりのお方にもお会いなされぬとは！

お相手があれば、いくらかご気分もまぎれましょうに。

あなたが果て、かの君も滅びれば、何も残りません！」

274

彼は答えた、「おまえの言葉はおまえの心、  
だがこの世にわが傷を癒す薬はない！」

まだこの世に現われぬ人を、どうして見つけられよう？  
魂がからだと別れる死こそ、わがよろこび。

275

私と同じ星の下に生まれた人はこの世にいない。

どんなに会いたく、語りたくねがおうとも！

この苦しみに耐えられる人が、どこにいるか？

おまえのほかには、いるはずもない。」

276

娘は思いきつていう、「どうぞ、あたしを叱らないで！

神があたしをあなたのつけ人になさった上は、

自分が知った恵みを、隠しておくことはできません。

天のおくりものとは、このことすわ。」

277

彼は答えた、「なんのことか、よくわからないが、  
私のためになる人が、降ってわいたというのか？  
でも私は神に見すてられた者、

けものを友とし、顔までけものに似てきたのに。」

278

娘は勇を鼓し、「この上なんであなたを苦しめましょう？

じつは自分の意志でおまえをつけてきた人がいるのです、

お会いになれば、きっと慰められるでしょう。

お誓いなさい、その人に手出しはしないと。」

279

騎士は答えた、「そういう人に会えるのはうれしい。

野の果てをさ迷うことになったかの君への愛に誓って

その人に悪いことはせず、その人を苦しめもしまい。

心楽しく友の語らいしようじゃないか。」



280

娘はアフタンジルを呼びにいく、はげまして、いう、「もう心配ないわ。」

満月のような彼の手をとって、つれてくる。

それを見て、タリエールはいう、「まるで太陽だ。」

281

タリエールは出迎える。二つの太陽か、

はた月か、雲なき光は谷に満ち、

その姿にはポブラもおよばず、

七つの惑星も——くらべものにはならない！

## 第8章

### アフタンジルと

### タリエールの出会い

282

初対面なのに、ためらわず、ふたりはキスした、

バラがほころびて、ま白い歯がきらめく。

首を交えて、ふたりは泣いた

ルビーの色は琥珀に変わった\*。

283

騎士はアフタンジルの手をとって、

いっしょにすわり、長いこと熱い涙にむせていた。

アスマートはおだやかな言葉で慰める、

「自らお命を縮め、太陽を闇でかげらしませぬように。」

\* バラは口、ルビーは顔

284

タリエールのバラは霜をおいたが、しほみはしなかった。

彼はいう、「まずおまえの秘密を知りたい、

おまえは誰で、どこから、なんの用でできたのか？

死も私を忘れ、私は死神にさえ見放されたのに。」

285

アフタンジルはてきばぎした言葉で答える、

「獅子か、勇士か、タリエールよ、

私はアラブ。アラビアにわが城はある。

恋に狂い、胸に炎が燃えている。

286

私はわが主君の姫を愛した、

力強い臣下たちはいま姫を女王にいただく。

おぼえないかもしれぬが、おまえは私を見たことがある、

おまえはわが主君の戦士を殺した。

287

わが主君はひどくお怒りなされ、

戦うかくごで、はげしくおまえを追いかけた。

呼べどこたえなく、部隊に追跡させた、

おまえは戦士の血潮で野を赤く染めた。

288

剣でなく、鞭で追いつく者の首を切った。

だがわれらはおまえを見失い、足跡も捜せなかった。

カッジのようにおまえは消え失せ、われらをおどろかせた。

それはいつそうわれらを怒らせ、じりじりさせた。

289

もともと王というのは気ままなもの、

おまえを捜して捜しぬぎ、ついに命令が出た。

だが老いも若きもおまえを見つけることはできなかった、

そこで太陽よりも美しい姫が私を送り出した。

290

姫のいうには、『その消え失せた騎士を捜すように、

そうすれば、そなたの望みを叶えてあげよう。』

三年間、涙にひたって過ごすよう、姫はいいつけた。

姫を見ないでこの年月、よくぞ息がつづいたもの。

291

しかもおまえを見たという人にさえ出会わなかった、

するとおまえに怨みをもつ一族のやからが見えた。

ひとり、たぶん、おまえの鞭で瀕死の深手、

その兄たちがおまえの道を私に教えた。」

292

タリエールは古いいきさつを思い出した。

「跡もとどめぬことながら、いわれてみれば、

おまえと主君を獵場で見たおぼえがある。

私を不幸にしたその人を思って、泣いていたときに。

293

おまえと私のあいだに何があろう？

おまえはよろこび、楽しみ、私は涙につかっている。

おまえは私をつかまえようと戦士たちをさし向けた、

だがその代りに死者をひろい集めた。

294

ふり返ると、近づくおまえの主君が見えた、

君主には遠慮があるので、私は手を出さず、

なんにもいわずに、彼の目から消えた。

私のメラニは目にもとまらぬほど速いのだ。

295

つむじ風のように飛んでいく、

いやな感じのものからは、すぐに逃れる。

あの一族のやからにも私はとり合わなかった、

かならずも無いのに、私の前にしゃしゃり出た。

296

だがおまえはほんとうによくきてくれた！

見れば、イトスギのように形よく、りっぱな勇士、

やはり労苦に耐え、運命の打撃と戦っている。

全く天に見放された人なんて、めったにはいまい！」

297

アフタンジルはいった、「ほめられては恥ずかしい、

私にはそれほどの値打はない。

おまえこそ天照らす太陽、

苦悩の涙もおまえを変えることはできなかった。

298

いま私は心を闇にとざすその人を忘れた。

わが奉公をすてて、おまえの望むところへ進もう。

トルコ玉はどんなにみごとなガラスよりも値打がある、

おまえといっしょなら、何も望むものはない。」

299

タリエールは答えた、「おまえの心の熱が伝わる、

何でそれに報いられるか、私は知らない。だが、

ミジスールの心を知るはミジスールのみという掟がある、

愛する人からおまえを引離して、私の気が済むだろうか？

300

おまえはその人のいいつけで、私を捜しに出て、  
神の御心で私を見つけ、なお勇敢にふるまった。  
だが私の生涯をどのように話したらいいか？  
もし話したら、私は燃えて、灰になるだろう。」

301

アスマートが口を出す、「涙はその火のお役に立ちませぬ、  
話して悪いことなれば、あたしもお止めいたしますが、  
見れば、この迷える騎士はあなたのために一命も抛なげつ様子、  
心の傷の由来を話して、力になっておもらいなさい。」

302

この方は何か話せとあたしにお頼みなさいましたが、  
あなたにその力がある以上、なんであたしが余計な口出し。  
あなたのことを知ったなら、きっとあなたの力になるお方、  
天の神の授かりものに、悪いものはございませぬ。」

303

タリエールは火に包まれてだまっている。  
ややあって、「あの目からおまえはずっと私のそば、  
この傷がなおらぬことは、おまえも知ってしよう、  
涙にぬれたこの騎士こそいたましい。」

304

アファンジルにいう、「兄弟の契りを結んだ上は、  
その人のために死も悲しみも避けてはならぬはず、  
ひとりを助けるために、神は別のひとりを滅ぼすのだから。  
私といっしょなら、どうなるか、では聞いてくれぬか。」

305

アスマートにいう、「水をここに持ってきて、  
氣を失ったら、この胸にかけておくれ。  
息絶えたら、ため息しつつ泣きくずれ、  
お墓を掘って、この地をゆりかごにしておくれ。」

306

胸をはだけて、彼はすわり直した。  
太陽が雲にかくれた風情である。  
思い言葉はせきとめられて、口をつぐんでいたが、  
やがて深い息をして、涙とともに叫んだ。

307

「おお、失われたわが愛する人よ、  
わが希望、わがいのち、わが理性、わが魂よ！  
おまえをきり倒したのは誰だ、おおエデンの木よ。なぜ、  
この心を焼きつくさなかったのか、百度も燃えた心を！」





## 第9章

タリエールは

おのが運命を物語る

308

「では、よく判断して、聞いてくれ、  
いきさつを語れば、舌もつれようから。」

私は私を狂わせたその人からは、もはや喜びを期待しない、  
その人は私を悲しみに沈め血を流させるばかりなのだから。

309

知ってのとおり、インドには七つの土地があり、  
そのうち六つをバルサダンという王が治めている。

諸侯に君臨して、勢威ならぶものなく、

からだは獅子、顔は太陽、戦争では勝利者。

310

七つ目の土地を統べるのが、私の父で、

名をサリダン、敵を迎えて、ひけをとったことがない。

かげの敵も、おもての敵も、彼には手出ししなかつた

彼は人生の苦い味を知らず、猟を楽しんでいた。

311

そのうち、ひとりぼっちの寂しさが胸にしみてきた。

『勝利のおかげで、敵の土地をぶんどり、

富と兵力はわが手にある』と彼はいった。

『そうだ、バルサダンの保護に頼ろう。』

312 彼はバルサダンに特使を送って、伝えた、  
『君は全インドを治めるべきです、

今日よりは、私は真心を君に捧げ、  
患実に仕えたいと望んでいます。』

313 これを聞いて、バルサダンはよろこんだ。  
すぐに返事を出した、『私は神に感謝する、

私と同じ王なるあなたが、この決意をなされたことを。  
親か兄弟のように、私はあなたを迎えましょう。』

314 彼はサリダンに領地を残し、アミルバルに任命した、  
インドではアミルバルはスパサラルをも兼ねる。  
だからサリダンは強大な権力を失わず、

不足といえは、カニサルの称号くらいであった\*。

315 王はわが父を自分と同列においた。彼はいう、  
『世にこんなアミルバルを持つ王が他にいるだろうか？』

サリダンは戦い、猟に遊び、敵に和を請わせた。  
私は父に似ていない、私に似た人がひとりもないように。

316 王と王妃のあいだには子がなかった。  
その悲しみは人びとにもしみとおっていった。

呪うべきその日、私は生まれた。王はいう、  
『同族のよしみ、この子をわが子として育てたい。』

317 王と王妃は私を妻子のようにいつくしみ、  
将来の君主として、私を教育し、  
君主の作法を身につけるよう、賢者にゆだねた。

318 成長につれて私は、顔は太陽、からだは獅子に似てきた。  
私がちょうど五歳のとき、王妃はみごもった。」

こう語ると、勇士は泣いた。「王妃は女の子を生んだ。」  
彼は失神し、アスマートがその胸に水をかけて促した。

「それが今も私を炎にくるんでいるあの姫なのだ！

319 今の私には王女をたたえる力はない。  
バルサダンは夜を日について祝宴をはり、

諸侯は八方からさまざまな贈りものをとどけ、  
贈りものは惜しみなく家来衆に分け与えられた。

\*アミルバルは海軍長官、スパサラルは陸軍長官、カニサルは皇帝。

312 彼はバルサダンに特使を送って、伝えた、  
『君は全インドを治めるべきです、

今日よりは、私は真心を君に捧げ、  
患実に仕えたいと望んでいます。』

313 これを聞いて、バルサダンはよろこんだ。  
すぐに返事を出した、『私は神に感謝する、

私と同じ王なるあなたが、この決意をなされたことを。  
親か兄弟のように、私はあなたを迎えましょう。』

314 彼はサリダンに領地を残し、アミルバルに任命した、  
インドではアミルバルはスパサラルをも兼ねる。  
だからサリダンは強大な権力を失わず、

不足といえは、カニサルの称号くらいであった\*。

315 王はわが父を自分と同列においた。彼はいう、  
『世にこんなアミルバルを持つ王が他にいるだろうか？』

サリダンは戦い、猟に遊び、敵に和を請わせた。  
私は父に似ていない、私に似た人がひとりもないように。

316 王と王妃のあいだには子がなかった。  
その悲しみは人びとにもしみとおっていった。

呪うべきその日、私は生まれた。王はいう、  
『同族のよしみ、この子をわが子として育てたい。』

317 王と王妃は私を妻子のようにいつくしみ、  
将来の君主として、私を教育し、  
君主の作法を身につけるよう、賢者にゆだねた。

318 成長につれて私は、顔は太陽、からだは獅子に似てきた。  
私がちょうど五歳のとき、王妃はみごもった。」

こう語ると、勇士は泣いた。「王妃は女の子を生んだ。」  
彼は失神し、アスマートがその胸に水をかけて促した。

「それが今も私を炎にくるんでいるあの姫なのだ！

319 今の私には王女をたたえる力はない。  
バルサダンは夜を日について祝宴をはり、

諸侯は八方からさまざまな贈りものをとどけ、  
贈りものは惜しみなく家来衆に分け与えられた。

\*アミルバルは海軍長官、スパサラルは陸軍長官、カニサルは皇帝。

328

父はこの世を去った。サリダンの最後の一日は終わった。  
バルサダン王をかこむ楽しい歌声は消えた。

サリダンを恐れるともがらはよろこび、

親しい人びとは嘆き悲しんだ。

329

いのちのはかなさに思い沈んで、私はまる一年喪に服し、  
昼夜となく、なぐさめのない涙にかきくれていた。

王の使者がきて、その命令を伝えた、

『わが子タリエールよ、もう喪に服するのを止めよ！』

330

私とても悲しいことはおまえに劣らないのだ！』

王は百の宝物を私にとどけて、忌明けを命じ、

亡き父に属する権力をすべて私に相続させた。

『おまえもアミルバルとなって、その義務を果たせ！』

331

インドの君主は私の忌明けの宴をひらいた、

王と王妃は私の館を訪れ、わが子のように私にキスした。

私は父の跡目の任ではない、と固辞したけれど、

許されないので、ついにアミルバルの職を継いだ。

332

そのときから長い年月が過ぎ、たいがいはもう忘れた、  
過ぎたできごとを語りつくすのは容易ではない。

いつわり、裏切りの世界はたえず悪をかもし出し、

打ち交う火花は私に当って今もこの身を焼いている。」



## 第10章 タリエールの 恋の物語

333

涙からわれに返ると、また彼は語り継いだ。

「ある日、主君といっしょに猟から帰ると、

『姫に会おう』といて、主君は私の手をとった。

そのときのことを思うと、いま生きているのがふしぎだ！

334

心うきうきする美しい庭園、

セイレーン\*の歌よりもなお甘い小鳥の声、

沐浴ゆあふに使うたぐさんのバラの噴水、

ドアにかかる金ビロードのカーテン。

335

王の指図で、手土産のキジ数羽を用意し、

そこへ行ったのが、炎に包まれるもどであった。

そのとき以来、うたかたの世にみつぎもの捧げはじめ、

岩の心臓打ち出すのに、ダイヤの槍が必要になる！

336

王は姫が人目につくことをきらっていた。

だから私は遠くに立ちどまり、王がドアをあけた。

私はかたくなって、ただ話し声だけを耳にしていた、

アミルバルからキジを受取るように、と。

\*セイレーン——ギリシア神話で、上半身は女、下半身は鳥の形をした人を魅する歌い手である海の怪物。

337

アスマートがとぼりをかかげ、私はそのすき間から、ちらと姫を見た。楡が頭と心を刺し貫いた。

無我夢中で、キジをアスマートに渡したが、

悲しや！ その時から永遠の業火に身を焼くことになる！

338

太陽をかげらすその光は、いまだこへ消えたのか？」

この思い出にたえやらず、タリエールはまた氣を失った。

アフタンジルはアスマートとともにもらい泣き、

慰めていう、「脅かしの手も、もう弱まったはずだ！」

339

アスマートに水をかけられ、タリエールはわれに帰ったが、

しばらくは胸ふさがれて、口がきけなかった。

ため息は重く、涙は土にまみれた。

「悲しや、こんなにつらい思い出があるうか！

340

うたかたの世に頼るものは、物欲に満足するが、

その裏切りを避けるわけにはいかない。

私は世にそむく賢者の知恵をたたえる。

わが息がつづくかぎり、なおしばらく耳をかしたまえ。

341

キジを渡して、その先はもうおぼえがない、

氣を失って倒れ、手や肩の力は抜けた。

われに帰って、烈しい泣声を聞く。見ると、

舟に乗るときのように、家の子たちが列をつくっている。

342

私は広いホールのベッドに寝ていた。

王は王妃とともにつきぬ涙にくれ、

その顔を両手でかきむしっている。

ムクルたちは私の病氣をウェリゼルの魔法のせいにした。

343

私が目をあけたのを見ると、王は私の首を抱き、

『わが子よ、死んだのでなければ、何かひと言！』

私はただ震えるだけで、口がきけなかった、

ふたたび無我の境に落ちた。

344

ムクルたちが私をとりまいた。

手に手に経文を持って、それを読みあげた。

私が悪魔にとりつかれた、とでも考えたらしい。

三日のあいだ、熱に浮かされ、息もしないで私は寝ていた。

\* ムクルは回教の僧・医師、ウェリゼルは悪霊の名。

345

医師たちもおどろいた、『なんて変な病気だろう、薬はきかず、おおかた気のやまいではないかしら？』

時どき私は狂ったようにはね起きて、うわごとをしやべり、王妃の涙は集まって海ともなった。

346

三日のあいだ、生死の境をさま迷って、やっとなれに返り、事のいきさつを思い出した。

『ああ、気を失うとは、なんたることだ！』

私は気がたしかになるよう、神に祈った。

347

『神よ私を破滅させないで、わが祈りを聞き給え、たえ忍ぶ力を与え、大地に立たしめ給え、

わが秘密を見破られぬよう、私をわが家に帰し給え！』

神はわが願いを聞き入れ、心の痛みは軽くなった。

348

私は起き上がった。のべつ王の見舞がきていた。

『起き上がった』と聞かや、王妃がかつけ、

王は帽子もかぶらず、あわてて飛んできた。

静まったなかに、神をたたえる王の声が響いた。

349

ふたりは私の両側にすわって、薬を私に飲ませた。私はいった、『わが君、心の痛みはなおりました、早く馬に乗って、野の駆がしたいのですが。』

馬が引出され、私はそれに乗って、王につづいた。

350

川岸を走り、野を走り、帰り道には、王が私を送ってきてくれた。館に入ると、また気分がふさいだ。

『どうせ闇の運命なら、死ぬがまだ。』

351

涙は頬をサフラン色に染め、幾千万の剣がさらに深くわが心を切り刻んだ。鍵番を呼んで、寝所に取次ぎがはいつてきた、

『はてな、いまごろなんの用かしら？』

352

『アスマートさまのお使いです。』

使者は一通の恋文を渡し、私は読んで、

びっくりした、人の心に火をつけたなんて！

しかもアスマートにはなんの関心もないものを。

353

びっくりした、『よくも愛の告白ができたものだ！

でも返事しなけりや、無作法になるし、

望みを失えば、私の悪口いい触らすだろう。』

私はやさしい返事を書いた。

354

日は過ぎて、わが心にまた炎が燃えあがる。

野に遊びに行く若者たちには顔をそむけ、

宮廷にも出仕することがない。

入れかわり立ちかわり、医師たちがやってくる。

355

医師たちは手の施しようがない、

私が炎に包まれてることには、誰も気がつかない。

そこで私から悪い血を吸取ることになった、

あくまでも秘密をまもるため、私は承諾した。

356

血を吸取られて、ぼんやり横になってると、

取次ぎがはいってきた。なんの用か？

『アスマーットさまのお使いです。』

私はひとりごと、『しつこい女だな！』

357

手紙が渡され、私はゆっくり読んだ、

はやくお目にかかりたいとのこと。

返事を書いた、『待ってましたよ、

お呼出しがあれば、すぐ参ります。』

358

わが胸にきいた、『この槍に傷つくことはないだろうか？

私はアミルバル、インド人はすべてわが配下、

私の一挙一動は彼らの目にさらされ、

疑いを招けば、この土地にいることは許されまい。』

359

王の使者が私のようすを見にきた、

悪い血を取ったか、とのお訊ね。

私は答えた、『腕を切ったので、軽くなりました、

さっそくお礼言上に、お城にあがります。』

360

宮廷に出ると、王はいった、『これで魔物は退散した。』

物の具つけずに、そのまま私を馬に乗せ、

王は先頭をきって、タカを放った。

雄叫びまたげあげて射手たちは矢を放った。



361

野からもどると、酒宴をひらいた、  
歌手も楽手も疲れを知らなかった。

王は珍しい宝石を分けあたえた、

その場にいた人で、頂かない人はいなかった。

362

どんなにがまんしても、私はがまんしきれなかった、  
姫を思うと、いよいよ大きい炎が胸をつかんだ。

親しい仲間を招いて、わが家で酒宴をつづけたのは、  
ただこの苦しみを隠したいためばかりであった。

363

勘定方が私の耳にささやいた。

『どこかの娘がお目にかかりたいと願っています、  
顔をかくしてはいますが、匂うようなお方です。』

私はいった、『約束だから、寝所に通せ。』

364

私が席を立つと、みんなも立去りそうになった。

あわてて私はいった、『すぐもどるから、そのまま！』

寝所に向かった。家来たちがドアを見はっていた。

私は情熱に溺れないよう、気持を引締めた。

365

中にはいると、娘が迎えて、お辞儀をしている。

『お目にかかれて、こんな嬉しいことはございませぬ』

私はおどろいた、ミジナルにお辞儀する者があるのか？

恋の作法を知るならば黙ってつつましく控えるべきなのに。

366

私は長いすにすわり、娘はじゆうたんの端に立ちどまった、  
私のそばにすわる資格はない、と考えたらしい。

私はいった、『愛しているのなら、なぜここにこないのか？』  
娘は答えず、ひっそりと静まっている。

367

やがていった、『あたしの心は恥ずかしさにふるえています、  
たぶん、恋に眼くらんで、ここに来たとお思いでしょうが、

でもあたしは冷静に振舞うことができるのです。

神のお加護を当てにしてもいいのです。』

368

娘はつつける、『心臆して、思慮もくもりがちながら、

おいitつけどおりに申上げること、お疑いなきように。

わが姫さまはあなたにお心をおひらきなされたのです。

あたしが語りえないことは、このお手紙が語るでしょう。』



## 第11章

### 王女ネスタン・ダレジャンの

### 最初の恋文

371  
そなたのことは、わが夫として、思いくらしでございましたが、今日まで、お話するおりがありませんでした。先日、病の中から、正気でないそなたを見て、それからそなたのことをいろいろ聞いたのです。

369  
それはわが胸を炎にくるんだその人の手紙であった。太陽は書いている、へ獅子の君よ、お心の傷は深くとも、私はそなたのもの、いたずらに死を急いではなりません。くわしくは、アスマートよりお聞きくださるよう。

370  
死をおもうのが、ミジヌールの常でしょうか？  
それよりも勇ましい手柄をこそ、見せていただきたいもの。現にハタイの住民は、わが国を裏切つて、貢物を納めなくなりました。厳しく処罰すべきです。

372  
今私のいうことを、本気で聞いてください。出陣し、ハタイ人と戦つて、手柄をお立てなさること！  
むだに涙にくれるより、どれほどましでしょう！  
闇を睨に変える太陽が、あとはお引受けします。

373  
アスマートがそなたのことつつみかくさず話しました、私のうれしさ、何に喻えられましょう？  
心は胸に高鳴り震えて、いまにも止まりそうになり、顔は水晶に、頬はルビーに凍りつきました。∨

タリエールの返書

374

王女の手紙を読んで、私は返事を書いた、

へ月の君よ、あなたにまさる太陽があるか？

あなたにふさわしくないものを、天は私に授けますまい。

まるで夢のようだ、私が生き返ったのは、

375

アスマートにいった、『返事はこれしか書けない、

どうか言い添えておくれ、へあなたは私の太陽だ、

あなたは死者を甦らせ、狂気の跡をかき消した、

私はどんなにつらいつとめをも果すだろうと。』

376

アスマートはいった、『姫君の仰せには、

この話合いをけつて人にさとられぬように、

あなたが登城なさる時は、あたしに流し目を送るように、

時がくるまでは、かたく秘密を守るように、と。』

377

この約束は気に入った、

太陽もはじらうその人の知恵。

真昼の光もかき消すほどのその人から、

すこしもきびしくない言葉がとどいたのだ。

378

私はアスマートに宝石入りの金杯を贈った。

彼女はいった、『いいえ、あたしには珍しくないのです。』

目方一ドラクマほどの指環一つだけとり、

『記念にはこれ一つでじゅうぶんよ。』

379

娘は立去り、槍はわが胸から引抜かれた。

よろこびは闇を照らし、私を焼く火は消えた。

ふたたび私は仲間が待つ酒席にもどり、

贈りもの分け与えて、有頂天にさわいだ。



### 第13章

## ハタイ人に出した タリエールの手紙

380 私は手紙を持たせてハタイへ飛脚を出した。

その文面は、ヘインドの王は神のように偉大だ、  
彼に心服する者は、おのが運命に満足するだろう。  
だが逆らう者は、おのれに苦情をいうだろう。

381 われらは貴国のわがままを見逃すものではない、  
この令書受取りしだい、すぐ出頭するように。  
出頭しなければ、当方から堂々と参上する。  
むだに血を流すより、出頭する方が為になるらう。▽

382 特使を送って、心はさらに浮き立った。

身を焼く妄執わうしやくの炎は消えた、

世界はわが欲するものを借しみなく与えた。

だが今はけものでさえも顔をそむけて私から遠ざかる。

383 一度は旅に出ようとしたが、それは思いとどまった、  
仲間が休みなく酒宴を催した、

だが狂おしい情熱はよろこびを奪い、

時に気が滅入って、つかの間の世界を呪った。



第14章

ネスタン姫

タリエールを招く

384

ある日、御所からもどつて、寢室に入ったが、眠れないままに、かの人のことを思いつづけていた。

希望に満ちた手紙を思うと、心はおどつた。

ふいに、おもてになにかささやく声が出た。

385

『アスマートさまのお使い！』——私は通せといった。

その手紙には、へ胸に刃をつき刺したお方のお招きです。

うれしさは闇をばらい、わが枷はゆるんだ、

すぐに使者とともに出向いたが、誰とも口はきかなかった。

386

庭に入った。使者は姿を消し、あとは誰もいない。

アスマートが出迎えて、にこにこしている。

いった、『ほら、あなたの心のとげをぬいてあげたのよ、

さあ、早く、あなたの清らかなバラをもらいなさい。

387

娘は重いじゅうたんのカーテンを引上げた、

バダフシヤンのルビーを散りばめた天蓋が見え、

その下に、やさしく光る太陽のように、姫がすわっていた。

姫はきれいな黒い目を私に向けた。

\* バダフシヤン——ルビーの産地として知られるバミールの一地区。

388

私を招いておきながら、姫はひとことも口をきかなかった、ただしげしげと、やさしくながめるだけであった。

アスマートに何かささやき、アスマートは私にささやいた。

『さあ、帰りましょう、姫は今なんにも仰れないのです。』

389

アスマートに見送られて、私はカーテンをくぐり、

考えた、へつかの間の世界よ、おまえはつい先刻、

希望を与えながら、なぜ喜びを真二つに引裂いたのか？

私はいつそう強く別れのつらさを感じた。

390

私たちは庭を通り、アスマートはしあわせを約束した。

『今の別れで、お気を悪くなさらぬように、

悲しみに幕を引き、喜びにドアをおひらきなさい。

姫はあなたに恥じらって仰る言葉を失ったのですよ。』

391

私はいった、『心の薬をぜひ頼む、手紙のやりとりを絶やさぬように、

何かと耳よりのこと聞いたなら、

もれなく打明けてくれるように。』

392

私は馬に乗った。涙はあふれて、

わが家に帰っても、寝もやらす、

顔はいよいよ青くなり、

いつまでも夜が明けないように祈っていた。

ハタイ王の返書

393

期限たがわずハタイの使者がやってきた、使者は居丈高に不敵な言葉を吐いた、

『われらは腰抜けにあらざ、城もかまえている、貴国の王とは何者か、われらにはわれらの保護者がある。』

394

書面には、△王ラマズ、汝タリエールに告げる。

余は汝の書状に目を通し、あきれ果てた。

多くの民族に君臨するこの身を呼びつけるとは？

二度とかかる書状は目にしたくない！

395

私はマルザパン<sup>※</sup>を派<sup>つか</sup>して、兵を召集した、

空の星の数よりも多いインド人の大軍が集まった。

遠くからも近くからも、ぞくぞくつめかけ、

野も山も軍勢におおわれた。

396

戦士たちはわれ遅れじと馳せ参じ、私は閲兵して、彼らの装備に満足した。

雄々しさにも、華やかさにも、申し分なく、

馬が勇めば、鐙<sup>ぶら</sup>が鳴った。

397

私は赤黒縞の王旗をかかげ、

その朝、全軍の進発を命じた。

だが心はおのが不運に泣いていた、

太陽の君を見ないで、どうして出陣できようか？

398

いったんわが館<sup>やかた</sup>にもどったが、悲しみはいや増すばかり、熱い涙は堰<sup>せき</sup>を切ったように目からほとぼしる。

この暗い運命に、いつ晴れの目がくることか。

掴むことができないのなら、バラは誰<sup>た</sup>がためにあるのか？

\* マルザパン——行政官

ハタイ王の返書

393

期限たがわずハタイの使者がやってきた、  
使者は居丈高に不敵な言葉を吐いた、

『われらは腰抜けにあらざ、城もかまえている、  
貴国の王とは何者か、われらにはわれらの保護者がある。』

394

書面には、△王ラマズ、汝タリエールに告げる。

余は汝の書状に目を通し、あきれ果てた。

多くの民族に君臨するこの身を呼びつけるとは？

二度とかかる書状は目にしたくない！

395

私はマルザパン<sup>※</sup>を派<sup>つか</sup>して、兵を召集した、

空の星の数よりも多いインド人の大軍が集まった。

遠くからも近くからも、ぞくぞくつめかけ、

野も山も軍勢におおわれた。

396

戦士たちはわれ遅れじと馳せ参じ、  
私は閲兵して、彼らの装備に満足した。

雄々しさにも、華やかさにも、申し分なく、

馬が勇めば、鐙<sup>ぶら</sup>が鳴った。

397

私は赤黒縞の王旗をかかげ、

その朝、全軍の進発を命じた。

だが心はおのが不運に泣いていた、

太陽の君を見ないで、どうして出陣できようか？

398

いったんわが館<sup>やかた</sup>にもどったが、悲しみはいや増すばかり、

熱い涙は堰<sup>せき</sup>を切ったように目からほとぼしる。

この暗い運命に、いつ晴れの目がくることか。

掴むことができないのなら、バラは誰<sup>た</sup>がためにあるのか？

\* マルザパン——行政官



405

男の前で女はつつしみ深くあるべきでしょうが、  
でも切ない思いを隠しておくのは、もっと悪いこと。  
口で笑って、心で泣いてはみじめです。

それゆえいつぞやは心のたけを書きおくれたのです。

406

お互いに心の秘密を打明けたその日から、  
この身はそなたのものです、そなたの妻とっています。  
それが私の決心です、天に誓って。

それに背いたら、天から奈落につき落とすがいい！

407

では、軍を進めて、ハタイ人と戦いなさい、  
勝利を納めて、めでたく私のもとにお帰りなさるようにならなさい！  
でも、長くそなたに会えないのは、つらいゆえ、

私の心はそなたが、そなたの心は私が預かりましょうね。』

408

私はいった、『姫のためなら、水火も辞さぬつもりですが、  
姫が私を見殺しになさらず、私のいのちを助けられた上は、  
あなたは太陽となって、私を照らすでしょう。』

では、これから出陣し、ハタイどもに日に物見せてくれます。

409

この世のどんな人にも恵まれぬものが、私に恵まれました、  
神のお慈悲は気まぐれだから、それは当てにしません。

あなたに明るい光こそ私の暗い心を明るくしました、  
大地にのまれぬ限り、私はあなたのものなのです。』

410

誓いの文にかけて、私は誓い、姫は誓った、  
しかも姫はその愛を二重に保証した。

『もしそなたの他の誰かに心動かすようなことあれば、

神は私に最も重い罰を賜わるでしょう。』

411

なおしばらく姫のかたわらにあつて、

おいしい果物を味わい、甘い言葉を交し、  
やがて席を立ったが、またも不覚の涙にむせび、  
心にさしこむ姫の光にやっと気をとりにおした。

412

姫の前から離れるのはつらかったが、  
世界は私にとって一新し、この身ははりきった。  
すべては私のもの。太陽も、はるかな空の残照も。

別れに当り、岩にも似たわが心の落着きは、今もふしぎだ。



## 第17章 タリエールのハタイ進撃と 大会戦

413 朝、私は馬上から号令かけた、『ラツパ吹け！』

全軍がいかにか動き出したか、それは筆舌につくし難い。  
こうして私は威風堂々ハタイへ馬首を向けた。

軍隊は道なき道を縫って進んだ。

414 インドの国境は後になり、なおしばらく進むと、  
ハタイ王ラマズの使者に行き会った。

使者は気分をやわらげるような情報をもたらした。

『インドの山羊にはわれらが狼を噛み殺す力もあります！』

415 ラマズの贈りものとして、珍しい宝物がさし出された。  
『けれど、王は無益な殺生なならぬよう願っていますし、

すでに投縄がわれらの首に巻きついているのですから、  
われらは壊滅を避け、降伏し、財産もさし出すつもりです。

416 いつぞやの無礼は平にお許しくださいさるよう。  
お慈悲をもって、全軍の攻撃を思い止まり、

わが国の破滅をご猶予くださいさるならば、

小部隊の御入城こそ願わしく、謹んでお迎え仕ります。』

417

私は幕僚たちを呼んで、会議をひらいた。

彼らはいった、『殿はお若い、経験者の意見を聞きませ。

敵はたいそうずるい奴、前にもその手を用いたことがある。

奴らの裏切りと謀殺を許してはなりません。

418

選りぬぎのお供をつれてお進みなさい、

本隊はすこし離れてつづき、敵に通告するのです、

汝らに誠意あれば、天地にかけて誓え、

もしそむけば、わが鉄槌は再び汝らの頭上に下るぞ、と。』

419

幕僚たちの進言は気に入った、

私は通告した、『王ラマズよ、汝の条件を受け容れよう。

城を明け渡して、死よりも生を選ぶこそ、賢いやりかただ、

私は本隊を残し、小部隊で汝に見参しよう。』

420

私は最も勇敢な戦士三百名を選んで、

出発し、後に残した本隊にはこう命じた、

『わが行くところにはどこまでも追尾し、

あまり離れず、合図を見たら、すぐ救援に駆けつけよ。』

421

三日進んだところで、また別の使者が現われ、

またしても高価な衣裳をたくさん私に贈った。

『王は誇り高いインドスタンのアミルバルにお目にかかり、

早く贈りものをさしあげたい、と急いでおります。』

422

重ねて使者は念をおす、『王は誠意を示すため、

自らあなたの出迎えに参じます。』

私は答える、『王のいったことを私は守っている、

父と子のように、私たちは会うだろう。』

423

しばらく進み、森のはずれで休んでいると、

また使者が現われて、低く腰をかがめた。

使者はすばらしい馬数頭を私に贈った。

『王は心からあなたに会いたがっています。』

424

仰せには、へせひ私は出迎えにい、

館を後に、あした朝早くお目にかかりたいと。』

私は使者たちのためにフェルトのテントを張り、

あたたかくもてなした。彼らはよろこんで横になった。

425 善き人の善の思い出は永遠に消えないものだ。

使者のひとりが仲間から離れて、ひそかに私に近づいた、  
『実は私はおやかた様に深いご恩をうけた者、  
それを忘れ、あなたを死地に陥れることはできません。』

426 こどものころ、私はあなたの父君に養われたのです。

今あなたが畏にかけられるのを知り黙ってはいられますぬ、  
そのバラのかんばせが色あせるのを、見てはいられますぬ、  
今お話することを、どうかとつくりとお聞きください。

427 ハタイの王ははじめから嘘ついているのです、  
ある場所には十万の軍勢を隠し、

次の場所には三万の兵力を伏せています。

すぐ手当しなければ、逃れる道はございません。

428 王はわずかの手兵をつれて、出迎えるでしょう、  
お世辞たらたら、あなたの欲心を買うでしょうが、

のろしを合図に軍勢が起こって、四方から取りかこめば、  
多勢に無勢、勝敗はおのずからあきらかです。』

424 ふたりはうちとけて話し、私はその使者に感謝した。

『よし、末代までの語り草になるほどの仕返ししてくれる、  
だが、おまえはすぐ知らぬ顔して仲間にもどれ、  
おまえの親切はけっして忘れないぞ。』

430 私はこのことを誰にももらさなかった。

会議はもう間に合わないから、わが胸ひとつで決裁した。  
飛脚をかなり離れている本隊に送って、  
命令を伝えた、『野越え、山越えて、急ぎ追いつけ！』

431 朝、私は使者たちにうれしい通告を与えた、

『王ラマズに伝えよ、へ汝に会いにすぐ出発する』と。』  
半日ほど歩いたが、まだ危難は起こらなかった。

そういう運命なら、幽霊にだって殺されるだろう。

432 私は丘にのぼって、野末に土煙のあがるのを見た。

『きたぞ、ラマズ王が、翼を仕かけたのだ、  
だがわが剣、わが槍は奴のからだを刺し貫くだろう。』  
私はわが部隊にさし迫った危険を説明した。

433

『兄弟よ、奴らはわれらを謀略にかけたのだ、したがってわれらの腕はいっそう強くあらねばならない。

わが君のために命捧げた者の魂は天に昇るだろう、

ではいさぎよくハタイ人相手に戦おう！』

434

武装せよという私の号令は雷鳴のようにとどろいた、

一同は鎧、兜、鎖帷子くさきまじらに身をかためた。

部隊は列を正して動きだした。決戦は近づいた。

私の剣が敵の頭上くびに下る日はきた。

435

敵は近づいて、われらが武装しているのを見る、

使者がかげよって、王ラマズの言葉を伝える、

『われらに二心なきことは、ごらんのとおりなのに、

貴隊が剣をふりかざすとは、心得かねることである。』

436

それに答えて、『女の悪巧みは露頭した、

それゆえ、汝との話し合はご破算になった。

支度よければ、尋常に勝負しよう、

私も剣をとって、汝の素っ首打ち落とすつもりだ。』

437

使者は引返し、二度とやってこなかった。

のろしがあがり、敵は秘密の幕を切って落とした、

伏勢は姿を現わし、両側からつめよせた、

列は列に続いたが、私を害することはできなかった。

438

私は兜の緒おをしめ、槍をかまえて、

戦いのただ中におどりこみ、敵を突き伏せながら、

ただ前へ前へと進んでいった。

無数の列が無気味に静まり返っていた。

439

私が近づくと、『やや、気が狂ったぞ！』と声があがった。

私は主力がひかえている場所に向かい、

まず一人の騎士を馬もろとも血祭りにあげた、

槍は折れた！ 私は自慢の剣に手をのばした。

440

雷鳥の群にまいおりたタカのように、私は敵陣に切りこみ、

片っ端から人馬の山を切り崩していった。

私にはねあげられた敵勢はコマのようにきりきり舞いし、

先頭の二部隊は早くも壊滅した。

441

敵勢はより集まって八方から私をとり囲んだ。  
剣の落ちるところ、立上がる者なく、血は川と流れた。  
断ち割られた奴は頭陀袋のように馬からぶらさがった。  
私の姿を見るがはやいか、怖気をふるまって、敵は逃げた。

442

その日の暮方、敵の偵察兵の声が響いた、  
『はやく逃げろ、また天のお怒りが下ったぞ、  
恐ろしい土煙はたしかに敵の援軍、  
あの大部隊では味方の滅亡は必定なり！』

443

おくれて追尾してきた本隊が私の命令を受けるや、  
夜を日についでかけつけたのだ。  
野も山も難なく越えて、近づいた。  
太鼓の音はラッパのひびきととけ合った。

444

これを見て、敵は逃げ、味方はときの声あげて追いかけた、  
戦場をふたたび走りぬけて、敵に迫り、  
私はラマズ王と剣を交え、彼を馬からたたき落とした。  
味方は敵勢を残らず捕虜にしたが、命は取らなかった。

445

味方の後統部隊は逃げまどう敵勢をおしつぶして、  
捕虜とし、馬から引きずりおろした、  
不眠の連中にとって、まるで悪い夢を見ているよう、  
無傷の者まで、負傷者のように、うなっていた。

446

戦場で休息するよう、全軍に伝えた。  
私は腕に傷をうけ、血がそこから流れていた。  
私に対面して、讃辭を呈しようと、部隊がつかめた、  
だが、それにふさわしい言葉は見つからなかった。

447

私によせられた敬意は身に余るものであった、  
遠くから讃えるもあり、キスしようと縛むしめく者もあった。  
私を教え育てた人たちは泣きぐずれた、  
私の剣の働きを見て、すっかり胆をつぶした。

448

みつぎものを集めるため、部隊を八方へ送った。  
どっさり取入れて帰ってくると、慰安の休暇を与え、  
私に敵対する者の血を流すことを許した。  
抵抗なしに城市の門をひらかせた。

449

私はラマズ王にいった、『汝の悪だくみはずれた、  
こうして捕虜になった上は、罪のつぐないにつとめ、  
城塞の武装を解き、それを当方に引渡せ。』

さもなければ、汝の運命はいっそう悪くなるばかりだ。』

450

ラマズ王は答えた、『私にはほかに手はない、  
打合せのため、重臣のひとりを呼んでもらいたい、  
それを籠城部隊につかわして、命令を伝え、  
いっさいをあなたに引渡すことにする。』

451

わが戦士たちをつけて、重臣をラマズ王に送った、  
ハタイの守備隊はわが手に帰した、  
彼らは声を放って泣きながら武装を解いた。

勝利者は莫大な宝物を手に入れた。

452

私はハタイにはいって、見てまわった、  
なんにもかくさず、すべての宝庫の鍵を私にさし出した。  
私は住民を家庭に帰し、安心させた。

『心配するな、太陽の熱でおまえたちを焼きはしない。』

453

私は宝庫を次から次へ見てまわった。

品物の多種多様さには目を見はるばかり！

ある場所には豪華な服とショール、

誰が見ても、おのが目を信じかねるだろう。

454

どういう織物で、どう加工されたのか、わからなかった。  
誰に見せても、これは神業だと驚嘆した。

たて糸もよこ糸も表面に出ることなく、

火で鍛えられた合金のように丈夫であった。

455

その織物を私を照らしている人への土産とし、  
主君のためにはいちばん貴重なものを選び、  
一千頭の足の強い驃馬もへと駝駝らくたに積んで、  
勝利の知らせとともに送り出した。



## 第18章

### インド王への

### タリエールの手紙と凱旋

456

私は書いた、へわが君のご武運めでたく祝着に存じます。  
敵は謀略をもってわれらに対しましたが、  
かえって破滅を招き、ハタイの王は捕虜となり、  
これより私はみつぎものを持って帰国いたします。▽

457

国内を平定し、財宝を集めて、  
ハタイを後にした。  
駱駝が足りないので、雄牛にも荷を積んだ。  
望みのとおり、私は名譽と名声を手に入れた。

458

ハタイの王を引き具して、インドに帰ると、  
バルサダン王は心浮きうき出で迎え、  
お賞めの言葉を雨あられとふりまきつつ、  
私の手を見て、やさしく綑帯してくれた。

459

私に会い、私と語らうために、  
野にりっぱなテントが張られていた。  
その日、そこで祝宴がひらかれ、  
王は隣に私の席を設けて、やさしく私をいたわった。



460

夜どおし酒くみ交してさんざめき、

朝、野を後に都にはいった。

王は命じた、『わが軍をここに波打たせよ。

またハタイの王を見せてくれ。』

461

私は捕虜のラマズ王をつれ出した、

ゆりかごの赤ん坊を見るように、王はやさしく彼を見、

忠実な家来のように、裏切者をもてなした。

それが男の意気というものだ！

462

王はハタイの王をなぐさめ、ごちそうし、

長いこと四方山の話をつづけていた。

夜が明けると、王は私を呼んで、やさしくいった、

『おまえに手向かったハタイ王を許す気はあるか？』

463

私は答えた、『神が罪人を許し給う上は、

わが君も無力に帰した者に慈悲をたれ給え。』

王はラマズにいった、『その方を許してつかわすが、

二度と恥ずかしい姿を見せるでないぞ！』

464

身の代金として一万ドラクマ、

ほかにハタイの貴重な織物がたくさん課された。

ラマズ王と従者たちにはきれいな服を賜わり、

憎しみを水に流して放してやった。

465

ハタイ王は頭をさげてお礼を述べた、

『裏切りには深く恥じ入ります。いつの日か

また道に背いたなら、こんどこそお斬りすててください！』

彼は一族郎党引きつれて立去った。

466

夜のしらじら明けに、王の使者がきて、

王のメモを渡した、『おまえと別れて三か月、

矢でしとめた野の鳥を食べていない、

旅の疲れもあろうが、出向いてはくれまいか。』

467

支度して登城すると、將軍たちがもうみんな集まり、

城内にはタカがむらがっていた。

王は太陽のように美々しく装って待っていたが、

私を見ると、立上がつって出迎えた。

468

私の耳に入らないよう、王はそっと王妃に囁いた。

『タリエールは晴姿、なんとりっぱではないか、

いかにふさいだ人として、彼を見れば心が晴れる。

おまえに話してあることを、すぐ実行してくれまいか。

469

私の考えは、おまえにもよくわかっているはず、

姫が王位を継ぐことに決まった以上、

エデンの木をいまこそ世界に見てもらおうではないか！

姫を隣にすわらせて、私の帰りを待ちなさい。』

470

タカヤ犬をたくさん使って、

山間の空地で狩りをした。

広い場所ではなかったので、球戯もしないで、

まもなく私たちは帰ってきた。

471

物見高い連中が通りをうずめ、屋根をうずめた。

凱旋將軍の私はぬいとりある服に飾られ、

涙にぬれた白バラに似ていた。

みんなは息をのんで私に見とれていた。

472

ハタイの都で手に入れたマントは

よく私に似合い、みんなを羨ましがらせた。

王は馬をおり、広間のドアはひらかれた、

太陽のように輝く顔を見て、私はふるえあがった。

473

姫はオレンジ色の服をまとい、

後ろにハドゥムたちがひかえていた。

姫の光は町に満ち、家々に満ち、

バラをもれる真珠の白が美しかった。

474

戦場で傷ついた私の腕には繻帯がかかっていた、

王妃は立上がって、私に近づき、

わが子のようにキスして、頬にバラの跡を残した。

『もはや誰もそなたを敵にまわす者はいないでしょうね。』

475

わが心を焼く太陽と向かい合う場所に、

私の席を設けてくれた。

ひそかに私は姫を見、姫は私を見たが、

その目がはずれると、とたんに私のいのちは空虚になった。

\* ハドゥム——召使、宦官。

468

私の耳に入らないよう、王はそっと王妃に囁いた。

『タリエールは晴姿、なんとりっぱではないか、

いかにふさいだ人として、彼を見れば心が晴れる。

おまえに話してあることを、すぐ実行してくれまいか。

469

私の考えは、おまえにもよくわかっているはず、

姫が王位を継ぐことに決まった以上、

エデンの木をいまこそ世界に見てもらおうではないか！

姫を隣にすわらせて、私の帰りを待ちなさい。』

470

タカヤ犬をたくさん使って、

山間の空地で狩りをした。

広い場所ではなかったので、球戯もしないで、

まもなく私たちは帰ってきた。

471

物見高い連中が通りをうずめ、屋根をうずめた。

凱旋將軍の私はぬいとりある服に飾られ、

涙にぬれた白バラに似ていた。

みんなは息をのんで私に見とれていた。

472

ハタイの都で手に入れたマントは

よく私に似合い、みんなを羨ましがらせた。

王は馬をおり、広間のドアはひらかれた、

太陽のように輝く顔を見て、私はふるえあがった。

473

姫はオレンジ色の服をまとい、

後ろにハドゥムたちがひかえていた。

姫の光は町に満ち、家々に満ち、

バラをもれる真珠の白が美しかった。

474

戦場で傷ついた私の腕には繻帯がかかっていた、

王妃は立上がって、私に近づき、

わが子のようにキスして、頬にバラの跡を残した。

『もはや誰もそなたを敵にまわす者はいないでしょうね。』

475

わが心を焼く太陽と向かい合う場所に、

私の席を設けてくれた。

ひそかに私は姫を見、姫は私を見たが、

その目がはずれると、とたんに私のいのちは空虚になった。

\* ハドゥム——召使、宦官。

愛する人への

ネスタン姫の手紙

483

召使が現われて告げた、

『ヴェールで顔をかくした婦人が見えました。』

それと察して、私ははね起きた、

アスマートが急ぎ足ではいつてきた。

484

恋する人のたよりをもたらしたに違いない。

あいさつのひまも与えず、私は彼女にキスし、

その手をとって、そばのタフタ\*に招じた、

『かの君は館にお帰りなされたか？』

485

ほかのことはなんにも聞きたくないぞ！』

『仰せまでもなく、まっすぐ申しあげますわ。』

今日お会いなされて、どちらもたいそうな熱のあげよう、

今も、すぐあなたのところへ行ってこいと姫のお言葉。』

486

アスマートは光の君の手紙を渡した。

へそあなたのお姿にはうっとりしました、

敵に馬をお進めなさるときは、さぞごりっぱでしょうね。

わが涙の原因も不吉とは思われませぬ。

487

そなたをたたえる言葉が見つければいいものを、

見つからぬゆえにただ思い悩むばかり。

太陽は獅子のためにバラの園を作ります、

誓って、そなたのほかにも、心動かすことはございませぬ。

488

そなたが涙にくれるさまは、さほど悪くもありませんが、

今日からは泣くのをやめて、凛々しくなさること！

そなたと私、どちらが美しいか、と噂とりどりですもの。

そなたがまもっていた織物は、私のショールにして下さい。

489

それは凱旋の時そなたを飾ったもの、

こんどは私を飾って、きつとそなたを喜ばすでしょう。

あたしのもを望みなら、この腕輪をどうぞ。

あのような夜がそなたの一生に二度とこないように。』

\*タフタ——背もたれの無いじゆうたん張り長いす

## タリエールの狂乱

490

ここでタリエールは千倍の悲しみにむせんだ、

「かの君の愛用していた腕輪はこれだ！」

腕からはずし、手にとって、無量のおもいでながめ、

くちびるをおしつけたかと思うと、すっと氣を失った。

491

墓の亡者のように、身動きもしないで、倒れていた、

胸にはこぶしで打ったあとおぼろの青痣あざが二つ。

アスマートも頬の掻傷から血を流していたが、

正氣に戻そうと、タリエールに水をかけていた。

492

アフタンジルはこれをながめて苦いたため息をもらし、

アスマートの流す涙は岩をえぐりぬいた。

まもなく水は火を消し、タリエールは正氣にかえった、

「生きていたのか、世界はまだ私の血が欲しいとみえる！」

493

身を起こしたが、目には狂氣の光があった、

バラの赤はサフランの黄にかわり、

あらぬ方に目を向けて、長く黙っていた。

生きる方が彼には死よりもなおつらかった。

494

彼はアフタンジルにいった、「心乱れてはいるけれど、

私を葬ったその事件を物語ろう。

おまえが知らないかの人との出会いの後で、

なお私が生き残っているのはふしぎなくらいだ！

495

私はアスマートを姉か妹のように思っていた。

手紙を読み終ると、彼女は私に腕輪を渡した。

私はすぐそれを腕につけ、はおっているものを脱いだ、

それは黒い織物のすばらしい名品であった。



496

私は書いた、へ太陽の光はわが心を打ち、  
私の知恵と勇気をくじいた。

私はあなたの魅惑に気もそぞろ、  
なんでお返ししたらいいのだろう？

497

いっぞやあなたは私の命を返してくれた、  
そのめでたい目とおなじくらい今日はうれしい。  
あなたの腕輪を受取って、手にはめた。  
こんなに喜んだことがいまままでにあったらうか？

## 第21章

愛する人への

タリエールの返書

498

あなたの望みのものをおとどけます、  
これほどの織物はけっして求められないでしょう。

私をいたずらに苦しめず、安心させて下さい、  
あなたの他に、この世で結ばれる人はいないのだから！

499

アスマートは退き、私はぐっすり眠ったが、  
夢に愛する人を見て、身ぶるいした。  
目がさめ、すべては消えて、またうら悲しく、  
かの人の声は聞こえず、まわりの闇は濃い！



第22章

ネスタン姫の  
花婿を選ぶ会議

500

朝、すぐ出仕するように、という命令がきた、  
支度をととのえ、すぐ登城した、

重臣三人だけを従え、王と王妃は待っていて、  
私を見ると、その前のいすをすすめた。

501

ふたりはいった、『無常の風は避けられず、  
われらは老いに近づき、若さを失った。

幸い、なに不足なき姫には恵まれたが、  
息子がなければ、老いの身の心細さはひとしお。

502

はやく姫のつれあいを見つけて、  
王位を譲り、わが一族に加えたい。

ずるい敵にわれに刃向かう剣を研がせないように、  
わが国の君主となり、保護者となってもらいたい。』

503

私はいった、『王子なきお嘆きはごもつともながら、  
太陽の姫君は世の渴仰カクキョウの的、

誰が花婿に選ばれましょうと、喜びは無上のもでしょう。  
すべてはわが君の御意の通り、私に意見はごさいませぬ。』

504

相談がはじまり、私の心ははり裂けるばかり、

へこで口出しはできない、いや、すべきでない！

王はいった、『ホレズムシャフ、ホレズムの国王が、

その子を婿にしてくれたら、願ってもないことだが。』

505

あらかじめ打合わせずみとみえて、

重臣たちは顔見合わせ、同意を表した。

何か反対意見を述べるのはぐあい悪かった。

私はとたんに灰燼と化し、心は震えおののいた。

506

王妃はいった、『ホレズムシャフは強大な国王、

その子にまさる婿どのがどこにおりましょう？』

それがお望みだしたら、私の出る幕はもうない。

私も同意を表し、それでわが失意の日はきまった。

507

ホレズム国王に使者が送られた。

その口上は、へわが国には世継ぎがありません。

姫はあれど、ひとり娘ゆえ、他に嫁ぐことができませぬ、

つれあいにご子息を賜わらば、無上の俸せでございませぬ。

508

織物などの土産を山のごとく頂いて、使者はもどった、

ホレズムシャフはよほど喜んだとみえ、

返事には、へまるで夢のようなお話です、

われらの手が最愛の姫の手をとることができるとは！

509

花婿を迎える使者たちがまた送り出された、

その口上は、へ承諾の上は、速やかに事を運ばれたく。

球戯も気晴らしとはならず、私はいたずらに疲れた、

うれしい胸にあふれ、悲しみはここにきわまった。

\*ホレズム (ホラズム) ——アラル海の南、アム・ダリア下流域に栄えた古代文化国家 (11~13世紀)。シャフ——イラン系国王の称号。



タリエールとネスタン姫の相談  
そして兩人の決意

510

悲しみのきわみ、あわや胸に短刀を突立てようとしたが、アスマートの使者を見ると、はっと正気に返った。

使者は手紙をさし出し、手紙には書いてあった、

へすぐきてください、と姫の御意。』

511

私は喜び勇んで、馬を内苑に乗入れた。

塔に近づくと、そこにアスマートが待っていた。

頬に涙の跡があり見えだが、

あえてなんにも聞かなかった。

512

アスマートの悲しげな顔に私は胸を衝かれた。

それは前のように私に笑いかけなかった。

ひと言も語らず、涙だけが滝つ瀬となって、

いっそう私をおどろかし、わが傷を深くした。

513

あれこれ思いめぐらすひまもなく、

アスマートは私を塔に案内し、カーテンをかかげた。

明るい月を見て、私ははっとし、

胸に光満ちたが、でも心はかたく張りつめていた。

514

カーテンに落ちるあかりには影がさしていた、

私が贈った金襴のショールをはおっていたからだろう、

いつものみどりの服を着て、タフタにくつろいでいたが、

顔は涙にぬれて、かがやきをくもらせていた。

515

それは岩壁のすき間にひそむ怒れる虎、

エデンの園のイトスギに見立てるはおろか。

けおされる私をアスマートがやや離れて席につけたとき、

姫は眉根をよせ、気色ばんで、立上がった。

516

『かたい言葉にそむいた人が、よくもここにこられたもの、

誓いを破った裏切者ではないの、そなたは！

私に代って天の仕置を受けるがいい！』

私は答えた、『身におぼえないことを仰る！

517

真相を知らないで、なんと答えることができましょう？  
このうつけ者が、どんな罪を犯したのでしょうか？』  
重ねて姫はいった、『嘘つきには、言ってもせんないこと、  
女とあなどり、よくも私を騙したわね。』

518

ホレズムの王子を婿にという話、知らないことはないはず、  
そなたは相談にあずかりながら、同意なさった、  
私に与えた神聖な誓いをお破りになった、  
神はそなたの謀略を許さないでしょう！

519

おぼえていますか、そなたの涙が野をひたし、  
医者が薬をさしあげたことを？  
それも男の手管かしら？

520

言うまでもなく、誰がインドを統治しようと、  
それがどこから来ようと、実権は私のもの、  
他人の干渉は受けませぬ。  
そなたのような嘘つきは勝手にどこへでもいくがいい。

521

私が生きている限り、そなたをインドにはおきませぬ、  
わりに残るおつもりなら、そなたの身は魂を失い、  
天を仰いだとて、私のような女は二度と見つかるまい。』  
タリエールは涙ながらにため息した、『むごい話だ！』

522

騎士はいった、『でも、姫の話は私にまた希望を与えた、  
私の目は再び姫の後光を見ることができるようになった。  
その姫は今いない——私がおお生きているのはふしぎだ、  
いまわしい世界よ、どこまでわが生き血を吸うつもりか？

523

見ると姫の枕辺にコーラン<sup>\*</sup>がおいてある、  
それを手にとって、神を、つづいて姫を祝福した。  
『私は太陽に焼かれ、今にも灰になるばかり、  
でもまだ息がある限り、あなたに答えることができる。』

524

今私のいうことがつくり話であったなら、  
天の怒りが私に下り、日の光を消すがいい！  
あなたに正しく裁く心があれば、私の無罪を知るだろう。』  
『では、話してごらん！』姫は私をうながした。

\* コーラン——イスラム教の経典

525

私はつづけた、『私が誓いを守らなかつたのなら、

この場で雷神の一撃を下すがいい！

あなたのほかに、誰を太陽と仰ぐのか？

道に外れたのなら、この胸を槍で刺し貫くがいい！

526

王は私を呼出して、会議をひらいたが、

あなたの花婿はあらかじめきめられていた。

だから反対しても、そのとりきめを覆すことはできまい、

同意して、しばらく耐えることだ、と自分にいい聞かせた。

527

私、タリエールをおいて、どこにこの国の世継ぎがいよう。

それなのに、インドに君主がなくなるときめられた上は、

私として、王に返す言葉はありません。

王が誰を招くにしろ、その人は無事にここに入れまい！

528

言葉なければ、行動するよりほかはない、

自分に言った、へあわてず、よく考えろ。』

心はけものように、いく度野駆けを思ったかしませぬ。

あなたが私を見すてぬ限り、誰にあなたを譲れようか！』

529

私は心のために魂を売り、城塞を市場に変えた。

いままでバラをぬらしていた雨は暖かくなり、

サンゴに美しく飾られた真珠が見え、姫は明るくいった、

『よくわかったわ、そなたは正しい道を選んだのよ。』

530

もうそなたの裏切りやふたごころ、

背信や無情を案じないことにしましょう。

私の手とインドの主権を王に頼みなさい、

ふたりが玉座を占めれば、これにまさる婚儀はないわ。』

531

怒り狂った人はやさしく静まった、

それは地上の太陽か、はた満月か。

私をそばに招き、いままでにない親しきで、

語りかけた。それは私を焼く火を消した。

532

姫はいった、『知恵ある人はあわてず、急がず、

最善を選んで、冷静にうつし世をながめるもの。』

そなたがここに花婿を入れなければ、王は激怒し、

ここでふたりが争えば、インドは跡形なくなるでしょう。

533

またここに花婿が入れば、私はそのつれあいとなり

そなたとは別れ別れになって、悲しみに沈むばかり。

彼らは得意の絶頂に、私たちは苦惱の淵に——

いいえ、ベルシア人をさばらせていいのですか!』

534

私はいった、『神はその若者をあなたの夫にはなざるまい、

インドにふみこんだたとんに、彼に目に物見せてやります。

私の力、私の武勇をふるって、

物の役に立たぬ人間にしてやります!』

535

姫はいった、『女には女らしい思案があるもの、

よけいな血を流して、争いを起こしたくはありません。

花婿だけを片つけて、その部隊には手をつけぬように。

そうすれば正しい裁きに、枯木もみどりになるでしょう。

536

そなたは勇士のなかの勇士、

手兵をつれずに、ひそかに花婿を倒しなさい。

でも彼の部隊を驕馬のように蹴散らさないこと、

どんな人も無辜の血の重さには耐えられないもの。

537

ことがすんだら、王に、わが父に、こう申出なさい、

へ私はこのインドをベルシア人の手に渡すことはできません、

これはわが領土、ひとかけらでも惜しみます、

お聞き入れなければ、あなたの都を灰にします。へ

538

でも私へのお気持はけっして口になさらぬこと。

そうすればそなたの言い分に箔がつく道理。

王は頭をさげて、詫びを入れ、

王権とともに、私をそなたの手に渡すでしょう。』

539

姫の計略はしごく私の気に入った。

敵を一刀両断する素振りを見せて、

辞去しようとする、姫は私をひきとめた。

私は渴望にうずきながら、でも姫を抱く勇氣はなかった。

540

しばらくして、心うつろに、姫と別れた。

アスマートは前に立ち、私は熱い涙を流した。

悲しみは千倍に、でも一条のよろこびは残っていた。

立ち去りがてに、私の足どりは重かった。



## 第24章

### ホレズム王子のインド入りと その暗殺

541

飛脚が馬をとばしてきた、『花婿さまご到着！』

だが神が何をなさるのか、不運な若者は知らなかった。

王はよろこんで、私を呼びだし、

かるく会釈して、隣にすわらせた。

542

王はいった、『私にとってこの日はよろこびの日、

世にもみごとな祝言の式をあげよう、

国じゅうの宝物をかき集め、

惜しみなくそれをわけ与えよう。』

543

私は宝物集めの人びとを八方へ送り出した。

すこしの遅れもなく、花婿は着いた。

わが軍勢は花婿の一行を出迎え、

両勢合わせて、広い土地にもあふれるばかり。

544

王は命じた、『野にテントを張り、

そこでしばらく花婿を休息させるがよい。

彼の案内には部隊をくり出し、

おまえは私とともに、ここで彼に会うのだ。』

545

野に赤い繻子のテントを張った。

花婿は到着して、馬をおりる――

貴顕高官たちは立つて出迎え、

軍勢は列を正して立並ぶ。

546

役目を果して、疲れたので、

私はわが家へ帰り、ひと休みしようとした。

アスマートの使者がきて、手紙を渡した。

へすぐお目にかかりたい、と、イトスギの君のご命令へ。

547

気分を落着けて、私は出向いた。

『その涙は？』とアスマートにきくと、

それに答え、『涙なしにあなたとお会いできませんようか？

これ以上あなたをかばうことができませんようか？』

548

ふたりは入った。眉根をよせて姫は怖い顔をしていた。

それはあたりを照らす太陽よりも、なおまぶしかった。

姫は言った、『何をためらうの、決戦の日だというのに！

それともそなたはまた私を裏切り、騙すつもりなの？』

549

さすがにむっとして、私はおもてへとび出した。

こうどなりながら、『女にはげまされなければ、

戦闘に出られないほど、私は腰抜けだろうか？』

家にもどると、すぐ敵を倒す手配をした。

550

戦士百名を集めて、命令した、『戦闘準備！』

みんな馬に乗り、間道づたいに町を走りぬけた。

私はテントをめくった。婿はふしどに。哀れだったが、

私は血を見ずに彼を殺した。後に血は流れたけれど。

551

まずテントの裾を切裂いて、入口をあけた、

若者の足をつかんで、頭を柱にたたきつけた。

番兵たちはこの世のものならぬ悲鳴をあげた。

私は馬にまたがり、その場を離れた。

552

『つかまえろ！』怒号が鳴り響いた。

追いついた追跡隊は、私の手でみんな片づけられた。

私は不落の要塞都市をもっていた、

手傷ひとつなく、ぶじにそこに入城した。

553

私は部下の將兵に使者を出した、

へ私に力をかそうとする者はここに集まれ！

暗夜に乗じて駆けつける者ひきもきらず、

事情を知ると、おのが首も惜しまないと誓った。

554

夜は明け、私は起きて、武装した。

王の使者三名が見えて、王の言葉を伝えた、

へ神も照覽あれ、私はおまえをわが子のように育てたのに、

なんでわがよろこびを悲しみに変えたのか？

555

なんで無辜の血でわが館を汚したのか？

わが姫が望みなら、なんでそれをいわなかったのか？

おまえは育ての親の老骨を暗い淵につき落とし、

この先、おまえの顔も見られないようにした！

556

私は答えた、へ王よ、私は岩より堅い男です、

名譽を損われて、なお生きていけるでしょうか？

正しい裁きをするのは、君主のつとめ。

誓って申し上げますが、私は姫を望む者ではございません。

557

インドにいくつ玉座があるかはおぞんじのはず、

私はお手にあるものすべての唯一の継承者。

諸王族の血は絶えて、国はあなたおひとりに残されたいま、

玉座は当然ほかならぬ私に属すべきでしょう。

558

率直に申せば、あなたの裁きは正しくなかった。

神はあなたに男子でなく、女子をおめぐみなされた。

ホレズムシャフを王に迎え、私をどうなさるおつもりか？

私に剣がある限り、インドの王位は誰にもつがせぬ！

559

姫をどこかにお嫁にやり、私から遠ざけても、

インドは私のもの、なにびとの手にも渡しません。

私に逆らう者はその身をほろぼすでしょう。

私はこの身ひとつでそれをやりとげてごらんに入れます！

## ネスタン姫

## かどわかされる

560 高官三名が立去ると、私はにわかになんか気がかりになった。  
どうして姫のたよりが絶えているのか？

土手にのぼって、野の彼方をながめた。  
そのたよりは身の毛もよだつものだった。

561 歩いてくる二人の姿が見え、私は出迎えた。  
しもべをつれた女、それが誰かはすぐわかった、  
アスマートは髪ふり乱し、顔は血まみれ、  
いつものあの微笑の影もなかった。

562 私は胸を衝かれてうろたえ、  
遠くから声をかけた、『どうしたんだ？』  
女はせきあげ、すぐには言葉も出ないようす。  
『神のおとがめで、地獄に落とされたのですわ！』

563

私は近づき、もう一度訊く、『どうしたんだ？』  
女はさらにはげしく泣きじゃくり、  
しばらくは一言も発することができなかった。  
胸は頬から滴り落ちる血に赤く染った。

564

やがていった、『包み隠さず、すっかりお話しします。  
その代り、あたしをかわれとおぼしめし、  
ぜひいのちを絶ってくださるよう、  
この世のいとま賜わるよう、お願いします。

565

あなたが花婿を殺したとき、噂はすぐにひろまって、  
王のお耳にもはまりました。王はおどりがあって、  
お声も荒く、あなたを召捕れとのご命令。  
さがしましたが、おやしきにあなたの姿はない。

566

〈彼は都の城門を出ていきました〉との報告に、  
王はうなずき、へわかった、よくわかった、  
あれは姫を愛し、そのために血を流したのだ、  
いっしょになったら、もうふたりを引離す力はない。



567

首にかけて誓う、妹ダワールは生かしておけぬ！

神の道に導くよう頼んだのに、その姫は外道に落ちた。

誰が妹にあんなふらち者を期待したか？

その罰には死の用意があるのみ。▽

568

王が誓いを立てることはめったにありませんが、

いったん立てたら、もう決して取消すことはありません。

これを知る者が、王の激怒を耳にして、

さっそくカッジのダワールに告げ口しました。

569

王の妹ダワールは不信心な男の話を聞きました、

へですから、王はあなたを生かしてはおきませんよ。▽

ダワールはいいました、△罪もないのに、殺される？

それなら、あの人とて、そのままにしておくものか！▽

570

あたしのあるじはあなたの贈りものをはおり、

たいそうよくお似合いです。

そこへダワールがえらいけんまくで飛びこんできたのです、

へいたずら女め、なんで私を殺すの？ おぼえておいで！

571

じぶんの婿を消させるとは、とんでもない娘！

なんで私の血でその償いをさせるのか？

殺すといったら、兄はきつと殺すだろう。

おまえも二度とあの殺し屋とは会えぬようにしてやる！▽

572

ダワールは姫の長い髪の毛つかんでひきすえ、

悪鬼の形相ものすごく、姫の顔をめった打ち。

姫は声も立てず、ただ荒い息を吐くばかり。

黒い侍女もあるじをかばうことができませぬ。

573

気のすむまでダワールが荒れ狂ったころ、

カッジづらした奴隷ふたりが現われました。

ふたりはいけぞんざいに姫に手をかけ、

かついできたトランクに姫をおしこみました。

574

それをかつぐと、窓を越えて、海の方へ一目散。

ダワールはひとりごと、△石もて私を打つのは誰か？

だが、打たれるより先に、私は自分でしまつするわ！▽

短刀を突きたて、血潮にまみれて、意絶えました。

575

あたしが槍に刺しつらぬかれなかったことこそふしぎです。  
あの恐ろしい知らせと同様な目にあたしは会いたいただけ、  
だから、お願ひ、あたしの息の根絶つてください。』  
アスマートはつきぬ涙にかきくれた。

576

私はいった、『なんでおまえに罪があるろう？  
私こそ姫のためになさねばならぬことがある、  
今日からは岩根水底かきわけ、姫の行方を尋ねよう。』  
私の心はかたい岩根のように凍りついた。

577

痛恨に気は狂い、全身を震えが走った。  
わが心にいい聞かせるには、へ無為に朽ちるな、  
姫を尋ねるさすらいの野の果てにこそ憩いはあろう。  
今日は私につき従う者がきまる日だ！』

578

私は急ぎ身支度して、馬にまたがった、  
前から進退を共にしてきた勇士百六十騎、  
私に従って、杖をふくんで城門を出た。  
海岸に着いて、見ると、小舟が波にゆれていた。

579

私はその舟に乗り、海に漕ぎ出た。  
ひとつも逃さず、行き会う舟に目をくばったが、  
期待はすべて裏切られ、虚しいあせりだけが残った。  
神はよくよく私を憎み給うたものとみえる。

580

一年は過ぎ、十二月は二十倍も長く思われた、  
姫を見たという舟乗りにはひとりも出会わず、  
私に従った戦士たちはほとんどみんな死に絶えた。  
私はいった、『運命をかこつまい、成行きにまかせよう。』

581

海をあきらめて、陸にあがった。  
相談する人もないひとりぼっち、  
わずかに生き残った戦士たちも散りぢりになった。  
それでも神は見棄てた人にまだいくらかの憐みをかけた。

582

アスマートとふたりの召使だけは残って、  
私をなぐさめ、話し相手になった。  
姫のたよりは絶えて聞くことなく、  
泣くことだけが私にはよるこびであった。

タリエールと

ヌラジンとプリドンの出会い

583

ある夜、海岸の草木の茂ったところを通った、よく見ると、町のようでもあり、一方に岩窟が見えた。私は人に出会って、心を傷つけられたくなかったので、大木のかげに馬をとめてとびおりた。

584

召使たちは食事、私は木の根を枕にまどろんだ。重くまた暗い気分が目がさめた。ずいぶん長いあいだ何も聞かず、何も知らなかった。流れ落ちる涙は野をうるおした。

585

大音声が響いた。おどろいて見まわすと、ひとりの騎士が海沿いに馬をとばしてくる。全身蘇芳に染まり、手にも血まみれの折れた剣。ありったけの悪口を敵にあびせている。

586

馬は黒、いま私が乗っているあの黒馬だ。それに乗って、騎士は風のようにとんでくる。私はふとその顔を見たくなり、召使をさし向け、訊ねた、『おまえを辱しめたのは何者か、打明けてくれ!』

587

騎士は答えず、耳にもいれなかった。私は馬にとび乗って、彼の行く手に立ちふさがった、『待て、どうしてそんなに血を浴びたのだ?』

588

彼は私を眺め、『神はよくもこんな木を育てたものだ!』つづいて、『よし、おまえの知りたいことに答えよう、じつは、山羊だと思っていた敵が俄に獅子になったのさ、無防備の虚を衝けば、強くなるにきまっている。』

\*こんな木——こんな勇士

589

『待て』と私はいった、『あの木のかげに行こう。

真の勇士なら手傷受けてもひるまないはず。』

ふたりはうちとけて馬を返した。

私は騎士のやわらかい身のこなしにおどろいた。

590

召使のひとりには傷の手当の心得があった、

矢しりを抜き、繻帯をかけた。もう痛みはないと見て、

私は訊いた、『おまえは誰で、誰に襲われたのか？』

彼はまずおのれの運の悪さからはじめた。

591

『私は知らない、おまえが誰で、何に喰えるべきかを、

また何がおまえをそんなに瘦せ衰えさせたかを、

また何がバラの花咲いたおまえの顔を黄ばませたかを。

いったい神は自らつけたあかりをなんで消したのだろうか？

592

この近くにムリガザンザルという町があり、

私はその王で、スラジーン・ブリドンという。

おまえが休んだところは私の領土、

広くはないが、どこも美しく、ゆたかな土地だ。

593

私の祖父が父と叔父に領土を分け与えたとき、

海に浮かぶ島は私の分け前ときめた。

それを叔父は強奪し、今また叔父の子たちは私を傷つけた、

さらに猟場をめぐるいざごも絶えたことがない。

594

今日私は海辺に猟に出た、

勢子がすくないので、タカを使うつもりだった。

それで部下にいった、△△△で待ってろ！△

私は鷹匠五名ほどしかつれて行かなかった。

595

小舟で海峡を渡った。

境界については気にもとめず、親戚を警戒もしなかった。

相手は衆寡敵せずと私を見つめた。

私が大声あげて猟にふけたのが相手のカンにさわった。

596

無視されたのを見て、彼らは大いに怒り、

ひそかに私を包囲して、舟への道を絶った。

私のいとこたちは自ら馬を御し、

剣をふるって私の部隊におそいかかった。

597

私は雄叫びを聞き、劍のひらめきを見た。

渡船場で舟を見つけ、へ急げ！と叫んだ。

海に出ると、敵勢はあらしのようにおしよせて、

私を沈めようとしたが、それはうまくいかなかった。

598

数知れぬ別働隊も私を追いつめ、

四方からひしひしと取巻いた。

正面ではかなわぬと見るや、後ろから矢を放ちはじめた。

私の方はすでに矢は尽き、頼みの劍も折れた。

599

もはや抵抗できないとさとり、波間に馬をおどらせた、

海を泳ぎ渡るのをみて、敵は胆をつぶした。

私を待っていた部隊はみな殺しにされたが、

私は追いつまざる敵を討ちしりぞけた。

600

いずれにせよ、神のおぼしめしに逆らうつもりはないが、

私の血は復讐せずにはおさまらないだろう。

昼も夜も、彼らの存在は私をじりじりさせる、

なに、鴉を呼んで回向させてやるよ！』

601

魅力あるこの若者に私は気を引かれた。

私はいった、『そう急ぐことはあるまい、

おまえといっしょに私が行けば、それで彼らはおしまいだ。

われら二人の前に震えあがらぬものはあるまい。

602

私の素性をおまえは知らぬが、

いずれおりをみて、くわしく話そう。』

ブリドンはいった、『こんなうれいことはない、

私もおまえのためならなんでもしよう。』

603

私たちは小さいけれど美しい彼の都へはいった、

彼の身を案じて、みんなこぞって出迎えた。

顔をかきむしって泣きながら、

王に抱きつき、その劍のつかにキスした。

604

王を送ってきた私はみんなに頼もしがられた。

彼らは賞めた、『太陽の君よ、お蔭でいい天気になった！』

私たちはゆたかな都を見物した、

住民はすべて舶来の錦をまっていた。



## 第27章

### タリエール

### ブリドンの力になる

605

ブリドンは恢復し、いつでも戦えるようになった。  
舟を用意し、軍勢を用意した、

見れど見飽きない王の凛々しさ。

彼がいかに敵をこらしめたかを、物語ろう。

606

敵はやくも戦闘準備をととのえ、

兵士を乗せた八そうの舟を差し向けた。

舳艫相ぶくんで進み来るのに私はとびかか

かかとして蹴って、一そうをひっくり返した。

607

次の舟に漕ぎよせると、片手で艦をつかんで、  
悲鳴もろとも、海に沈めた。

あとの舟は一目散に逃げ散り、

これを眺めた一同は大合唱で私の腕前を賞めたたえた。

608

陸にあがると、こんどは馬で攻めてきた、  
腕を休めるひまもない決戦がはじまった。

私はブリドンの剛勇と好手に見とれた、

わがは獅子、顔は太陽、姿はポプラ。

609

劍をふるって叔父とその子たちを馬からたたき落とし、肩のつけ根から腕を切落とすと、

ブリドンは彼らを捕虜として、しょっぴびいてきた。

敵の軍勢は泣き、味方は勝鬨かちどぎあげて笑った。

610

敵はしりぞき、われらはその後を追い、

手をゆるめず、都をふみにじると、

捕虜どもの足を切って、山羊皮のようにもみほぐした。

戦利品はくるまに余り、その情かまを知らなかった。

611

ブリドンは宝物をあらためて、それに印を押し、

叔父とそのふたりの息子を野につれ出して、

わが血のために、彼らの血を流した。

そして『おまえの腕前にはおどろいた！』と私を賞めた。

612

都は沸きにわいていた、

軽業師かろわざしたちは見る目をおどろかした。

人びとこぞって私とブリドンをたたえた。

『今もお手から敵の血が滴り落ちてますよ！』

613

ブリドンを王、私を諸王の王とうやまって、

部隊は私に奴隸として仕えることを誓った。

だがバラを摘まないで、私になんのなぐさめがあろう。

その心を打明けければ、楽しい宴のじまになる。



614

ある日、ブリドンとつれ立ち獵に出て、  
海辺に切り立つ崖道をのぼっていくと、

馬上から声がかかった、『おもしろい話がある、

この崖から、いつか、たいへんなものを見たんだ!』

615

私が聞き返すまでもなく、ブリドンは進んで物語った。

『ある日、獵をしようとしたこの黒馬に乗って――』

この馬はね、海ではカモ、陸ではタカとおなじだが、  
これに乗ってここからトビの行方をながめていた。

## 第28章

ブリドンは

ネスタン姫を見たという

616

そのとき、ふと頭を海の方にめぐらすと、  
はるか沖合になにか小さいものが目にとまった、  
ただその走ること、どんな矢よりも早く、  
正体を見分けることはできなかった。

617

へはてな、あれはけものか、鳥か、何だろ?」  
じつはそれは、一つの小舟で、じっと目をこらすと、  
番人たちにまもられた大きいトランクが見え、  
そこに光りかがやく娘の顔が見えた。



618

舟は岸に着き、タールのようにまっ黒な二人の従者が、

娘をかかえて上陸した。ふさふさした髪の毛――

娘が発する稲妻を何に喩えよう！

陽の光も娘の前には色あせた。

619

うれしさに私は思わず身ぶるいした、

雪をかぶらぬバラは私をとりこにした、

私は心をきめた、へとびかかろう、

この黒馬から逃れられる生物がどこにいよう！

620

私は黒馬に拍車をかけた。草は音立ててなびいた。

だがどんなに馬を急がせても、彼らに追いつけなかった。

岸におりると、沈む日の残照のように、娘は遠くに見えた。

こうして望みは消えたが、胸につけられた火は消えない。』

621

ブリドンの話を聞いて、私の火は燃えさかった、

私は馬からとびおると、がまんもならず、

頬を赤い血に染めて、いった、

『おお、私以外の他人の目がその顔を見たのか！』

622

私の振舞はブリドンをめんくらわせた。

でも彼は私をあわれみ、目に涙さえ浮かべて、

わが子のように、やさしく私をなぐさめた。

涙は真珠のように頬をころげ落ちた。

623

『つまらぬ話をして、悪かったな』とブリドンはいった。

私は答えた、『いや、その話のせいではない！

じつはあれは私の月、だから私を焦がすのだ、

おまえとはもう兄弟の仲、だから委細を物語ろう。』

624

私はわが身の上をすっかり話した。

彼はいった、『気の迷いとはいえ、恥ずかしい！

おまえはインドのえらい王、

王座と玉の宮殿こそ似合いの人。

625

若木をじょうぶな幹にしたいと思えば、

神はまず心臓を突いて、それから槍を引抜くという。

神は雷のように私たちにお恵みを落とし、

悲しみをよるこびに変えるにちがいない。』

626

私たちは涙にむせびながら王宮にもどった。

私はブリドンにいった、『私には、おまえの他に友はない、

おまえのような男がほかにこの世にない限り、

おまえとよしみを結んだ私は果報者。』

627

私とおまえに不信な友とはならないだろう。

だがさし当り、その口と知恵を貸してはくれまいか、

愛する人としあわせになるには、どうしたらいいか。

なんの役にも立たぬなら、私はこの世においとましよう。』

628

彼は答えた、『私として、これ以上の幸福があるうか？

インドの王がここに身を寄せたのももの。

私こそお礼の言葉もないくらい、

忠実なしもべとして仕えるつもりだ。

629

この都は世界の国ぐにの船路に当たり、

八方から無数のたよりがここに集まる。

おまえを焦がす炎についての噂も入ろう。

おまえの悲しみ、苦しみに、報いられる日も来よう。

630

私は世界をめぐった手慣れた船人をさし向けて、

おまえの涙のもとであるその月を捜させよう、

そのときまで、くよくよせず待たがたい。

いかな悲しみも、いずれ愉しい酒宴に変わるだろう。』

631

彼はその場に人びとを呼びよせた。

『すぐ世界の海に船出して、その人を見つけ出し、

恋する人の望み叶えてあげるように。』

千万の災厄を踏み越えて、いざ、行け。』

632

彼は港という港に人びとを送り出した。

『姫の噂があるところ、くまなく捜せ。』

待つは楽しく、苦しみはやわらいたが、

かの人なしに安んじたのを私は恥じた。

633

ブリドンは私に玉座をすすめた。

『いままで私はまちがっていた』という。

『おまえはインドの偉大な王、

おまえのしもべにならないものがあるだろうか？』

634

そのころから、使者がぞくぞく帰ってきた。  
困難な航海も虚しかった。

彼らはなんにも見つけず、なんの話すこともなかった。  
ふたたび私の目からつきぬ涙が流れ落ちた。

635

私はブリドンにいった、『つらいこの日々、  
それをいい表わす言葉を知らない。

愛する人なしでは、昼も夜もひとしく暗闇、  
心は苦しい悲しみにとざされるばかり。』

636

姫のたよりが聞かれない上は、  
もはや止まることはできない、どうか放してくれ。』  
これを聞いて、ブリドンはさめざめと泣いた、

『私だってもうどんなよろこびも見ないだろう。』

637

大いに努めてくれたが、私を引止めることはできなかった。

彼の将兵は私の前に膝を折り、  
とりすがって泣き、私を泣かせた。

『あなたの奴隷となるほどに、どうかお見捨てなく。』

638

私はいった、『私とてけっして別れたくはない、  
だがかの人なしには私にはなんの楽しみもない。  
どうして姫をとらわれの身にしておけようか？  
せっかくのお志ながら、今はこれまで。』

639

するとブリドンはその愛馬を引いてきた。

『これはおまえのからだにふさわしい贈りもの。  
つまらぬ贈りものなどは、けっしていうまい。

640

そのしつけ、その駿足はきつとおまえの気に入るだろう。』

涙にむせびながら、ブリドンは私を見送ってきた、

ふたりはそこでキスを交し、ため息して別れた。

将兵も口には出さないが、心で泣いていた。

私たちの別れは親子の別れに似ていた。

641

姫の行方を尋ねて、私はまた旅に出た。

陸の一地も海の一水も余さなかったが、  
姫を見たという人には、ついに出会わなかった。

心は狂って、けものようになった。

642

私は考えた、へこの上旅をつづけても、意味はない。

いっせいの仲間になれば、気持も楽になるだろう！

私は従者たちとアスマートにいった、

『おまえたちをひどく苦しめて、さぞ私を怨んでいよう。』

643

今は私にかまわず、自分の身を案じてくれ、

この目からあふれる熱い涙に、そっぽ向いてくれ！』

この話を聞きおわらないうちに、彼らはいった、

『なにをおっしゃる。そんなこと聞く耳もたませぬ！』

644

あなたのほかに、どんなあるじがおりましよう、

あなたの馬の足跡から、金輪際離れることなく、

どこまでもそのごりっはなお娯楽してまいります！

薄命なお人に変ったのも運命なのですから。』

645

それを聞くと、彼らにひまを出すことはできなかったが、

私は人里を遠く離れることにきめた。

山羊や鹿のかくれ場が似合いの住居に思われた。

私はあまねく山々、谷々をめぐりはじめた。

646

私はこの、人間のではない、巨人の岩窟を見つけた。

戦いは巨人族の悲嘆に終わったが、

二人の忠義の従者を私は失った。

たまゆらの浮世はまた私にしづきを注いだ。

647

そのときから私はここにいて、死を待っている。

物狂おしく野を駆け、時に涙し、時に消えようとする、

この娘アスマートは私を見ず、やはり姫を案じている、

でも私には死のほかに出口はない。

648

姫のおもかげを美しい牝虎に見て、

私は虎の皮を愛し、それでわが服をつくった。

ため息しながら、この娘がそれを縫った、

わが剣がにぶり、おのれを刺さないと知るゆえに。

649

どんな賢者の口も姫をたたえることはできまい、

私は息ある限り失われた姫を思いつづけるだろう。

でも今はけもの仲間の暮らし、

死を祈るほかには、天に頼むものはない。』

650

タリエールはおのが顔を打った、

紅玉は琥珀こくろくに変わり、水晶は微塵こぼりにくだけた、

涙はアフタンジルのまつ毛からもあふれた、

アスマートはタリエールをなぐさめ、膝をついて祈った。

651

気がしずまると、タリエールはいった、

「私がおまえを満足させたが、自分によるこびはない、

自分がいかに地獄に墮ちたかを、私はすっかり話した。

では行け、おまえの大陽と会う時がきたのだから。」

652

アフタンジルは答えた、「別れはつらい、

別れは止めどない涙を誘うだろう。

今私も真実を語るが、ぶしつけをとがめないように。

おまえがここで死んだなら、かの君に喜びはないだろう。

653

医者いしやが病んだら、いかに彼が名医でも、

別の医者いしやを呼んで、脈をとらせるだろう。

別の医者いしやは症状、病因を語るだろう。

悩める人に適切な助言を与えうるのは第三者のみだ。

654

真心から語るわが言葉に聞き給え、

一度では足りず、百べんも耳傾け給え！

ひたすらに胸焦がすは自ら災を招くもとだ、と。

私はこれからわが炎の君に会おうと思う。

655

私はわがチナチンに会い、その愛情をたしかめ、

すべてを物語り、ふたたびここにもどるだろう。

私を信じて、望みをつないでいるように。

互いに背かないことを、互いに誓おう。

656

ここから消えないことをおまえが約束すれば、

私も、誓って、おまえを裏切ることはない、

再会の上は、おまえのために死にもし、さすらいもしよう、

この上おまえに涙させることはあるまい。」

657

タリエールはいった、「他人の私をそんなに愛し、

露と別れる鶯のように、別れを借しむのに、

なんで私がおまえを忘れていいものか。

イトスギの若木のおまえとの再会を期そう。

658

おまえがその顔を見せてくれるなら、

私は野駆けもせず、鹿にもならないだろう。

この言葉に偽りあれば、神よ、蔽罰を下し給え！

おまえがいれば、わが悲しみもうすらぐものを。」

659

こうして二人は心から誓い合った、

もう思案することはなかった。

別れのつらさでただ胸がいつぱいであった。

美しい友達はこの夜を語り明かした。

660

ふたりは共に泣き、共に涙を流した、

東が白むと、キスを交して、別れた。

タリエールの重い悲しみを、誰が計れようか？

アフタンジルも、木の間を歩きながら、涙を止めかねた。

661

アスマートはアフタンジルを見送った。

彼の前に膝をつき、手を合わせて拝み、

墓のようにしおれながら、早くもどって、と頼んだ。

彼は答えた、「おまえたちをおいて、誰を思い出そう！

662

わが家にも長居はせず、すぐもどる、

ただわが友がどこへも遠ざからないように。

もし二か月を経て戻らなければ、おまえたちは知るだろう、

私が不慮の災難にとらえられたことを。」



第29章

アフタンジル

アラビアに帰る

663

悲しみに胸しめつけられつつ、アフタンジルは出立した。  
無情の手で彼はわれとわが顔をかきむしり、  
流れる血潮をけものどもはなめた。  
早駆けして、彼は長い道のりをちぢめた。

664

やがて部隊を残しておいたところに着いた。  
その姿を見るや、将兵は大いに喜び、  
さっそくシュエルマジンに飛脚を立てた、  
「われらの苦を楽に変えるお方がお帰りました。」

665

シュエルマジンは出迎えて、抱きつき、キスした、  
うれし涙は山の斜面をうるおした。  
「おおこれは夢か、まぼろしか、  
ごぶじのお姿拝するとは、身に余るしあわせ！」

666

勇士はいんぎんに腰をかがめて、髭にひげを合わせた、  
「おまえもつつがなくて、なによりだった。」  
高官たちは頭をさげて、お祝いを述べ、  
住民は老いも若きも喜びの声をあげた。

667

彼らは主君の城の前にきた。

勇士を見ようと、町じゅうが集まった。

誇り高く、陽気な勇士は、すぐ酒宴をひらいた。

言葉にはこの日の欲楽を伝える力はない。

668

彼はよそ国で見聞きしたことをシエルマジンに話した、

太陽に似た勇士に出会った次第も。

涙をこらえるため、臉を閉じて話した。

「彼なしでは、宮殿もあばらやも、同じことだろう。」

669

シエルマジンは領地の情報を伝えた、

「お留守のことは誰にも知られず、ご命令を守りました。」

その夜はアフタンジルはそこに休んだが、

しらじら明けとともにもう馬にまたがっていた。

670

彼は酒宴にふけらず、休息にくつろがなかった。

すでにシエルマジンが王のもとへ報告に先駆けしていた。

彼は十日の道を三日でとばした。

すこしも早く大陽にまがちかの姫に会いたかった。

671

彼は使者にいませた、「畏れながら、わが君！

つつしんで、ありのままを申し上げたいと存じます。

勇士の消息について、お心悩ませなさいましたが、

今私はそれを知り、よろこんでお知らせに上がります。」

672

誇り高く、気性すぐれたロステワン王に

シエルマジンは委細を物語った、

「かの勇士のことはアフタンジルから申上げるでしょう。」

王はいった。「わが望みが叶うて、うれしい限りだ。」

673

シエルマジンはチナチンに告げた、

「快い知らせをもって、アフタンジルが現われるはず。」

姫は太陽よりもっと強い光を放った、

そして彼とその一族に新しい服を贈った。

674

王は馬に乗って出迎えた。

相手もこのような出合いを予期していた。

心躍らせて、ひとりほひとりに駆け向かった。

重臣たちは酔ったようになった。



675

近づくと、勇士は下馬して、頭をさげた。

うれしさいっぱいに、王は彼にキスした。

ふたりははがらかに王宮に向かった。

集まった人びとすべて、勇士の帰還を喜んだ。

676

獅子の中の獅子は太陽の中の太陽に一礼した。

バラ匂う水晶は、しとやかさに、さらに美しさを増した。

その顔は天上の光よりもさらに明るく輝いた。

地上より天上の宮殿こそ、その住居にふさわしかったらう。

677

その日、ゆたかなうたげがひらかれた、

わが子を見るように、王は勇士に目を細めていた。

ふたりとも美しかった——冬の雪とバラの露のように。

ふたりは惜しみなく贈りものを分け与えた。

678

うたげは終り、客たちは家路に散った。

王は重臣たちを去らせず、勇士を前において、

あれこれ問いただし、アフタンジルは経験したこと、

未知の人について見聞きしたことを物語った。

679

「その人については、ため息なしではお話できませんぬ。

その顔のりっぱなること、太陽のごとく、

一度見た人は、以前に見たものすべてを忘れるほどなのに、

それは悲しいことに、雑草の中に枯れていくバラ！」

680

無残な運命が人に悲しみを強いるとき、

葦はとげある草に、水晶はサフラン色に変わる。

それを思い出して、アフタンジルは頬を涙でぬらし、

タリエールから聞いた事の次第をつぶさに物語った。

681

「巨人族を破って、彼はその岩窟を住居に変え、

彼の恋人の侍女なる娘がまめまめしく仕えています。

いつも虎の皮を着ていますが、それは金襴きんらん織子オリにまさり、

淫世を離れてなお日毎に新しい炎に身を焼かれています。」

282

アフタンジルがかの明るい太陽を見たいきさつを語り、

タリエールの不幸についてのその物語を結んだとき、

入びとはバラをたたえ、その手腕をたたえた、

「それこそはどんな手柄にもまさる手柄です！」

683

その評判を耳にして、チナチンはよろこんだ。  
アフタンジルも心弾んで、みんなと杯を交した。

館に帰ると、姫の侍女が待っていて、

お呼びです、との命令を伝えた。彼はよろこんだ。

684

勇士はいそいそ館を出た。

愛し愛される二つの心は波立った。

真珠の光を帯びて、勇士は王女と会ったが、

異国のさすらいに顔はやつれていて。

685

太陽は嬉々として玉座にかがやき、

すらりとした楽園のイトスギをユーフラテスの川波が洗い、

水晶はゆたかな黒髪と月の肩に飾られていた。

彼女の讃歌ができるのはアテナイの賢者たちの合唱だけ！

686

王女は胸ときめかず勇士を招いた。

ふたりはしあわせの思いにあふれて、

流れるような甘い響の言葉を交した。王女は聞いた、

「あの方を見つけるには、ご苦労なさったのでしょね。」

687

彼は答えた、「この世で目的を達するつもりなら、

そのための苦しみなど、顧慮すべきではありませんぬ。

私は世界の波に洗われた木を見つけれ、

バラのような、でもいまは蒼ざめた顔を見つけれました。

688

彼は意志を失い、望みを失っていました。

『私は水晶と、それに連なる七宝を失った』というのです。

彼同様、身を焼く炎を感じて、私も悲しくなりました。」

ここでもアフタンジルはタリエールの語った話を繰返した。

689

彼は搜索しながら経験した苦難について、

神のみちびぎで彼を見出したてんまつについて物語った。

「世をきらい、人びとをけものと見て、

彼はひとり、狂気のていで野山をさまざましているのです。

690

あなたの臉に浮かぶように、彼を描くことができようか？

今彼を見れば、おそらく誰も好きにはなれないでしょう。

その目から、太陽に眩んだように、涙が出るのです。

バラはサフランとなり、今や葦に変わりつつあります。」

691

見たり聞いたりしたことを、彼はくわしく物語った、

「虎のように、彼は岩窟を住居とし、

侍女が仕えて、彼を上げまし、なぐさめています。」

いや、運命は世界の全住民に涙を流させるのか！

692

聞き終って、わが望みの遂げられたことを知ると、

姫の顔は満月のように輝いた。

「その人が喜ぶようなことを、何かしてあげられますか？

その人の痛手をなおすようなお薬が何かありますか？」

693

勇士は答えた、「そう手つとり早くは参りませぬ。

彼は私のために水火も辞せずと約束し、

私は再び立返って、彼の力になると誓いました。

友のために友は困難を避けるべきではありませんぬ。

694

友は互いの心のために心を投げ出すべきであり、

愛は友情の道となり、橋とならねばなりませんぬ。

悲しみもまた、ミジヌールは互いの悲しみと受取るべきで、

従って私にとって、彼なき喜びは、喜びではないのです！」

695

姫はいった、「わが心の願いはかなえられました。

第一に、消え失せた人を見つけて、そなたはぶじに戻り、

第二に、私の植えつけた愛は、そなたの中で成長しました。

私は今まで燃えていたわが心に、慰めを見出したのです。

696

たまゆらのこの世は人それぞれにお天気のようなもの、

日が照るかと思えば、雷の鳴り渡るときもある。

久しく悲しみが私をしめつけていたが、今は喜びに変わった。

この世が喜びに満ちたら誰に悲しむことがありませんか？

697

そなたはりっぱな騎士、誓いを破ってはなりませんぬ。

友への愛情はどこまでも立て通し、

未知をひらいて、回復に手助けしてあげるべきです。

とはいえ、わが太陽が隠れて、私はどうなるでしょう？」

698

勇士は答えた、「七難にあらで、八難と教えましょう。

暖めようと氷に息を吹きかけても、せんないこと、

手がとどかぬ太陽にキスしようとしても、むだなこと。

お身と耐えられる悲しみも、離れては幾千倍となる。

691

見たり聞いたりしたことを、彼はくわしく物語った、

「虎のように、彼は岩窟を住居とし、

侍女が仕えて、彼を上げまし、なぐさめています。」

いや、運命は世界の全住民に涙を流させるのか！

692

聞き終って、わが望みの遂げられたことを知ると、

姫の顔は満月のように輝いた。

「その人が喜ぶようなことを、何かしてあげられますか？

その人の痛手をなおすようなお薬が何かありますか？」

693

勇士は答えた、「そう手つとり早くは参りませぬ。

彼は私のために氷火も辞せずと約束し、

私は再び立返って、彼の力になると誓いました。

友のために友は困難を避けるべきではありませんぬ。

694

友は互いの心のために心を投げ出すべきであり、

愛は友情の道となり、橋とならねばなりませんぬ。

悲しみもまた、ミジヌールは互いの悲しみと受取るべきで、  
従って私にとって、彼なき喜びは、喜びではないのです！」

695

姫はいった、「わが心の願いはかなえられました。

第一に、消え失せた人を見つけて、そなたはぶじに戻り、

第二に、私の植えつけた愛は、そなたの中で成長しました。

私は今まで燃えていたわが心に、慰めを見出したのです。

696

たまゆらのこの世は人それぞれにお天気のようなもの、

日が照るかと思えば、雷の鳴り渡るときもある。

久しく悲しみが私をしめつけていたが、今は喜びに変わった。

この世が喜びに満ちたら誰に悲しむことがありませんか？

697

そなたははりっぱな騎士、誓いを破ってはなりませんぬ。

友への愛情はどこまでも立て通し、

未知をひらいて、回復に手助けしてあげるべきです。

とはいえ、わが太陽が隠れて、私はどうなるでしょう？」

698

勇士は答えた、「七難にあらで、八難と教えましょう。

暖めようと氷に息を吹きかけても、せんないこと、

手ごとどかぬ太陽にキスしようとしても、むだなこと。  
お身と耐えられる悲しみも、離れては幾千倍となる。

炎に焼かれて、さすらいの野になおぶじでいられようか？

わが胸は矢の絶好の的となり、

わが命は三分の一に縮まるでしょう。

苦難を逃れる隠れ家はこの世にありません。

700

姫のお言葉はよくわかりました。

バラは正にとげの中、私はとげに突き刺されます。

だが、姫は私にとって太陽です、

生きる望みのしるしとして、何かかたみを賜りたい。」

701

心やさしい騎士は情にあふれる言葉で頼み、

太陽の熱のなかで、なお語らいはつづけられた。

姫は頼みを聞きいれて、真珠を彼に与えた。

ふたりの喜びの高まりには、神も満足なさったろう！

702

紅玉や七宝と並んだ黒琥珀は人をうつとりさせ、

イトスギと並んだポプラは庭園を引き立てる。

見る人に喜びをもたらすものは見えない人を悲しみに誘う。

別離は心を傷つけ、涙で目はふさがれる。

ふたりは互いに見交わして、大きな喜びを味わったが、

やがて騎士ははげしく震える心抱いて、姫と別れた。

海よりもなおたくさんの血の涙が流れた。

彼は呟いた、「私の血では世界は満たされないのだろう。」

704

彼はわれとわが胸を打って、青痣を残した。

なぜなら、恋する身にとって、別離はただ涙、

黒雲が目をさえぎれば、地上にかげが落ち、

ふたたびたそがれに胸がとざされるのだもの。

705

血と涙がまじり合って、頬を伝わった。彼はいった、

「事をなし遂げるには、命を捧げてもなお足りないという。

でもあの黒いまつ毛がなぜわが心を刺し貫くのか？

姫なしでは、世界よ、おまえは喜びとは縁がない。」

706

エデンの園のイトスギに育てられたとはいえ、

今はたまゆらの浮世が私を槍で刺し貫き、

消えない炎の網でわが心をくるむのだ。今にして知る、

この世の仕事は気ままで、無意味なものに過ぎないと。」

707

騎士は涙に暮れて、身ぶるいした。

深いため息とうめきからだはよろけた。

別れの悲しさは窮まる<sup>きまつ</sup>ところを知らず、

運命は、経帷子<sup>きょういす</sup>に変わりつつある

708

館に帰っても、なお泣きおめいていたが、

心のなかでは、恋する人から離れていない。

霜に打たれた草のように、蒼ざめた顔。

口が沈むと、かくも早くバラは色褪せるものか！

709

「人の心は欲深く、あくことを知らぬ、

よろこびを求めて、時にどんな不運にも耐える心、

心は盲目となり、情欲のとりことなる、

どんな王者も、死も、それを意のままにはできはしない。」

710

強くわが心にそういい聞かせると、

彼は王女が身につけていた真珠をつかんだ。

それはブレスレットで、彼女の歯に似ていた、

彼はそれを唇におし当てて、キスした。

711

夜が明けると、宮廷へお召しの使者がきた。

騎士は一睡もせず、だが元氣よく、出仕した。

押し合いへし合い、物見高い人びとが並んでいた。

王は狩りの支度、鼓手もラッパ手も揃っていた。

712

王は出馬した。その光景を伝えるには言葉が足りない。

太鼓のひびきのため、一語も聞きとれなかった。

タカどもは日をかげらし、犬どもは駆けまわり、

この日、野はえものの血に染まった。

713

重臣、諸侯、将兵にかこまれて、

彼らは心暗ればれと獵場からもどった。

広間は美しく飾られて、一同を迎えた。

堅琴は堅琴と鳴り交し、合唱の歌声は高くあがった。

714

騎士は王と並んで、その問いに答えていた。

ルビーのように唇は光り、稲妻のように歯はきらめいた。

高官たちは近くにすわって、耳傾けていたが、

タリエールの名が口から出ないことはなかった。

715

野を涙でうるおしながら、騎士はわが家にもどった。

またしても姫の愛情が目の前を駆けめぐるた。

彼は起きたり、寝たり、いっかな眠れない。

がまんを説いて、心を落着かせうる人がいるだろうか！

716

横たわって考える、へ私は心に喜びを与えられない。

私はあなたと別れるのだから、エデンの園の葦よ。

もし再会すれば幸福だが、再会しなければ苦難の重荷。

うつつには叶わずとも、せめて夢になど顔を見せ給え。▽

717

身もだえして、嘆き悲しみ、

またおのが心にかき口説く、へ忍耐は知恵の泉とか。

耐え得ねばどうすべきか？　なんで悲しみを和らげるか？

強く不幸に立向かうには、神の加護を頼むしかない。▽

718

また繰返す、へ心よ、おまえはそんなに死にあこがれるが、

生に耐え、その為に己れを犠牲にする方がましではないか。

ただし、おまえが炎に包まれていると人に寛あやまられるでない、

愛は秘密に———それこそが愛の第一の義務ではないか！▽

王から暇を賜わるよう  
アフタンジルは侍従長に頼む

719

夜が明けると、騎士は館を後にした。

「わが恋を人にさとられぬように」と、

心ながまんを呼びかける、へしっかりするんだ！

月のように光を散らして、侍従長の館に馬を駆る。

720

侍従長は出迎えた、「館が明るくなりました、

今日はきつといいことがあるでしょう。」

腰をかがめて、お世辞をいった。

「望みのお客がくれば、あるじに喜びがくるものですよ。」

721

彼はまめまめしく騎士の下馬を手伝い、

その足もとにハタイのじゅうたんを敷いた。

騎士は太陽のように館を照らした。

一同はいった、「西風がバラの香りを運んできたような。」

722

騎士はすわった。人びとは胸ときめかして彼を眺め、

むしろしびれるのが光栄だとさえ思った。

ため息すること幾たびか、うなること一度ならず。

だが侍従長の命令で、彼らは散り退いた。

723

騎士はこの機会を待っていた。侍従長に向かって、

いった、「城内のことであなたにできないことはない、

王は何事もあなたの意見に聞き、それに従う。

どうかわが苦しみを癒す医者になってはくれまいか。

724

かの勇士タリエルの悲しみは、私にとって熱火の苦しみ、

会えればよし、さもなくば生きてはいられない。

彼は私のために一命を惜しまない、

この無欲寛大な友をどうして愛さずいられようか。



725

再会の望みは、網あみのように、わが心からみ、その心はつなぎの網あみでかしくに残されている。

彼こそは神に創られた太陽、

またアスマートは親身の姉妹よりもなお慕わしい人。

726

別れるとき、私はかたく誓った、

へ敵もその目を疑うほどに、私はかならずもどって、

この先暗くならぬよう、おまえの光を捜して進ぜる」と。

今その時は近づいて、私を熱い火が焼いている。

727

この話にはほんのすこしの誇張もない。

私を待ちおわせなかったら、彼の命はおぼつかない。

私は誓いを破ることも、狂気の人を見捨てることもできない。

背信の徒には生まれのあったためしはない。

728

登城して、私の話をロステワン王に伝えて下さい、

あなたは城内一のきけもの、あなたのほかに頼む人はない。

王がお暇賜わらば、すぐ出発できるが、でなければ一大事、

心に火傷の残らぬよう、私に手をかして下さい。

729

王には私に代ってこう申上げるよう、へ畏れながらわが君、ご威光の下に、私私はこのように震えております。

さりながら、あのイトスギの騎士に、私は火をつけられ、

ふせぐ間もなく、たちまち心を奪われました。

730

ですから、今では、彼なしには生きられませぬ。

狂人に慰めはないので、私は彼にわが分別を渡しました。

私が役に立つならば、まず称えられるのは、わが君です。

助けることに失敗しても、誓いを破らねば心は安らぎます。

731

いとまの願いにお怒りなく、お悲しみもなきように。

神の御意に叶うことを、私ともどもなされますように。

勝利にめぐまれば、私は帰宅できますよう。万一、

帰らなくても、お国が永遠に安泰でありますように！」

732

騎士はさらにつけ加えた、「これが要領です、

じゃまの入らぬうち、早く王にお目にかかり、

ぜひともお暇賜わるよう、お力ぞえして下さい。

そのお礼には、ここに十萬金。」

\* 私-アフタンジル

733 侍従長はにこりとした。「お金はもとに納めなさい。  
おまえの厚い信頼だけで、私は満足。

今聞いたことを、そのまま王に伝えようものなら、  
王はまちがいなく私に褒美を下さるだろうから。

734 つまり、その場を去らせず、お手打は知れたこと！  
とすれば、そのお金より、私に必要なのはすこしの墓地。

だが、人間にいのちよりたいせつなものがあるうか。  
誰になんといわれようと、私はひと言もしゃべる気はない。

735 いのちの果てに道はなく、なんでいのちを棄てるのか？  
へそんな話は聞く耳持たぬ。気ががいの世迷い言、

なんで判断できなかつたか！〜と王は私を斬るだろう。  
生は死にまさる——これが私の座右の銘。

736 仮に王がお假賜つても、軍の目は逃れられまい。  
軍が太陽の光を見落とすようなことがあろうか？

おまえが立去れば、敵は勢をえて、高みから見下すだろう。  
そんなことで小鳥をタカに化けさせてはなるまい！」

737 騎士は涙にくれた。「ならば私は胸に刃を突き刺すしかない。  
あなたは、たぶん、愛とは何かをご存じないのだろう。

愛する人に会い、誓いの言葉を聞いたこともないのだから。  
でなければ、別離で私がどうなるか、わからぬはずはない。

738 太陽はまわるが、なんのためにまわるのか？  
それを引止めたなら、冬を暖かくすることもできよう。

楽しみも、悲しみも、私のことは私がよく知っている。  
つまらぬ人たちの言葉はとかく判断を誤らせる。

739 王やその軍隊に、今の私がなんの役に立つだろう、  
分別を失って、涙にくれるだけのこの私が。

むしろ行って、誓いの試練に身をまかせがまし、  
およそ人の世の悲しみで、かの騎士の知らぬ悲しみはない。

740 あなたの言葉でなぐさめられるような私の心だろうか？  
今の私には、鉄も堅い岩ではなく、蠟に変るだろう。

ゲオンの流れほどに涙しても、彼の涙の代りにはならない。  
私を助けて、どんな感謝をも求めるがいい。

\*ゲオン——ナイル川の古称

741

ならぬなら、夜盗のように、私はひそかに脱出します、彼の期待に添って、わが心を火に投ずるために。

あなたが役に立つかぎり、王はあなたに手出しはしない。どんなことが起ころうと、私を憐み力をかして下さい！」

742

侍従長はいった、「おまえの炎は私にも燃え移った、これ以上おまえの涙を見るに忍びない。

言葉はときに罪をつくるが、時には沈黙にまざる。申上げましょう、死ねばそれまで、惜しくはない。」

743

侍従長は支度して、すぐ登城した。

見ると、王は正装して、太陽のように輝いている。びっくりして、よくない知らせは口から出ない。

悪い予感にもじもじして、立ちすくんだ。

744

王はなにやら取乱した侍従長のようすを見て、

訊いた、「どうした、そんな浮かぬ顔をして？」

彼は答えた、「なんと申したらよいか、胸潰れる思いです、いやな知らせをお耳に入れば、お手打ちは覚悟の前。

745

その懸念も、わが悲しみにはおよばず、

使節は心臆してはならぬと知りながら、私は臆しています。

今アフタンジルはお暇賜わるよう願っています、

かの勇士なしには、生きていられないと申すのです。」

746

おずおずと彼は聞いた通りを王に物語り、

こう結んだ、「これで事情はおわかりになったでしょう、

いかに彼は生の重荷に苦しみ、いかに多く涙を流したか！

わが君が忽ち私を手打になされようと、せんないこと。」

747

聞き終えて、王は烈火のように怒った。

まっさおになり、見るも恐ろしい形相に変わった。

王はきめつけた、「よくもそんな話を、たわけめ！

ばかな奴はいつもばかなことを知りたがる！

748

まるでうれしい便りのように、おまえはしゃべった。

鬨討ちくらうよりも、もつと気色が悪い。

たわけめ！ その舌の根を引抜いてくれようか、

よくもそれで侍従長の大役がつとまるものだ！

749 主君の耳にいやなことを入れない心構えであるべきなのに、  
將もないたわごとを自分から口外する。

しゃべるまえに、なぜ私の耳に栓をつめなかったのか？  
手打ちにすれば、その血がしみて私のうなじに残るだろう。

750 もしおまえがアフタンジルの使者でなかったら、  
まちがいでなく、おまえの首は胴から切離されたるう。

行け、消え失せろ！ そそっかしいそこつ者め！  
言葉も、人間も、仕事も、まるでかたなした！

751 いすをつかんで投げつけたが、壁に当たって四散した。  
ねらいは外れたが、侍従長には脳天唐竹割りの感。  
「ボブラの若木が消えるなどと二度と口にするでない！」  
熱い涙は侍従長の頬を焼いた。

752 あわれ、侍従長は一言も発せず引下がり、  
心に深手をうけて、狐のようにはい出した、  
はじめの勢い今はなく、苦りきったようすをして。  
残忍な敵どうしでも、これほど人を害することはあるまい。

753 眩いた、へいや全くひどい目に会った、

なんで分別がかすみ、あんなまちがいをしでかしたのか！  
主君にあんな話をもち出す向う見すがどこに、  
私同様、やはり不幸におなりなされるはずだのに。

754 げっそりして、わが身の不運を嘆きながら、  
侍従長は元氣なくアフタンジルにいった、

「あんまりうれしくて、お礼の言葉もないくらいだ、  
この頭は名譽を失って、恥でいっぱいになりましたぞ。」

755 涙も乾かないまま、彼はおどけて例のわいろを求めた、  
こんな愁嘆場にもおどけるとは、なかなかのしたたか者。  
「約束のものを出さないと、相手にもされぬぞ、  
それ、地獄の沙汰も金次第というではないか。

756 どんなにお叱りを蒙ったか、口には言えない。  
うかつ者、脳足らず、気がいい、大たわけ、  
分別をなくした人間の屑……  
お手打ちなさらなかったは、神の忍耐のご加護からだろう。

757

もとよりそれは予期しなかったことではない、

お怒りは前もって承知のことだけに、私はいっせうつらい。

神意のご不興免れることは、誰にもできぬこと。

おまえのために命をすてるのは、本望だが。」

758

騎士は答えた、「どのみち私は出立せぬわけにはいかぬ。

バラがしほめば、鶯は死ぬ、

鶯は露の玉をさがして、ここかしこさ迷うているが、

見つからなかつたら、なんでおのが心をなぐさめるか？

759

彼なしには私は寝起きもままならぬ、

彼とともにけもののようにさ迷うことこそ好ましい。

そんな私を、なんで王は敵と戦わせようとなさるのか？

不満の臣を抱えるより、誰も抱えぬ方がましではないか。

760

いかに王がお怒りでも、重ねて申上げれば、

どんなに私が燃えているか、わかって頂けるやもしれぬ。

それでもお暇賜われねば、ひそかに脱出するばかり、

道に倒れば、わが生涯もそれまでのこと！」

761

話が終ると、侍従長はご馳走をふるまい、

たくさんの贈りものを客に捧げた。

彼のつけ人たちにも分け与え、老いも若きも喜んだ。

日が沈むころ、騎士はわが館へもどった。

762

いつものように気前よく、十万金をそろえ、

金糸のみごとな織物三百反を重ね、

ルビー、サファイア、色とりどりの宝石六十を選んで、

彼はこれを侍従長に贈った。

763

使者にいわせる口上は、「これはほんの心ばかりの品、

このご恩になんて報いることができましょう？

もし生き残ったら、あなたのためにこの一命を捧げ、

愛をもって愛に答えるつもりです。」

764

アフタンジルの振舞を、どうたたえたらいいものか！

彼こそそのつとめにふさわしい人、

助けを必要とする人に、ありったけの心くばり、

人が不幸あるときは、そういう友こそ貴重だろう。

アフタンジルと

シェルマジンの相談

765

光の君はシェルマジンにいう、

「今日はいれしい希望の日、

おまえの忠節がひらめく日。」

説者はすでに、ふたりの厚い友情をご存じのはず。

766

「王は暇をくれず、私の話さえ聞こうとはしなかった、

王は誰のお蔭で私が生きているかを知らない、

彼なしでは国の内外いずれでも生きてはいられぬものを。

はたして神はこの世の邪悪な罪に寛大であるうか？

767

なんのためらいもなく、私は彼を見ずてぬ覚悟。

神をけがすのは裏切り者にきまつてる。

友を見なければ、心は悲しみにもだえるばかり。

しかも彼は誰もよせつけず、人目を避けているではないか。

768

今わが友につくすには、三つの方法がある。

別離を語らず、共に暮すこと——これが一つ、

惜しみなく、心から与えること——これが第二、

第三に、いざというとき、すぐ援助に駆けつけること。

769

いや、なんだつてくどくどしゃべつてるのか？

今ひそかな失踪こそ心の傷の薬ではないか。

おまえは私のいうことをよく耳にとめて、

いつつけられたとおり、しかとやってくれ。

770

まず今日からは王に直接仕える気持になり、

おまえの美徳をありつたけお目にかけることだ。

つぎにわが館を守り、わが将兵を指揮して、

今までに見せてきたものを、もっと増大させることだ。

771

国境をよく見はり、自分の力をたいせつにし、  
忠節には賞を惜しまず、裏切りには死を！

ぶじに帰ってきたときは、存分におまえに報いるつもり、  
かけた情なさけはけっして消えるものではない。」

772

これを聞いて、シエルマジンは熱い涙を流した。

「ひとり残るのは、恐ろしくはありませぬ、

ですが、たそがれが胸に迫るのを、どうしましょう？

ぜひお伴させて下さい、きつとお役に立つでしょう。

773

ひとりですんなりに長い旅に出られるとは、

またあるじの不幸に家来が知らぬ顔でいようとは、

そんな話はどこでも聞いたことはありませんぬ！」

勇士は答えた、「いくら口説いても、供はかなわぬ！」

774

おまえの情をゆめ疑ってはいないが、

今はそのときではない、周囲はすべて私には敵、

おまえのほかは、留守を任せられる者がどこにいるか？

どのみち、つれてはいかぬのだから、気づかいは無駄だ。

775

仮に私がミジヌール、恋に狂った男とすれば、

血にまみれて、ひとり野をさ迷うも、ふしぎではなからう。

さすらい——それは家で老い朽ちないミジヌールの運命、

この世はそうしたものだ、疑いもなく！

776

ここから遠く離れても、私を忘れず、愛しておくれ。

私は敵を恐れないし、自分のしまつは自分でつける。

悲しみに打ちひしがれないのが武人のたしなみ、

恥ずべきことに平気な男こそ憎らしい。

777

この世は熟し過ぎた胡瓜きゅうりではあるまい。

それなら友情に死するのは私のよろこびでもあらう。

陽の君のお許しがある上は、何のためらうことがあるう！

姫を見ずてる以上、わが家を見ずてるが何だらう！

778

おまえに私は王にあてた遺書を渡す、

親身の人への配慮を王に頼むのは当然のこと。

私が死んでも、後を追うような愚かなまねはするな。

ただその目から涙を流すだけに止めるがよい。」



## 第32章

### ロステワン王にあてた アフタンジルの遺書

781

つまり嘘はあらゆる不幸のもとでありましょう、  
生みの兄弟よりもお愛する友を裏切れましょうか？  
学んだ知識、哲人の教えを無駄にできませんか？  
私たちが学ぶは、高い秩序をもたらす為ではありませんか？

782

ご存じのように、使徒たちも愛について書いています。  
いかに彼らは愛を讃美しているか、

783

《愛はわれらを高める》と——それは鈴のように響きます。  
よもやわが君のお耳に、それが届かぬはずはございません。  
私を生み、敵を裁く力を私に与えた人、  
目に見えぬ力で地上の存在を支えている人、  
国ぐにの境界を定めた人は、神のように、不死となり、  
忽ち一つを百に、百を一に変えることができます。

779

彼は心のなやみ打ちあける遺書をしたためた。  
《捜さねばならぬその人を捜しに私は旅立ちます。

780

私を炎にくるんだその人に会わずにはいられないからです。  
わが君、神に免じてお許しの上、旅路の幸をお祈り下さい。  
いずれはわが罪をおとがめなさらぬことと存じます。  
分別ある身が愛する友を見ずてはありませぬ。  
ブラトンも教えているではございませぬか——  
《嘘と偽善はまずからだを、次に魂を毒する》と。



784

神に好ましくないものは、世に現われませぬ。

陽の光仰がぬとき、蓮は色あせ、バラはしほみ、

美しいものは、目が見分けて喜ぶように創られたのです。

友と別れていて、なんで安閑と暮せましようか？

785

いかにお怒りが激しくとも、ご命令には従えませぬ。

心がそこにはない以上、従いたくとも、できないのです。

旅立ちにはわが身焼く火を消す薬。

いずこにいても同じなら、せめて気が向くままにこそ！

786

悲嘆の涙はわが君のおんためになりませぬ。

天命は避けられない道理、

男ならどんな悲しみにも耐えるべきです。

生きとし生くる身として神意にそむくことはできないはず。

787

されば私を神意の下になげうたれませ。

無事に帰れば、心はもはや灰ではないはずです。

よろこびにあふれて、ふたたびわが君を仰ぎ、

タリエールに役立ったものが、わが名利になるでしょう。

788

この考えがお気に召さねば、私に罰を賜わります。

さりながら、わが旅立ちがご不興と悲しみを招こうとも、

私はタリエールを欺き、卑怯者になることはできませぬ、

あの世で顔を合わせた時、なんのいいわけが立つでしょう。

789

友を忘れないことは、小さくない宝です。

恥知らずの嘘つきこそ、とがめられるべきです。

いや、光まばゆいかの領主を欺くことはできませぬ。

それは出陣に遅れるしれものよりもなお悪いでしょう。

790

戦場で洗面つくる男よりもなお悪いでしょう。

死の恐怖におどろき震えて、しりごみするような

臆病者のどこに、紡ぎ女に勝るところがありますか？

どんな財宝よりも、名譽をこそ手に入れたきもの。

791

狭い岩の道だろうと、死を遮る道はありません。

死は強きも弱きをも区別せず、

いずれは老いも若きも一つ土に帰るはず、

恥じ多き生よりも、名譽ある死をこそ選びたきもの。

792

畏れながら、あえて申し上げます、

今このときも死を待たない人はまちがっている、

それは昼夜を問わず、人を選ばず、やってくるのだと！

生きてお目にかかれなくとも、私はあの世にいるでしょう。

793

万物を滅ぼすたまゆらの世界が、また私をも滅ぼすなら、  
さすらい人はさすらいに死んで、親の涙も知らず、

身内や家臣の手で経帷子を着せられぬことでしょう。

そのときには慈悲深いお心で私を憐んで下さるように。

794

はかり知れない私の財宝は数えたこともありませぬが、  
そのすべてを貧しい人に分け与え、奴隷には自由を、  
みなし児には富を、めぐんでやって下さいますよう。

彼らは私に感謝し、私の菩提を吊ってくれるでしょう。

795

宝のもちぐされというものもございましょう、

一部を養老施設に、一部を橋づくりにあてて下さい。

私の財産の配分に、けちけちなさらぬように。

君の他に、わが身焼く火を消して下さる方はいないのです。

796

私の便りはこれが最後でしょう。

ですから、お気に召さぬことも真心もて申し上げます。

真心にはどんな悪魔の企みも、かなわぬはず、

お許し賜わり、私の後生をお祈り下さい。

797

特に、忠義の家臣シエルマジンのことを願上げます。

この年は彼には悲しみつきぬ年、

あるじに代り、よろしくなぐさめてやって下さい。

その目から、血まじりの涙がこぼれませぬように。

798

わが手でしたためたこの遺書を終ります。

さらば、わが君、狂った心抱いて、私は立ち去ります！

おなげきなく、喪服も着用なさいませぬように。

敵どもを畏怖させつつ、お健やかにあらせられますよう！

799

書き終ると、彼はこの遺書をシエルマジンに渡した。

「ありのままをくわしく王に伝えてくれ、

こういう任務におまえにまさる者はいないのだから。」

シエルマジンを抱いて、血の色の涙を流した。



800

彼は祈った、「神よ、天と地の主よ、  
苦を賜わり、業を授け、

知りえず、表現しえざる大権の主よ、

われに熱情を与え給え、神よ、熱情の主よ。

801

大地に君臨し、高山を支配する主に、われは祈る、  
愛は主に創られ、主はその法則を敷きたれど、

この世はわれをわが美しき太陽より引離せり。

わがために培われたる愛を引裂き給うことなかれ。

### 第33章

## アフタンジルの祈り

802

神よ、われには主のほかは何ものもなし、  
わが旅路のつづく限り、われ主の加護を祈る。

海のあらしから、闇の悪鬼から、われを護り給え。

ぶじに生き永らえし上は、供物そなえ、主を祭らむ。」

803

祈り終ると、彼は馬にまたがり、ひそかに城門をくぐって、  
シエルマジンを後に引返させた。

家臣は泣いておのが胸を打ち、血は岩の上にはとぼしかった。

あるじを失って、召使になんのしあわせがあるう！



第34章

王はアフタンジルの  
秘密の脱出を知る

804 話変って、こちらはロステワン王、  
心おたやかならぬまま、その日は接見を行わず、  
夜明けとともに、不興げに起きあがり、  
使者を出して、まさにおな侍従長を呼びつけた。

805 おそるおそる伺候する侍従長を見て、  
王はいった、「きのうのおまえの話を私は忘れた、  
ただむやみに腹が立ち、一向に落着かないのだ、  
忠義一途のおまえを叱りとばしたりして。」

806 たしかアフタンジルがどうかいう話であったな。  
ことわざにも「怒りは悲しみのわな」とある。  
腹を立てるより、ものごとの判断が先だ。  
ではもう一度、その件を話してはくれまいか。」

807 侍従長はきのうの話をくりかえした。  
聞き終ると、王は短く答えた、  
「おまえを正気の人間とすれば、私はレビだろ<sup>\*</sup>う、  
もうこの話はするな、さもないとその顔を二度と見ぬぞ！」

\*レビ—ヤコブとレアの第三子、妹の恥をそそぐため、シケムびとに暴虐無  
残の復讐をし、ヤコブの歌の中でのろわれた（旧約、創世紀29、34、49章）。

808

侍従長はさがって、アフタンジルを獲した。  
召使たちは涙ながらに彼の失跡を伝えた。

侍従長は呟いた、「あの雷を思えば、もう御殿には上がれぬ、それにしても復命する勇士には気の毒な。」

809

待ちきれないで、王はふたたび使者を出す。

侍従長はもとより、王に答えられる勇士はひとりもない。

王の疑いは深まり、悲しみは増す。

「さては立去ったか、一人で百人をあやなす教え子は！」

810

うなだれて、思い沈んでいたが、

やがてため息し、首をあげて、側近に命じた。

「あの腰抜けを呼びだして、すっかり話させろ！」

色あおざめ、恐怖にふるえて侍従長は御殿にもどった。

811

彼はしおしおとまた王の前に出た。

王は聞いた、「すると太陽は落ちたというんだな？」

侍従長はアフタンジルの失踪の次第を述べた。

「日はもう照らず、晴れた空はなくなりました！」

812

再びこれを聞いて、王は思わず悲鳴をあげ、泣き崩れた。「わが子よ、もうおまえに会えぬとは！」

彼は髭といわず、顔といわず、かきむしった。

「おまえはどこへ行った、光の柱はどこに隠れた？」

813

だが首が胴にのっている限り、おまえはひとりではない。

ただ私はどうなるのだ、闇の色濃いこの住居で。

おまえに見すてられて、私こそ孤独の淵に沈み、

おまえに再会せぬ限り、この苦しみのほけ口はない。

814

狩から帰るおまえを見るのはいつの日か？

球戯の後も、その美しいからだを見られないだろうし、

魅惑の声も聞かれないだろう。

おまえなしでは、この玉座も、この宮殿も、すべて虚しい。

815

いかに遠くさ迷うとも、飢えはおまえを倒さぬだろう、

弓と矢がおまえを養うだろうから。

神も憐んで、おまえの悲しみを軽くして下さるだろう。

だが、おまえに万一のことあらば、誰が私に報いるのだ？」

悲報はあまねく伝わり、人びとの大群が集まった、  
廷臣たちはあご鬚をつかんで立現われ、

みんなそれを引抜いた。われとわが頭を打つ音が響いた。

口ぐちにいった、「太陽に背かれて、われらは闇だ！」

817

高官たちを見ると、王はため息まじりにいった、

「どうやら私たちはわれらが太陽に見放されたようだ。

いったい私たちは彼にどんな悪いことをしたのだろうか？

彼が指揮した部隊を、誰が指揮することができただろう？」

818

みんなは声をあげて泣いた。ややあって、王は命じた、

「ひとりで立去ったのか、部隊をつれてか、調べてこい。」

そこへシェルマジンがおそるおそるはいってきて、

遺書をわたした。目を泣きはらしていた。

「私はこの遺書のあるじの寝所で見つけました。

召使たちが髪をかきむしって、泣いていました。

あるじは老いも若きもつれず、ただひとり立去ったのです。

生きて甲斐なきこの身、お手打も、お恨みには存じませぬ。」

820

遺書を読んで、一同はまた涙にくれた。やがて、

王は命じた、「わが軍勢にきらびやかな物の具を禁じ、

貧者、孤児、寡婦に彼の無事を祈らしめよ。

おそらく神も彼の旅路をお護りなさるであらう。」



## 第35章

### タリエールと再会するための アフタンジルの旅立ち

821

太陽から遠ざかると、月は一段と光を増すが、近づけば光をかき消されるゆえ、つい近づきたい。だが太陽がなければ、バラは色あせて、枯れる。そのように愛する人を見ないでいると、古傷は痛んでくる。

822

さてこれからわが騎士の行方を追って物語を進めよう。彼は尽きぬ涙にぬれながら、馬を進め、時どきあたり見まわして、太陽が太陽であるように祈った。それから目を離すことができず、離すと気が遠くなった。

823

気が遠くなると、きつと舌がもつれた。チグリスの川波のように、涙があふれた。ときに後ろを振り返って、苦しみに打ち勝とうとし、前に向かえば、どこへ馬が行くのか、わからなかった。

824

彼はいった、「別れがこれほどつらいとは知らなかった。分別はお身の許においてきたが、心もともに帰ろうとし、泣きぬれた目はもう一度お身を見ようとする。これほど、愛とは煉獄と苦悩の道をたどるものなのか。

\*太陽——王女チナチン

825

また逢う日まで、何に生き甲斐を見出すのか？

お身も悲しんでいると思わないほどなら、私は死を選ぶ。

だが、私がこの世にないと知れば、お身は深く嘆くだろう。

それなら生きて、涙の淵を行くがまし！」

826

彼は呟いた、「日食の形で太陽を見分けるといふ、

時にかかりなく、分かちえざる、唯一のもの形の、

もろもろの天体はいつの瞬間もそれに従属する。

わが運命を変えず、また逢う日まで、わが真心を受入れ給え。

827

哲学者はかつてお身を神の形象と考えた、

助け給え、私は鉄の鎖につながれているのだ！

私は水晶、紅玉を捜して、黒玉、七宝を失った、

前には姫に近づき焦がれたが、今は別離に悶えるのだ。」

828

彼は泣き、燃えて、ろうそくのように溶けたが、

遅れてはならじと、先を急いだ。

夜に入ると、星ぼしが顔を出した。

姫になぞらえて喜び、あれこれと話しかけた。

829

彼は月に語った、「神かけての願いがある、

おまえはミジヌールに恋の病を吹きこむが、

またそれをなおす薬も持っていよう。

おまえのように美しいあの人に早く逢わせておくれ。」

830

夜は彼を喜ばせたが、昼は苦しめた。彼は日没を待った。

川に出会うと、そのつど馬をおりて、川面をながめた、

涙の池に発する血の流れが、川に注いでいた。

それからふたたび馬にまたがって、先を急いだ。

831

彼は孤独に苦しみ、イトスギの身をよじって泣いた。

岩の狭間で山羊をしとめた、

それを焼いてたべ、マリフの心抱いて、先へ進んだ。

彼は呟いた、「バラがなければ、なんと惨めなことよ！」

832

騎士がいった言葉を、いま伝えることはむずかしい。

いかに語り、いかにかき口説き、いかに悶えたか！

ときに目を赤く泣きはらし、バラを爪でかきむしった。

ついに洞窟が見えた。彼は喜び勇んで、入口に向かった。

\* マリフ——火星のこと。軍神にも通じる。



833

涙にぬれながら、アスマートが彼を迎えた、

あまりのうれしさに、娘は口もきけなかった。

騎士は馬をおりて、娘を抱き、キスした。

しあわせのおもいは、ふたりとも一つであった。

834

騎士は娘に訊いた、「どうだね、あるじのようすは？」

娘はせきあげ、涙は川となって海に流れていった。

「洞窟ではお身もてあまして、またどこかへお出まし、今にいたるも絶えてご消息はございませぬ。」

835

槍で突き刺されたかのように、騎士の胸は痛んだ。

「それはたいへん、どうして彼は誓いを破ったのか？」

私は嘘をつかないのに、どうして彼は私を欺いたのか？  
いったん交した約束を、なんで守らなかったのか？

836

彼なしには、この世に生きる張合いもない。

なんで私を忘れ、なんでがまんできなかったのか？

よくもまあ思い切って、誓いを破ったものだ！

でも今さら、運命のいたずらに驚いていられようか！

837

娘はいった、「つらいお気持はよくわかります。

でもこれはあなたにおもねていうのではありませぬが、

誓いや約束を守るには、正しい心がいりましよう？

けれどかの君はその心を失い、ただ終りの日を待つばかり。

838

知、情、意の三つは互いにかたく結ばれ、

その一つが去れば、他の二つも、後を追って去ります。

心を失った人は、もはや人の仲間にははいれませぬ。

どんな火にかの君が焼かれているか、あなたには見えぬ。

839

かの君をお恨みなさるのには、ごもつともですが、

まずひととおり、事のしだをお聞き下さい。

ただ舌がもつれて、憐みの心が痛むかもしれませぬ。

あたしは生れつき不幸な女、だからそれがわかるのです。

840

こんな苦難の物語は、まだ誰も聞いたことがないでしょう、

聞けば、人びとばかりか、木石さえも、震えあがり、

注ぐ涙でチグリスの川波も静まることでしょ。

他人の争いでは誰も利口ぶる、とはよくいったものです。

841

火と燃えてお出ましの時、あたしはかの君に訊ねました。

『アフタンジル様が着かれたら、何と申しましょう？』

そのお答は、『すまないが、捜してくれるように、

私は遠くには行かないし、約束を破りもしない。

842

誓いも破らなければ、一言もない。

どんなに涙を流そうと、予定の日まで彼を待つ。

もし私が死んでいたら、かわいそうに、といって葬り、

もし生きていたら、なんとふしぎ、と驚いてくれるように。』

843

その日から、あたしにとっては、太陽は山の彼方にかくれ、  
いたずらに涙はあふれて、野をうるおすばかり。

絶え間ないため息に、気も狂いそうなのに、

死ぬにも死ねないとは、なんたる因果なことでしょう。

844

中国ではこんなことわざが石に彫ってあるとのこと、

へ親しい友なき人は、自分にも敵である。

バラに喩えられぬ人は、サフランになりました。

そのおつもりなら、お気の向くままに、お捜し下さい。」

845

騎士はいった、「私の不満をつっぱねたのは気に入ったが、

愛のとりこが同じとりに、いかに尽したか知ってくれ。

水を求める濁かえた鹿のように、私は館を飛び出したのだ。

その名を呼びつつ、野をへめぐって、彼を捜そう。

846

真珠貝はルビー色の真珠を秘めて、保護するのに、

私は気も狂うほど愛する人を、あえて見すてた。

私のひそかな出奔は、神とならぶ人たちを悲しませ、

恩寵に報いるに、かの人たちの心を傷つけた。

847

私のあるじはやさしい養育者、父のように甘く、

慈愛の声は、空から雪が降るように！

それを私はふりきって、道に背いた、

もう神の恵みを待つことはできないのだ。

848

それもこれも、すべてはタリエールのためと耐え忍び、

約束どおり、夜を日に継いできてみれば、

彼の姿はなく、その火が私を焼くばかり、

泣くも苦しむも、なにかその甲斐なきような。

849

だが、いつまでこぼしてもはじまらない、過去にこだわらず、賢者の言葉に従おう。

行って彼を見つめるか、わが死を早めるか、いずれにせよ、神に逆らうつもりはない。」

850

涙をはらってアフタンジルは出て行った。

川を渡り、草むらを分けて、野に出ると、

冷たい風が赤いバラを凍らせた。

「なんでこんな曇き目にあうのか？」彼は運命を呪った。

851

「神よ、あなたの前に、私はどんな罪を犯したのか？

なんで私を友たちから引離し、暗闇につき落とされたのか？

ひとりでふたりを思いながら、私は滅亡の淵にある。

いっそ死んで、この血をわが頭上に浴びようか。

852

友はバラのたばでわが心を打ち、それを傷つけた。

私が守った誓いを、彼は守らなかった。

友がわが目から消え去れば、わが喜びも消える。

でもほかにはどんな友もいらぬ、なんの幻想も抱かぬ。

853

分別ある者が悲嘆に溺れていてよいものか、頬を洗う涙になんの益があらう？

たしかな道を選ぶのが、知恵あるやりかたではないか。そうだ、何はともあれ、あの太陽を捜すしよう。」

854

騎士は、涙をはらって、搜索に向かった。

捜し、名を呼び、夜も眠らない。

谷を渡り、草を分け、森を過ぎて、すでに三日、

彼の姿はなく、また気が滅入ってきた。

855

「神よ、なんで私はこんなにお怒りがあったのか？

なんでこんな天罰を私に下し給うたのか？

裁くとあれば、裁いた上、わが祈りを聞き給え、

わが命を縮めても、悲しみを喜びに変えさせ給え！」



856

色あおざめ、涙にぬれながら、騎士は馬を進める。  
丘の鼻に出ると、日当りのいい谷が目の下にひらけ、  
野放しの黒馬が一頭、やぶかげにいたるのが見えた。

「おや、あれだ、たしかにまちがいない！」

857

馬を見たとなんに、騎士の心は明るくひらけ、  
悲しみは、十倍どころか千倍のよるこびに変わった。  
バラは輝き、水晶は水晶に甦った。

馬から目を放さず、彼は疾風のように駆け下りた。

### 第36章

#### アフタンジルは

#### 氣を失ったタリエールをみつける

858

タリエールをひと目見て、思わず震えあがった。  
やつれはてて、すでに生色なく、  
えりもと破れ、髪の毛乱れて、  
なんにも感ぜず、この世の境をふみ越えていた。

859

一方には血ぬられた剣と獅子の死体、  
一方には深傷に息絶えた虎のなきがら、  
タリエールの目からは涙が流れ落ち、  
熱い炎は彼の心を焼きつくしていた。

860

彼は悲しみにふさがれた臉をあげることさえできず、死に近づいて、苦しみから遠ざかりつつあった。

アフタンジルは名を呼んで、呼び起こそうとしたが、手応えないので、そばにすり寄った。

861

その手に涙を感じて、タリエールの目をふいてやり、さらに耳近く、その名を呼びつつける。

「おまえのため戻ってきたアフタンジルがわからぬか？」  
タリエールはかすかに臉を震わせたが、まだ目をあげぬ。

862

この場のようすは、いささかの省略もなく物語ろう。まずアフタンジルは、正気に戻そうと友を抱きしめた。

タリエールは初めて気がつき、兄弟のように抱きついた。いくら造物主でも、このような兄弟を生んだことはない！

863

タリエールはいった、「見た通り、私は嘘をつかなかった、生死の境でも、百倍もかたく、誓いを守った。

だから今は私にかまわず、涙の中で死なせてくれ、そしてけもの餌食にならぬように、葬ってくれ。」

864

アフタンジルは答えた、「なんでそんな世迷い言を？

ミジヌールでなかったら、火に焼かれもしなかったら、人間の仲間の誰に、こんな恐ろしいことができるか？

それなのに、おまえはサタンに降服し死のうとするのか？

865

ばかでないなら、ものの道理を知らねばならぬ。

男は男らしくこそあれ、泣くはひかえめに、

不幸には、石壁のように、強くありたいもの、

そうすれば、おのずといい知恵も出てこよう。

866

おまえはそういう賢者の教えに従わないで、

けものあいだをむだにうろつき、泣いている。

世界を憎むかぎり、誰が為に死ぬのかわからなくなる。

なんで健やかな頭に繻帯巻き、なんで傷口をあばくのか？

867

誰がミジヌールでなく、誰が火に焼かれなかったか？

誰も受難を知らず、誰も思い焦れなかったというのか？

どんな異常が起こり、魂がおまえを見すてたというのか？

刺のないバラは誰も摘まぬことを、知らぬ者がいようか？

ある時バラに聞いてみた、『おまえは心も形も美しいが、  
なんで刺をまとい、どうして近づきたいのか?』

バラはいう、『甘味は苦味に宿るもの、難しいほど心を惹く、  
美しくとも、手に入り易ければ、三文の値打もないもの。』

869

無心のバラさえそういうものを、

サタンを片づけなくて誰が喜びをつかむことができよう?

進んで悪を封じなければ、誰がその手から救われよう?

数奇なめぐりあわせで、この世に苦情をいうは恥ずかしい。

870

私のいうことがわかったら、馬に乗って、ゆっくり行こう、

自分の判断だけに頼らず、

欲することに逆らい、意志に情熱を割込ませないこと。

最善の道と思えばこそ、このように諫めるのだ。』

871

タリエールは答えた、「答えるにも、舌はこわばり、

狂った頭で、おまえの言葉を聞きわけける力もない。

他人事なれば、この苦しみを耐えるのも、易しいだろうが、

私には、死に近づいて、やっと喜びの時がはじまったのだ。

872

絶え入りながら、口先だけでなく、神に祈った、

へいま別れたわれらミジヌールが、あの世で逢えますように、

逢ってふたたび喜びにめぐまれますように。

また、友がわれを葬り、わが墓に土をかけるようにと。

873

愛する男が愛される女に、どうして会わずにいられよう?

胸おどらせて女のもとに行き、ついで女がたずねてくる。

私は女を迎え、女は私を迎える、女は泣き、私も泣く。

誰がどう忠告しようと、心の命ずるままに動くだけだ。

874

どうか、わかってくれ、これは真剣な話なのだ。

すでに死の手に落ちて、私の余命はいくばくもない、

生きのびるとしても、狂った者に何が期待されよう!

朽ちていく身を離れて、魂は天に昇ろうとしているのだ。

875

おまえの話は、聞いてもわからぬし、聞くまでもない。

この狂人に残された命はほんの一瞬にすぎぬ。

今ほどこのいのちが無意味になったことはない。

これから涙が土と混ざるところへ行くばかり。

876

分別というけれど、狂人に分別があるだろうか？

私が自分のあるじなら、この相談もまとまるだろうが、  
バラは太陽なしにはありえず、光なしには枯れるばかり。  
すでにがまんもつき果てた、どうかもう手を引いてくれ。」

877

アファンジルはなおも言葉をつくして説きつけた。

「死ぬにしても、こんな最期はがまんならぬ、

自分が自分の敵になるばかりじゃないか。」

だがどんな言葉も彼をしずめることはできなかった。

878

そこでまたいった、「どうしても聞き入れぬのなら、

もはや頼むまい。余計なむだ口きいたようなもの。

それほど死にたければ、死ぬがいい。バラも枯れるがいい。

だが一つだけ、聞いてもらいたいことがある」と、また涙。

879

「黒髪がゆたかに水晶をめぐるあの人を、

私は見すてて、急ぎ出奔し、

王が父の訓戒をたれても、私は引止められなかった。

しかも、おまえに背かれては、どこに私の立つ瀬がある？

880

せめて、ただ一つ、最後の頼みを聞いてくれ。

一度だけ、わが心引裂いた人の、乗馬姿を見せてくれ。  
そうすれば、今のこの悲しみが消え去るかもしれない、  
私は立去り、おまえの好きなようにさせてあげよう！」

881

彼は祈る調子でくりかえした、「さ、馬に乗れ！」

馬に乗れば、タリエールも気分が晴れて、

はずみとゆとりが出てくるだろう、と察していた。

タリエールはやつと聞き入れて、うめきをこらえた。

882

彼はいった、「よし、馬を引いてきてくれ！」

アファンジルは、息切れせぬよう、静かに彼を馬に乗せ、

野に出ると、いくらか早駆けさせた。

みるみるタリエールは元気づいてきた。

883

アファンジルはおもしろおかしい話で友をなぐさめた、

赤い色がひらめき、その唇は話のたねをふりまいた。

老人が聞けば若返るような風説であった。

タリエールは悲しみと別れ、がまんに結ばれた。

884

タリエールが目に見えてよくなったのを知ると、  
悲哀の治療者の頬にういわれぬ欣喜の色がのぼった。  
無分別な人のうめきとため息を切りすてて、  
その医師は無分別な人に分別ある言葉を注いだ。

885

きつかけをつかんで、アフタンジルはふいにいった、  
「ひとつ、秘密をあかしてもらいたい。」  
その腕飾りは愛する人の贈りものと聞いたが、  
どれほどたいせつに思っているのか、話してくれぬか。」

886

タリエールは答えた、「完美なものの前に言葉は無力だ。  
これには私のいのちが、私の恋の動機が宿っている。  
私にはこれが全世界よりも、水、土、植物よりも貴重だが、  
思い出すまいとすることを思い出すのは、何よりつらい。」

887

アフタンジルはいった、「その答を待っていたのだ、  
おまえが打明けた以上、まっすぐ本題に入ろう。  
この腕飾りを失っても、アスマートを失うな、ということ。  
もともと、おまえの行ないに私は賛成できないのだ。」

888

なるほどそれは名匠の手に成る黄金のブラスレットだろう、  
だが、魂なく、いのちなく、口をきかず、感じもしない、  
アスマートよりこの品物を愛でるのが、正しいだろうか？  
彼女は第一に姫の侍女、第二におまえの義妹ではないか。

889

彼女はおまえに真心こめて仕え、おまえも妹と呼び、  
われらの出会いも彼女の心ひとつできめられた。

890

おまえと苦難を分かつたため、遠くここまでできたものを、  
なんでおまえは見すてるのか？それが正しい行ないか？」  
タリエールは答えた、「まったくおまえのいうとおりだ、  
ネスタンを思い、私の泣声を聞くのが、アスマートの常。  
私は生きる望みはなかったのに、おまえに助けられた、  
生き残った上は、少しも早くアスマートに会いに戻ろう。」

891

こうしてアフタンジルと海軍<sup>アムール</sup>長官は共に馬を返した。  
二人を賞めたたえるには、言葉がたりない、  
歯は真珠のよう、唇はバラの花、  
はずんだ言葉は穴から蛇をも誘い出すだろう。



892

アフタンジルはいった、「私は知恵も情熱も友に捧げよう、おまえも心の古傷にさわらぬように。」

賢者の教えに従わなければ、学問も役に立たず、役に立たなければ、どんな宝物も無用となる。

893

悲しむことはなんの役にも立たないはず、

神の御意なしには、誰も死ぬことはないのだから。

陽の光を待つ気があれば、バラも三日で枯れはしない。

神の御意あれば、勇氣と勝利はおまえのもの。」

894

相手は答えた、「その教えは私にとって全世界にも値する。

知恵ある人は師を愛するが、愚者は師に心を砕かれる。

とはいえ、よせくるこの悲しみを、どうおさえつけよう？

同じ病のおまえが私を責めるのはふしぎだ。

895

蠟は火の熱と結ばれて、燃える。

水は別だ。火は水に会って、消える。

悩みを同じくすればこそ、二つの心は結ばれる、

わが心の溶けるのを、おまえにどう伝えよう！」



第37章  
タリエールが  
獅子と虎をしとめた次第

896

「ではこれまでのできごとをくわしく話すから、おまえの頭で正しく判断してくれ。

私はおまえを待っていたが、そのうちしびれが切れてきた。洞窟にいたたまれず、馬で野駆けしたくなった。

897

草原を過ぎ、山地にさしかかると、牡の獅子と牝の虎が木の間にみえた。

相愛の仲らしく、私の目を楽しませたが、まもなく私を驚かせ、震えあがらせる騒ぎが起こった。

898

はじめ彼らは機嫌よく遊んでいたが、ふいに猛り立ち、前足を振って、互いに相手をたたき伏せようとした。

女性の常として、虎がまず後退したが、獅子は許すまじき勢いで、その後を追った。

899

獅子のふるまいに腹立てて、私は叫んだ、『気がいめ！愛するものをいじめるなんて、そんな暴力は男の恥だ！』

私は剣をぬき放ち、頭を唐竹割りにして、彼をこの世のわずらいから逃してやった。

900

私は剣をすて、馬からとびおり、虎を両腕にかかえると、  
熱い炎で私を焼くかの君を偲びながらキスをしようとした。  
虎はほえ、その爪をふるって、私を血まみれにした。  
がまんもこれまで、と私はついに虎を刺した。

901

どんなになだめても、虎は静まらなかった、  
私は怒って、思いきりこれを地面にたたきつけた。  
愛する人とのいさかいが思い出された。

こうして生き残り泣くことができるとは、思いがけぬこと。

902

これで話すことはすっかり話した。  
私は生き残るべきではなかったのに、運命が私を弄び、  
私は生と別れたのに、死が私を引取ってくれないのだ。」  
話し終ると、騎士はため息して、はげしく泣き出した。

903

アフタンジルも共に泣き、共に涙を流した。  
「心じょうぶに、じつとがまんしぬくことだ。  
悲しみはまだつづいても、愛には神のお慈悲がある。  
神は試練を望み、初めにおまえたちを別れ別れになさった。

904

ミジヌールに不幸はつきもの、この世は恋する者に暗い、  
だが初め悲しみに耐えたなら、後で明るい酒宴が恵まれる。  
愛はつらく、時に人を死に近づける、  
知恵ある人を無分別にし、愚者をかしこくもする。」



### 第38章

## 両騎士は洞窟に戻り

## アスマートに会う

905

泣きながら、ふたりは馬を洞窟へ向けた。

その姿を見て、アスマートは夢かとよるこび、

うれし泣きに出迎えたが、涙は岩をうがって流れた。

キスし、泣き、また気が遠くなった。

906

アスマートはいった、「感謝のしようもわかりませぬが、

神よ、あなたはわれらを太陽の輝きでいっぱいになさった、

知恵では讚美できないなら、なんでたたえましよう！

嬉しいことに、泣き細る私に、死を賜わらなかったとは。」

907

タリエールはいった、「妹よ、私がここで泣いたのは、

以前の喜びの償いに、泣きを見る運命となったからだ、

今は通用しなくても、それが古い世のしきたりというもの、

私には死は喜びだったが、おまえにはすまなかった！

908

水に溺れた人が、分別あるなら、水をこぼすだろうか？

だから私はあきれの、わが目は涙に溺れるのに、

つぎることなく水は流れて、しかも渴え死にとは！

ああ、開いたバラは失われ、連なる真珠は崩れ落ちた！」

\*真珠——ネスタン姫の顔

900

アフタンジルも焦がれる自分の太陽を想い出した。

「お身なしで、どうして生きていけようか？」

お身なしでは、わが生涯はみじめな重荷。

火に焼かれて苦しむ私のことを、誰がお身に伝えよう？

910

陽が落ちてもしおれぬと、どうしてバラに考えられよう！

いや、陽が山の彼方に隠れたなら、私たちはどうなるか？

心よ、しっかりしろ、岩のようにかたくなれ、

愛する人と逢うためには、おのれを失ってはならぬのだ。」

911

ふたりは息をついて、口をとじ、焼く火に身をまかせた。

アスマートも洞窟に入り、やはり火に焼かれていた。

前のように、彼女はふたりに虎の皮を敷き、

両騎士はそれにすわって、くつろいだ。

912

肉をあぶり、この場にふさわしい食事をととのえた、

パンもなければ、そろいの酒杯もなかった。

たべろ、とすすめたが、タリエールには食欲なく、

肉の一片をやつとのみこむだけであった。

913

うれしいことを聞くのは、偷しいものだ、

ただし余計な口出しせず、聞く耳持つことが必要。

お蔭で、どんなに強く身を焼く火も、いくらかかずまる。

悲しみを打明けることは、大きな慰めである。

914

その夜、獅子に似た両勇士は共に語り、

互いに互いの悩みを打明けた。

夜が明けても、長い話はずきることなく、

互いにはじめの誓いをくりかえした。

915

タリエールはいった、「くどくどいうまでもないこと、

おまえのりつばな行ないは、神に讃えられよう、

われらの誓いはかたく、その場の気まぐれではない、

たとえ身は遠くにあろうとも、互いの友情は忘れまい。

916

だが今はわが願いを聞き、私を熱い火で焦らさぬことだ。

私を焼く火は、火打石で切出された火ではない、

おまえにそれは消せず、おまえも自然の理で燃えるだろう。

帰ってくれ、おまえの太陽が照るところへ！

917

私を創ったその人でさえ、私をなおすことはむずかしい、だから私は狂人のように野や山をさ迷い歩く。

前には私だつて分別ありげにふるまっていたが、

今はちょうど狂気の出番、だから私は狂人なのだ。」

918

アフタンジルはいった、「さて、なんと答えたものか？

おまえは賢者の教えを受けた人の言葉で話した。

はたして神は傷をなおしえないだろうか、

全宇宙のために種をまき、育てるその主が！

919

はたして神の本意だろうか、

ふたりを引離して、おまえを狂人にしておくのが。

ミジュールに悲運はつきもの、それはおまえの力になり、

いつかふたりは会えるだろう、でなければ、私も破滅だ！

920

悲しみに打ち勝たないで、男といえるだろうか！

もろもろの不幸の前に、屈服してはならぬのだ！

おそれることはない、世の中はけちでも、神は気前がいい、

こういう理屈がわからないのは驢馬だけだ。

921

この道理をよく考えれば、きっとおまえのためになる。私はおまえに会うことを、わが太陽に頼んだ、

『彼が私の心を灰にしたので、お身の役にはもう立たず、

もうここにいられない。この上、何のいうことがあるう？』

922

姫は答えた、『まあ、うれしい、なんとおまえは偉いこと、彼につくす援助は、私につくすのと同じことです。』

相談の上、一ばい機嫌などではなく、私は出てきたのに、

今帰ったら、なんとといわれる？ 『臆病風に吹かれたの？』

923

いや、こんな話よりも、さっきの忠告を心にとめてくれ、難事を果すには、知恵ある人物でなければならず、

太陽なしで枯れるバラには、なんの美りもない。

おまえに元気なければ手をかそう、それが兄弟の務めだ。

924

どこでも気に入ったところに居を定め、

好きなように、しかし賢く暮らすがいい、

からだをまっすぐに、ふるまいに品よく。

ただ心しょうぶに、熱い炎に巻かれて死なぬように。

私の願いはそれに尽きる。ちょうど一年の後、

くまなく世界の情報を集めて、私はまたこの洞窟にくる。

それはバラが一番花盛りのとき、バラのようすは

犬のはえ声のように、おまえを緊張させるだろう。

926

もし一年の期限が過ぎてても、ここにもどらなかつたら、

もちろん、私はこの世にないもの、と思ってくれ。

おまえが私のために涙を流す、それを合図にそれからは、

喜ぶも、悲しみを倍加するも、おまえの勝手だ。

927

大いに話したが、おまえの胸を痛めはしなかつたらうか？

今別れたら、馬上で死ぬか、舟で死ぬか、知れぬもの。

でも、黙ってられないのは、ただの動物ではないからだ。

神が、永遠の天が、私をどうするか、誰にもわかるまい！」

928

タリニールはいった、「私も多くをいうまい。

くどい長話はおまえも聞きたくないだろう。

友がおまえに同意しなくても、おまえは友に聞くべきだ、

あげくには、どんな秘密もあきらかになるだろう。

そうすれば、私のつらい立場もわかるだろう、

私には一つしか道はない、ここにいるか、野に出るか。

たとえ正気を失っても、おまえのいったとおりにするが、

そんなに長く別れていて、私はどうなることだろう？」

930

話は終り、すべての打ちあわせはすんだ。

ふたりは馬に乗って野に出で、野鳥一羽ずつしとめて、

もどってきた。涙をたたえた心はまた泣きはじめた。

明日の別れを思うと、悲しみに悲しみが重なった。

931

この物語の読者よ、あなた方も泣けてくるだろう、

心と心が別れたとき、心なき不幸な心は何をかなすべき！

親しい友との別れは、人間には致命傷、

そのつらさのわからぬ人がいるだろうか？

932

朝、ふたりは馬に乗って、娘に別れをつげた、

タリニール、アスマート、アフタンジルの目は涙にぬれた。

三人の頬に紅の炎がゆらめき、

森のけものを驚かせて、二騎士は獅子のようにはえた。

933

洞窟を出ると大きなため息つきながら、ふたりは遠ざかり、  
あを見送って、アスマートは泣く、「りっぱなお姿！  
でも陽は燃えて、おふたりとも焼きつくすかと思えば、  
わが悲しみはきわまり、わが生涯に受難はつづくばかり！」

934

その日、二騎士は共に馬を進めて、  
海岸に近づき、ここで一夜を明かすことにした。

その夜、別れを惜しんで、胸の火花を分け合い、  
泣いて、悲しみを分かち合った。

935

アフタンジルはいった、「涙の泉は涸れたようだ。  
なんでおまえはこの馬をくれたブリドンと別れたのか？  
そこなら、情報を集め、太陽を喜ばせる手段もとれたのに。  
私はこれからそこへ行く。道を教えてくれ。」

936

タリエールはブリドンの領国へ行く道を教えた。  
できるだけわしく口で説明した。

「海岸を離れないで、東へ進むんだ。

彼に会ったら、私のことをよろしく伝えてくれ。」

937

ふたりは山羊を射ち、浜で焚火し、  
悲しさをまぎらせながら、飲み、たべた。

その夜はいっしょに木の下に枕を並べた。

時に気前よく、時にけち、とかく浮世は気まぐれだ。

938

夜明けとともに、ふたりは起きて、抱き合った、  
その話を聞いたなら、誰の心も溶けるだるう。

泉のように涙はあふれて、野をひたした。

胸に胸を溶け合わせて、ふたりはしばらく立っていた。

939

髪かきむしりながら、ふたりは別れた、

道なき道を分けて、一人は山へ、一人はその裾づたいに、

姿が見えなくなるまで、互いに呼び交しながら。

太陽がふたりの顔を見たら、自分も泣き面になったらう。





第39章

アフタンジルは  
プリドンを訪ねて

940

世界よ、おまえは何者か？ なぜ私たちをふり廻すのか？  
おまえを信じる者みなを、なぜ、こんなに泣かせるのか？  
命の芽をつみ取るような所へ、なんで人を投げやるのか？  
だが神は、おまえが弄ぶ人の身を心にかけておられる。

941

アフタンジルは別れに泣き、その声は天にとどく、  
「前のように、私はまた血の涙にむせぶ、  
前に出合いが重かったように、今は別離が重い。  
人はみな同じでなく、人それぞれに大きな距離がある。」

942

流された血の涙でけものたちは満腹した。  
彼は悲しみを消すことができず、消えない炎に燃え、  
チナチン姫の想い出は、またもやるせない思慕に誘った。  
口をもれる水晶のきらめきは赤いバラを照らした。

943

バラは枯れて、色あせ、イトスギの枝は風に震え、  
みがかれた水晶と紅玉は青い色に変ったが、  
彼は元気を失わず、強く死に逆らっていた。  
「太陽と別れた上は、闇におどろくことはあるまい！」

944

彼は太陽にいう、「おまえをチナチンの顔にくらべると、

おまえは姫に、姫はおまえに似て、山や谷を照らしている。

おまえの顔形は狂気の私をよろこばせるのに、

なぜおまえは私の心を冷たく凍らせておくのか？

945

一つの太陽が遠ざかると、冬の寒さがくるといふ、

二つの太陽を見つめた私に、心が凍らぬはずはない。

なにもものにも脅かさされず痛みも受けないのは、岩だけだ。

ナイフは傷をなおさず、痛みをもたらすだけではないか。」

946

道みち彼は天にうったえ、太陽に呼びかける。

「全能なるものすべてに君臨する全能なる太陽よ、

しいたげられしものを高め、幸福を与えるおまえならば、

私を恋人から引離さず、私の昼を夜に変えないでくれ。

947

土星よ、涙に涙を、嘆きに嘆きを加えて、

わが心を黒くぬりつぶし、わが身を濃い闇に沈め、

驢馬の背の重荷のような悲しみを負わせる。だが恋人に、

伝えよ、彼を見つてるな、へ彼は姫を偲び泣いている」と。

948

木星よ、おまえは正しい審判官！

公平に、心を心で裁き、

正しいものを曲げず、魂に罪を着せないでくれ。

私は正しい、それなのに、なぜ古傷に傷を重ねるのか？

949

火星よ、その槍でようしゃなくこの身を刺しつらぬき、

血潮の流れで赤く染めるがいい。

ただ恋人にわが苦しみを伝えてくれ、

おまえは、私が喜びを失ったことを知っているのだから。

950

金星よ、助けてくれ、彼女のつけた火で私は焼かれている。

それは世にも美しいさんごが真珠をとり巻き、

そういう魅力をおまえが贈った女性ではないか。

だがおまえは私を見放し、気を狂わせている。

951

水星よ、おまえだけだ、わが運命に似ているのは。

太陽は私をふりまわして放さず、出会えば、火をつける。

わが苦しみを書いてくれ！ ほら、インキだ、涙の壺だ、

ペンには、髪の毛のようにやせ細ったこの身をさし出そう。

952

月よ、察してくれ、私はおまえのように、やせ細った、  
これも太陽のせいだ、気が向けば、またふとらせる。

恋人に伝えてくれ、私を見すてるな、と、

私は彼女のもの、だから彼女のために死ぬのだ、と。

953

こうしていま、七つの天体が呼び出され、

太陽、水星、木星、土星は私と苦しみを共にし、

月、金星、火星は私の証人に立とうとする。

不滅の火がいかに私をなめつくすか、彼女に伝えてくれ。」

954

さてわが心にいう、「なぜ涙を流し、なぜ涙はつきぬか？

苦しんで何になろう、おまえは悪魔と兄弟になったのか？

恋する人の髪が、鴉の濡れ羽色なのを、私も知っている、

だが悲しみに耐える方が、喜びに耐えるより、つらいのだ。

955

生き残れるものなら、私だって、望むところだ、  
あの太陽に会えたなら、つきぬ嘆きも終るだろう。」

彼は涙にぬれながら、甘い声で歌った、

その声にくらべれば、鶯の声も曇なみの声となるらう。

956

騎士の歌を聞こうと、けものたちははい出し、

声のしらべに岩石さえ流れからはねあがった。

彼らは耳をすまして、聞きほれ、歌手が泣くと、泣いた、

歌は悲しく、いたるところで同情の涙がそそがれた。



957

七十日、騎士は海沿いに馬を進めた。

見ると、波をわけて舟が岸に近づいてくる。

着くのを待って、訊いた、「おたずね申しますが、

ここは何という国、どなたのお声に従っているのですか？」

958

口ぐちに答えた、「見れば、りっぱな旅のお方、

そのごようすには、私どもさえ、ほればれします。

このあたりはトルコとブリドンの領土の境界、

あなたに目が眩まされぬよう、主あんどのことを話しましょう。

## 第40章

### アフタンジルと

### ブリドン

959

スラジンスブリドン、これがわが国の王です。

馬の名手で、戦いに強く、ほまれ高い勇士、

しかも太陽のように美しく、誰にも傷つけられませぬ。

天から光をふりまくようにも見えます。」

960

騎士はいう、「これはいい方がたにお目にかかった、

じつは私はその王を訪ねてきた者です、

どこへ、どれほど行ったらいいか、お教え下さい。」

舟乗りたちは海沿いにのびる道を教えた。

「この道を行けば、ムリガザンザル国に着き、  
弓矢としては天下第一のわが君にお目にかかれるでしょう。  
イトスギのようなあなたなら、ここから十日の道のりだが、  
でも異国人のお方から、なぜ心に火をつけられたのか？」

騎士はいう、「私に火傷を受けたとは、意外な話、  
しおれた冬のバラが、どうしてそんなに目についたのか？  
せめて元気なとき、晴ればれした姿を見せたら、  
いい気分にもなってもらえたらうに。」

みんなと別れて、騎士はわが道をつづけた、  
からだはイトスギ、心はふたたび鉄となり、  
馬を早駆けさせると、いつか喜びがわき、  
目に雷雨が起こって、水晶を洗った。

道で行き合う人は、誰も彼にかしすぎ、  
彼をしげしげと見て、飽きることなく、  
彼を放しながら、別れを惜しみ、  
案内者をつけて、どんな質問にも答えさせた。

長い道のりをつめて、ムリガザンザルに近づいた。  
巻狩でもするのか、兵の一隊が現われて、  
鎖のように、野を四方からとりかこみ、  
矢を放って、穂を刈るように、けものを狩った。

兵のひとりをつかまえて、訊いた、  
「この矢叫びや足音は何ごとなのですか？」  
兵は答えた、「ムリガザンザルのブリドン王が、  
野をかこんで、狩をなさっているのです。」

彼は優雅なものごしで部隊の方に向かった。  
その美しさを描写することができただろうか？  
出会う者は太陽に焼かれ、離れる者は凍りついた。  
彼の身はススキのように震え、見る者は気が遠くなった。

ふいに部隊の上に、どこからか、一羽の鷺。  
騎士ははりきって、馬に拍車を当て、  
矢を放った。鷺は血にまみれて、地に落ちた。  
彼はとびおり、鷺の翼を切取ると、静かに馬に乗った。

977

なるほど、ブリドンに並ぶ勇士はいない。

だがアフタンジルには人の知らない美徳がある。

太陽は出会う天体を目に見えなくする、

ろうそくは昼は明りを放たず、夜になってあたりを照らす。

978

ふたりは馬にまたがり、ブリドンの宮殿に向かった、

巻狩はとりやめとなり、弓矢はおさまった。

アフタンジルを見ようと四方から兵が集まり、口ぐちに、

「あれほどの作品が、誰に、どうして、創られたのか？」

979

騎士はブリドンにいう、「さっそく話しましょう、

私が何者で、どこからやってきたのか、

どうしてタリエールを知り、兄弟の義を結んだのか。

彼の奴隸にも値しない私を彼が兄弟と認めたのです。

980

私はアラビアの産で、ロステワン王の家臣、

アフタンジルという侍大将です。

名門の出で、王の子として養育され、

なにびとも近より難く、肩を並べる者もない。

981

ある日、われらは王のお供で狩に出た、

すると、地面を涙でぬらしている騎士が目についた。

それがタリエールで、声をかけても、返事がない。

涙のいわれを知らないから、われらは腹を立てた。

982

王も怒って、彼をつかまえよ、というご命令。

だが討手の者たちは手もなく彼にたたき伏せられ、

手足をもぎ取られる者、息絶える者、数知れず。

この時初めて、月を軌道からそらすことができぬと知った。

983

軍隊も彼一人に及ばぬと知って、王はますます憤り、

自ら馬を駆って、彼の後を追った。

それが王と知ると、タリエールもさすがに手を下しかね、

手綱をゆるめて、たちまち姿を消した。

984

一同は彼を捜して果さず、あれは悪魔に違いないと考えた。

王は楽しまず、酒宴も一向にはずまない！

私は彼の運命に無関心でいられず、

やはり火に焼かれて、ひそかに彼を捜しに出発した。

977

なるほど、ブリドンに並ぶ勇士はいない。

だがアフタンジルには人の知らない美徳がある。

太陽は出会う天体を目に見えなくする、

ろうそくは昼は明りを放たず、夜になってあたりを照らす。

978

ふたりは馬にまたがり、ブリドンの宮殿に向かった、

巻狩はとりやめとなり、弓矢はおさまった。

アフタンジルを見ようと四方から兵が集まり、口ぐちに、

「あれほどの作品が、誰に、どうして、創られたのか？」

979

騎士はブリドンにいう、「さっそく話しましょう、

私が何者で、どこからやってきたのか、

どうしてタリエールを知り、兄弟の義を結んだのか。

彼の奴隸にも値しない私を彼が兄弟と認めたのです。

980

私はアラビアの産で、ロステワン王の家臣、

アフタンジルという侍大将です。

名門の出で、王の子として養育され、

なにびとも近より難く、肩を並べる者もない。

981

ある日、われらは王のお供で狩に出た、

すると、地面を涙でぬらしている騎士が目についた。

それがタリエールで、声をかけても、返事がない。

涙のいわれを知らないから、われらは腹を立てた。

982

王も怒って、彼をつかまえよ、というご命令。

だが討手の者たちは手もなく彼にたたき伏せられ、

手足をもぎ取られる者、息絶える者、数知れず。

この時初めて、月を軌道からそらすことができぬと知った。

983

軍隊も彼一人に及ばぬと知って、王はますます憤り、

自ら馬を駆って、彼の後を追った。

それが王と知ると、タリエールもさすがに手を下しかね、

手綱をゆるめて、たちまち姿を消した。

984

一同は彼を捜して果さず、あれは悪魔に違いないと考えた。

王は楽しまず、酒宴も一向にはずまない！

私は彼の運命に無関心でいられず、

やはり火に焼かれて、ひそかに彼を捜しに出発した。

985

捜すこと三年あまり、夢さえまどかならず、

たまたま彼に打破られたハタイ人たちから彼の行方を聞き、

やっと、しおれて黄ばんだバラを見つけることができた。

彼は私をいたわり、弟か子のように愛した。

986

彼は血戦に勝ってデフ族の洞窟をうばい、

アスマートとただふたり、そこに住んで、

変ることなく、姫への情熱に燃えつづけている。

彼を離れても、彼の運命は喪章のように目の前にひらめく。

987

娘は洞窟にひとり残って、涙にむせび、

勇士は獅子がその子にするように、狩の獲物をはこんで、

それで娘を養うが、自分はそのこじつとしていられない。

彼女の他には、人間と名のつく者は、見るのもいやだ。

988

ところが彼は見知らぬ私に、秘密を聞く望みを起こさせた。

彼は自分のこと、その恋人のことを物語ったが、

彼が耐えてきた苦しみは、私の口からは語れそうもない。

強いて話せば、私は正気を疑われるだろう。

989

月のように、止ることなく、彼は野山をめぐり、

おまえに贈られた馬に乗って、おりることがない。

人の言葉を悪と思ひ、けもののように、人を避ける。

私は友情に苦しみ、彼を思っては泣く。

990

あの勇士の火は私を焼き、熱い涙をしぼらせる。

憐みは私をゆり動かし、わが心をふるい立たせる。

陸に、海に、彼のための薬を捜しまわり、

いったん帰国したが、わが主君のご機嫌は斜めであった。

991

ふたたびお暇を願ったが、お聞きとどけないので、

わが部隊とも泣いて別れを惜しみ、

血の涙を分かちつつ、ひそかに出奔した。こんどこそ、

地の果てまでもめぐって、よく利く薬を捜すつもりだ。

992

彼はおまえのことを兄弟の仲とも話したが、

なるほど、噂にたがわぬりつばな人柄。

ひとつ考えてくれないか、あの太陽をどう捜したらいいか、

見る人には喜びを、見ない人には絶望を与えるあの姫を。」



993

騎士の物語はブリドンに燃えあがらせた。

ふたりはおなじ悲しみを分け合い、

心はタリエールの想い出にむせび泣いた。

バラは森の泉から湧く熱い湯にひたされた。

994

軍勢はもらい泣き、

われとわが顔をかきむしるもあり、服を引裂くもある。

ブリドンは七年の別離を嘆いて、おろおろ声、

「何というまやかしの、ろくでなしの世界なんだ！」

995

ブリドンはつづける、「おまえを讀める言葉を知らない、

おまえは天上の太陽を軌道からはずす地上の太陽、

惑星たちもおまえの光をうけてきらめく。

タリエールよ、おまえはわれらの闇を照らす灯だ！

996

おまえと別れたその日から、わが生活は味気なく、

おまえは私を忘れても、私はおまえを思わぬ日とてなく、

おまえは私なしで平気でも、私はおまえなしではいられず、

私にとって、世界は荒涼たるものになった。」

997

涙にむせんで、ブリドンはかき口説いた。

ふたりは慰め合いながら、歌もなしに、馬を進めた。

アフタンジルは魅惑の光で見る人たちを照らしたが、

黒い湖は瑪瑙めのうのふたふたの下に隠されていた。

998

一行は町にはいった。目につくみごとな王宮。

そこには国の秩序が保たれていた。

正装に威儀を正した家臣たちが居並び、

人びとはうっとりとしてアフタンジルに見とれた。

999

王宮は人で埋まり、空席はひとつもなかった。

十に十倍する高官たちが両側を占めた。

アフタンジルはブリドンに並んですわったが、

水晶と紅玉の微妙な色合いを、誰がよく表現し得よう！

1000

一同は宴席につき、さまざま飲みものがあふれた。

ブリドンはアフタンジルを身内のようにもてなした。

珍珠の皿が後から後からはこばれたが、

アフタンジルの顔色は見る人の心を傷めた。

\* 森の泉から湧く——まつ毛の下から湧く

\*\* 瑪瑙のふた——まつ毛

1001

日は傾き、うたげは終ったが、酔声は聞かれなかつた。  
アフタンジルは浴場におもむき、繻子しゆじを解いた。

十万ドラクマもする高価な服を着せられ、

価もわからぬみごとな帯を締めさせられた。

1002

落ちつかなかつたけれど、数日をそこで過ごし、  
ブリドンと共に狩や競技を楽しんだ。

近くも、遠くも、獲物を射損じることなく、

ねらいのたしかさは射手すべての舌を巻かせた。

1003

彼はブリドンにいった、「今日はぜひ聞いてもらいたい。

おまえと別れるのは、死ぬよりつらいのだが、

わが身焼く火に責められて、ぐずぐずしてはいられない。

道は遠く、仕事は重く、遅れては一大事。

1004

おまえと別れて、涙にぬれぬ人はあるまい。

だが私は出立せずばなるまい、別の火に焼かれる身だから。

その必要がないかぎり、旅行く身に遅れは禁物。

おまえがああ太陽を見たその海岸に、私を案内してくれ。」

1005

ブリドンは答えた、「むりにおまえを引止めはしない、  
いま出立しなければ、別の槍に刺し貫かれるのだから。

行くがいい、神の加護があるように、敵が敗れるように。

だが、おまえと別れて、どこに私の救いがあるだろう？

1006

せめておまえをひとりぼっちで旅立たせることはできぬ。  
兵をつけてやるから、それに用をさせるがいいし、

馬と騾馬に物の具積めば、道もはかどるだろう。

さもなければ、バラも涙に洗われて、黄ばむだろう。」

1007

ブリドンは信頼のおける従者四名を選んだ。

アフタンジルには鎧、兜、鎖帷子くさりかたびら、腰当て、

六十リトルよりは少くない金、

馬具一式つきの馬をあたえた。

1008

足のじょうぶな騾馬には荷を積んだ。

ブリドンは馬に乗って見送りに出たが、

もうじき別れるのかと思うと、気が滅入った。

「太陽が遠ざからなければ、冬の寒さもこぬだろうに！」

1009

別離の悲しい知らせは八方にひろがり、  
町の人、絹織物や果物の商人たちが駆け集まって、  
別れを惜しむ声は雷鳴のように空気をどよもした。  
「太陽と別れては、われら目あきもなんになろう。」

1010

ふたりは町を過ぎて、あの海岸に近づいた、  
いつかブリドンがあの太陽を見たところである。  
涙の湖から血の川が流れ出た。  
ブリドンはとらわれの姫のことを物語った。

1011

「ここに二人の黒人奴隷が小舟を漕ぎよせた、  
白い歯、紅い口、黒いベールのあの太陽を乗せて。  
私は馬を急がせ、姫を取返そうとした。それと見るや、  
彼らは急ぎ漕ぎ去ったが、早いこと、鳥のようであった。」

1012

ふたりは抱き合ったが、悲しさはいや増すばかり、  
キスをし合えば、またも胸に炎が燃えあがった。  
無二の義兄弟は、生みの兄弟のように、ここで別れた。  
ブリドンは残り、アフタンジルの姿は遠ざかって行った。



## 第41章

### アフタンジルと キャラバンの出会い

1013 満月のように、アフタンジルはその道を行く。  
チナチン姫を思い出すと、彼の心はずみ、

思わず口走る、「別れとは、思わしいこの世のたくらみ！  
姫だけにはわが傷をなおす薬があるものを。」

1014 なぜ三つの炎の熱がたえずわが心を焼くのか？  
なぜ一枚岩のようなわが心が、三つの破片くずかけになったのか？

槍やりひと突きでは三つの傷をつけることはできない。  
この世がこんなに辛いつらいのは、みんなお身のせいなのだ。」

1015 アフタンジルは四人の従者をつれて、海辺を行き、  
根こんを詰めてタリエールのための薬を捜す。

昼も夜も涙は滝つ瀬、  
世界は薬屑くすりくずよりもなお軽い、つまらぬものに思われた。

1016 海辺で行き会う旅人には、きつとネスタン姫のことを聞き、  
すでに百日が過ぎたある日のこと、  
いっぱいいっぱいに荷を積んだ駱駝らくだの列が現われた。

商人たちは元気なく、心配そうに海辺に立つ。

1017 数知れぬ大キャラバンは足ぶみし、  
進むか、留るか、決しかねたようす。

騎士はあいさつし、一同は称讃で答える。

「どこから？」という騎士の間から語りはぐれた。

1018 キャラバンの隊長はウサムという賢い人、  
アフタンジルを祝福し、優雅な言葉で賞めた。

「あなたは太陽、私たちを喜ばすためお昇りなされたが、  
まず馬をおり給え、事の次第をお話しましょう。」

1019 馬をおりると、キャラバンは口ぐちにいった、  
「私たちはバグダードの豊かな商人、マホメットの信者、  
いっかなマジヤリは飲みませぬ。絹の切れ端などでなく、  
高価な品の取引きに、海の王の都に参るところ。」

1020 するとこの海辺で、息絶えた人を見つけました。  
手当をすると、息ふき返したので、聞きました、

『旅の人、おまえは誰で、何を捜していなさるのか？』  
彼はいっのです、『船出しなさるな、海賊にやられます。』

1021 私たちのキャラバンは護衛つきでエジプトから、  
高価な織物を積んで航海してきました。

ところがあちらの沖で、衝角つきの海賊船に襲われて全滅、  
この身がどうして生き残ったのか、わかりませぬ。』

1022 そういっわけで、私たちは迷っているのです。  
引返そうか、だが損害は計り知れず、

船出するか、だが海賊を相手にするほどの力はない。  
出るも引くもならず、思案に暮れているところです。」

1023 アフタンジルはいった、「気落ちすれば事態は悪くなる、  
天から降ってくるものは避けられない。

私はおまえたちの命をあずかり、血に染まろう、  
おまえたちに手出しする者は、わが剣の切れ味を知ろう。」

1024 キャラバンは大よろこび。

「この若いお方はおれたちみたいに臆病じゃない、  
まこと、頼もしげだから、もう心配はいらぬだろう。」  
彼らは船に荷を積んで、岸を離れた。

1025

空は晴れて、航海にんのさわりもなく、  
アフタンジルも心浮き浮き指揮をとる。

すると数日後、高く旗をかけた海賊船が現われ、  
こちらの船を突き破ろうと衝角を向けて進みくる。

1026

ラッペを鳴らし、ときの声をあげて、海賊どもは近づき、  
その数に胆をつぶして、商人たちはうろたえざわぐ。

勇士はいう、「あんなおどしに驚くことはない、

奴らをみな殺しか、今日がわが命日になるか、どちらかだ。

1027

世界の軍勢総がかりでも、私は負けないつもりだが、  
神のおぼしめしなら、槍先にかかって相果てよう。

どんな城も、どんな友も、私を援けることはできぬだろう。

そう覚悟すれば、私のように、物に動じないのだ。

1028

おまえたちは商人だから、戦いは不得手、  
うっかり矢に当らぬよう、ドアをしめて、

いかに私が、獅子のように、敵を蹴散らすかを、

いかに敵の船を血で染めるかを、見物するがいい。」

1029

虎のすばやさで物の具つけ、  
片手に鉄の棒をにぎって、

ひるむ色なく船の鼻に出ると、

彼は剣で敵を斬る素振りをした。

1030

海賊どもはわめきおめいて、

とびぐちつきの丸太ふりかざし、打ってかかる。

勇士はすこしも臆せず、鉄棒であしらい、

獅子の腕で、丸太をたたき折る。

1031

丸太はふっ飛び、こちらの船にはかすり傷もない。

海賊どもは仰天し、隠れ場求めて逃げ散るが、

そのすきを与えず、彼は敵に躍りかかってなぎ倒す。

生あるものも、無傷なものも、ひとりもいなくなった。

1032

恐れを知らず、アフタンジルは山羊のように敵を討ちとる。

船にたたきつけるもあり、海に放り出すもある。

八名を九名に、九名を八名に、互いにつつけ合う。

負傷者は死体のあいだに隠れて、首をすくめる。

1033  
アフタンジルは望みどおりに勝利をおさめた。

「後生だから、命だけはお助けを！」と拝む者があれば、それを殺さず、手傷が浅く生きのびた者は、捕虜にした。使徒はいいことを言った、「愛は恐怖から生まれる」と。

1034  
人間は己が力を、酔いどれのように鼻にかけるでない！  
神の加護がなければ、どんな力も役には立たぬ。

ただの火花だって大木を倒して、燃やすことができるし、  
神の加護があれば、棒切れでさえ、剣と同じ威力をもつ。

1035  
海賊船には宝物が山とあった。  
アフタンジルは船に船を引きよせて、商人たちを呼んだ。

それを見て、ウサムは大いに喜び、  
彼を武神になぞらえて賞めあげた。

1036  
だがアフタンジルを賞めるには、千の言葉でも足りない、  
とりわけ戦いの後のその美々しさには、いう言葉を知らず、  
ただ感嘆するばかり、「主よ、感謝します！  
太陽はその光をわれらに送り、闇夜は昼に変わりました。」

1037  
商人たちは勇士をかこみ、顔、頭、手、足と、キスの雨、  
ただもうやみくもに讚美する。  
さすがの賢者も判断を失って、思いちがいをした。

1038  
「かほどの大難を逃れたのは、ひとえにあなたのお蔭。」

勇士はいった、「万物の創造主、神に感謝しよう、

天の力はここで行なわれることすべてをお見通しであった。

それは隠れたものも、目につくものも、一切を支配する。

それを信じ、運命を信じなければならない。

1039  
われらのいのちは神に預けてあるようなもの、  
この身もちりにすぎず、ひとり勝手に何ができよう？

いま約束どおり、敵を討ち滅ぼし、贈りもののように、  
品物満載の船を手に入れたのも、神のお蔭なのだ。」

1040  
気風のいい勇士が合戦に勝ったのも、  
並みいる者たちすべてに立優るのも、めでたいこと、

おのが小心を恥じながらも、一同は彼を祝福した。  
かすり傷さえ彼を美しく引立てた。

1041 明日といわず、その日のうちに海賊船を調べた。

かぞえられる程度の財宝ではなかった。

それをそっくりこちらの船に運び移し、

海賊船には火をつけた。後には板子一枚残らなかった。

1042 商人たちを代表して、ウサムはあらためてあいさつした、

「私どもは蠟のように軟弱なのに、お蔭で固くなりました、  
ここにあるもの総てあなたのもの、それに疑いありません。

「下さるものあれば、どうぞ分けてくださいまし。」

1043 勇士は答えた、「おまえたちも聞いたことがあろう、  
おまえたちが流す涙は神のみ心にとめられる、と。

おまえたちを助けたのは神。私に何謝することがあろう？  
また私に何欲しいものがある？ 私にはこの馬がある！

1044 仮に財宝をためる気があれば、私には、  
金銀はもとより、織物、じゅうたんなど数知れずあった。

おまえたちには、私はただの旅の道づれ、

私にはこの身を捧げる別の仕事があるのだ。

1045 ここで見つけた財宝のうち、  
気に入るものがあれば、なんでも勝手に取るがいい。

ただ一つ、ぜひ聞きいれてもらいたい頼みがある、  
私をおまえたちのなかにかくまってはくれまいか。

1046 時がくるまで、私を一城のあるじのようには呼ばず、  
騎士とも呼ばず、へ私たちの頭とだけいってくれ。

さっそく商人に姿を変えて、取引をおぼえよう。

1047 兄弟分の名にかけて、この秘密を守ってくれ。」

キャラバンの連中はこおどりしてよろこんだ。  
「それはまことに願ってもないしあわせ、

こちらからお頼みしたいことを、ご自分から仰いました。  
太陽の君に、何で私どもがつくさずにいられましょう。」

1048 船はすぐ帆をあげて、その旅路を進みはじめた。

順風にめぐまれて、おだやかな航海がつづいた。

一同はアラタンジルを心からもてなし、讚美して、  
その歯と色を競う真珠を彼に捧げた。





1049

アフタンジルは無事に海を渡り、

うっそうとした庭園をめぐらす都に着いた。

花の色、花の形の珍しいこと、種類の多いこと。

この都の美しさを伝える言葉を知らない。

1050

三本の綱で船を庭園よりの岸につなぎ、

アフタンジルはカフタン<sup>\*</sup>をはおって、床几<sup>トコ</sup>にすわった。

荷おろしする仲仕たちがやってきた。

こうして勇士は身分を隠して取引する。

## 第42章

### 美しい都

### グランシャロの物語

1051

まず船をつけたその庭園の番人が現われ、

光を放つ勇士の顔を驚嘆して眺める。

アフタンジルはこの人にていねいに言葉をかける、

「ここはなんという国で、王さまはなんというお方か？」

1052

どうぞくわしく話してください、

ここで一番高いもの、また安い品物はなんですか？」

庭番は答えた、「あなたのお顔はまるで太陽、

知ってることは正直にすっかりお話いたしましょう。

\* カフタン——部長のオーバー、主に商人が着る。

1053 ここはひと周りにするのにか月がかかる海の国です、  
都はグランシャロといって、美しいものがいっぱい、  
海の彼方からたくさん美しいものが運ばれてくるのです。  
王はメリクニスルハフと申し、幸福が満ち満ちた国。

1054 ここにお見えになる人は、ご老体でさえ、若返ります。  
饗宴に明けて、遊樂に暮れ、歌声の響かぬときはなく、  
夏も、冬も、いつも千紫万紅の花、  
これを知る人は、敵でさえ、うらやみます。

1055 当地ほど、商人が大儲けする所は、他にはございませぬ。  
買ったり、売ったり、得したり、損したり。  
貧乏人は一か月もすれば金持になり、  
文なしだって、一年で財宝をためます。

1056 私は商人頭ウセンの庭番ですが、  
旦那のきめた取引の規則を申し上げます。  
いま船がかりしているこの庭は旦那のもの。  
まず旦那に最も値打ある物をご覧に入れねばなりません。

1057 ここに着いたら、豪商の方がたは旦那にお土産を差上げ、  
品じなをご覧に入れ、他所でそれを広げてはなりません。  
逸品はすべて王のために取分け、すぐ決済します。  
それがすんで、はじめて自由な取引ができるのです。

1058 あなた方のような立派な方を接待するのが旦那のお役目、  
どなたをどこにお泊めするか、旦那がきめます。  
ところが今、旦那はお留守。  
ご自分でお客さまをお迎えすることができません。

1059 幸い、お内儀のフアチマリハトゥンは在宅です。  
親切にお客好きのお方ですから、  
私からあなた方の到着を告げましょう。  
迎えの者がきましたら、都にお入りなさいまし。」

1060 フアタンジルは答えた、「万事よろしく願います。」  
庭番は喜んで駆け去る。汗が胸を流れる。  
彼は内儀に告げる、「えらい人がお見えです。  
まるで太陽みたいに輝いているのです。」

1061 大キャラバンをひきいる商人ですが、  
すらりとした姿はイトスギか、七日の月か、  
カフタンとむらさきのショールに飾られ、  
織物の値段について私に声をかけたのです。」

1062 フアチマはハトウンは喜んで十人の召使を迎えに出し、  
自分はキャラバン宿を整え、そこに当地の商品を並べた。  
バラの頬、ルビーをちりばめた水晶が到着すると、  
これを見た人はその足を虎に、手を獅子になぞらえた。

1063 人おどろかす噂がひろがり、  
彼をひと目でも見ようと、都じゆうの人が押しよせた。  
はれぼれと見とれるもあり、ただ夢中になるもある。  
女房たちは己が亭主に愛想をつかし、亭主たちは落胆する。

1064 ウセンの妻フアチマは玄関に彼を迎えた。  
うれしさに上気して、いそいそとかしぎ、  
あいさつもうわの空に、一室に案内した。  
お察しのとおり、フアチマは彼に魅せられたのだ。

1065 フアチマはちょっと洪皮がむけた女、年の割には若く見え、  
色浅黒く、丸ほちゃで、背はすらりと形いい。  
歌手や楽士をひきにし、酒も別にいとわなない。  
ぜいたくな衣装を取っかえ引っかえお召しになる。

1066 その夜フアチマは勇士に大盤ぶるまい、  
勇士は彼女に一同が感嘆するほどの贈りものを捧げて、  
その待遇にじゆうぶん報いた。

1067 宴はてて、勇士は彼女のもとを辞去した。  
朝、彼は荷をほどいて、全部見せた。  
最上の品じなが王の為に残り分けられ、値段がきまった。  
彼は商人たちに行った、「これだけは別にして、  
残りは好きに取らせよ、ただし私の素性を明かさぬよう。」

1068 勇士はいつも商人の服をまとい、  
ときにフアチマを招き、ときにフアチマを訪れて、  
ひざを交え、優雅な話を交した。  
ラミン不在のヴィス\*のよう、彼の不在はフアチマを殺した。

\*ラミンとヴィス——第6章に註、イランの悲恋物語の主人公



1069

女には、ほどほどにして、あまり近づかぬがいい。  
言葉たくみにおまえをたらしこみ、信用させるが、  
なにかのはずみに、いつおまえを裏切るかもしれぬ。  
だから女にはけっして秘密を明かすべきではない。

1070

アフタンジル恋しさが胸深くしみとおると、  
その火は日に日に勢いを増し、ファチマを焼いた。  
どんなにおさえても、その悩みを隠すことはできなかつた。  
「あたし、どうしよう？」と口走って、彼女は泣いた。

1071

「打明ければ怒られて、めったに会えなくなるかもしれず、  
黙っていれば、さらに燃えさかるこの火をなんとしよう！  
そうだ、言っちゃまえ、生きるか、死ぬか、二つに一つだ。  
痛む所を言わなけりや、お医者も手がつけれぬもの！」

第43章  
ファチマ  
勇士に恋い焦がれる



1072

ファチマはアフタンジルあての手紙を書いた。  
それはわが身の恋と悩みを打明け、  
読む人の心の琴線に触れて、ゆり動かし、  
無用の書として破りすてられることなき手紙であった。

1073

へ太陽の君よ、太陽として創られ給いしばかりに、  
君はよろこびにあらで、別れの悲しみを誘い給う。  
君に近づくものは、すべて炎につつまれ、  
星ほしさえも、君を見て、目を樂しませます。

## 第44章

### ファチマの恋文

1074

君を見て、思い焦がれぬ人はなく、  
君はバラ、鶯がきて鳴かないのがふしぎです。  
君の美しさに花々はしおれ、わが花もしおれて、  
いま陽の光そそがねば、私は灰になるでしょう。

1075

これを申上げるのを、おそれ、ためらいましたが、  
それなら、どうしたらいいか？ もはや辛抱もこれまで、  
黒いまつ毛にたえず刺されるのには、耐えられませぬ。  
救いの道あらば、お導きを、でないと私は分別を失います。

1076 この手紙へのご返事がくるまで、

私を殺すか、わが願ひ叶えて下さるか、それがわかるまで、  
どんなに心が痛んでも、私はいのちをつなぐつもり、  
生か死か、そのときわが運命はきまるでしょう！

1077 フアチマはこの手紙をすぐアフタンジルにとどけ、

彼はこれを身内か姉妹の手紙のように読んだ。彼はいった、  
「それというのも、彼女が私の心、私の素性を知らぬから。  
どうして私がわが恋人を見変えることができようか！

1078 鴉とバラでは絵にもならず、似通うところもない。  
ただ、今はバラに鳴く鶯がこないだけ。

すべて出過ぎた行ないは命短く、実りもないもの。  
何とぼかげたことを書いたものだ、あの女は！」

1079 心中そうフアチマを叱つてはみたが、ふと思いなおした、  
へ私にはこの自分のほかに、頼りになる者はいない。

そうだ、こうして訊ねまわっているその人のためには、  
どんなことでもして、手がかりをつかまなければならぬ。

1080 あの女はここに住んで、たくさんの人を見ているし、  
世界じゅうのお客を接待して、宿の世話もしている。

いうことを聞いてやれば、何かとみんな話すだろうし、  
いろいろ役にも立とう。その効用は認めねばなるまい。

1081 彼は考えた、へ一度恋すると、女はすっかりのぼせあがり、  
恥も外聞もかまわなくなるものだ。

知ってることはしゃべり、どんな秘密もぶちまけよう。  
ここは一番いうこと聞いて、何かを嗅ぎ出すのが上策だ。

1082 自分の星に歩がなければ、人は何をしてもうまくはいかぬ。  
必要なものを私は持たず、私が持つるものは必要でない。  
この世は黄昏ながらゆえ、そこにあるものもすべて薄暗い。  
壺から取り出せるのは、そこにあるものだけなのだ。



1083

彼はファチマに書いた、へお手紙うれしく拝見しました、  
そなたには先を越されました、私も燃えていたのだから。  
いつもいっしょにいたいのは、私とおなじこと、

望みが一つなら二人の逢瀬になんの妨げがありません。>

1084

ファチマがどんなに喜んだか、伝えようもないほど。

彼女は書いた、へあなたと離れて流す涙はもうたくさん。

今宵はひとりでお待ちしますゆえ、

暗くなり次第、すぐいらっしやいますよう。>

1085

勇士はこの手紙を受取って、暗くなるのを待ち、  
ファチマのもとに出かけると、途中で召使に会った。

「急につごう悪くなりました、今夜はおとりやめ下さい。」>

「そんなばかなことがあるか！」と、彼は怒った。

1086

招待は取下げられたが、招待された人は引下がらなかつた。

ポブラのような、すらりとした姿を見せると、

ファチマはおどろき、うろたえたが、

さすがに、さりげないようすをとりつくろおうとした。

## 第45章 アフタンジルの返書

1087

ふたりはより添って、キスし、軽い話をはじめたが、ふいにドアがあいて、優雅な若者が身のこなしも軽く、剣と楯をもつ従者をつれて、はいってきた。

アフタンジルを見るや彼は身震いし、「容易ならぬことだ。」

1088

ファチマは度を失い、がたがた震えだした。

若者はより添うふたりを、あきれたように見下した。

「その女、私はおまえの楽しみを、あきれたように見下した。だが夜が明けたら、その男を抱いたことを、悔むだろう。」

1089

おまえは私をはずかしめ、私の顔に泥を塗った。

その代り、あしたはそのむくいを受けるだろう。

おまえはその歯でおまえの子どもたちの肉を食うのだ。

そうならぬなら、私の鬚に唾し、私を滅ぼすがいい！」

1090

男はあご鬚をしごいて、ドアの向こうに消えた。

ファチマはおのが頭をかきむしり、頬に爪を立てた。

流す涙は泉のようにしゆるしゆると鳴った。

「石を投げて、私を打ち殺してください！」

1091

彼女はせきあげた。「私は夫も幼い子どもも殺した。

私はじぶんの財産も、たぐいまれな宝石も失い、

親身の人たちとも別れ、家庭を滅ぼすことになった。

この先、私の名は恥辱におおわれるでしょう！」

1092

アフタンジルはこれを聞いておどろいた。

「どうしたんです、なんでそんなにさわぐんです？」

あの男が、おまえをどうしようというのか、

落着いて話さない、何者が、なんで現われたのか？」

1093

彼女はいった、「私は悲しくて、気も狂いそう、

おたずねにも、この口からは何もお答えできませんわ。

だってこの手でじぶんの子どもたちを殺したのですもの。

あなた慈しさに耐えかねて、私は破滅したのです。

1094

このようなことは、頭弱く、口数多く、

秘密を守れぬ者にこそ起こること。

お経の一つもあげておくれ、と私は知る人たちに頼みます。

われとわが血を飲む者には、医者も手をつけられませぬ。



1095

でも、たずかる道がないことはない。その一つは、もしあなたにできるなら、夜のうちひそかに彼を殺すこと。すれば、私もたずかり、この家にも傷がつかないでしょう。おもどりなされたら、わけはくわしく申し上げます。

1096

もう一つは、この夜のうちに驢馬に荷を積み、一刻もはやくこの場をお立去りなざること。

私のせいで、あなたに災難が及ぶかもしれないもの。

彼が現われ次第、私はわが子の肉を食べさせられるのです。」

1097

アフタンジルは聞き終るや、重い棒をとって、立上がった。

その姿の雄々しいこと！ 彼は自分にいった、

「この女の悲劇に知らぬ顔するは、魂の貧しい証拠だ。」

生ある人の中で、彼に並ぶ者を見出すことはできない。

1098

彼はフアチマにいった、「道案内の者をつけてくれ。

道をお教えるだけで結構、手助けはいらぬ。

私から見れば、あの男は戦士ですらない、

始末は後で話すから、安心して私の帰りを待つがいい。」

1099

道案内の召使を先に立てて、

出て行く彼の後ろ姿に、フアチマは叫んだ、

「首尾よくあの人の片をおつけなされたなら、お願い、あの人がはめてる私の指輪をお持ち帰り下さいまし。」

1100

アフタンジルはひそかに都を通りぬけた。

海岸に出ると、赤々緑の石造の建物が見えた。

下は豪壮な宮殿、上はバルコンの上にバルコン、

たくさんの階段をかけて、広大で、美しい。

1101

そこへ召使はアフタンジルを案内して、

そっと耳打ちする、「これがおたずねの方のご殿です。」

それから指さし、「ほら、バルコンが見えるでしょう？」

あの方はあそこでお寝みか（寝みか）でなければ、下で起きてます。」

1102

不幸な若者のドアの前に、番兵が二人横になつていた。

そっと通り過ぎようとしたが、二人が声をたてたので、

アフタンジルはめいめいの喉をそれぞれ片手で締めあげ、

さらに頭と頭をぶつつけた。髪の毛が血に染った。

1103 若者はむしゃくしゃして横になっていた。

そこへ血まみれの手をしてアフタンジルがはいってきた。

起上がるまもなく、相手を見定めるまもなかった。

アフタンジルは若者を床に引きすえ、小刀でしとめた。

1104 彼を仰ぐ人には太陽だが、敵にとっては冷たく恐ろしい。

若者を地獄に送りこむと、指輪をはめた指を切りおとし、

亡骸を窓から海へ投げすてて、波に引渡した。

墓を掘るツャベルもなければ、墓標もない。

1105 暗殺は誰にも知られなかった。

さわやかなバラを悲しませるものはなんにもなかった。

人の命をこんなにもうまく盗めるとは、驚くほかはない。

彼はさっき来たその道を帰っていった。

1106 太陽は明るくファチマの部屋を照らした。

彼はいった、「あの男は二度と陽の目を見ることはない。

おまえの召使が、彼の死の証人となるだろう、そら、

これが指輪をはめた指、これが私の血に染った小刀だ。

1107 では、さっき、なんであんなに取乱したのか、

「あの男が何でおまえを脅かしたのか、そのわけを聞こう。」

ファチマは彼の尻にすがりついた。「面目ございませんが、

やっと今火が消えて、心の痛手はなりました。

1108 私もウセンも子どもたちも生まれ変わったのでございます。

獅子の君よ、君を讀える言葉があるでしょうか？

あの人の血が流された今、もう気に懸ることもありませんぬ。

はじめからすっかりお話しましょう、お聞き下さいまし。」



## 第46章

### ネスタン姫の運命についての ファチマの物語

1109

「この都にはこういう習慣があります。ナヴロズの日には、だれひとり、取引する人なく、また旅立ちする人もなく、みんな晴れ姿に妍を競い、宮廷では大宴会がひらかれます。」

1110

私たち豪商はそこに贈りものをとどけ、そのお返しにやはり贈りものを頂くことになっています。十日のあいだ、いたるところ、歌舞音曲のにぎわい、競技場では球戯、競走馬のひづめのとどろき。

1111

夫のウセンは豪商の先立ですので、自然に私もその女房たちをひきいる形となり、それぞれに応じて、王妃さまに贈りものをさしあげ、宮廷で飲をつくして、楽しく帰宅するのでございます。

1112

さて、そのナヴロズの日がきました。王妃さまと私たちの間に、贈りもののやりとりがあり、楽しい時を過ごして、やがて帰ってまいりましたが、こんどは気楽な遊びが待っております。

\*ナヴロズ——春祭り

1113 暮れ方、私は庭に出ました。

仲のいい友達をもてなすつもりです。

歌手たちが甘い声で歌いました。

私も若作りに着替えて、歌いました。

1114 庭にはとても美しい塔のような建物があります。

海辺に高くそびえて、四方が見渡されます。

そこへ私はその女房たちを案内して、

またどんちゃんさわぎです。

1115 女房たちは羽目はずして大はしゃぎ、ところが、その最中になんの理由もなく、私はふいに気分が悪くなり、

それと見て、一同は夜食の席を立ち、散っていききました。

私はゆえ知らぬ悲しみのなかに、ひとり取残されました。

1116 私は立って、窓をあけ、海の方に目をやりました。

次第につのる悲しい気分を、まぎらそうと思つたのです。

すると、何やら小さいものが、こちらに泳いでくるのです。

鳥か、けものか、ほかには思い当るものがありません。

1117 それが小舟であるうとは、どうして見分けられたでしょう。

顔もからだもまっ黒な召使らしいのが二人、

小舟を漕ぎよせて、岸にあげました。

このふしぎな光景に、私は目を見るばかりです。

1118 庭のすぐ前の砂浜に小舟を引きあげると、

ふたりは用心深くあたりに目をくばるようす。

人の姿はなく、おどろかすものありません。

まさか私が息を殺して、家の中からのぞいていようとは！

1119 気づきもせずふたりは、小舟から衣袋箱めいたものを運び、

ふたをあけて、目のさめるような娘を引き出しました。

服はみどり、頭には黒いヴェール、

その美を競うものがあるとすれば、太陽だけでしょう。

1120 娘がこちらにふりむくと、海辺の岩が明るくなり、

頬の光が天と地のあいだに照り映えました。

太陽のようにまぶしいので、私は思わず目を細め、

彼らに気づかれないように、ドアを細目にあけました。

1121 私は召使四人を呼びよせて、いいつけました、

『ごらん、黒人たちがすごい美人を掴まえてるじゃないか。そつと忍びよって、静かに話しかけるんだよ、値段はいくらでも、言い値どおりに買っておいで。』

1122 売らないというなら、かまやしない、ふたりを片づけて、あのお月様をつれてくるのさ。うまくおやり！』

召使たちは、まるで蒸発したように、忍びよって、交渉しましたが、黒人たちはにべもなくつっぱねたようす。

1123 窓から覗いていて、話がつかぬと知るや、私は叫びました、『おやり！』召使たちはとたんに黒人ふたりの首を切り、亡骸を海に投げると、娘をだいにかばいながら、こちらにつれてまいります。私は迎えにかけおりました。

1124 あなたの前ですが、その娘の美しさは、たとえようもなく、太陽に喩えれば、太陽のほうが顔負けするでしょう。

彼女の光に耐えられるほどの人はなく、私だって焼かれる覚悟していました！』

1125 言葉を切つて、ファチマはわれとわが顔を打ち、アファンジルも熱い涙を流して、泣きだした。

心乱れて、互いに相手を見失い、流す涙は清らかな雪\*を汚した。

1126 やがて勇士はいった、「話を切らず、つづきなさい。」ファチマはつづけた、「私はその娘を迎え入れ、やたらにキスし、しつこく愛撫し、タフタに招じて、心からなぐさめました。」

1127 私は聞きました。『おまえはどこの、どなたで、どうしてあんなネグロにかどわかされたのですか？』いくら聞いても返事はなく、目から泉のように涙がわき出るばかり。

1128 言葉をつくして問いつめますと、身も世もあらず泣き伏して、水仙からあふれる早瀬は紅玉と水晶を流れくだります。それを見て、私の心臓もとまるばかり。

\*雪—顔

1129

ついに娘はいいました、『あなたは実の母にもまさるお方、その人に私の話は何になりましたよ——ばかげたお伽噺！私に悪いくじを引き当てた女、私を問いつめたら、神をそしりたくなくなるでしょう。』

1130

私は考えました、へ夜明け前に太陽を呼び出してはいけない、分別を失って、気がいいになるのが落ちだ。

潮時に呼びだすべきだ、どんな願望にもその時がある。今はこの太陽と話す時ではない、と知るべきだ。』

1131

私は太陽の姫をかくまうことにきめました、その光を隠すのは容易なことではなく、

たくさんひだをとった金襴をかけることにしました。涙は霰となりバラを凍らせ、まつ毛からは雪の嵐でした。

1132

私は太陽姫に一室をあてがひ、これを極秘にして、どんな人にももらさず、

ネグロ一人をかしずかせて、警戒怠らず、時どき見舞いに行きました。

1133

娘の憐れなようすを、どうお伝えしたらよいか、昼も夜もひっきりなしに泣いてばかり。

慰めの言葉かけると、そのときはすなおに従うのです。今も彼女を思えば、どうして私が生きられたのか、悲しい。

1134

娘の部屋にはいると、タフタの前には涙の池、紺青の淵<sup>\*</sup>は漆黒の楕<sup>\*</sup>かこまれ、

深い池からは幾すじもの流れがあふれ、サンゴとルビーのあいだに真珠の双子<sup>よたご</sup>が燦<sup>\*</sup>いています。

1135

ですから、あれこれ聞く時をとらえようがありません。『あなたは誰で、どうしてそんなに蒼ざめているのか』と。

血は早瀬となつて泉からあふれるばかり。木石ならぬこの身で、よくもこれが耐えられたものね。

1136

娘はベッドに横になろうとはせず、着たまま、ヴェールをかけたままで、

手枕して眠ります。千度頼んで、やつとすこし食事をとってもらいました。

\* 紺青の淵——彼女の目

1137

ぜひお聞き頂きたいのは、娘のウェールと服のことです。稀なもの、高価なものは、たいがい見馴れています、それがなんの織物か、こんどばかりは見当がつかませぬ、それには織物の柔らかさと鉄の強さが合わさっています。

1138

こうして娘はかなり長くこの家にいました。

夫は秘密を守れそうもないので、話すわけにはいきませぬ。

へ打明けたらあの恥知らずは、私を裏切るにきまつてる！  
そこに私の苦勞がありました。

1139

へでも打明けぬとしたら、どう娘を世話したらいいか？

娘に何が必要で、どんな人が役立つのか、わかりません。

夫に嗅ぎつけられたら、もう施すすべはない。

でも太陽のようなあの光を、どう隠すことができようか？

1140

考えれば、自分ひとりではなんにもできやしない。

夫にいつてしまおう、ウセンに隠し立てはまずい、

裏切らないように神かけて頼めば、あの人だって、

誓約に背いて己が魂を滅ぼすようなことはしないだろう。へ

1141

そう考えて、ある日、夫をちやほやもてなし、

ころあいを見ていきました、『ひとつ相談があるのですが、

その前に、他言しないことを、固く誓って下さい。』

彼は誓いました、『岩にぶつけて、この頭を割るがいい！

1142

おまえから聞いたことは、死ぬまで、誰にもしゃべらぬ、

老人にも、若者にも、友人にも、敵にも。』

そこで私はウセンにすっかり打明けました。

『では、その太陽のような娘にひきあわせましょう。』

1143

私は夫を娘の部屋につれていきました。

すると、とたんに太陽の光をあびて、彼は仰天しました、

『これはなんだ、こんなふしぎがどこにある？』

これが地上の生きものなら、私は神の怒りに触れよう！』

1144

私は答えました、『地上の生きものかどうか、私も知らぬ。

あなたに話したこと以外は、いっさい知らないのです。

では、娘の素性や悩みを、いっしょに聞いてみましょう、

よく頼めば、話してくれるかもしれせんよ。』

1145 ふたりは娘に近づいて、やさしくなぐさめ、

やがていきました、『あなたの嘆きの炎は私たちをも焼く、  
いってごらん、何が曇った月を晴らすことができるのか？  
何がああなたのルビーの色をサフラン色に変えたのか？』

1146 この言葉が彼女の耳にとどいたかどうかは、わかりませぬ。

バラはとじられたままで、真珠は見えず、

顔をあげると、蛇が乱雑にもつれからまりました。

太陽は龍にかげられ、あたりは暗くなりました。

1147 娘は返事する気にならなかったようです。

何か不機嫌に、虎のように、身をすくめて、

また涙の滝つ瀬に溺れていきました。

『なんにも知らないの、かまわないで！』というだけ。

1148 彼女の前にすわって、私たちももらい泣き。

声をかけたのが悪かったとしたら、もう黙るほかはない！

わずかに気安めの言葉かけるだけ。

果物をすすめましたが、手に取ろうともいたしませぬ。

1149 ウセンはいいました、『いろいろと心配してもはじまらぬ。  
あの頬は太陽と同じだから、人間にはキスできまい。  
見て、百二十倍苦しむくらいなら、めぐらになる方がまだ、  
子どもたちが大切なら、生死は神にお任せするように！』

1150 やがて私たちはため息まじりに部屋を出ました。

娘に会うはうれしく、別れは悲しいと知り、

商売の暇を見ては、娘を見舞いました。

1151 私たちの心は彼女の網にかたく巻きこまれたのです。

時は流れ、昼と夜は交代しました。

ウセンはいいました、『暫く王にお目にかからないので、

お土産もって、ちょっといつてくるぞ。』

私は答えました、『どうぞ、ごゆっくり。』

1152 ウセンは真珠や宝石をお盆に盛りました。

私は念を押しました、『酒呑みのお役人に会うでしょうが、

娘の秘密を守らなかつたら、私は生きちゃいませんよ！』

彼はまた誓いました、『首を斬られたって、いうものか。』

\*蛇—髪



1153 ウセンは王の宴席に行きあわせました。

ウセンは王の仲よし、王は彼に目をかけています。

王はウセンを隣に招じ、お土産を受取りましたが、さて、酔い痴れ商人が何をしてくすかどとごらんあれ！

1154 王はすでにたくさん酒杯を重ねていましたが、今またウセンを相手にしきりに大杯を傾けます。

ウセンはコーランも、メッカも、知るもんかという気持、へべれけウセンは用がない、驢馬に角は余計ものゝ次第です。

1155 へべれけウセんに、王はお世辞をいいます、

『こんどのおまえの贈りものには胆をつぶしたぞ、こんな大きな真珠やルビーをどこで手に入れたのか？ 私にはその十分の一のお返しもできぬ。』

1156 ウセンは一礼していいました、『何を仰る、わが君、

光あまねく、万物に命賜いしは、わが君ではありませぬか。

私が持ついつさいの富は、そも誰のものでしょうか？

母の胎内からのもの？ いや、すべて君からの授かりもの。

1157 してみると、君には、私に感謝なざる筋合はございませぬ。それとは別に、私には王子に差上げる花嫁候補があり、それに対してこそ、必ずや感謝して頂けるとぞんじます。

君の統治はますます楽しく榮えていくことでしょう。』

1158 ウセンは誓いを破り、信仰のとりでを破って、太陽のように輝く娘を見出した次第を物語りました。

それは王をよろこばせ、心楽しくさせました。さっそくその娘をつれてこい、というご命令です。

1159 そうとは知らず、のんびり家にくつろいでいますと、いきなり親兵隊の隊長が現われました。

規則どおり、六十名の部隊です。

私は度胆をぬかれて叫びました、『まあ、なんでしょう！』

1160 隊長は一礼していいました、『王のご命令なのです、

ウセンさまが太陽の娘のことを王に約束なさいました、

ここに出して下さい、私たちがお伴しますから。』

私は空が割れ、神のお怒りが山に落ちたように感じました。

1161 とほけて訊いてみます、『娘って、どんな娘のこと？』

『なんでも、顔から光が出る娘だそうですよ。』

万事休す、これで私もおしまいだ。

はげしい震えがきて、立つことも、坐ることもできません。

1162 やつと娘の部屋にいつて、涙ながらにいいました、

『なんてまつ黒なくじを引いたものでしょう！』

天のお怒りが私に下り、望みはむなしくなりました。

私は裏切られ、王があなたをお望みなのです。

1163 娘はいいました、『おねえさま、お嘆きなさい、ますな！』

私は不幸な運命につきまとわれているのです、

良いことには驚きますが、悪いことには驚くものですか！

どんな悲しみも私には新しくはなく——古いのですもの。』

1164 ひとしきり目から真珠の粒がこぼれましたが、

立上ると、もう女虎のように、恐れ知らずに見えました。

喜びは喜びの中になく、悲しみは悲しみの中にないようす。

彼女はショールを所望しただけで、それで顔を隠しました。

1165 私は無限の財を秘めた宝庫に入り、  
真珠や宝石を持てるだけ持ち出しました。

ひとつひとつが一つの都市にも値するものばかり。

それを胴巻に入れて、娘にしまてやりました。

1166 『これはどこかでああなたの役に立つかもしれないからね。』  
そういつて、彼女を親兵隊に引渡しました。

王は出迎え、警鐘が鳴り響き、えらいさわぎです。

太陽姫はうつむき加減に、静かに足をはこびます。

1167 これを見逃したら大変だ、と八方から人が押寄せ、  
警護の者もこれをなだめ、阻止することができません。

イトスギのような娘が近づいてくるのを見て、

王はおどろきました、『ほんとに、太陽だ！』

1168 太陽のように、彼女は、見る人をまぶしくさせました。

王は眩きます、『私も様々なものを見たが、これははじめて、

神でなければ、このような女性を思い浮かべられまい！

恋するなかれだ、気がいになりたくなければだ。』

1169 娘を隣に招じて、王はやさしく言葉をかけます、

『そなたはこの生まれで、なんという名前か？』

太陽のような娘はひと言ももらしませぬ、

悲しい顔うつむけて、氣をはずめているふうです。

1170 王がなんと言おうと、彼女はてんで耳を貸さず、

心は遠くにあつて、何か深く考えているようでした。

バラは閉ざされ、真珠は隠されました。

これでは、誰が何を理解することができましよう？

1171 王はいいました、『これをどう解し、どう扱ったものか？

この二つの考えのほかには、なんの分別もありえない。

彼女が恋をして、その恋人のことを思っているのだとすれば、

ほかのことにまわっていられず、誰とも話ほしなはず。

1172 また彼女が何か非常な知恵者だとすれば、

喜びは喜びの中になく、次々の悲しみも悲しみでなく、

幸福も不幸もお伽噺にすぎない、と観ているだろう。

どこにいようと、その思いは、鳩のように高く舞うのみ。

1173 今はただ、王子の凱旋を待つことにしよう、  
願わくば、この太陽を彼の手に渡したいものだ。

うまくすれば、その際、彼女から話があるかもしれぬ。  
それまで青い月は太陽から離して、休ませておこう。』

1174 この話の王子というのが、またりっぱな勇士なのですよ、

顔も、姿も、また気立ても申しぶんありません。

その時は征旅の途中で、かなり長い戦争でした。

王はこの王子の花嫁に太陽姫を予定したのです。

1175 彼女のためにさまざまな衣裳が整えられました、

宝石をちりばめたりっぱなものばかりです、

ひとつのルビーでつくった王冠を頭にのせ、

すきとおった水晶の房がバラを飾りました。

1176 王は命じました、『王子の寝殿を片づけろ。』

そこにはとんと純金の玉座を設け、

王自ら太陽姫の手をとって、そこに坐らせ、

見る人の目をよろこばせました。

1177

王は召使九名を呼んで、彼女のドアの前におくと、  
また酒宴の席にもどりました。

王はウセンに太陽姫にたいするお礼をうんと奮発し、  
ラッパや太鼓で囃したて、お祝い気分を盛上げました。

1178

酒は溢れ肴は山の如く、宴席はいつ果てるとも見えませぬ。  
太陽姫は運命にいました、『おまえはどうしてこんなに、  
つらく当るの？ 私をどこへ運び、誰の手に渡すの？  
いったい私はどうしたらいいのだろうかね！』

1179

さらに考えます、へい、え、花の色を消してはいけない、  
やってみれば、案外、敵に勝つかもしれないじゃないの？  
死ぬ前に自分を殺すなんて、つまらないじゃないの！  
不幸に落ちたときにこそ、知恵は働かすものでしょう。✓

1180

彼女は番人たちを呼びました、『よく聞いて下さい、  
私の番をするなんて、おまえたちは騙されているんですよ。  
私を花嫁にするなんて、王の大きな思いちがいですよ。  
ラッパや太鼓で囃したてても、むだ骨折りというものです。

1181

私には、王女の座ではなくて、別の道があるのです、  
神はこの国のりっぱな王子から、私を逃がして下さるはず、  
いくら私を引止めようとなさっても、むだなのです、  
この国で暮すことは、私の性に合わないのです。

1182

今にも私はこの小刀をこの胸に突き立てるでしょう、  
すれば、その科まで、おまえたちもこの世にお別れのはず、  
そのくらいなら、この高価な宝石を受取って、  
そつと私を逃がすほうがいいわ。でないと、後悔しますよ。』

1183

胸巻から真珠と宝石をとり出し、  
すきとおった一枚石のルビーの王冠もぬぎ、  
分け与えながら、いいました、『さあ、受取って、  
私を逃がして下さい。神さまだつてきつとお喜びだわ。』

1184

召使たちは高価な宝石に目がくらんで、  
恐ろしい王が、触れ役ぐらいにしか思われなくなり、  
彼女をひそかに逃がすことにきめました。  
ごらんなさい、地獄の沙汰も金次第ですわ。

1185 でもね、金はこれを愛する人に決して喜びを与えません。

欲にぎりなく、彼は死ぬ時まで歯ぎしりをつづけ、

儲けても、損しても、たえず運命にぐちをこぼす。

金は人の魂を俗界に縛りつけ、その飛躍を妨げるものです。

1186 彼女の頼みを引受けると、

番人のひとりはおのが服をぬいで、彼女にかぶせ、

宴席とは別のドアからつれ出しました。

蛇の餌食にならないで、月はぶじに残ったのです。

1187 召使たちもやはり彼女といっしょに逃げ去りました。

娘は私の名を呼んでドアをたたきます。

私は彼女を抱取りましたが、おどろいたのなんのって！

でも、追手を恐れて、彼女は中に入らず、こういいます、

1188 『あなたの贈りもので、私は自由を買いました、  
神はあなたに大なるお恵みを賜わるでしょう。

でももはや私をかくまうことはできませんから、

王の追手のかからぬうち、早く馬で逃がして下さい。』

1189 私は大急ぎでうまやに走り、駿馬を引出して、  
鞍をおき、勇み立って嬉しげな娘をそれに乗せました。

まるで獅子をふんまえた太陽です。

1190 まいた種を刈り取ることができず、私の努力はむだでした。

日が傾くころ、噂はひろまり、追手が現われて、  
都を封鎖し、追跡がはじまりました。

1191 訊問に私は答えました、『この家であの娘が見つかったら、  
王に対する罪人として、この血で責任をとりますよ。』

捜索しましたが、何も見つからず、空しく引返しました。

その時から王とその一族は浮かぬ顔になり、

ご殿をのぞくと、みんな喪服を着ていました、

1192 『太陽が隠れたので、光が足らなくなったんだよ。』

月の行方のごとは、さておいて、

まず私を脅かしたあの男のことを申し上げましょう。

私は不幸な女で、彼の牝山羊、彼は私の牡山羊でした。

男は卑劣さで泥にまみれ、女は恥知らずで墮ちるものとか。

1193

夫は趣味も格好も悪く、私はいつも不満でしたのに、

あの男は猷酌侍従として、宮廷でも羽振りよく、ふたりは、愛し合っていたのです。彼の喪には服しませんでしたけれど、その血の杯をくれたなら、私は喜んで飲んだでしょう！

1194

女の浅はかさから、太陽姫の出現のこと、

その秘密の脱走を、うっかりあの人もらしたところ、

友ではなく、敵として、私を告発するといきまわります。

その彼も今は消えて、ほんとに、助かりました！

1195

なにしろ、何かにつけ彼はすぐ脅かしの手を使ったのです。

あなたを招いた時、まさか彼がくるとは知りませんでした、ところが、これから行くとの知らせに、私はめんくらい、召使を送って、あなたに断りを伝えさせたのです。

1196

あなたは引返さず、あなたの光を持っておいでになり、

あの人と顔が合って、斬合いがはじまりそうになったので、生きた心地もなく、私は震えておりました。あの人は、口先だけでなく、心から私の死を望んでいたのですもの。

1197

あなたに殺されなかったら、あの人は宮廷に出て、

憤怒に燃えながら、私を売渡したでしょう。

王は容赦なくこの家を叩き潰し、子どもたちの血を流させ、それから石で私をめった打ちにしたでしょう。

1198

その蛇の目から首尾よく助けて頂いて、

お礼の言葉もございませぬ！

今からはおのが運命に心おきなく身をまかせ、

もう死も恐れませぬ。ほんとうによかったこと！

1199

アファンジルはいった、「本にも書いてあるではないか、

敵の中で一番恐ろしい敵は、友のふりをする敵である、と。

だから知恵ある人は、めったに本心を見せないのだ。

もう安心していい、あの男は亡者の仲間になったのだから。

1200

さてこんどはその太陽姫の話だが、

彼女を送り出してから、何かたよりを聞いたのか？」

ファチマはまた泣きだして、涙のなかから答えた、

「野山を照らす太陽のような光は消えました！」



第47章

ネスタン姫が

カッジのとりこになる物語

1201

たまゆらの浮世よ、おまえはサタンに似て、まやかした。ずるさを隠して、いっかな正体を人に見せぬ。

太陽の如く輝く人をどこに隠し、どこに連れ去ったのか？ 今ぞ知る、どこで何が起ころうと、この世はすべて空しい。

1202

ファチマはいった、「太陽は私のもとを離れ、それとともに私の命と魂も飛び去りました。

その日から私は絶えず熱い炎に焼かれ、

目からあふれる涙の泉を潤らすことができないのです。

1203

私は薄情になり、いつそ家も子どもも憎らしく、寝ては夢、覚めては幻に浮かぶのは、あの娘のおもかげ。

ウセンは誓約に背いた不信の痴れ者、

さすがに気がさすか、私のそばにはよりつきませぬ。

1204

ある日、誰そ彼は……の夕まぐれ、

はたご屋の前を通りかかって、その門をのぞき、

また彼女のことを切なく思い出しました、

〈男の誓約なんて、いい加減なものじゃないの！〉

1205

どこからか、四人づれの男が着きました。

一人は兵隊らしく、あとの三人は亜麻の旅支度です。

町で買ってきた飲みもの、たべものをひろげ、

飲み食いしながら、賑やかなおしゃべりをはじめます。

1206

彼らの話し声が耳にはいつてきます、

『道づれになって、お互いに愉快だが、

実はお互いに相手が誰で、どこからきたかを知らない。

順番にめいめいそれを話すことにしようじゃないか。』

1207

これは巡礼たちなどのあいだにもよくあることです。

兵隊がはじめました、『私はね、最高の光を見たんだよ、

おまえたちが蒔くのはキビにすぎぬが、私が蒔くのは真珠、

私の話はおまえたちの話とはくらべものにならぬだろう。

1208

私はカッジェチー国に仕える者だが、

あるとき大王は重い病におかされて、亡くなり、

つづいて王妃の後見役かつ遺児たちのお守役も死んだ。

この王子たちは、いま、大王の妹君に世話されている。

1209

妹君はドゥラルドゥフトといい、まるで岩のように堅い女、

彼女自らのほかには、誰もその部下を傷つけられない。

世話する甥はロサンとロディアの二人で、まだ幼く、

今やカッジェチー国はこの女の支配下にある。

1210

ある日、遠い国に住む彼女の妹の死の知らせがとどいた。

大臣たちはいそいで会議をひらいた、

へ大地を照らす星の消滅を、なんと女王の耳に入れよう？

巨万の軍勢の大將ロシヤクが立った。

1211

ロシヤクはいったへ殺されたって、哀悼式には出ないぞ。

野において、強盗を働き、えものを集め、

金持になって帰ってからも、間に合うのだからな。

女王が妹の哀悼式にでられる時には、きつとお伴するよ。』

1212

彼はとりまきに行った、へ私のあとにつづけ！

選ばれた兵百名が彼に従い、

夜は相手をさぐり、昼はそれを襲撃して、

たくさんさんのキャラバンから財宝をむしり取った。



1213 ひどくまっ暗なある夜のこと、  
野の彼方にふいに明るい光がきらめいた。

「へおや、あれは太陽が地面におりてきたんじゃないか？」  
私たちはどきどきして、あて推量をはじめた。

1214 「朝焼けだ」という者、  
「あれは月だ」という者。  
見定めようと、部隊は光りものに近づいていき、

すばやく展開して、それを遠巻きにする。  
光りものから、こちらに呼びかける声が聞こえた。

1215 「へおまえたち、騎馬の衆はどここの部隊かな？」  
当方はグランシヤロからカツジエチーにおもむく大使だ、

道をあけてくれ！聞いて、私たちは包囲の輪をちぢめる。  
さながら太陽みたいな感じの騎士の顔が見えてきた。

1216 それは光を発するふしぎな顔である、  
その光は、太陽の光のように、あたりを照らしている。

だが、発する声は細く消え、  
歯にためらいのひらめきがある。

1217 私たちはさらにこの太陽と言葉を交して、  
彼が戦士に偽装していることに気がつき、

ロシヤクも、馬をよせて、それが女であることを見破った。  
私たちはこの女を手放さず、生けどりにした。

1218 そうしてまた声をかけた、  
「へほんとのことを言うんだ、  
おまえはどここの何者で、何しにここへきたのか？」

返事はなく、女は熱い涙の壺をひらいた。  
蛇にのまれた満月の哀れ！

1219 あからさまにも、ほのめかしにも、  
彼女は自分の素性をあかさなかつた。  
話をするにも、眉をよせて、顔をそむけ、

その目は、コブラのように、怪しく私たちをまどわした。

1220 ロシヤクは命じた、  
「へ聞くな、いうにえぬわけがあるか、  
世に類のない運命なので、うまく話せないのかもしれないね。  
われらの女王の運命は世の人の羨望のまどだが、  
それは神がいつも珍しいものを彼女に贈るからだ。」

1221

この女は、女王に差上げるよう神から送られたものだろう。これを差上げれば、女王はどんなにかお喜びになるだろう。かくまっても、いつかは見つけられて、第一に、女王のお怒りを蒙り、われらが大恥かくことにもなるろう。』

1222

私たちはなるほどと思つて、別に異議をとなえず、その女をつれて、カッジェチーにひきあげた。もう女にはかまわず、うるさく声もかけなかったが、女は泣いて、熱い涙で頬を洗っていた。

1223

私はロンチャクにいった、へしばらくお暇<sup>いとま</sup>賜わりたく、実はグランシャロの都に用事がございますので。』お暇が出たので、これからグランシャロに行き、絹織物を持ち出して、また仲間を追いつくつもりなのさ。』

1224

兵隊の物語は道づれを大いに喜ばせましたが、私もそれを聞いて、涙のかわく思いがしました。たしかに、物語の女は、わが太陽姫です。私はいくらかほっとしました。

1225

すぐその兵隊を呼んで、頼みました。『いまのお話、もう一度くわしくうかがいたいのですが。』兵隊はすでに私が聞いたことをくりかえしました。その物語は私を元気づけ、生き返らせてくれました。

1226

うちには魔術にすぐれたネグロの召使が二人います。ひと目につかずに現われたり消えたりすることができません。私はこの二人をカッジェチーにさし向けました。『うまく立回って、あの方のようすをさぐっておいで。』

1227

三日の後、二人は早くも帰ってきました。『女王が船出の支度している所に、あの方は送られました。まるで太陽ですから、誰もまともには見られないのですが、ドゥラルドゥフトは早くもロサンの花嫁にときめたようす。』

1228

こういふ渡したとのこと、へ娘はロサンの花嫁にするが、今はこの胸が炎に包まれているので、婚礼どころではない、いずれ帰ってきてから、式をあげることにする。』あの方は城の塔に幽閉、奴隸一人にかしずかれています。

1229

女王は、魔術の達人たちをお伴につれていったそうです、それは敵が手ぐすね引いて、途中が危険だからとのこと。あとには遅りぬぎの戦士たちが留守を固めています。女王が妹の悔みを済ますには、かなりの日時がかかる由。

1230

カッジの都は未だ敵に踏みこまれたことはございませぬ。というのは、都が高くて長大な岩壁の中にあるからで、岩壁には秘密の通路、上にのぼる裂け目があるだけです。そこにあの方がひとりおかれ、近づく者を照らしています。

1231

屈強な戦士たちがいつも秘密の通路を見張っています、その数およそ一万、ひと癖ありげな面構えの奴ばかり。都の三つの門ごとに、戦士三千名ずつ配置されています。』太陽姫の行方だけは、これでわかった次第です。』

1232

アフタンジルはこの物語を聞いて、どんなに喜んだか！でも、それは色にも出さず、ひそかに神に感謝した。

へ無縁の女からこんなうれしかったよりを聞こうとは！

1233

彼はファチマにいった、「そなたは真に頼もしい人だ、聞きたいことを、はつきり話してくれたのだから、だがカッジのことは、もっとくわしくわからぬだろうか？カッジは肉体がないはずなのに、今の話では、人間並だ。

1234

とりこになった娘には深く同情するけれど、肉体のないお化けに、人間の女が何になるのかふしぎだ。』ファチマは答えた、「そのご不審はもっともながら、あれは実はカッジではなく、切立つ岩場に住む人たち。

1235

それをカッジと呼ぶのは、魔術の達人たちが、あそこにひとつにかたまっているからです、いくらでも人を害するが、自分がかすり傷ひとつ負わず、手向かう者はさんざんな目に会って追い帰されます。

1236

怪しい魔術を使って、敵勢を盲目にするかと思えば、大風を起こして、船をひっくり返し、水を干あげて、陸地のように、そこを突走り、その気なら、昼を夜に変え、闇を照らすこともできます。

1237

ですから、誰にもカッジと呼ばれているのですが、  
 正体は私たちと変らぬ血も肉もある人間なのですよ。」  
 アフタンジルはお札をいった、「お蔭で私の火は消えた、  
 ほんとに、いい話を聞かせてくれた。」

1238

アフタンジルは涙を流して、心から神を讃えた。  
 へ神よ、悲しみをやわらげ給う汝に感謝し、  
 われらの知覚を超えて存在し給う汝に感謝する、  
 現に汝の慈悲が突如われらの上に降りかかりしことをー

1239

アフタンジルは涙とともに神に感謝を捧げた。  
 ファチマは神をねたんで、また炎に焼かれたが、  
 アフタンジルはよく彼女の愛情に耐えた。  
 ファチマは彼の首を抱き、顔にキスした。

1240

その夜ファチマはアフタンジルと共寝した。  
 勇士はその水晶の頬に女の頬を引きよせた。  
 チナチン姫を思うと、ひそかな戦慄が身内を走り、  
 狂った心はけものと化して森へ飛んだ。

1241

アフタンジルはひそかに涙を流した。  
 漆黒の池に漆黒の船が浮かんだ。  
 彼はいった、「見よ、ミジヌールよ、バラを離れた鴉が、  
 いま鴉のように、雑草にとまっているのを。」

1242

流れる涙のなかで、堅い岩もとけるだろう。  
 漆黒の森は堰となったが、涙はなおバラの野にあふれた。  
 ファチマは、勇士に添い寝して、鴉のように泣いた。  
 バラを見つけると、鴉は自分を鴉のように感じるものだ。

1243

夜が白むと、アフタンジルは浴室に行った。  
 女はたくさんの衣裳、マントの頬をはじめ、  
 あらゆる香水、まっさらの下着類まで取揃えた。

1244

「ご遠慮なく、ご随意にお召し下さい。」  
 アフタンジルはいった、「今日は私の秘密を打明けよう。」  
 この日まで、彼は型どおりに、商人に扮していたが、  
 今そのみごとな身体に、勇士にふさわしい服をまとった。  
 美々しさは百倍し、獅子は太陽と化した。

1245

ファチマは食卓をととのえて待っていた。  
勇士は晴れ姿に笑みをたたえて現われた。

商人のおもかげが消え失せたのに、女は驚いた、

「まあ、そのお姿なら、誰だって、よけい夢中になるわ。」

1246

ファチマは男の美しさに逆上したが、

彼は答えず、わずかに微笑するばかり。

へこの女はまだ正体に気づかぬらしい。そう思つて、

なお恋の奴を装ったのは、ほかに出口がなかったからだ。

1247

食事がすむと、二人は別れた。

男は一杯やつて、横になり、ぐっすり眠つた。

暮れ方、目をさまして、ファチマを招いた。

「今自分ひとりです、おいでを待つ。」

1248

ファチマがはいると、そのため息が男の耳を打った、

「イトスギのようなお方に、私はすっかり燃えています。」

彼は女にじゅうたんの座ぶとんをすずめた。

まつ毛の影がバラの園に落ちていた。

1249

アファンジルはいった、「この話はね、ファチマ、

蛇に噛まれたように、おまえを震えあがらせるかもしれないぬ。

だが今までおまえは私についての真実を耳にしなかった。

実はまつ黒なまつ毛に、まつ黒な木立に、殺されたこの身。

1250

おまえは私を商人と見、キャラバンの頭目と見ていたが、

私は実は強大なアラビア王の侍大将、

幾千万の軍勢をひきいるばかりか、

多くの財宝、多くの倉庫もわが手にある。

1251

おまえを頼もしく、よき人と見て、打明けるが、

王には、太陽のように地上を照らすひとり娘がある。

それが私を燃やし、私を溶かすその人で、

ある人を捜しに、私を送り出したのだ。

1252

私が捜していたのは、おまえが援けたあの娘、

その太陽姫を尋ね、私は広い世界をめぐつた。

その姫ゆえにさすらいつづける青い獅子も見つけたが、

今、彼は身心ともに滅亡の淵にある。」

1253

アファンジルはファチマに物語った、  
自分のこと、虎の皮をまとったタリエールのこと。

「おまえは、まだ会ったことがないその人にとって、  
鴉の羽のようにもつれたまつ毛にとつて、頼みの綱。

1254

手を貸してくれ、ファチマ、共に肩を組んで援けてやれば、  
彼らに喜びをもたらすことができるかもしれぬ。

しかもそのことで、私たちは世に賞め讃えられよう、  
相愛の人たちにもふたたび相見る日がくるのだから。

1255

とりあえず、魔術に優れた召使をカッジェーチーに送り、  
私たちの知るかぎりのことを太陽姫に伝えさせ、

姫にも真実を語らせて、救助の方策を立てようじゃないか。  
おお、カッジ王国に対する勝利が我らに恵まれんことを！」

1256

ファチマはいった、「まあ、ほんとにふしぎなお話、

これもみな神さまのお思召しでしょう、生涯忘れないわ！」  
彼女は鴉のようにまつ黒な魔法使いの召使を呼出した。

「ご苦労だが、これからカッジェーチーに急いでおくれ。

1257

おまえの魔法がお役に立つ時がきたんだからね、  
私の悲しみの炉の火を早く消しておくれ。

病をなおす見こみがついたと、あの太陽姫に伝えるのさ。」  
男は答えた、「明日にも、お望みの知らせを持参します。」

第48章

ネスタン姫へのファチマの手紙

1258

ファチマは手紙を書いた、  
「太陽の君よ、  
遠く離れた者すべてを寒さに凍らせ、  
やさしく、美しい声で、優雅に語り、  
水晶とルビーをひとつに合わせ持つ君よ！」

1259

私はあなたからなんにも話してもらえませんでした、  
でも今、事のいきさつを知って、ほっとしたところです。  
タリエールの無事を知れば、あなたもきつと喜ぶはず、  
望み叶えておふたりがバラと蓮になりますように。

1260

彼と兄弟になられた方が、あなたを捜しに見えたのです、  
アフタンジルといって、アラビアに聞こえた勇士、  
ロステワン王の右腕といわれる侍大将。  
ぜひあなたのことを知りたいというのです。

1261

この使者をさし向けたのは、カッジエチーのことや、  
カッジの部隊が帰ってきたかどうかを、知りたいため、  
またそこにいる軍隊の実数や、  
あなたの見張りのようすを、知りたいためです。

1262

何がそこに起こっているか、知らせて下さい、  
あなたの恋人にも、一筆したためるように。  
今までの悲しみは、すべて喜びに変わるでしょう、  
できるなら、相愛のお二方を一つに結んであげたいもの。♡

1263

ファチマはこの手紙をあつ練達の魔法使いに渡した、  
「あの太陽姫にしかと渡すんですよ！」  
魔法使いは黒いマントふうのものにくるまると、  
とたんに姿を消し、屋根の上を飛んでいった。

1264

強弓の弦を放れた矢のように飛んで、

黄昏の色濃くなった頃には、もうカッジエチーに着いた。

彼は諸門を守る無数の兵の目をくらましつゝ、

太陽姫の許へ待望のたよりをもつていく。

1265

城塞の閉った門も、彼には明け放しとおなじこと。

マントをまとった長髪の黒人がはいつてくるのを見て、

太陽姫はまたも不幸の到来か、と震えあがる。

バラはサフラン色に、葦は紺青に変つた。

1266

黒人はいった、「何をそんなにびっくりあそばす？」

私はファチマの召使、そのお使いで参つたのですよ、

この手紙をごらんになれば、お疑いは晴れるでしょう。

日の出をお待ちになれば、バラはしおれないものです！」

1267

太陽姫は思いもかけぬファチマのたよりに驚いた。

扁桃アイキンドは割れて、黒いまつ毛の奥に光がきらめいた。

召使は手紙を彼女に渡した。

姫はため息し、読みながら、それを涙でぬらした。

1268

姫は訊いた、「私をお捜しなさつてるのは、どんなお方？」

私が無事に生きてることを、どこからお耳に入れたの？」

召使は答えた、「はい、私の知るところを申上げれば、

まず、あなたがお姿消してから、太陽が暗くなつたこと。

1269

その時から、ファチマの胸は槍にすらぬかれ、

流す涙は海にもたとえられたでしょう。

私は前にも一度あなたのようなすあるじに知らせましたが、

その知らせでいよいよ彼女の目は乾かぬことになりました。

1270

さきごろ、どこかの美々しい騎士がお見えになり、

あるじからあなたのことをくわしくお聞きになりました。

それがあなたを捜している勇士なので、

あるじともども、私をここへ送り出したのです。」

1271

姫はいった、「いいことを聞かせてくれました、

ファチマにも、誰が私を攫さらつたかは見当つかぬようですが、

私を燃え立たせる方が、どこかにおいでとはわかりました。

早速返事を書きますが、おまえからも私の氣持を伝えて。」



ファチマへの

ネスタン姫の手紙

1272

太陽姫は書いた、へ私の身を案じて下さる優しい母君よ！  
 ごらんのとおおり、この世は私を虜囚の身として、  
 今までの悲しみにさらに悲しみをつけ加えましたが、  
 今受取ったお手紙は私を大きく慰めてくれました。

1273

二人の魔法使いの手からあなたに援けられたのも束の間、  
 私はカッジどもにとらわれの身。  
 私ひとりを見放されたとしか考えられませぬ。  
 運命に見放されたときか考えられませぬ。

1274

ここには、世間のことはわかりませぬが、  
 カッジの女王も、その部隊も、まだ帰国しようすはなく、  
 それでも数知れぬ軍兵が私を見張っているのです。  
 どんな力も私を救い出すことはできないでしょう。

1275

私を尋ねてお宅に見えたお方の努力も、その甲斐なく、  
 ただ苦しみ、燃えるだけに終るでしょうが、  
 でもそのお方が太陽をごらんになったことは羨ましい限り。  
 それなして、\*私の生涯がこんなに惨めであるものを！

1276

前に私のことをあなたに打明けなかったのは、  
 私の口からはうまくお伝えできないからでした。  
 私をあわれみ、また私を捜そうとはなさらぬよう、  
 私の恋人にお伝えください。

1277

苦しむのは、私ひとりでたくさん、  
 この上、彼が命を落としたら、私は二度死ぬことになる。  
 いったいは無益——これが悲しい真実です。  
 彼がこれに耳傾けぬようなら、黒い石で私を殺すがいい。

1278

彼にたよりするように、とのおすすめに甘えて、  
 ここに彼から贈られたヴェールの切れ端を送ります。  
 これは、私の運命のように、黒い色ではあるけれど、  
 私にとって何よりも大切なもの、何よりの慰めなのです。♡

\*それなして——タリエールなしで



第50章

愛する人への

ネスタン姫の手紙

1279

やがて姫はすすりあげながら、愛する人への手紙を書く。

その涙のなかで、燃えあがる炎は消え、

その文面は石の心をもやわらげるだろう。

バラはひらいて透明な水晶を見せた。

1280

へなつかしの君よ、この手紙はわが丹誠の果実、

ペンはペンではなくて、胆汁にひたした肉身、

紙は紙ではなくて、私の心とひとつになったそなたの心。

心よ、暗い心よ、解けないで。互いに結ばれてるままで！

1281

恋しの君よ、つれなき世のさまを見給え。

どんなに陽が照ろうとも、私にはいつさいが闇、

世を知るがゆえに、賢い人は世をさげすみ、遠ざける。

悲しや、そなたなき明け暮れのいかにつらいことか！

1282

愛しの君よ、呪われし時がいかにわれらを引裂いたことか。

そなたの喜ぶ顔を私は見ることができなかった。

そなたの槍につらぬかれたわが心をなんとしよう？

そこに秘められたものは、今そなたにひらかれたのです。

1283

そなたが無事でいようとは、今の今まで思いもしなかった。私にしても、命と力が永らえようとは思ってもいなかった。今、すべてを知って、あらためて神の前に頭をさげます。今までの悲しみは喜びと同じになったのです。

1284

そなたの命は、傷つき、破れはてたわが心に、希望のあかりをともして下さった。

そなたゆえに失われた私を思い出して下さい。

私はわが植えつけた愛を育てているのです。

1285

愛しの君よ、ほかに書くことは何もありません。

舌が回らなくなるほど話しても、信じる人はないでしょう。

魔法使いどもから私を救い出したのはフアチマというお方。

だが、この世はまたいつもの悪い癖を出しました。

1286

この世は私の悲しみにさらに大きい悲しみを加えました。

運命はそれまでのあらゆる悲しみに満足しないで、

私をまた無敵といわれるカッジの手に引渡しました。

これが、愛しの君よ、運命のしわざなのです。

1287

私は目もはるかな高い塔にとじこめられています、ここにのぼる道は秘密にされ、上には番兵がついて、夜も、昼も、目を放すことがありません。

これに戦いを挑む者は、炎に包まれたように滅ぼされます。

1288

彼らをふつうの軍兵とってはいけません。

今の悲しみをさらに大きくして、私を殺し給うな。

そなたの死を見たら、火口ヒナのように燃えつきるでしょう。

別れ別れになってはいても、岩イハのような心もてこらえ結え。

1289

愛しの君よ、私がほかの人のものになるかという、

その疑いにお身をまかせ給うな。

そなたなしでは生きられないものを！

いざとなれば、岩から身を投げるか、小刀で喉をひと突き。

1290

誓って、そなたの月はそなたのほかの誰のものでもなく、

誓って、それは三つの太陽が現われても手にはいりません。

身を投げる大きい岩はすぐそばにあります。

身を投げれば、天の翼が私を抱きとってくれるでしょう。

1291

お祈りすれば、神は私を浮世の重荷から、

火、水、土、空気の混りものから、逃がしてくれるでしょう。

翼があれば、飛んでいって、望みのものを手に入れ、

昼も夜も太陽の光を仰ぎ見るでしょう。

1292

そなたなしには太陽もないはず。そなたがその片割れゆえ。

そなたは太陽の軌道にあり、そなたは異端の星ではない。

そこにそなたを見つければ、私の暗い心は明るくなり、

わが生がつかうとも、わが死は甘美なものになるでしょう。

1293

わが魂をそなたに預けた以上、死はもう辛くはありません。

そなたの愛はわが心に隠したので、そこに息づくでしょう。

別離の想い出は傷口をさらに大きくしますが、

私への愛のために、愛しの君よ、涙し給うな。

1294

インドへもどって、敵に包囲されている、

孤立無援のわが父を援け給え。

私を失って嘆き悲しむ彼の心を慰め給え。

そなたを思って、涙のかわくひまがない私を忘れ給うな。

1295

いつまで運命を嘆いていてもしかたないこと、

真心はきつと真心に通じるという。

そなたのために命ずれば、鶉が鳴いてくれるでしょうが、

生きているかざりは、そなたを思って私は泣いています。

1296

ここにそなたから贈られたヴェールがあります、

その端を切りとって、そなたに送ることにしました。

永遠に別れることなき印として、身につけていて下さい。

七つの天の車は怒り狂って私たちに向かってきたのです。

1297

恋人への手紙を書き終ると、

ネスタンはヴェールの端を切りとった。

かぶりものがとれて、長く美しい髪が現われ、

ポブラから、鶉の羽\*から芳香が立ちのぼった。

1298

召使はすぐグランシャロに飛び立ち、

あつという間にファチマの前にもどった。

望みが叶えられたのを見て、

アフタンジルは両手を天にあげて神に感謝した。

\* 鶉の羽——髪

1299

彼はファチマにいった、「お蔭で、好機に、事が運んだ、おまえの心づかいには、お礼の言葉もない。

一年も過ぎようとする今、猶余はならない、すぐ出立し、敵を滅ぼすその人を、カッジエーターにつれてこよう。

1300

ファチマは答えた、「私の火はまた燃えあがり、あなたから離れて、私の心は暗くなるでしょう。

でも、私に構わずお急ぎ下さい、狂気の人が気がかりゆえ。カッジ勢が帰れば、敵地へ近づくのは一層困難でしょう。」

1301

勇士はブリドンがつけてくれた従者たちを呼んだ、「長いこと死んでいたが、今私たちは生き返った、待ち望んでいたことを聞いて、元気が出た。

おまえたちもまもなくひれ伏した敵の傷口を見るだろう。

1302

急ぎ立帰って、ブリドン王にありのままを話してくれ。私も道を急ぐので、彼に会うことができない。

立帰ったら、雷鳴の如く、おまえたちの声を響かせてくれ。私が手に入れた財宝はみんなおまえたちに進呈するから。

1303

私がおまえたちに着る思は大きい。ブリドンと再会の日には、改めて謝意を表するつもりだが、

差当り、私が海賊から分捕ったものをとってくれ。けちくさいと思うだろうが、今はほかにあげるものがない。

1304

良い贈りものができないのは、旅先のことと許してくれ。」彼は財宝がいつばいの船を従者たちに与えた。

「では、おまえたちの国にまっすぐもどり、私の手紙を義兄弟ブリドンに渡してくれ。」



## 第51章

### プリドンへの

### アフタンジルの手紙

1305

アフタンジルは書いた、へ幸福満ち満ちた王者の王、  
強きこと獅子の如く、光をふりまくこと太陽の如く、  
天降って、敵の血潮を川のように流すプリドンよ！  
ここに私は、義弟として、遠くからおまえに敬意を表す。

1306

私は数かずの悲運を味わって、今その報償をえた。  
かねて考えていた仕事はうまくいって、  
太陽に似た姫の事件の真相がわかり、  
地獄に墮ちたあの獅子に、生気をとり戻す手掛りをえた。

1307

その太陽はいまカッジエチーに囚われの身、  
途中に合戦はあろうが、そこへ乗りこむのは私の楽しみ。  
水仙から水晶の雨が降り、バラは雨にぬれる。

1308

姫のそばに今カッジどもはいないが、軍兵はその数知れず。  
心うれしく、滝つ瀬と流れた涙は止まった。  
おまえとおまえの兄弟がいるところ、困難は軽くなる。  
欲することを、おまえはきつとやりとげるだろう。  
おまえの前には、人は立ち塞がれず、岩とて軋らかくなる。

1309

今おまえに会えぬことを、悪く思うな、

月が囚われているのに、道草を食うことはできない。

でもまもなくみんないっしょに喜び合う日がくるだろう。

今はただ、兄弟のよしみで兄弟を助けよ、というだけだ。

1310

私はこの従者たちに然るべく報いることができない。

彼らはおまえの意を体して、忠実に仕えてくれた。

おまえの息がかかった人に、特別な讃辞が必要だろうか？

喩えにいうではないか——誰も自分に似た者を生む、と。▽

1311

手紙を書き終えると、それを巻いて、結び、

ブリドンの従者に渡して、

見たこと聞いたことの総てを口伝えするよう、いいつけた。

むらさきの門が\*あいて、真珠がきらめいた。\*

1312

アフタンジルはタリエールのほうに向かう船を見つけ、

満月の明るさで出立した。

嘆きのファチマを後にするのはつらかったが、

残る人たちも血の涙にむせんだ。

1313

ファチマ、ウセン、召使たちは声をあげて泣いた、

「太陽の君よ、あなたは熱い炎でわれらを焼いた！

なぜにわれらを暗闇に残し、

墓掘りの手で葬らせようとするのか？」

第52章

アフタンジルとタリエールの再会

1314

アフタンジルは便船をえて、海を渡り、

上陸すると、ただひとり、馬を早駆けさせていった。

よき知らせをもって、タリエールに会うはうれしく、

両手をさしあげて、神に加護を祈った。

1315

みどりが燃える夏になり、

バラの花の盛りの時がきた。

太陽は天の宮居を移して、かに座かに座\*に近づいた。

久しく見なかった花を見て、彼はため息した。

1316

遠雷がとどろき、雲は水晶の露をふりまいた、

彼はバラのような唇で、バラにキスした、

「ちつとりおまえを見ていると、

うちとけて友と語り合つてゐるような気がするよ。」

1317

その友を思って、苦い涙にむせびながら、

彼は人なき土地、道なき場所を通り、

危険をかき分けて、タリエールに近づいた。

草むらにひそむ獅子や虎を、見つけ次第手にかけた。

1318

洞窟が見えてきた。彼はよろこんだ、

「たしかにあれはわが友の岩屋にちがいない、

私の話を聞いたなら、彼のよろこびはどうだろう！

だが彼がいなかったら、私の努力はむだになる。」

1319

仮に帰ってきたとしても、長くはそこにいないだろう、

野獣のように、またとび出すにきまつている。

「そうだ、私も草むらをかき分けていく方がいい。」

アフタンジルはあたり見まわし、野に馬を向けた。

\*かに座——巨蟹宮



1320

馬は走り、人は浮き浮きと歌い、  
はずんだ声が友の名を呼んだ。

するとすこし先に、かがやく太陽が現われた。  
草むらの外れに披身の剣をさげてタリエールが立っていた。

1321

剣が血に染まっているのは、獅子でも仕とめたのだろう。  
馬の姿はなく、徒歩と見えた。

アフタンジルの声を聞いて、胆をつぶし、  
それと見定めるや、いきなり駆け出した。

1322

タリエールは剣をすてて、義兄弟に駆けよった。  
アフタンジルは馬をすてて、彼にとびついた。

ふたりはキスし抱き合った。  
バラの声は蜜よりも甘かった。

1323

万感胸にせまってタリエールは泣くばかり。  
血の流れは黒い森をむらさきに染め、

尺きることなき涙の泉はイトスギをうるおした。  
「おまえの顔を見て、長い苦しみは忽ち洗い流された！」

1324

タリエールは泣き、アフタンジルはほほえむ。  
サンゴがひらいて、稲妻のように歯が光る。

彼はいう、「おまえをよるこぼす知らせがある、  
しほんでいたバラも、今日からは生き生きするだろう。」

1325

タリエールはいう、「今私を喜ばせてくれただけで充分だ、  
おまえに会えて、これにまざる慰めはない。

それ以上のバルサム\*は神も与えはしまい。  
天降りせぬものを、この世で、どうして見出せよう！」

1326

タリエールが本気にしないので、アフタンジルは苛立ち、  
もう黙っていられず、あせり気味に、

バラ色の唇をもつその人のヴェールの切れ端を差出した。  
ひと目でそれとわかり、タリエールはそれをもぎ取った。

1327

手紙を受取り、切れ端をひろげ、  
それに着い顔をおし当てたかと思うと、彼は倒れた。

がっくり頭を投げ、息絶えた。  
こんな衝撃には、カイスやサラマン\*\*でも耐えられまい。

\* バルサム——香油、慰め

\*\* カイス——ニザミの長詩「レイラとメジス」の主人公。サラマン——アラビアの「サラマンとアブサル」という詩の主人公との説がある。あるいはカイスはカイン、サラマンはソロモンとの説もある。

1328

タリエールが息絶えて倒れたのを見るや、

アフタンジルは駆けよって、助け起こそうとしたが、

斃かれて、もう灰になった人には、手の施しようがなかった。

彼の命は跡形もなく愛する人の贈りものに引渡された。

1329

アフタンジルは歌うように声をあげて泣く。

鴉はしばしば水晶の屋根からとびおりる。<sup>\*</sup>

カット・ルビーはダイヤのハンマーでこわされ、<sup>\*\*</sup>

そこからサンゴの色に似た泉が噴き出す。

1330

彼は顔をかきむしり、頬に血が流れる。

「なんてばかなことをしたものだ。正気の沙汰じゃない、

めったに消えない火に、あわてて水をかけるなんて！

ふいに歓喜きわまれば、どんな心臓も耐えられぬだろう。

1331

私はわが友を殺した、なんとすべきか？

私が悪かった、まったく考えが足りなかった、

軽はずみな人間は難事の役には立たぬ。いうではないか、

へ非難されるのろまは称揚されるはしこさに優る」と。

1332

命の火が燃えつきたように、タリエールは倒れている。

アフタンジルは草むらを分けて水をさがしに走り、

獅子の血を見つめる。それを持ち帰って、

タリエールの胸にふりかける。蒼い色は赤く変った。

1333

獅子の血がこの獅子の胸にしみると、

タリエールは身ぶるいし、インド部隊<sup>\*\*</sup>はゆらぎはじめた。

彼は目をあげ、力をふりしぼって起き上がろうとする。

太陽の光にふれて、月はほの青くなつた。

1334

バラは冬の寒さにしぼんで、花びらを散らし、

夏の日が近づくと、燃えて、かわきをうつたえる。

妙なる声で鶯は歌うけれど、

暑さは焼き、寒さは凍らせ、どのみち傷はうずく。

1335

悲しみにつけ、喜びにつけ、すぐ狂う心を、

平常にもどすのは、そうたやすくはない。

それは常に傷つき、痛まないことはめつたにない。

自分が自分の敵である人は世界に従うしかない。

\* 鴉……—黒髪が頭からぬけ落ちる。  
 \*\* カット・ルビー（顔）をハンマー（手）で打つ。  
 \*\*\* インド部隊——まつ毛

1336

タリエールはまた命とりの手紙を見た。

読めば狂乱につれ去られるのに、彼は読んだ。

涙は光を隠し、真昼も暗く感じられたろう。

アフタンジルは語氣するどく口をきった。

1337

「みたところ、理性ある人の振舞をもおほえぬ、

今さらなんで泣くのか？ 笑顔になろうではないか。

立って、不幸に沈む太陽を助けに行こう！

おまえがあんなに捜し求めていたその場所へ、さあ行こう。

1338

じっくり作戦を練り、それから馬にまたがって、

カツジエチへ出発しよう。

われらの剣に先導させ、彼らの剣を背後に投げ散らせ、

われらは無傷でもどり、彼らをしかばねに変えよう。」

1339

タリエールはこんどは氣を確かに、何かと訊ねはじめた。

黒く白く光る目をアフタンジルに向け、

陽の下のルビーに似た鮮かな色を顔にみながらせて。

天の恵みを受けるに、これほどふさわしい人があろうか？

1340

話を聞いて、彼はアフタンジルに感謝した。

「おまえには賢者の称讃こそふさわしく、賞め言葉もない。

山の泉のように、おまえは谷の花をうるおし、

水仙の池から出る涙の流れを止めてくれた。

1341

最高におまえに報いる義務を私は果たすことができない、

私に代って、神がとりなしてくださるようには！」

二人は大きな喜びにあふれて、帰路を急いだ。今や世界は、

長く渴えていたアスマートにも喜びを味わわせるだろう。

1342

洞窟の入口は、軽装のアスマートが淋しげに坐っていた。

白黒まだらの馬に乗った騎士の後ろにはアフタンジル、

ふたりとも、鷲のように歌いながら、近づいてきた。

ひと目見るなり、アスマートは肌着一枚で立上がった。

1343

いつもは泣きながら帰ってくるタリエールが

今、笑顔で歌っているのを見て、胆をつぶし、

彼女はまるで酔ったように、ふらふらと腰を浮かした。

待望の吉報があろうとは、彼女は予期しなかった。

1344

アスマートをを見ると、二人は歯をきらめかして声かけた、

「よろこんでくれ、神のおめぐみが天降ったぞ、

失われた月をとりもどすことができるのだ、

私たちの炎は運命の手で消されるだろう。」

1345

アフタンジルは馬からとびおりて、アスマートを抱いた。

娘はまっすぐなポブラにつかまり、その枝にすがって、

首にキスし、顔にキスし、さめざめと泣いた。

「どんなにいいお知らせか、早くお聞かせ下さいまし。」

1346

アフタンジルは枝の枯れたポブラ、青白い月を偲びながら、

ネスタン姫の手紙をアスマートに見せた、

「この手紙には尽きぬ苦しみがこもっているが、

闇をはらって、太陽はもうわれらに近づいていますよ。」

1347

手紙の筆跡は姫のものにまぎれもなかった。

アスマートは熱にうかされたように震えた。

おどろきは脳天から爪先まで彼女をとらえた、

「ほんと？ こんなことってあるかしら？」

1348

アフタンジルはいった、「でも、もう心配なことはない。

私たちの重い悲しみはすべて消え去り、

私たちに太陽は近づいて、闇は明るくなった。

善は悪にうち勝つだろう——善は永生だもの。」

1349

インドの領主は何か嗜ればれとアスマートに語り、

ふたりは相抱いて、うれし涙にくれた。

鴉の尾から露の玉がバラに滴り落ちた。

最善を尽くす人を神は見すて給わぬだろう。

1350

彼らは神に感謝した。「よき道をお選び下されたものだ、

おまえたちの判断が正しかったこと、今はつきりした。」

インドの領主は両手をさしあげ、うれしげにいった。

彼らは中に入り、アスマートはいそいそと食事を整えた。

1351

タリニールはアフタンジルにいった、「話したい事がある。

妙なことをいう奴だ、と冷やかしてはいけない。

実は、デフどもを破って洞窟を占領してこのかた、

彼らの宝庫がここに手つかずに残っているのだ。

1352

別に必要がないので、かつてのぞいたこともないが、  
どうだろう、一度、あけて調べて見ては？」

提案にアフタンシルは同意、アスマートも坐ってはいない。  
ドア四十を破ったが、格別に骨の折れる仕事ではなかった。

1353

今まで見たこともないほどの莫大な宝物がみつかった。  
みごとに磨かれた寶石の山があり、

球戯のボールほどの大きさの真珠があり、

黄金の如きは、これを数えあげることではできないほど！

1354

四十の宝庫はどれもぎっしり詰まっていた。

兵器をおさめた部屋もあったが、

そこにはあらゆる物の具が、漬物みたいに積重なっていた。

きっちり封印された長持も見えた。

1355

長持にはこう書いてある、  
「魔法の物の具——」

鎖帷子、兜、ダイヤモンドをも切るバスマ製の剣。

カッジ勢とデフ勢が戦う日こそ苛烈な日となるだろうが、

先にこれをあけたる者が、弑逆者となるだろう。✓

1356

彼らは長持をあけてみた。するとそこには、

三名の戦士が武装するに足る物の具三組が入っていた。

鎖帷子、兜と膝当てなどが、

サファイアのケース三つに、それぞれきっちり入っていた。

1357

めいめい物の具を身につけて、ためしてみた。

兜、鎖帷子、鎧はどんなものにも傷つけられず、

剣はひと振り、木綿糸を切るように鉄を切り裂いた。

戦士にはこれほど全世界にも代え難い宝物はないだろう！

1358

「これはわれらに運が向いてきた前兆だ、

きつと神がわれらに注目されたにちがいない。」

ふたりはめいめに物の具一組をとり、

あと一組をブリドンへの手土産に革ひもでゆわえた。

1359

そのほかに黄金や宝石をいくらかとり出し、

四十の宝庫をしめて、封印した。

アフタンシルはいった、「剣を断乎として執る時がきた、

最後の夜をここで過ごし、しらじら明けに出発しよう。」



1360

しらじら明けとともに、二勇士は馬を引出し、

後ろにアスマートを乗せて、ブリドンの国に向かった。

途中で、彼女のために、商人から馬を買った。

アフタンジルが道案内だが、何と頼もしい案内者だろう！

1361

やがてヌラジシリブリドンの馬回組ウマカエグミに行き会った。

馬の群を見ると、すぐブリドンのものとわかった。

タリエールはいった、「おもしろいことを思いついたよ、

馬の群をたねに、ブリドンをからかってやろうじゃないか。

## 第53章

### 二勇士と

### ブリドンの出会い

1362

馬を追立てるのだ。すると、馬泥棒と思うだろう。

忽ち、野を血に染めようと、彼は軍勢をくり出すが、

そこでわれらに気がついて、ほっとするという段取だ。

罪ない戯れは気晴らしになり、剛毅な奴をも笑わせよう。」

1363

ふたりはこれという馬を狙って、横奪りしはじめた。

馬回組は火打石を切って、たいまつに火をつけ、

大声をあげた、「こら、とんでもないことする奴だ、

一瞬に敵を一刀両断にする方の持ち馬とは知らざるか！」

1364 ふたりは弓を引きしほって、馬回組を追いまわし、馬回組は逃げまどいながら、泣き声をあげた、

「出会え、出会え、馬泥棒だ、人殺しだ！」

彼らはあわてふためいて、ブリドンのもとに駆けこんだ。

1365  
ブリドンは身支度して出陣した。

騒ぎは大きくなり、軍勢は野を埋めた。

冬も凍らすことができない二つの太陽が向かってきたが、兜をまぶかに引下ろしているの、顔は見えなかった。

1366  
ブリドンを見ると、タリエールはいった、「待ってた！」  
兜を脱ぎ、にこりとし、大笑いした。

「何事だ、この騒ぎは？ きて、悪かったかな？」

「ごちそうに事欠いて、軍隊で歓迎とは、呆れたものだ！」

1367  
ブリドンは馬からとびおりて、地面に平伏し、二人もあわてて彼を抱いて、キスした。

両手を空へさしあげて、ブリドンは神に感謝し、それと知って、高官たちはふたりにキスした。

1368  
ブリドンはいった、「遅かったぞ、ずいぶん待った、手助けできないかと、気をもんでいたところだ！」

二つの太陽と一つの月が重なった形になり、互いに照り映えながら、彼らは馬を進めていった。

1369  
まもなく壮麗なブリドンの館に着いた。  
彼は兄弟分のアフタンジルを隣に招じ、

タリエールもまたビロードの座ぶとんに坐った。

ブリドンには例の魔法の物の具が呈上された。

1370  
二人はいった、「差当たり、土産はこれだけだ。  
別に、すばらしい宝物がうんとしまってはあるが。」

ブリドンはすぐ床に平伏した。

「こんな結構なお土産がほかにあるものか。」

1371  
ブリドンの手厚いもてなしを受けて、その夜は休んだ。  
入浴して、旅の疲れを洗い流すと、

次から次へ、きれいな衣装がとどけられ、さらに宝石と真珠がいっぱい金の茶碗まで贈られた。

1372

ブリドンはいった、「おまえらの滞在にはうんざりすると、  
けちな主人がこぼすように聞こえるかもしれないが、  
ゆっくりにせずに、すぐ旅立ちするほうがいい。

カッジどもがわれらに先んじたら、困難は増すだろう。

1373

われらにたくさんの軍兵はいらぬ、  
強いのが三百名もあれば足りるはず。

戦いはじまったら、われらも剣のつかをにぎり、  
ボブラのようなかの君を速やかに捜し出そう。

1374

実は私もカッジエチーのようすを調べてきたが、  
岩壁に四方を囲まれて、とうてい近づく術はない。

ひそかに忍びこめればいいが、さもないければ歯が立つまい。  
秘密に進退できないから、大軍は不要というわけだ。」

1375

二人はブリドンに同意し、出陣を急いだ。

アスマートは残り、ブリドンは贈りもので彼女を慰めた。

三百名の精強な騎馬隊が編成された。

神ははじめに苦しみ受けた者に、最後の勝利を恵まれよう。

1376

三義兄弟は海を渡っていった。

水先案内はブリドンで、昼夜を分かつた船を進めた。

やがてブリドンはいった、もはやカッジエチーも近い、  
見つからぬよう、この先は夜だけの航海とせねばならぬ。」

1377

二勇士はブリドンの意見に従った。

夜明けとともに船を停め、日がくれて先を急いだ。

城塞が見えてきた。鹹々たる岩山から、

無数の番兵の声が、潮騒を圧して、聞こえてくる。

1378

秘密の通路を守る一万の戦士たち。

月の光を浴びた摩天城。

獅子たちはいった、戦果をあげるには、謀略が肝要、  
百名を千人にも万人にも当たらせなければならぬ！」





## 第54章 ブリドンの方策

1379  
ブリドンはいった、「まず私の考えをいってみよう。

相当な大軍でなければ城塞都市とは戦えないが、

当方は小人数、従って正面切つて押し入ることはできない。

しかも千年来、門をしめられて中に入った者はいない。

1380  
こどものころ、私は軽業をけいこした。

とんだり、はねたり、いろんな芸当をしこまれた。

とりわけ、私の綱渡りは目にもとまらぬ早業で、

仲間はずいぶんうらやまれたものだった。

1381  
この早業をいま役に立てようと思うのだ。

投げ縄の名手呼び、塔の一つに長い縄をかけさせれば、

野を駆けるより易く、するする渡っていくことができる。

おまえたちには、中に忍びこんで人を捜すなど容易でない。

1382  
私なら、鎧、兜に桶をかまえての綱渡りも朝飯前。

そこで下にとびおりて、旋風のように不意討ちかけ、

当るをさいわいなぎ倒して、さっと門をあける！

おまえたちは一番騒ぎの大きい所へ駆けつければいい。」



## 第55章

### アフタンジルの方策

1383

アフタンジルはいった、「なるほど、勇ましい考えだ。獅子のようなおまえの腕にもいわせて、敵に辛き目見せることは疑いない。だが、番兵どもの呼び交す絶叫がおまえの耳には入らぬか？

1384

綱渡りのさい、おまえの物の具の音が敵の耳に入り、繩を切られるおそれがある。おまえの方策は実を結ばず、すべてはむだに終るだろう。とすれば、何か別の出口を見つけないかならまい。

1385

おまえたちは、どこかに身をひそめているがいい。私は商人に身をやつして、うまくやってみせる。遠くからきた旅人には手をつけないはずだから、驛馬おんばに兜かぶとと、鎖帷子くわいし、剣を積んでいく。

1386

三人いっしょだと敵に怪しまれる。私ひとり、商人として、市内にはいり、こっそり自分の物の具つけて、立ち現われ、城塞を彼らの血で彩るだろう。

1387

城内の軍兵は私が難なく始末し、城外の軍兵はおまえたちの手にまかせる。たとえ鉄で固めであろうと、門かどをばらして、門をあける。これが私の方策だが、他に名案なあんあらば、聞かせてくれ。」

## タリエールの方策

1388 タリエールはいった、「おまえたちの烈しい気風きぶたはわかる。

考え方や方策はおまえたちの力にふさわしいもの。

劍のから振りではなくて、血戦が望みなものだから、苦戦を共にすることは、どんなに楽しいことか！

1389 だが、私の言い分も聞いてもらいたい。

劍の音が起れば、太陽姫は上からのぞくにちがいない。

おまえたちが戦っているのに、私の姿が見えなかったら？

これほど私を辱しめることはないだろう。

1390 私が考えたのは、次のようなやりかただ。

夜明けとともに、めいめいが騎兵百名ずつをひきい、

三手に分れて、急速に攻めよる。

敵は無勢と侮って迎えようが、われには無双の劍がある。

1391 急戦を挑むかんで、門に逃げこむすきを与えず、

一隊は城内に突入し、あとの二隊は門外で戦う。

内も外もいっさいが血の海に溺れるだろう。

一度ならず手にした武器を、また手にとろうではないか。」

1392 ブリドンはいった、「なるほど、それもおもしろかろう。

私が贈ったこの馬は、門前で誰にも追い抜かれないだろう。

カッジエチーでカッジどもに対面しようとは知らなかった。

知ってたら贈りはしなかったぞ、けちを白状するようだが。」

1393 ブリドンは気軽に冗談をとばし、

まじめな論者たちは大笑いして、

これも負けずに冗談を返した、

三人は物の具つけ、めいめいの名馬に鞍をおいた。

1394 念のため、もう一度よく話し合って、

タリエールの方策に落着いた。

いずれ劣らぬ戦士百名ずつを分け持って、

三人は兜を手に、馬にまたがった。



1395

さて三勇士の姿を見れば、その光は太陽よりも強く、七つの惑星が光の七柱となって三人を照らしている。すらりと形よく黒馬を御するはタリエール。

1396

三勇士によく似た姿を描いてみよう。雲を破って大雨が落ちると、溪谷の水はあふれ、すさまじいとどろきあげて、すべてをおし流すが、海に注げば、それはとたんに静かになる。

## 第57章

カッジェーチー城塞の攻略と

ネスタン姫の救出

1397

ブリドンやアフタンジルと肩を並べる勇士はいないが、タリエールと戦うことを欲する人もまたいないだろう、太陽は惑星をかげらし、星ほしも光を失うのだから。

1398

三勇士は三つの門を受けもった。従う戦士三百名、いずれも剛の者ばかり。その夜はたしかな物影に身をひそめ、夜明けとともに姿をやつして、前進した。

1399

はじめは、旅人のように、しずしずと馬をやった。  
市内の番兵どもはそうとは知らず、警戒を怠り、  
恐れを抱かず、のんきに談笑していた。  
ごく近づいて、旅人たちはいきなり兜をかぶった。

1400

馬に拍車をかけた。鞭の音が高鳴った。

まず市の門が破られ、市内は上を下への騒ぎになった。

危険をかえりみず、三人は三方から攻めよせた。

銅鑼が鳴り、ドラムが鳴り、ラッパが響いた。

1401

このとき神の憤怒がカッジュエチーに下った。

クロノス<sup>\*</sup>は太陽の甘やかしをしりぞけた。

青天井が落ちて、闇がひろがった。

死体は戦場にあふれ、その山はますます高くなるばかり。

1402

タリエールの大音声は敵の戦意をそいだ、

彼は鎖帷子をひきちぎり、鎧や肩当てをはねとばした。

三勇士はさしたる困難もなく、三つの門に殺到し、

市に突入して、要塞を試練の前に立たせた。

1403

アフタンジルは市内でブリドンと出会った。

すでに敵を蹴破り、その血は川となって流れていた。

出会うと、互いに呼び交して、ふたりは大いに喜んだが、

「タリエールは？」と、気がついて、あたり見まわした。

1404

彼がどこにいるかを知らず、知る手段<sup>てだそ</sup>もなかった。

敵を気にせず、要塞の門に駆け向かった。

そこには剣の刃にたちぎられた物の具の山があり、

朽木のように散乱する一万の軍兵の死体があった。

1405

要塞の守備兵は疫病にかかったように倒れていた。

みんな頭から唐竹割りになり、物の具はぼろ切れと化し、

要塞の門は破片となって、とび散っていた。

「やった！」タリエールの仕業と知って、ふたりは叫んだ。

1406

もう遮る者もないと見て、ふたりは秘密の通路に潜入した。

蛇から放された月が、太陽と対面しているのが見えた。

彼は兜を脱ぎ、はちまきが髪を美しく引立てていた。

胸は胸に、頬は頬に、はりついた。

\*クロノス(ズアルと同じ)——土星

1407

ふたりは抱き合い、キスし合い、涙を流した、  
木星と土星が出会ったときのように。

陽に照らされると、バラは一層美しくなり、光を反射する。  
長い悲しみの後、今からふたりは喜びに満たされるだろう。

1408

ふたりは頬をすりよせて、たがいにキスし、  
唇のひらいたバラはしばしば閉じ合わされた。

アフタンジルとブリドンが現われ、太陽にあいさつした。  
おあつらえのように、三義兄弟が一つに集まった。

1409

美しい顔をはころばせて、太陽は二兄弟を迎えた。  
やっと落着き、姫は自分たちを助けてくれた二人にキスし、  
やさしい言葉で心からの感謝をのべた。

ふたりは明るく、快活に、これに答えた。

1410

ふたりはまた若いイトスギ、タリエールにも勝利を祝い、  
それから互いに戦果を語り合った。

物の具が痛んでも、ほとんど手傷負わなかったことを喜び、  
こちら獅子、あちら山羊となぞらえた。

1411

戦士三百名のうち、入城したのは百六十名、  
勝利のかげの損失をブリドンは悲しんだ。

彼らは生き残りの敵を生かしてはおかなかった。  
見つけた財宝は数えきれなかった。

1412

騾馬、駱駝、その他早足の動物、三千頭を集め、  
それに真珠、ルビー、サファイアなどを積んだ。

宝石はすべて名手にカットされたものばかり。  
太陽姫は丁重に輿に乗せられた。

1413

六十名をカッジエチーの城塞守備に残し、  
太陽姫を擁して、かなり遠い道のりながら、  
海の国さして出発することになった。

彼らはいった、「格別な恩義のあるファマに会いたい。」



第58章  
海の国から  
ブリドンの国へ

1414

タリエールは海の王に使者を送って、こういわせた、  
「私、タリエールはカッジエチーの敵を打滅ほしたので、  
わが太陽姫をつれて、これからお国へ参上いたします。  
私は父上に会う気持で、あなたにお会いしたいのです。」

1415

私は今カッジの国とその全資産を握っていますが、  
それにはあなたとの浅からぬ因縁があるのです。  
ファチマがわが太陽を救い、母となり姉となったことに、  
どんなお礼をしたらいいか？ 私は空手形はきらいです。

1416

あなたの国を通り過ぎないうちに、会いにきて下さい、  
カッジの国をそっくりあなたに進呈します。  
そこにあなたの部隊をおいて、城塞を固められるよう。  
先を急ぐので、私からお訪ねすることができないのです。

1417

ファチマのご亭主ウセンには、私からよろしく、と。  
ファチマを遣わし下されば彼女に救われた者は無上の喜び。  
もうひとり、ファチマが会いたがる人がおります、それは、  
水晶が石炭より明るいように、太陽より明るい人です。▽

1418

タリエールの使者の口上を聞いて。

海の王は胸おどらす申し出に歓喜した。

彼はみごとな神の裁きに感謝し、

重ねての招きを待つことなく、すぐ馬を引かせた。

1419

王は婚礼の宴をはるつもりで、みごとな品しなをそろえ、  
無数の宝石をふくめて、荷物を山積みにした。

フアチマも相伴して、十日の旅。

王には獅子と太陽に会う楽しみがあった。

1420

三勇士は王を出迎え、

互いに丁寧なあいさつを交した。

王はタリエールを讃え、相手は幾重にも感謝した。

太陽を見て、王はその水晶の後光に目を見はった。

1421

フアチマの胸にも炎が燃えてきた。

姫を抱きしめ、手、足、顔、ところきらわずキスした。

「闇が散って、こんなうれしいことはありません！

悪のいのちってほんとに短いものですね。」

1422

姫もフアチマを抱いて、やさしい言葉を返した、

「神が私のうちひしがれた暗い心を照らして下さったのよ、

今まで欠けていたところが、やっとうずまり、

陽の光に恵まれて、バラも枯れずにすんだらしいわ。」

1423

海の王はさっそく盛大な婚礼の宴を催し、

カッジェチーのお礼に、タリエールを七日放さなかった。

運んできた財宝を惜しみなく分けあたえ、

ばらまかれた金貨は、人びとが渡っていく橋となった。

1424

そこにはまた絹、ビロード、繻子の山があった。

また世にもまれな、黄金むくのヒヤンス石の王冠と、

評価し難い純金製の玉座を、

王はタリエールに捧げた。

1425

王はまたネスタタンリダレジヤンに、赤いヒヤンス石、

パタフシャン産ルビーなど宝石をちりばめた衣袋を捧げた。

姫と勇士は顔を火照らせて玉座にのぼり、

これを見る人びとは新しい炎にあおられた。



1426

アフタンジルとブリドンにも数えきれない贈りもの。

めいめいに、宝石の光まばゆい裾長の服、

すばらしい鞍おいたりつばな馬。

ふたりはいった、「お礼の言葉もありませぬ！」

1427

タリエールはあらためてお礼を述べた。

「まずお会いできたこと、次に多彩のお土産頂いたこと、

ともに、私にとってこんなうれしいことはありませぬ。

お国を素通りしないで、ほんとうにいいことをしました。」

1428

海の王はいった、「近くにある者にはいのちをあたえ、

遠くにあつて君を見ることができない者には死を意味する、

獅子の君よ、君にふざわしい贈り物があり得ましようか？

あなたと別れて、どんな楽しみが見つかりましようか？」

1429

タリエールはファチマにいった、「姉と呼ばせておくれ、

私はどうしておまえからの大きな借りを返せまい、

せめてカッジエチーからもってきた財宝を、

そっくりもらつてくれまいか、お願いだ！」

1430

ファチマは頭をさげて大なる謝意を表した、

「あなたと会えて、不滅の火がともった気持ちですが、

ここでお別れしたら、ものの分別もつかなくなるでしょう。

ほんとに、お側にいれば幸せ、離れば悲しみです！」

1431

勇士たちは海の王と話していた。

その齒は水晶、その唇は真珠貝。

「あなたなしでは堅琴も、太鼓も、楽しくはないけれど、

もうおいとませねばなりません、先を急ぐ身ですから。」

1432

あなたは、われらの父であり、希望ではあるけれど、

お願いします、船を都合して下さい。」

王はいった、「あなた方の為なら、墓に入るもいとわぬが、

急ぐとあれば是非もない、その腕で道を聞き進み給え。」

1433

王は港に船をまわし、勇士たちはそれに乗った。

残る人たちは泣いておのが頭を打ち、

髭をかきむしって悲しんだ。

ファチマの涙は海に流れて、その水位を上げた。

1434

三義兄弟はそろって海を渡っていった。

彼らはあらためて以前の誓いの言葉をたしかめた。

彼らの笑いは美しく、歌も殊のほかうまかった。

唇の光は水晶の面に照り映えた。

1435

上陸すると、ブリドンの都に急使を立てて、

アスマートと高官たちに、合戦のようを知らせた。

へ太陽は光を増しながら近づき、

われらももはやかじかむことはないだろう。▽

1436

その太陽を輿に乗せて、海岸沿いに進んだ。

悲しみを乗越えたことを喜び、若者のようにはしゃいだ。

こうしてブリドンの国に着いた。

天地に響く歌声が一行を迎えた。

1437

ブリドンの高官たちはひとり残らず出そろうい、

アスマートもいまは晴ればれたとした顔で、

ネスタン・ダレジャンを抱いた。

斧ノコギリをもってしても、この二人を割くことはできないだろう。

1438

ネスタン・ダレジャンも彼女を抱いて、顔にキスした、

「ずいぶんおまえを悲しませ、苦しめたけれど、

これからは神も惜しみなくわれらにお恵み賜わるとしよう。

でもおまえの広大な心に報いようがあるかしら？」

1439

アスマートはいった、「枯れぬバラとの再会こそ、神の恵み。

よき分別あればこそ、隠されたものも見出されたのです。

明るいあなたを見れば、死も生に変わるでしょう。」

およそ相愛のうちで、相愛の主従に優るものがあるうか。

1440

高官たちは一礼して、口ぐちに賞めたたえた。

「神はわれらに喜びを賜わりました。ありがたいことです。

お顔を仰げば、もう炎に焼かれることもございませぬ。

傷を受けた方がたも、まもなく本復なさるでしょう。」

1441

彼らは近づいて、タリエールの手にキスした。

タリエールはいった、「私に殉じたおまえたちの兄弟がある、

彼らは、まぼろしならぬ真に永遠の喜びを見出した、

それは一同に共通のもの、従ってその名譽は百四十倍。

1442

彼らの死は痛恨のきわみだ、

でも、不滅の偉大な栄光は彼らの頭上にある。」

彼は静かに泣いた。雨は雪に混り、\*

一月の風が吹いて、バラを凍らせた、

1443

タリエールが泣くのを見て、みんなも泣いた。

彼の死を悼んで、はげしくせきあげた。

やがて泣き止んでいう、「あなたを太陽に喩える上は、

泣くよりも、歌う方がふさわしくはございませぬか！

1444

あなたの大きな悲しみに価する人は見当たりませぬ、

地面を踏んでいるよりも、あなたのために死ぬが本望！」

ブリドンはタリエールにいった、「もう嘆くでない、

代りに神は千のよろこびをおまえに贈るだろう！」

1445

アフタンジルも大きな悲しみに包まれて、悔みを述べた。

彼らはアフタンジルを讃えていった、「まずは賑やかに、

失われた獅子と失われた太陽が再会した上は、

泣こうとしても、もはや目から涙はこぼれませぬ。」

1446

一行は大きい都ムリガザンザルに着いた。

歓呼の声、ラッパや太鼓の響き。

ドラムとシンバルの音は調子よくからみ合い、

市民は市場を離れて、どっとおしよせた。

1447

商人たちも往来にとび出し、八方から観衆が現われた。

警備兵は武器を手にして、人垣をつくり、

観衆のはげしい抗議にてこずっていた。

「それでは勇士たちの顔がおがめないじゃないか！」

1448

勇士たちは美しいブリドンの宮殿に近づいた。

黄金の帯しめたたくさんの家臣が出迎え、

彼らの通路にピロードを敷きつめた。

彼らは黄金をばらまき、観衆はそれをひろった。



1449 娘と若者のために、ブリドンは、

赤と黄の寶石をちりばめた白<sup>レ</sup>むらさぎの玉座を設<sup>レ</sup>えた。  
アフタンジルのためには、黄<sup>レ</sup>黒の玉座を。

一同息を殺して待つなかを、彼らは入場して席についた。

1450 歌手たちが現われ、甘美な声が流れてきた。

結婚式がはじまり、物惜しみしない主人から、  
やわらかい絹織物が山とどけられた。

ネスタン<sup>レ</sup>ダレジャンの口許がほころび、歯がこぼれた。

## 第59章

ブリドンのもとで行なわれた

タリエールとネスタン姫の婚儀

1451

ブリドンの引出物にくらべられるものはないだろう。

鶯鳥のたまごほどの大きさの真珠九つ、

青くかがやく太陽とも見紛うばかりの宝石一つ、

画家はその光で、夜も絵をかくことができたという。

1452

さらにブリドンはおのおのに、むく、のヒヤシンス石と

カットされた宝石より成る首飾りを進呈した。

また両手でもちあがらない重い盆が一つ運ばれたが、

これは獅子<sup>レ</sup>アフタンジルへの贈りものであった。

1453

盆には大粒の真珠が山盛りになっていた、

ブリドンはそれをそっくりアフタンジルに捧げた。

広間は絹、ビロード、やわらかい金欄でいっぱいになり、

タリエールは立って心からのお礼を述べた。

1454 うたげは八日八夜つづき。

ブリドンは毎日新しい引出物をもたらした。

昼も夜も弦楽の音の止むことなく、

こうしてこの上なく似合いの娘と若者が結ばれた。

1455 ある日、タリエールはしみじみブリドンにいった、

「おまえの心は生みの兄の心よりも大きく、報いるには、

このいのちを、いや、魂を捧げてもなお足りぬだろう、

半死の私はおまえのお蔭で、傷を癒す薬を見つけた。

1456 知っての通り、私の為にアフタンジルは首も惜しまなかった。

今私は彼の力になりたくて、うずうずしている。

何が望みか、ぜひ彼から聞きだしてもらいたい、

こんどは私が彼の炎を消してやる番なのだ。

1457 こういってはどうか、『私のためにおまえは辛酸をなめた。 どうしたらその償いをする事ができようか？

もしおまえの望みが叶えられないとすれば、

私はけっしてわが家のしきいをまたがないだろう。

1458 言ってくれ、何が望みか、あるいは何で手助けできるか？

思うに、我らはまずアラビアに行くべきではなかるうか？

言葉にしる、剣にしるおまえの考え通りに動くつもりだ。

おまえがああの子と結ばれぬ限り、私とて伴侶は持たぬ。』

1459 この旨をブリドンがアフタンジルに伝えると、

相手はいかにも愉快そうに大笑いした、

「なんの手助けかね？ 私は何ものにも負けるはずはなし、

私の太陽も、カッジに囚われの憂き身であるわけではない。

1460 私の太陽は神の思召しによって王位につき、

うやまわれ、威厳あって、何ものにも傷つけられない。

カッジであれ、魔法使いであれ、これには手がつけれぬ。

なんの手助けかね？ なんて私をどきまぎさせるのかね？

1461 私に運命づけられたことをすっかりなし終ったとき、

私の心の炎がよろこびに変ったとき、

その時はじめて太陽の光明は私に下るだろう。

その時までは、いかにもがいてもどうにもならないのだ。

1462

タリエールには私の返事をこう伝えてくれ。

『おまえは真に情け深い、私に感謝するのはおかしい。

私は母の胎内から、もうおまえの奴隷と定められていた身。

おまえが光榮ある王にならぬとあらば、私は灰になろう！

1463

へおまえを愛する姫と結びつきたい」と言っただが、

これは全く親切なおまえらしい心遣いだ。

だが、剣をぬく必要も、言葉をふりまく必要もない、

私はただ天意の下るのを待てばいいのだ。

1464

それが私の望み、そして私の志向。

私は見たいのだ、インドでおまえが嗜れて玉座につくのを、

おまえと並んで、光まばゆい太陽がすわるのを、

ひとり残らず敵がおまえに討ち滅ぼされるのを！

1465

そういうわが心の望みが果たされたとき、

その時始めて私はアラビアに帰り、わが太陽を見よう。

その気があれば、彼女は私を包む炎を消してくれよう。

そのほかに私が願うことは何もない。妙な<sup>いさ</sup>労りは無用。』

1466

ブリドンがこの話を取次ぐと、タリエールはいった。

「それを私が承知するかしないか、わかりきっているはず。

アフタンジルは私を生きかえらせる手段を見出した、

とすれば、兄弟の知恵と力を見出すこともできようはず。

1467

今あけすけに言うから、これをそのまま彼に伝えてくれ。

『おまえの養い親に会うまでは、私の心は安まらない。

王のたいせつな家臣を私はさんざん手にかけてはず、

だから王の許しをえないうちは、私はいつかな帰国しまい。

1468

これ以上、互いに話すことはあるまい。

私は明日の旅立ちをけつして延期しないだろう。

アラビア王は私のお詫びを聞捨てにはなざるまい、

私はまた姫にもお自にかかつて、よく頼むつもりだ。』

1469

ブリドンはタリエールの決意をアフタンジルに告げた、

「彼は強情っぱりだから、これ以上逆らってもむだだ。」

それはアフタンジルを悲しませ心はまたも炎に包まれたが、

相手が王位にあるとすれば、敬意を表さねばなるまい。

1470

アフタンジルはうやうやしくタリエールの前に出て、その足を抱き、帯より上には目をあげないで、キスした。

「すでに私はロステワン王に、少なからず悪いことをした、この上、忠節にそむくようなことはさせないでくれ。」

1471

神の裁きはおまえのもくろみをお許しにはなるまい。

なんで私が悪い親を裏切ることができよう？

なんで私が心悲しませたお方に、この手があげられよう？

なんで家来がそのあるじに剣をふりあげられよう？

1472

そんな行ないは、私と私の恋人の不和を招き、

彼女は怒り狂って、私の心を悲しみにつき落とすだろう。

私はやせおとろえ、ひと目彼女を見たいと焦っても、

その許しは、もはや金輪際手に入らぬだろう。」

1473

タリエールは太陽のかがやくように笑い、

アフタンジルの手をとって、助け起こした。

「私が幸せになったのは、おまえのお蔭だが、それなら、おまえにも幸福がもたらされたら、なおすばらしいはずだ。」

1474

兄弟の仲で、妙にそらぞらしく、用心深かったり、つまらぬ顔をして、陰気なのは、全くいやなものだ。

友なら、私に胸をひらくべきだし、

友でないなら彼は彼、私は私、別れ別れがいちばんだ。

1475

おまえの恋人の心がおまえのものであることは知れている、そのおまえの友の訪問が、なんで彼女を悲しませるのか？

王にお目通りしても、別に余計なことをいうわけではない、

私はただ、かねて望みの王のお顔を拝したいだけだ。

1476

そして申上げ、お願いしたいこともただ一つ、

ご息女を、自分の意志で、おまえにやって下さい、と。

結びつきが目的なら、なんで別離に泣くことがあろう！

ひとりでよくよしてないで、互いに飾ってやることだ。」

1477

どうしてもタリエールが旅立ちを思い止まらないうと見て、

アフタンジルもあきらめ、それに同意した。

ブリドンはお伴の人員を選び出し、みんなと打ちそろって出発した。



1478

賢者ディオノスはここに秘文を明らかにする、

「神は善を現わし、悪を生まず、

一瞬にして悪の命をちぢめ、善を永遠に復活させ、  
完全な自分をさらに完全無欠なものにする。」

1479

獅子たち、太陽たちは、ブリドンの国を後にした。

見る人を悩ませる太陽姫は輿の上、

きれいに編まれた鴉の羽は水晶にたわむれ、

典雅な風情はバダフジャンのルビーを引立てた。

## 第60章

### 三勇士は

### 洞窟を経てアラビアへ

1480

こうして一行は心楽しくその道を行き、

途中では狩を楽しんで、けもの血を流し、

行く先き先き、どここの国でも、送迎の人に喜びをもたらし、  
彼らを讀えて、贈りものを捧げる人は後を絶たなかった。

1481

宇宙の空、月づきの間に、太陽が昇っているように見えた。

一行は賑やかにさんざめきながら、多くの日を重ね、

ついに無人の広野にさしかかった。

前にタリエールが住んでいたあの洞窟は近い。

\*ディオノス、あるいはディフノス——多くの研究家の意見によれば、ディオニュソス・アレオパギタの名で著作した五世紀のキリスト教哲学者。



1482

タリエールはいった、「今日は私があるじになるう、  
気が狂っていたときに暮らしていた場所に来たんだもの。  
きつとアスマートが燻製の肉をごちそうしてくれよう、  
次に私からびっくりするようなお土産が出るだろう。」

1483

巨岩を縫って、洞窟へ急いだ。  
アスマートは鹿の肉を切って、客たちに分けた。

彼らはいつしか、浮き浮きと冗談をとぼし、  
過ぎし日を思い、悲しみを喜びに変え給いし神に感謝した。

1484

彼らは気晴らしに洞窟の中をすっきり見てまわり、  
タリエールの封印ある宝庫を目にした。

何人にも知られず、何人にも算定されざる財宝。  
彼らは、自分にそれがないことを、羨望を、口にしなかった。

1485

タリエールは各人にふさわしい贈りものをみんなに分け、  
ブリドンの部隊の大将から一兵にまでも、賞を与えた。

お伴の連中はこれで一躍金持になったが、  
それでもまだ手つかずの財宝が山ほど残された。

1486

彼はブリドンにいう、「おまえの借りを返しようもないが、  
へよき人は、結局は報いられる」という諺もある。

ここにある財宝、また将来見出されるかもしれない財宝は、  
みんなおまえのもの。いつでも引取ってくれ。」

1487

ブリドンは低くお辞儀して、大なる謝意を表した、  
「私がそれほど馬鹿か気がいに見えるのかな？」

でも、おまえを敵にまわしたら、こっちは膿層だ、  
おまえの顔を見られなくなったら、喜びもなくなる！」

1488

この財宝をわが家に運び移すため、  
ブリドンは人びとを戻し、駱駝をつれてくるようにした。

こうして今、彼らは洞窟を後に、アラビアへ出立した。  
太陽との再会に思いを馳せるアフタンジルは三日月のよう。

1489

長い旅を経て彼らはアラビアの国境に着いた。  
村や城塞が相次いで彼らを送りまた迎えた。

このあたりの住民は青とみどりの服をまとい、  
アフタンジルを偲んで、みんな涙にぬれていた。

1490

タリエールはロステワン王に使者を出した、

「謹んでご寛大なるお許しを賜わり、

私こと、インドの王は、貴殿の王宮に参上し、  
枯れざるバラのつぼみをお目にかけたいのでございます。

1491

当地で初にお目にかかりました際、大変なお怒りを招き、  
私を追跡して、捕えようとなさいました。

やむなく私はお国の戦士たちに悲しみをかけ、  
ご直参の方がたの多くをこの手にかかけました。

1492

今、わが道を逸れて、お訪ねいたしますのは、  
私の大罪のお許しを願うためでございます。

ブリドンと部下が知る通り、なんの手土産もないのですが、  
ただ一つ、あなたの臣アフタンジルが土産であります。」

1493

よきたよりが、王のもとにとどけられると、  
嬉しさがすぐには言葉にならないほど、王は喜んだ。

チナチンの頬には朝日の色が燃えあがり、

まゆとまつ毛の影は水晶とルビーの色を深めた。

1494

太鼓が鳴り、歓呼の声があがった。

戦士たちは出迎えを急いで、駆けまわった。

馬を追いこんだり、鞍をかつぎこんだり、

腕におぼえある氣丈夫な連中がそろっていた。

1495

王は馬にまたがり、隊長たちとその部隊がつづいた。

噂を聞くや、八方から人が駆け集まり、

声高に神に感謝を捧げた、

「悪に場所なく、善は勇士のために用意される。」

1496

ふたつの行列は次第に見える距離に近づいた。

それと見て、アフタンジルはタリエールに耳打ちした、

「野末にほこりの舞いあがるのが見えるだろうか？

あれを見て私に火がつき、胸に炎が燃えあがった。

1497

あそこには私の育ての父がいて、出迎えのご出馬だが、  
私は、恥ずかしくて、とうてい出て行けない。

私ほど面目を失った人間がこの世にいるだろうか？

おまえもブリドンも、私のため為すべき事がわかるはず。」

1498

タリエールはいった、「主君を敬い畏れる気持はわかる。

では、出て行かずに、この辺りに隠れているがいい。

王には私からおまえが隠れたことを伝えておこう。

おそらく神のご加護で、あの太陽とおまえは結ばれよう。」

1499

アフタンジルはそこに小さいテントを張った。

人目をひくネスタン・ダレジャンもそこに残った、

そのまつ毛から快いそよ風が吹いた。

タリエールは野をまつすぐ進んでいった。

1500

ブリドンを共に進んで、やがてアラビアの王と対面した。

王はタリエールに、そのイトスギの形に見覚えがあった。

王は馬を早めて、獅子の威容に一礼した、

彼は父が子を迎えるように、インドの王を迎えた。

1501

タリエールも一礼し、近よって、キスした。

ロステワンもキスを返して、唇の感触を楽しみ、

輿に乗って、大声をあげた。

「おまえは太陽、おまえと別れたら、昼も夜に変わろう！」

1502

王はタリエールのみめうるわしく形よいのおどろき、

その顔に見とれ、その腕の力を賞めた。

ブリドンを進み出て、腰をかがめてあいさつしたが、

王はアフタンジルの見えないことにやきもきた。

1503

タリエールを賞めながらも、気が沈んだ。

タリエールはいった、「今や私の心はあなたのもの、

でも、私ばかりをお賞めなさるは、いかがでしょうか？

アフタンジルがいるものを、ほかに心を移されるとは？

1504

いや、彼が見えぬことを、お案じなさるには及びませぬ。

さあ、ひと休みいたしましょう、このみどりの丘の上で。

彼をつれてこなかったわけを、まつすぐに申上げますが、

その前に、私へのお許しをぜひ頂きたいのでございます。」

1505

王は腰をおろし、親兵たちが王をかこんだ。

タリエールの顔に燈明よりも明るい火花が散り、

その立居振舞を見る人は、理性を失った。

彼はよく言葉を選んで話しはじめた。

96896  
M  
F



1514

これを聞いて、タリエールは深く心を動かされ、  
王の前にひれ伏した。

王はふたたび頭をさげて、彼に近よった。

満たされぬ思い残さず、ふたりは互いに感謝した。

1515

ブリドンは使者となつてアフタンジルのもとへ急いだ、

この大いなるよろこびに酔うがいい！

彼はアフタンジルをつれて引返した。

だがアフタンジルは王の前に身を縮め、その光はうすれた。

1516

王は立上がつて出迎え、勇士は馬からとびおりて、  
手にしたハンカチで、顔を隠した。

太陽は雲に隠れ、バラは霜にしぼんだ。

だが、何が彼の美しさを隠すことができよう！

1517

王はもう涙を流さず、彼にキスしようとした。

アフタンジルは膝でにじりよった。王はいった、

「立て、おまえは真の勇気を現わしたのではないか、

立派なものだ、小さくなり、恥じ入ることは何もない！」

1518

王は彼を抱いて、その顔にキスを浴びせた、  
「おまえは私を焼く炎に水をかけてくれた。

では行こう、私はおまえを、獅子を、  
太陽に結んであげよう、行こう、急いで！」

1519

王は彼を、獅子を、勇士を、抱きしめ、

隣に席を与え、話しかけながら、その顔を見つめていた。

太陽にも、玉座にも、いささかもひけを取らぬ立派さ。

多くの災厄を乗り越えたとき、喜びはいっそう強いものだ。

1520

勇士はいった。「およろこびもさることながら、

それよりも、早く太陽にお目にかかりたいもの、

今は気もそぞろ、早く宮殿におつれ下さい、

わが君ともども、姫の光に浴したいものです。」

1521

彼はタリエールをも誘って、姫のほうに馬を進めた、

強い三勇士の頬は太陽の色に染められた、

彼らは未知のものを求め、欲するものを入れた。

剣をとって戦ったのも、むだではなかった。

1514

これを聞いて、タリエールは深く心を動かされ、  
王の前にひれ伏した。

王はふたたび頭をさげて、彼に近よった。

満たされぬ思い残さず、ふたりは互いに感謝した。

1515

ブリドンは使者となつてアフタンジルのもとへ急いだ、

この大いなるよろこびに酔うがいい！

彼はアフタンジルをつれて引返した。

だがアフタンジルは王の前に身を縮め、その光はうすれた。

1516

王は立上がつて出迎え、勇士は馬からとびおりて、  
手にしたハンカチで、顔を隠した。

太陽は雲に隠れ、バラは霜にしぼんだ。

だが、何が彼の美しさを隠すことができよう！

1517

王はもう涙を流さず、彼にキスしようとした。

アフタンジルは膝でにじりよった。王はいった、

「立て、おまえは真の勇気を現わしたのではないか、

立派なものだ、小さくなり、恥じ入ることは何もない！」

1518

王は彼を抱いて、その顔にキスを浴びせた、  
「おまえは私を焼く炎に水をかけてくれた。

では行こう、私はおまえを、獅子を、

太陽に結んであげよう、行こう、急いで！」

1519

王は彼を、獅子を、勇士を、抱きしめ、

隣に席を与え、話しかけながら、その顔を見つめていた。

太陽にも、玉座にも、いささかもひけを取らぬ立派さ。

多くの災厄を乗り越えたとき、喜びはいっそう強いものだ。

1520

勇士はいった。「およろこびもさることながら、

それよりも、早く太陽にお目にかかりたいもの、

今は気もそぞろ、早く宮殿におつれ下さい、

わが君ともども、姫の光に浴したいものです。」

1521

彼はタリエールをも誘って、姫のほうに馬を進めた、

強い三勇士の頬は太陽の色に染められた、

彼らは未知のものを求め、欲するものを入れた。

剣をとって戦ったのも、むだではなかった。

1522

すこし先駆けして、王は姫に会った、

彼女の頬から発する光は王の目をくらくらさせた。

彼女は輿に乗って王を出迎え、キスした。

王はおろどぎ、奇声を発して、娘を賞めた。

1523

「嗜れて雲なき太陽を、賞めぬわけにはいくまい！

なるほど、そなたゆえに、正気を失う男も出るわけだ。

太陽姫か、月姫か、いかなる星とくらぶべき！

バラも、葦も、もはやそなたの顔を見たくはなからう！」

1524

見る人すべて、彼女の発する光にとまどい、

彼女は、太陽のように、おのが光で人の目をまどわした。

だが彼女を見て焼かれた心は喜びを見出し、

彼女が現われるところ、そこへ群集は殺到した。

1525

七つの惑星も、この太陽とはくらべものにならなかつた。

その美は人間の理解をはるかに超えていた。

勇士たちは王宮へ馬を進め、

まもなく王の御座所に着いた。

1526

チナチンが勇士たちを出迎えた、

王笏<sup>しやく</sup>、王冠、王服がよく似合っていた。

その顔の光は、客たちをまぶしがらせた。

インドの王が太陽のように近づいた。

1527

タリエール夫妻はうやうやしく姫にあいさつし、

キスを交して、四方山話をはじめた。

彼らの光で御座所の中はすみずみまで明るく、

水晶とルビーは頬に、黒玉はまつ毛に変わった。

1528

チナチンは彼らを一段高い玉座に招いた。

タリエールはいった、「あなたこそ、そこに坐るべきだ、

とりわけ今日は、その玉座があなたによく似合う。

その隣には、もちろん、獅子の中の獅子が坐るべきだ。」

1529

ふたりはチナチンの手をとって、玉座にのぼらせ、

彼女を惱殺したアフタンジルを、その隣に坐わらせた。

この世で彼らに優る美を見出せるだろうか？

同じミジスールのヴィスとラミンもこの二人には及ぶまい。

1530 姫は隣に坐ったアフタンジルを見てどぎまぎし、  
にわかにも動悸はげしくなり、顔あおぞめた。

王はいった、「わが子らよ、なぜそんなにはにかむのか？  
賢者も申したではないか、爰は結局は勝つものだ、と。」

1531 おまえたちに千年の幸福が授かるように、  
好運に恵まれ、悲運は忽ち過ぎ去るように、  
移り気にとらえられず、いつまでも初心忘れぬように！

そして、ふたりの手で私の死に水とつてくれるように！」

1532 それから王は軍隊に命じ、アフタンジルに敬礼させた、  
「これがおまえたちの王、すなわち神の御心であり、  
今日から彼には玉座、私には老いぼれの床。

私に仕えたように彼に仕え、私の遺訓を守るように！」

1533 重臣も兵士もいっせいに頭を下げて、敬意を表した。  
彼らはいった、「我らを地上に残したその人の為に、

従う者を大切にし、従わざる者をこらしめるその人の為に、  
敵を圧し我らを励ますその人の為に、我ら灰となろう！」

1534 タリエールも彼らを讃え、精神のいっそうの高揚を説き、  
さらに姫にいった、「これで二人ももう炎に焼かれまい。  
あなたのつれあいは私の兄、だから、あなたは私の姉。  
私はあなた方の敵を討ちこらしめるだろう。」

アフタンジルとチナチン姫の婚儀

1535

その日、アフタンジルは君主にして最高の統治者の席に、その隣に、タリエールが笑みをたたえ、

ネスタン・ダレジャンがチナチンと並んで坐った様は、

天が地に下り、四つの太陽が一つになったように見えた。

1536

数知れぬ客たちに酒肴がくばられた。

あたりの苦くよりもなおたくさんの牛や羊が料理された。

それぞれにふさわしい贈りものが手渡され、

彼らの顔は太陽のように輝いた。

1537

ヒヤシンス石の大盃にルビーのグラス、

五彩の色の微妙な彫金の食器類。

この婚礼を歌う人にさいわいあれ！

誰でももうだるう、「この場にしばらくつけてくれ！」

1538

四方から楽士が集まり、シンバルの音が響き、カッタ・ルビーと黄金の山が高まり、

ワインの泉が百か所から噴き出して飲み手のほうに流れ、

うたげは黄昏から夜明けにつづいて、朝も過ぎた。

1539

びっこもめつかちも、人におくれをとらなかった、

いたるところに真珠はばらまかれ、流された。

金塊を繩子に包んで運ぶのにももう飽きた。

三日三夜、インドの王はアフタンジルの付添人であった。

1540

次の日、アラブの王ロステワンはまた酒宴をひらいた。

彼はタリエールにいう、おまえの太陽を見るのが楽しみ、

おまえが王の王なら、彼女は女王の女王だもの。

おまえの足跡は、私たちには耳飾りにひとしいのだ。



1541 これからはもう、おまえと同列には坐れない。」

アラブの王は玉座をずっと引き下げて、

その列にアフタンジルとその妻を坐らせ、  
山なす贈りものをまたタリエールに捧げた。

1542 アラブの王はうちとけて客をもてなした。

すこしも王様ぶらず、あっちへ行き、こっちへ戻り、  
惜しみなく引出物を分けて、称讃の的になった。

王位に馴れたブリドンがアフタンジルに付添っていた。

1543 アラブの王はインドの姫とそのつれあいに敬意を表し、  
わが婿と花嫁同様に、愛情を注ぎ、贈りものをした。

その贈りものの一割をだつて数えあげることはできまい。

めいめいに宝石づくりの王笏、王服、そして王冠。

1544 さらに彼は二人の運命を形どつた新しい贈りものをした。

民話のにわとりが産んだ卵のような宝石一千、

ヘトの卵に似た真珠一千、

小山ほど背の高い駿馬一千。

1545 さらにブリドンにも真珠山盛りの盆を十、  
みごとな馬具つきの駿馬十を贈った。

インドの王は威儀を正して腰をかため、  
したたか飲んではいいても、しらすでお礼をのべた。

1546 さて、くどくど話をつづけても仕方あるまい。

ひと月は過ぎたが、彼らはいっこうに酒宴をやめなかった。

タリエールにはさらに大粒のルビーが贈られ、

その光は、太陽のように、辺りのものすべてを照らした。

1547 タリエールは初雪にみまわれたバラの風情で、  
アフタンジルを通じて、ロステワンにおいとまを願つた、  
その口上には、「お側にいれば、喜びにこと欠きませぬが、

私の国は敵の手に落ちて、いま塗炭の苦しみをなめている。

1548 身に覚えの知と技が無法の輩を討ち滅ぼすでしょうが、  
このようなことでご心配かけたくはありません、

それが気がかりゆえ、もうおいとませねばなりません。

でも神はすぐ幸福なあなたとの再会を賜わるでしょう。」

1549

ロステワンは答えた、「何をそんなにご遠慮なさる？」

いいと思つたことは、早速おやりなさるがよい、

精強部隊を編成し、アフタンジルにお供させよう。

敵や裏切者を蹴散らしなさるがよい。」

1550

アフタンジルがこの言葉をタリエールに伝えると、

タリエールはいった、「そういわず、水晶の匣を閉じ給え、

結ばれたばかりの月と、なんでおまえが別れられよう？」

アフタンジルはいった、「その口には乗らぬぞ！」

1551

おまえは私をおきざりにして、悪口いうつもりだろう、

『女房かわいさに、奴は私を裏切つた』と。

どうして私をそんな立場に追いやることができるのか？

人間にとって友を裏切るよりも悪いことがあるか？」

1552

バラが水晶をまき散らしたように、タリエールは笑つた、

「別れはね、私の方がおまえよりもずっとつらいのだ、

お望みなら、同行しよう、どうせ聞き分けないのだから。」

アフタンジルは、すぐ全軍に召集をかけた。

1553

時を移さずアラブの戦士が集まつた。

人も馬もすべてホレズムの物の具つけ、

陳なく武装して、その数八万騎。

アラブの王はこの別離を悲しんだ。

1554

ふたりの姫も互いに別れを惜しんで、

姉妹の誓いをさらにかたくとり交し、

胸を胸に、頬を頬にすりよせて、泣いた。

見る人もみんなもらい泣きした。

1555

月が明けの明星と出会うとき、

二つは一樣に光り、一つが去れば、あとの一つも去る、

もしその一つが去らないと、天はそれを遠く引離す。

ふたつを見たいと思えば、山の頂に登らねばならない。

1556

おのれにかたどつてふたりを創造したその神は、

ふたりを引離し、ふたりはおのれの意志でなく別れる。

ふたりはバラとなって互いにかみ合い、涙を流し、

ふたりと別れる人はすべておのが命を惜しむ気にならない。

1557

ネスタン姫はいった、「あなたを知らなかった昔が恋しい、別れがこんなにつらいものならば。」

私もたよりするけれど、あなたもお手紙忘れずに、思い思われて、あなたも私も身を灼くことでしよう。」

1558

チナチンはいった、「会う人に喜びを与える太陽の姫よ、なんでこの別れに耐え、あなたを忘れられましよう！」

願かけて、私は長命の代りに死を選びます、

この涙つきない限り、それだけ長生きなさるよう！」

1559

ふたりはまたキスして、別れた。

残る人は去る人から目を離すことができず、

去る人は炎になめられつつふり返り、またふり返る。

作者には、その十分の一も、言葉で描くことはできない。

1560

別れはまたロステワンを人一倍悲しませた。

ひっきりなしにため息まじりの泣き声をあげ、

ケトルから熱湯が出るように、熱い涙の泉があふれた。

タリエールも浮かぬ顔、白雪は青白く染った。

1561

王はタリエールを抱いて、キスした、

「おまえがここに立寄ったのは正に奇跡だ。」

おまえは命を与えたが、死をももたらすだろう。

私には別れのつらさが百二十倍もこたえるのだ。」

1562

タリエールは王と別れて馬に乗り、

戦士たちは涙を流して野をぬらし、口ぐちにいう、

「太陽が試合を挑んでも、勝利はわが君のものですよ！」

タリエールは答えた、「別れのつらさに岩さえ脆くなろう。」

1563

タリエール、ブリドン、アフタンジルは意気高く、

物資じゅうぶん整えて旅に出た。

従う戦士八万余、いずれも駿馬にうちまたがり、

互いに頼り頼りれつつ道を急いだ。

1564

三か月は過ぎた。三勇士の威光あまねく、

これを迎えて敵対できる者はいなかった。

野に休んで、夜明けまで食事を楽しむこともあった。

宴席も設けられ、酒があふれた。



## 第62章

タリエールと

ネスタン姫の婚儀

1565  
タリエールとその妻は望みを遂げた。

七つの王国の七つの玉座に坐るよろこびは、  
それまでの労苦を忘れさせた。

悲しみを知らない人にはほんとうのよろこびはない。

1566  
並んだふたりを見よ、太陽だって、より美しくはない！  
トランベットの彼の即位を告げ、ドラムの音が唱和し、  
宝庫の鍵が信頼のしるしに彼に渡された。

「これぞわれらの君主よ！」と、一同は声高く歌った。

1567  
アフタンジルとブリドンにも二つの玉座が用意され、

王の礼をとってそこに招じ、その徳をたたえた。

神もこのような存在を二度と創ることはできないだろう。

彼らはおのが悲しみを隠さず、冒険談を披露した。

1568  
婚儀のもようは、書くことも話すこともできない。  
飲めや歌えの賑やかさの中に、

それぞれ平等に贈りものがくばられ、

貧しい人たちへの心遣いも忘れなかった。

1569

アフタンジルとブリドンは全インド人に救いの主と呼ばれ、

「幸福はすべておふた方のお蔭」と感謝された。

彼らはおのが主君を仰ぐようにふたりを見て、

あとからあとからふたりの前に伺候した。

1570

インドの王は身を粉にして仕えたアスマートにいう、

「どんな親、どんな子も、おまえの真似はできやしない、

いまおまえにインドの一部を、第七王国を授けよう、

直ちに即位して、幸福な生活をはじめがいい。

1571

そのうち、気の合ったつれあいを見つけて、

末長くこの国に忠勤をばけむように。」

アスマートは彼の足にキスした、「私の命は君のなかに、

君に献身するよりもいいことが、どこにありますしょう！」

1572

三人義兄弟は、共に楽しい数日を過ごした。

世にもまれな真珠、世にもみごとな馬をはじめ、

計り知れない贈りものが彼らのほうに流れた。

だが恋しい人を思い、アフタンジルの顔色は冴えなかった。

1573

タリエールは妻恋う勇士の心のかげりに気がついた。

「どうも私はおまえにそれとなく非難されてるようだ、

あの人を思つて、おまえは七難を八難にした。

よし、別れよう、私の喜びは浮世に恨まれてるようだ。」

1574

ブリドンはいった、「もうおいとましなければならぬ、

でもまたじきにおまえの土地、おまえの城にやっこよう、

兄が弟に命じるように、どんなことにも手伝わせてくれ、

鹿が泉にあこがれるように、私はそれを望んでいるのだ。」

1575

タリエールは承諾した、「お国に帰るに遠慮はいらぬが、

どうか私を忘れないで、きつとまた顔を見せてくれ。」

アフタンジルにもいった、「おまえなしでは喜びもないが、

でも仕方がない、月が獅子を待っているのだから。」

1576

ロステワンへのお土産としてタリエールは、高価な毛皮類、

カット宝石に飾られた匙や杓子などの食器をそろえた、

「ではこれを差上げてくれ、道中つつがなくな！」

アフタンジルはいった、「おまえなしに生きられようか！」

1577

王妃は王妃に毛皮コートとヴェールを贈った、  
姫のほかにも、どこにこのような衣裳の似合う人がいよう！  
さらにもう一つ、目を見はらせる大きな宝石、  
それは夜も太陽のように光って、どこからでも見えた。

1578

タリエールに別れを告げて、アフタンジルは馬に乗った、  
別れの炎はふたりを焼いた。

インド人はみんな別れを惜しんで泣き、野をしめらせた。

アフタンジルはいった、「この世の毒は私を殺した！」

1579

ブリドンとアフタンジルは長いこと行を共にしたが、  
やがて別れ道にきて、涙ながらに袂を分った。

ふたりが考えたことはすべてうまくいった。

アフタンジルはアラビアに着いたが、何の変わりもなかった。

1580

アラブは総出で彼を迎えた、彼は国の誇りであった。  
彼は己の太陽を見た、恋わずらいはとたんにふっとんだ。  
彼はチナチンと並んで玉座に坐り、人びとの喜びを喜んだ、  
神は天から權威の王冠を授けた。

1581

こうして三人の君主は互いに愛し合い、  
互いに往来して、すべての望みを達成した。

彼らの意志に逆らう者は彼らの剣に傷つけられた。

彼らはそれぞれの国をひろげ、富まし、權威を高めた。

1582

彼らはまた雪片のように、万人平等に、思いやりをかけ、  
寡婦や孤児の生活苦を取除き、乞食に物乞いを止めさせた。  
悪人は震えあがり、子羊どもは互いに乳を吸う争いをせず、  
彼らの領地では山羊と狼がいっしょに草を食んでいた。

## 大団円



1583

われらの勇士たちの物語は夜半の夢のように終わった、  
彼らはやがて世を去ったが、それが時の狡知というもの、  
長いように思われても、この世はほんの瞬間に過ぎない。  
一介のメスフメスフわれはルスタヴェリという名で詩を書いた。

1584 太陽を道案内者とするグルジア王ダヴィドダヴィドのため、

東から西へ恐怖をかき立て、

二心ある者を灰にし、信服する者を喜ばせるその人のため、  
そのお慰みに私は詩の形でこの物語を述べた。

1585

ダヴィドの事業とその功績を、いかに讃えられよう！  
そこで私は他国の王のこと、何よりもその気質とふるまい、  
そして王への讃歌を物語にまとめた。  
私はそれを詩に移して、いささか楽しんだ。

1586

この世はそういうもの、誰もそれを信じることはできぬが、  
それは一瞬の間であり、まつ毛の一拍よりも早い！  
それなのに何を求めるのか？ 運命だつてむら気なのに。  
運命に裏切られず、墓場まで同道できたら、もつげの幸い。

1587

モセ・ホネリモセ・ホネリはアミラン・ダレジャニスゼを賞めたたえ、  
シャフテリシャフテリはアブドウル・メソアを格調高く歌い、  
サルギス・ツモグウエリサルギス・ツモグウエリはディラルゲトを心ゆくまで描き、  
このルスタヴェリはタリエールを涙ながらに歌いあげた。

メスフ—グルジア南部メスヘチアの住民。

ダヴィド—ダヴィド・ソストラニ、女王タマラの夫君。

モセ・ホネリ—十二世紀グルジアの作家、長篇小説「アミラン・ダレジャ

ニア」の作者、アミランはダレジャンの息子という説。

シャフテリ—十二世紀グルジアの詩人、長詩「アブドウル・メソア」の作

者。

サルギス・ツモグウエリ—十二世紀グルジアの詩人、今日まで全篇が伝わ

らないまぼろしの大叙事詩「ディラルゲチア」の作者。

あとがき

訳者あとがきに代えて  
編集部後記



(A) トビリシ市の中央にルスタヴェリ通りがあり広場には作者の像が市民に親しまれている。





(6) タラ川左岸の旧城址メテヒにおける訳者夫妻、対岸にナルカル城址が見える。

真夏なのに、けさもグルジアの赤いバラが咲いた。春からつぎつぎ花をひらく。一九六六年九月、世界三十二カ国の代表八百名と中世グルジアの大詩人シヨタ・ルスタヴェリの生誕八百年祭に参加したとき、お土産に一枝いただいたバラだ。

一九五五年、この詩を散文にして本にしたのが縁である。その後グルジア対外文化友好協会ですれを知り、それ以来のおつきあいであった。

ある日、トビリシ郊外のベタニア寺にいった。人里離れた谷間に、ぼつんと残っている十二世紀の正教寺院だそうだ。この山の中の一軒家の老人がぶどう畑の中で私たちにぶどうをごちそうしながら、ルスタヴェリの翻訳について感謝の言葉を述べたのにはおどろき、詩人と詩がこんなに一般民衆に浸透しているかと感心した。

そのとき、グルジアの友人たちに、そのうち原書どおり四行詩にして本にすると、かたく約束したのを、ついきのうのことのように思いだす。しかし、現実はその易々とはいかなかった。

理論社の小宮山さんが出版を引受けてくれるこ

訳者あとがきに代えて

袋 葉那子



(C) 作者ゆかりの地ボルゴックの会場を訪れる記念祭の参加者。

とになったのが、三年前のこと、袋もこれは一世一代の仕事と張りきった。やっと脱稿し理論社に渡したのが去年の七月はじめであった。それから生れてはじめての病院通いははじまり、とうとう本の出来上がるのを待たずに力つき、ちょうど一年目にこの世を去った。

何が心のこりかといえは、この本を持って、もう一度グルジアに旅行することだったと思う。そこには、なんでもこちらのいうことをきいてくれる多くの友人がいて、いつも夢に見ているカフカズの山々を眺めることができたから。

いまごろはきつと、愛してやまなかつたカフカズの空を、心ゆくまで山々、谷々を、白い雲にのつて散策しているかも知れない。

ルスタヴェリのひろげた大きな手に迎えられて……。  
一九七一・七・一三

訳者・袋一平氏は、一九七一年七月二日に逝去された。本書の「あとがき」も病床で口述を予定されておられたが、すでに病勢が、それをゆるさなかった。今は、夫人の追憶の辞と遺影をかかげて鎮魂を祈り上げるばかりである。写真(A)(B)は袋家からお借りしたものである。(編集部)

## 編集部後記

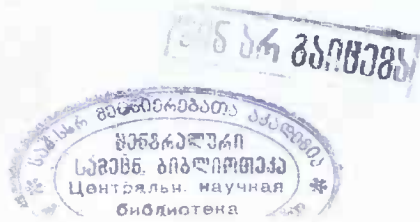
—日本語版刊行の経緯—

袋一平・葉那子夫妻が、日本における唯一のルスタヴエリ紹介者として、詩人の生涯八百年の記念行事に参加されたころ、私もまた全ソ作家同盟の招待によるソ連の旅にであった。それまで、この詩人について一片の予備知識すらなかった私が、全く時間的な暗合から、モスクワにおける盛大なルスタヴエリ記念行事に出席し、やがて惹かれるようにグルジアへの道志望したのは、なんとなく運命的なしあわせであった。編集者の本性は、この詩人の偉大さに対する直感的な洞察に酔い、憑かれたように邦訳の夢を抱いてしまった。魔手をつくしてみたが、グルジア語に通じる日本人は皆無に近く、まして原語の詩論を邦訳に生かす難事は、当然、不可能であることを思い知らされた。旧知の袋一平氏と会って先ず話しあったのも、この訳業のただことでない困難さについてであった。けっきょく、露訳からの重訳ではあっても、この詩人に対する敬愛の念が深ければ、先ずは可能な限り原意に肉薄し、原作の基本的な結構を日本の読者に伝えることは可能であるとうと覚悟したわけである。「私のライフワークのつもりで……」との袋氏の一語は私の心に刻まれた。爾やがて、ユネスコ版の英訳本も、トビリン版の英訳本も、ガリマール版の仏訳本も相次いで生まれ、いずれもグルジアの友人たちから届けられた。けれど、それらは、それぞれの国の詩の伝統に照応し、ヨーロッパ各国語間のみで可能な自由さと独自性が目立つばかりで、私たちとすれば反って邦訳の難事を思う念を深めるばかりであった。むしろ、無理な古語や詩語を細工して「日本的古典詩」とするよりは、さし当たって原詩人の語るところを直接きとるような「分かり易さ」で一貫することが最上策と、私たちは一致した。断折りに岩波版『人間の歴史』（イリオン）の改訂などの仕事も重なって多忙を極めた訳者の身辺ではあったが、何よりも自己の内部から湧きでる訳業の愉しさが、訳者をとらえつづけていた。微力の出版社を背負う私にとっても、分に過ぎた重責の興奮にとられる日々だった。熱した訳者と編集者とは、時に、ずいぶん激して仕事の在りようを語りあった。思えば、そのすべては、訳者に対する私の非礼に亘ることはかりであった。その訳者に、仕事の成果でお応えできないうちに逝かれてしまった今、私は呆然としている。

譯者が主として底本となったのは ВИТЯЗЬ В ТИПОВОЙ ШКУРЕ : ИЗДАТЕЛЬСТВО «МИЛЛА-ТЪРА ДА ХЕЛОВНЕБА», ТБИЛИСИ, ГРУЗСР, 1986. だが、これが最も詩の数も多く充実している。この古典に対するグルジア国民をはじめ全ロシア人の愛着を物語るかのように、さまざまの版が古くから出版されているが、訳者もその数種を対照しておられる。本書の各章に挿入したカットは、四種の本のいずれもみごとなきし絵を縮尺したもので、必ずしも物語の進行と一致してはいないが、それによって、本書の広く敬愛されている状況の一端を紹介したつもりである。

(小宮山重平)

9688 E



ШОТА  
РУСТАВЕЛИ  
  
ВИДЯЗЬ  
ТИГРОВОЙ  
ШКУРЕ

Шота・ルスタヴェリの叙事詩

虎皮の騎士 定価二〇〇〇円

訳者 袋一平 I・FUKURO

発行者 小宮山量平 R・KOMIYAMA

発行所 株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四

電話(203)五七九一(代表)

振替東京九五七三六

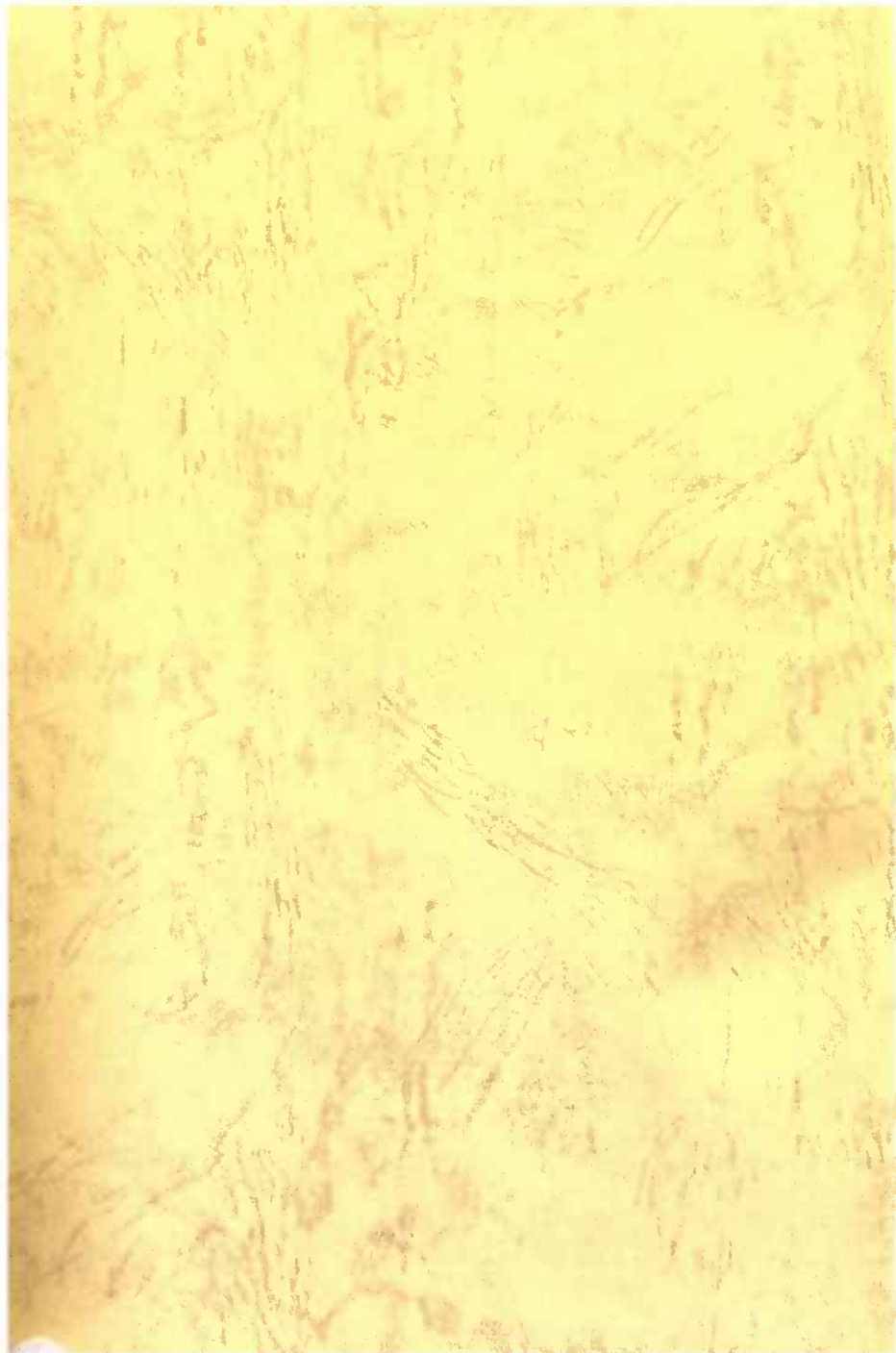
1972年1月 第1刷 2200部



RIRON-SHA

Tokyo

1972



試一平一

博論長刊

試一平一

博論長刊

試一平一



西欧のルネサンスより2世紀以上先行して花ひらいた  
“東方の文芸復興”の代表的古典・グルジアの大叙事詩  
日本で初めて全容を紹介する完訳版 理論社刊2000円

E ~~8898~~  
3

